児玉町遺跡調査会報告書　第14集

大久保遺跡（おおくぼいせき）

（Ｂ地点の調査）

２００３

埼玉県児玉町遺跡調査会

序

埼玉県の北部に位置する児玉地方は、県内でも多くの埋蔵文化財が所在することで有名な地域です。特に古墳時代の遺跡の多さは県内随一とも言われ、数多くの集落遺跡とともに、県内最古級で県指定の鷺山古墳や、町指定の金鑽神社古墳、県選定重要遺跡の長沖古墳群、生野山古墳群、秋山古墳群などの著名な古墳や古墳群も多く存在しています。

これらの文化財は、我々の遠い祖先達の歴史の痕跡であり、また当地方の発展の礎ともなったものであります。そのため、私たちはこれらの文化財を開発との調和を図りながら大切に保護し、後世の人々に伝えるとともに、将来の地域づくりに役立たせていかなければならないと考えます。

本書は、平成６年に分譲住宅地の造成工事に伴う事前の記録保存を目的として実施した、児玉町大字児玉に所在する大久保遺跡Ｂ地点の発掘調査の成果を記録したものです。このＢ地点からは、古墳時代後期から平安時代中期までの竪穴式住居跡や掘立柱建物跡などの遺構が多数検出され、またそれらからは当時の人々が使用していた土器や鉄器などの遺物も多く出土しています。今回のＢ地点の調査によって、比較的長期間にわたって営まれた古代集落の一部を明らかにすることができたことは、当地域の歴史を考える上で、貴重な成果を得ることができたと言えましょう。

本書が、文化財の保護や啓蒙・普及はもとより、学術的な地域史研究の基礎資料として、多くの方々に広くご活用いただければ幸甚に存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書刊行に至るまで、文化財保護に対する深いご理解と御協力を賜りました飯田建設工業株式会社をはじめ、ご尽力ご協力いただいた関係各位に心より感謝申し上げます。また、真夏の猛暑の中、現地の調査に携われた調査員や作業員の皆様に対しても、厚くお礼申し上げます。

平成15年３月10日

児玉町遺跡調査会
会長　冨丘文雄

例　　言

1．　本書は、埼玉県児玉郡児玉町大字児玉字大道南1645－1番地外に所在する大久保遺跡Ｂ地点の発掘調査報告書である。

2．　発掘調査は、分譲住宅建設に伴う事前の記録保存を目的として実施したもので、調査期間は平成６年５月９日～同８月31日である。

3．　発掘調査は、飯田建設工業株式会社の委託を受けて児玉町遺跡調査会（会長冨丘文雄）が実施し、その調査担当には恋河内昭彦があたった。

4．　発掘調査から本書刊行に要した経費は、すべて委託者が負担した。

5．　Ｂ地点の遺構番号は、現地発掘調査の時点ではそれぞれ１番から順に付けたが、本書刊行に際して、後の混乱をさけるため、Ａ地点からの続き番号に変更した（新旧遺構番号対比表参照）。

6．　本書の執筆及び編集は、恋河内が行った。

7．　出土遺物観察表に記した記号は、以下のとおりである。

Ａ－法量、Ｂ－成形、Ｃ－整形･調整手法、Ｄ－胎土、Ｅ－色調、Ｆ－残存度、Ｇ－出土層位、Ｈ－備考

8．　本書で使用した地図は、国土地理院発行の５万分の１・２万５千分の１、児玉町役場発行の２千５百分の１である。

9．　本書中の第８図Ｂ地点全体図に記載された国家座標のＸＹ座標値は、新座標による座標値で、() 内の数値は発掘調査当時の旧座標による座標値である。

10．　抄録中の北緯と東経の数値は、新座標の数値を換算したものである。

11．　本書に掲載した写真は、遺構を恋河内が、遺物は主に中里広子と増田久江が撮影した。

12．　発掘調査及び本書刊行のための整理作業には下記の者が参加した。

青木　フク、朝川　マツ、飯島　満江、池田　芳野、磐上　クラ、生形　サト、梅沢トモ子、小賀野フジ、久米とし子、小島　森平、小林　節子、鈴木　利一、関根喜久子、関根　トヨ、戸沢ミチ子、中　よし江、中里　広子、野本キクエ、野本ミチ子、増田　久江、山田　松枝、渡辺　裕子

13．　発掘掘査から本書刊行に至るまで、下記の方々や機関からご教示やご協力を賜った。記して感謝いたします。

赤熊　浩一、荒川　正夫、伊丹　　徹、太田　博之、小川　卓也、金子　彰男、加部　二生、小林　　修、昆　　彭生、坂本　和俊、篠崎　　潔、須田　英一、外尾　常人、田村　　誠、富田　和夫、中沢　良一、長瀧　歳康、中村　倉司、福田　　聖、堀口　幸則、増田　一裕、町田奈緒子、松本　　完、丸山　　修、矢内　　勲、山本　　靖

埼玉県教育局文化財保護課、埼玉県埋蔵文化財調査事業団、早稲田大学本庄考古資料館

目　　次

序

例　言

Ⅰ　発掘調査に至る経緯 …… 1

Ⅱ　遺跡の地理的・歴史的環境 …… 3

Ⅲ　遺跡の概要 …… 9

Ⅳ　検出された遺構と遺物 …… 13

1　竪穴式住居跡 …… 13

2　掘立柱建物跡 …… 76

3　土　　壙 …… 81

4　溝　　跡 …… 87

5　Ｂ地点出土の縄文・弥生時代の遺物 …… 88

Ⅴ　ま　と　め …… 89

1　出土土器の様相 …… 89

2　遺構の変遷 …… 99

参　考　文　献 …… 106

写　真　図　版

報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　大久保遺跡位置図 …… Ⅷ
第２図　埼玉県の地形区分 …… 2
第３図　明治時代における遺跡周辺の様子 …… 2
第４図　周辺の縄文・弥生時代主要遺跡 …… 5
第５図　周辺の古墳時代主要遺跡 …… 6
第６図　周辺の奈良・平安時代主要遺跡 …… 7
第７図　大久保遺跡Ｂ地点位置図 …… 10
第８図　大久保遺跡Ｂ地点全体図 …… 11，12
第９図　第27号住居跡 …… 13
第10図　第27号住居跡出土遺物 …… 15
第11図　第28号住居跡 …… 16
第12図　第28号住居跡出土遺物 …… 17
第13図　第29号住居跡 …… 19
第14図　第29号住居跡出土遺物（1） …… 21
第15図　第29号住居跡出土遺物（2） …… 22
第16図　第30・31号住居跡 …… 23
第17図　第30号住居跡出土遺物（1） …… 25
第18図　第30号住居跡出土遺物（2） …… 26
第19図　第31号住居跡出土遺物 …… 27
第20図　第32号住居跡 …… 28
第21図　第32号住居跡出土遺物 …… 29
第22図　第33号住居跡 …… 31
第23図　第33号住居跡出土遺物 …… 32
第24図　第34号住居跡 …… 34
第25図　第34号住居跡出土遺物 …… 35
第26図　第35号住居跡 …… 37
第27図　第35号住居跡出土遺物 …… 38
第28図　第36号住居跡 …… 40
第29図　第36号住居跡出土遺物 …… 40
第30図　第37号住居跡 …… 42
第31図　第37号住居跡カマド …… 43
第32図　第37号住居跡出土遺物（1） …… 44
第33図　第37号住居跡出土遺物（2） …… 45
第34図　第38号住居跡 …… 47
第35図　第38号住居跡出土遺物 …… 47
第36図　第39号住居跡 …… 49
第37図　第39号住居跡出土遺物 …… 50
第38図　第40号住居跡 …… 52
第39図　第40号住居跡カマド …… 53
第40図　第40号住居跡出土遺物 …… 53
第41図　第41号住居跡 …… 55
第42図　第41号住居跡カマド …… 56
第43図　第41号住居跡出土遺物（1） …… 57
第44図　第41号住居跡出土遺物（2） …… 58
第45図　第42号住居跡 …… 60
第46図　第42号住居跡出土遺物 …… 61
第47図　第43号住居跡 …… 62
第48図　第43号住居跡出土遺物（1） …… 64
第49図　第43号住居跡出土遺物（2） …… 65
第50図　第44号住居跡 …… 66
第51図　第44号住居跡出土遺物 …… 66
第52図　第45号住居跡 …… 67
第53図　第45号住居跡出土遺物 …… 68
第54図　第46号住居跡 …… 69
第55図　第46号住居跡出土遺物（1） …… 71
第56図　第46号住居跡出土遺物（2） …… 72
第57図　第47号住居跡 …… 74
第58図　第47号住居跡出土遺物 …… 75
第59図　第１号掘立柱建物跡 …… 76
第60図　第２号掘立柱建物跡 …… 78
第61図　第３号掘立柱建物跡 …… 79
第62図　第４号掘立柱建物跡 …… 80
第63図　第４号土壙出土遺物 …… 81
第64図　第５号土壙出土遺物 …… 81
第65図　土壙 …… 82
第66図　第９号土壙出土遺物 …… 84
第67図　第14号土壙出土遺物 …… 86
第68図　第15号土壙出土遺物 …… 86
第69図　第２号溝跡 …… 87
第70図　Ｂ地点出土の縄文弥生土器 …… 88
第71図　第Ⅰ期の土器（1） …… 90
第72図　第Ⅰ期の土器（2） …… 91
第73図　第Ⅱ～Ⅶ期の土器 …… 93
第74図　第Ⅷ期の土器 …… 96
第75図　第Ⅸ期の土器 …… 98
第76図　第Ⅰ期の遺構 …… 100
第77図　第Ⅲ期の遺構 …… 100
第78図　第Ⅳ期の遺構 …… 101
第79図　第Ⅴ期の遺構 …… 101
第80図　第Ⅵ期の遺構 …… 102
第81図　第Ⅶ期の遺構 …… 102
第82図　第Ⅷ期の遺構 …… 103
第83図　第Ⅸ期の遺構 …… 103
第84図　竪穴式住居跡の比較 …… 105

図 版 目 次

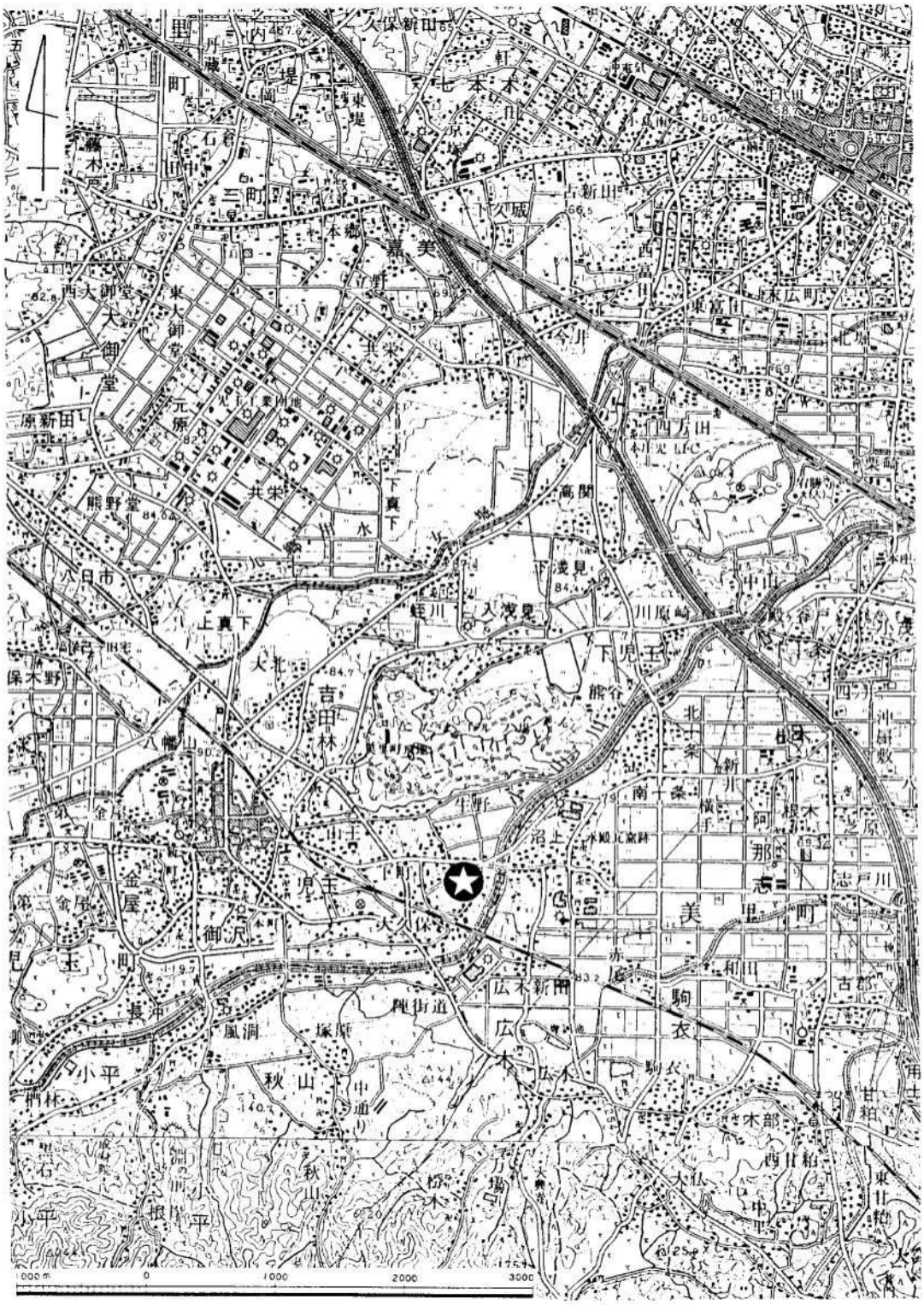
図版１　大久保遺跡Ｂ地点遠景（1984年頃）
図版２　大久保遺跡Ｂ地点航空写真（1995年頃）
図版３　大久保遺跡Ｂ地点調査区北側（西より）
　　大久保遺跡Ｂ地点調査区南側（北より）
図版４　大久保遺跡Ｂ地点調査区北側（東より）
　　大久保遺跡Ｂ地点調査区南側（西より）
図版５　大久保遺跡Ｂ地点調査区南東側（北より）
　　大久保遺跡Ｂ地点調査区中央部付近
図版６　大久保遺跡Ｂ地点調査区南西側（北より）
　　大久保遺跡Ｂ地点調査区北西側（南より）
図版７　第27号住居跡
　　第27号住居跡カマド
図版８　第28号住居跡
　　第28号住居跡カマド
図版９　第29号住居跡
　　第29号住居跡カマド
図版10　第30・31号住居跡
　　第30号住居跡カマド
図版11　第30号住居跡カマド煙道部土器出土状態
　　第31号住居跡カマド
図版12　第32号住居跡
　　第32号住居跡カマド
図版13　第33号住居跡
　　第33号住居跡貯蔵穴上面石出土状態
図版14　第33号住居跡カマド石出土状態
　　第33号住居跡カマド
図版15　第34号住居跡
　　第34号住居跡カマド
図版16　第35号住居跡
　　第35号住居跡カマド
図版17　第36号住居跡
　　第36号住居跡カマド
図版18　第37号住居跡
　　第37号住居跡貯蔵穴
図版19　第37号住居跡カマド遺物出土状態
　　第37号住居跡
図版20　第38号住居跡
　　第38号住居跡カマド
図版21　第39号住居跡
　　第39号住居跡カマド
図版22　第40号住居跡
　　第40号住居跡カマド
図版23　第41号住居跡
　　第41号住居跡カマド
図版24　第41号住居跡遺物出土状態（1）
　　第41号住居跡遺物出土状態（2）
図版25　第42号住居跡
　　第42号住居跡カマド
図版26　第43号住居跡遺物出土状態
　　第43号住居跡
図版27　第43号住居跡カマド遺物出土状態
　　第43号住居跡カマド
図版28　第44号住居跡
　　第44号住居跡遺物出土状態
図版29　第45号住居跡
　　第46号住居跡
図版30　第46号住居跡カマド
　　第46号住居跡遺物出土状態
図版31　第47号住居跡
　　第47号住居跡カマド
図版32　第１号掘立柱建物跡
　　第２号掘立柱建物跡
図版33　第３号掘立柱建物跡
　　第４号掘立柱建物跡
図版34　第４・５号土壙
　　第５号土壙
図版35　第６号土壙
　　第７号土壙
図版36　第８号土壙
　　第９号土壙
図版37　第10号土壙
　　第11号土壙

図版38　第12号土壙遺物出土状態
第13号土壙
図版39　第14号土壙
第15号土壙
図版40　第16号土壙
第17号土壙
図版41　住居跡出土土器（1）
図版42　住居跡出土土器（2）
図版43　住居跡出土土器（3）
図版44　住居跡出土土器（4）
図版45　住居跡出土土器（5）
図版46　住居跡出土土器（6）
図版47　住居跡出土土器（7）
図版48　住居跡出土土器（8）
図版49　住居跡出土土器（9）
図版50　住居跡出土土器（10）
図版51　住居跡出土土器（11）
図版52　住居跡出土土器（12）
図版53　住居跡出土土器（13）
図版54　住居跡出土土器（14）
図版55　住居跡出土土器（15）
図版56　住居跡出土土器（16）
図版57　住居跡出土土器（17）
図版58　住居跡出土土器（18）
図版59　住居跡出土土器（19）
図版60　住居跡出土土器（20）
図版61　住居跡出土土器（21）
図版62　住居跡出土土器（22）
図版63　住居跡出土土器（23）
図版64　住居跡出土土器（24）・土壙出土遺物
図版65　住居跡出土鉄器
B地点調査風景

新旧遺構番号対比表

旧番号	新番号
第 1 号住居跡	第 27 号住居跡
第 2 号住居跡	第 28 号住居跡
第 3 号住居跡	第 29 号住居跡
第 4 号住居跡	第 30 号住居跡
第 5 号住居跡	第 31 号住居跡
第 6 号住居跡	第 32 号住居跡
第 7 号住居跡	第 33 号住居跡
第 8 号住居跡	第 34 号住居跡
第 9 号住居跡	第 35 号住居跡
第 10 号住居跡	第 36 号住居跡
第 11 号住居跡	第 37 号住居跡
第 12 号住居跡	第 38 号住居跡
第 13 号住居跡	第 39 号住居跡
第 14 号住居跡	第 40 号住居跡
第 15 号住居跡	第 41 号住居跡
第 16 号住居跡	第 42 号住居跡
第 17 号住居跡	第 43 号住居跡
第 18 号住居跡	第 44 号住居跡

旧番号	新番号
第 19 号住居跡	第 45 号住居跡
第 20 号住居跡	第 46 号住居跡
第 21 号住居跡	第 47 号住居跡
第 1 号土壙	第 4 号土壙
第 2 号土壙	第 5 号土壙
第 3 号土壙	第 6 号土壙
第 4 号土壙	第 7 号土壙
第 5 号土壙	第 8 号土壙
第 6 号土壙	第 9 号土壙
第 7 号土壙	第 10 号土壙
第 8 号土壙	第 11 号土壙
第 9 号土壙	第 12 号土壙
第 10 号土壙	第 13 号土壙
第 11 号土壙	第 14 号土壙
第 12 号土壙	第 15 号土壙
第 13 号土壙	第 16 号土壙
第 14 号土壙	第 17 号土壙
第 1 号溝跡	第 2 号溝跡



第１図　大久保遺跡位置図

Ⅰ．発掘調査に至る経緯

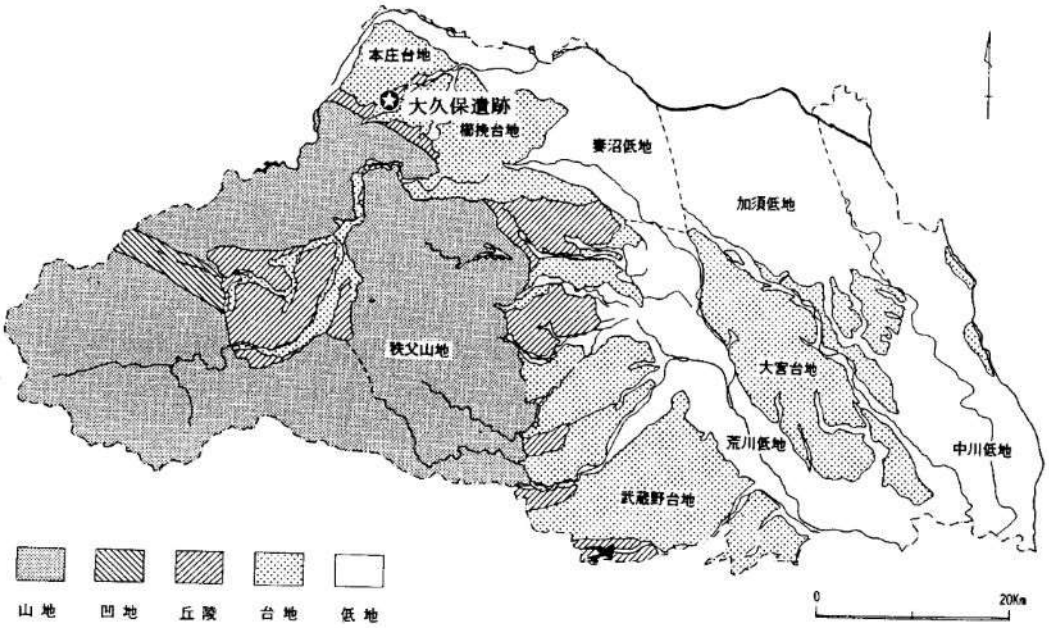
平成５年５月14日、児玉町大字児玉字大道南1645-1外にある約2,700㎡の土地に、分譲住宅の建設を予定している飯田建設工業株式会社より、開発予定地内における埋蔵文化財の所在について、児玉町教育委員会に照会があった。

児玉町教育委員会では、早々に照会のあった開発予定地を「遺跡分布地図」と照合したところ、当該予定地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である児玉町№043遺跡（大久保遺跡）の隣接地にあたっていた。そのため、埋蔵文化財が所在する可能性が十分に考えられるため、その所在については試掘調査を実施して明確にする必要がある旨を、５月18日付児教社第49号の文書により回答した。

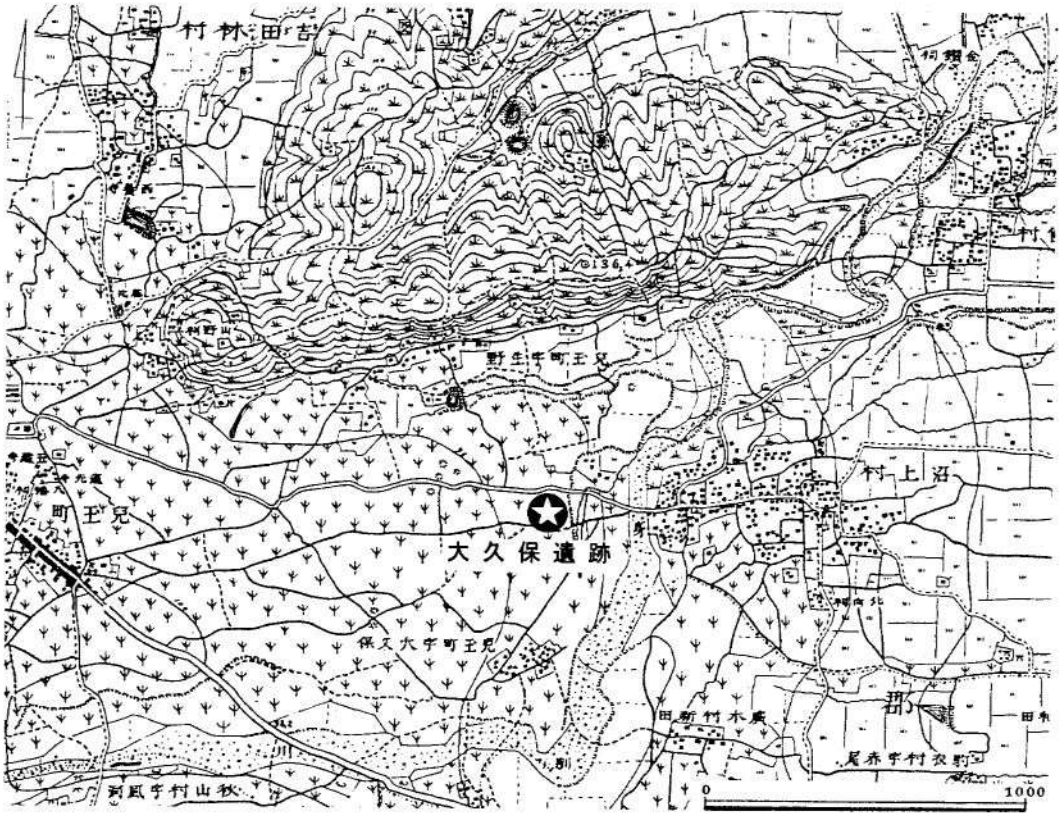
その後、５月24日に同社から当該予定地の試掘調査について依頼があったため、日程を調整しながら７月７日に現地の試掘調査を実施したところ、当該予定地のほぼ全域から古墳時代～平安時代の竪穴式住居跡や土壙などの遺構が多数検出された。この結果、当該予定地内における埋蔵文化財の所在が明確になったため、「開発予定地は埋蔵文化財が所在するため現状で保存することが望ましいが、やむをえず現状変更する場合は、当該開発に先立って、埋蔵文化財の取り扱いについて町教育委員会と協議すること」を、７月12日付児教社第105号の文書により回答した。

そして、同社と町教育委員会で、当該予定地内の埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ねた結果、すでに開発計画が進行しており、現状で保存することが極めて困難であることから、やむをえず発掘調査を実施して記録保存することになった。発掘調査の実施にあたっては、飯田建設工業株式会社と児玉町遺跡調査会の間で、発掘調査に関する委託契約を締結し、平成６年５月９日より現地における発掘調査が実施された。

なお、発掘調査に関わる届出は、平成６年４月７日に児玉町遺跡調査会会長より「埋蔵文化財発掘調査届」が、飯田建設工業株式会社代表取締役より「埋蔵文化財発掘届」が、児玉町教育委員会と埼玉県教育委員会を経て、文化庁長官に提出された。



第２図　埼玉県の地形区分



第３図　明治時代における遺跡周辺の様子

（明治18年測量の参謀本部陸軍部測量局作成の迅速測図を一部改変）

Ⅱ．遺跡の地理的・歴史的環境

本遺跡は、ＪＲ八高線の児玉駅から南東側約1500mの地点に位置し、小山川左岸の標高87mを測る南西から北東方向に細長く延びる自然堤防上に立地している。遺跡の東側約200mには三波川変成帯に属する南側の上武山地内から流れ出る小山川（旧身馴川）が北流し、北側約600mには南西から北東方向に延びる残丘性独立丘の生野山丘陵がある。その形状は、西端部付近の標高139mを測る三角点（物見塚古墳）を頂点に、北東側と東側に向かって二筋の狭く平坦な尾根筋が延び、女堀川中流域の方に向いた北側斜面は比較的緩やかなのに比べて、本遺跡の方に向いた南側斜面はかなり急な斜面になっている。この生野山丘陵には、新第三紀層の地層の上に、秩父盆地の高位段丘面にあたる長尾根（尾田蒔丘陵）の尾田蒔礫層と同じく、第四紀の中期更新世（約50万年前）に形成された浅見山礫層が堆積している（橋屋・中村1993）。この浅見山礫層は、尾田蒔礫層と同じく風化の進んだクサレ礫になっており、その礫種構成は、現在の当地方の代表的河川である神流川や小山川（旧身馴川）の河床礫の構成よりも、現在は当地方より南側約６kmの櫛引台地内を東流する荒川の河床礫の構成に近いと言われている（小幡2002）。

本遺跡の周辺は、現在は河川改修やほ場整備等の土地改良によって、地形的に整備され安定した景観的様相が見られるが、かつては小山川（旧身馴川）による氾濫原が広がり、水田も生野山丘陵との間に湧水による溜池の天水を利用した小規模な水田が形成されていた程度である。また、小山川（旧身馴川）も現在の流路より蛇行が強く、扇状地地形の河川のため表流水が少なく乾期には伏水する区域であり、比較的不安定な地形的条件を備えた地域であった（第３図）。

児玉地方には、各時代にわたって比較的多くの遺跡が存在しているが、本遺跡が所在する低地部には、概して弥生時代以前の遺跡は少なく、古墳時代以降になって急激に遺跡数が増加する傾向が認められる。

先土器時代の遺跡は、当地方では面的に発掘調査された例はないが、丘陵部では層位的に文化層が確認された遺跡がいくつか存在する。本遺跡周辺の低地部では、先土器時代の遺跡の痕跡は非常に少なく、生野山残丘北側斜面下の低台地上に立地する城の内遺跡（鈴木他1981）や、本庄台地上の将監塚遺跡（石塚1986）と古井戸遺跡（宮井1989）などで、後世の遺構の覆土や表土層などに混じって、該期の石器が少量出土している程度である。

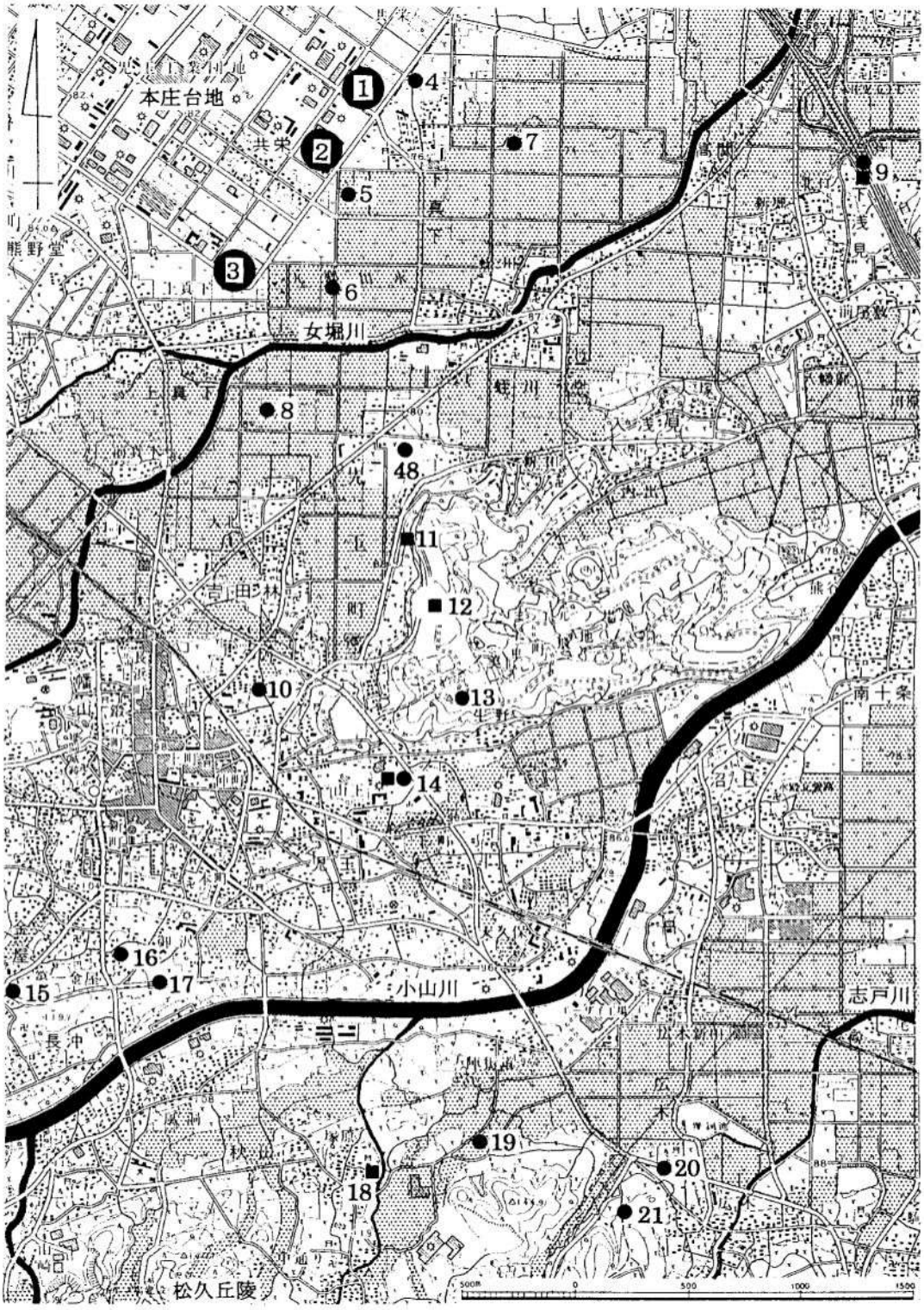
縄文時代の遺跡は、草創期から早期では、現在までのところ丘陵や残丘上を主体に土器片を少量出土する遺跡が少数見られる程度である。前期では、丘陵部の丘陵上やその斜面下の台地上に比較的小規模な集落が進出する様相が認められる。中期中葉になると、本庄台地の縁辺部に将監塚遺跡（石塚1986）・古井戸遺跡（宮井1989）・新宮遺跡（恋河内1995）がほぼ時期を同じくして出現し、中期後半にかけてそれぞれが同じような環状を呈する大規模集落に発展する。この近接して営まれた３つの大規模集落は、中期末頃には衰退し、同じ頃には中下田遺跡（鈴木他1991）・石橋遺跡（恋河内1995）・西富田前田遺跡（増田1989）などの小規模な集落が沖積低地内に形成されている。後期・晩期は、これまでの前・中期と比較すると遺跡数が減少し、その分布密度はかなり希薄な状況となる。遺跡立地の主体であった丘陵部や台地上は、少量の土器を出土する程度の極めて小規模な遺跡

が点在する状況であるが、低地部には女池遺跡（恋河内2001）・南街道遺跡（恋河内1996）・児玉清水遺跡・藤塚遺跡（鈴木他1997）などの小規模な集落や、大久保遺跡（本報告）・後山王遺跡（長瀧1992）・雌濠遺跡（本庄市1986）などの少量の土器だけを出土する遺跡が、旧河道や湧水点に接する低台地の縁辺部や微高地上に占地するようになる（鈴木1997）。

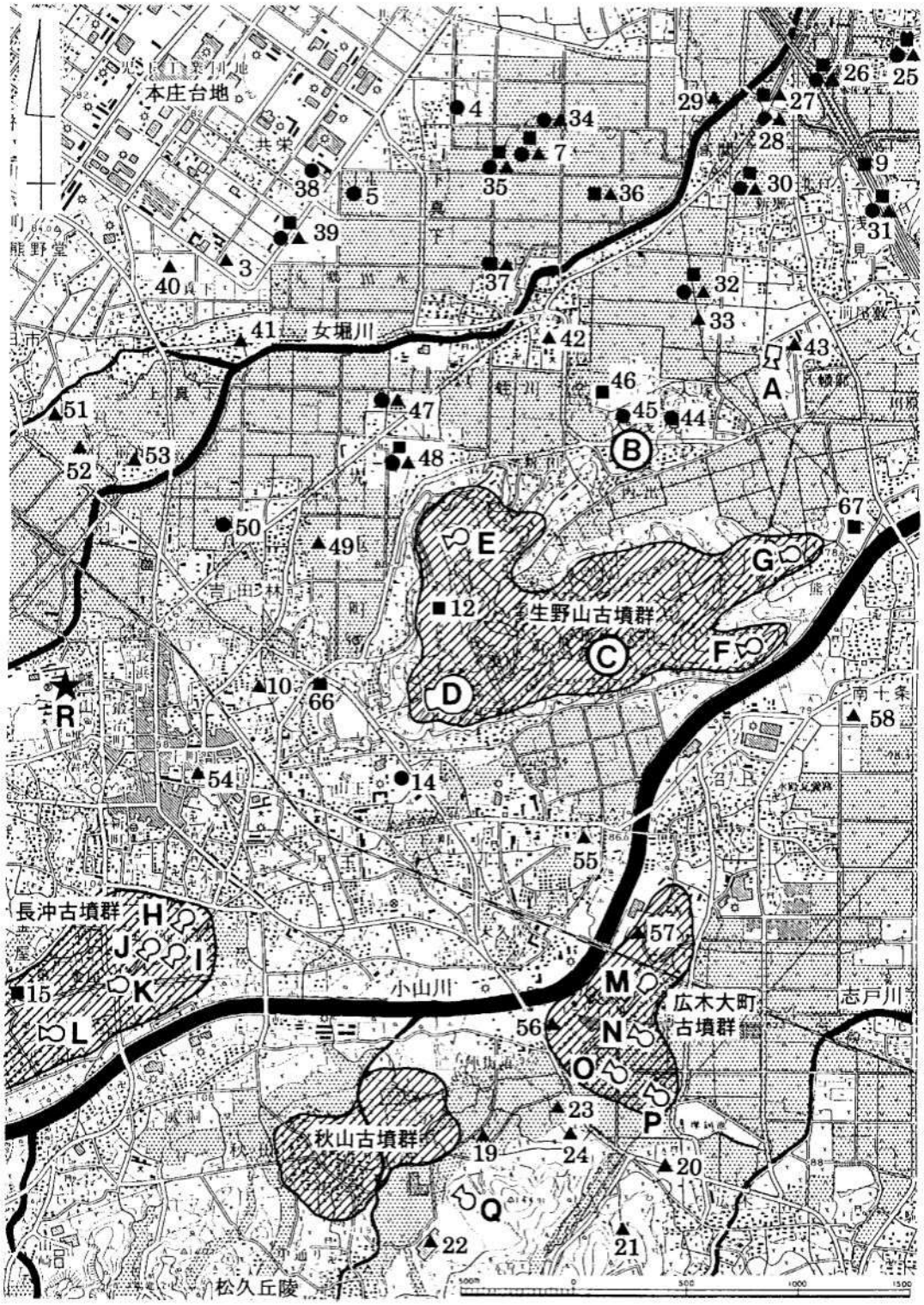
弥生時代の遺跡は、その初期の段階では縄文時代の後・晩期と同様に、極少量の土器を出土する遺跡が丘陵部や低地内に点在する状況が見られる。中期の中頃になると、志戸川流域の低地内の自然堤防上に村後遺跡（細田1984）の集落が出現し、熊谷・行田周辺の該期集落に見られる低地開発の志向性と類似した傾向が窺えるが、北側に隣接する女堀川流域ではその傾向は顕著でない。中期後半には、志戸川流域の丘陵部を主体に、神明ヶ谷戸遺跡（坂本1980、美里町1986）の環濠集落をはじめ、河輪神社境内遺跡（坂本1976、柿沼1984）や猪俣南遺跡（丸山1996）などの比較的小規模な集落が形成される。この集落立地の丘陵部嗜好は後期においても継続され、低地内における集落の形成は後期を通じてほとんど見られなくなる。本格的な低地開発に伴う低地内への集落の再進出は、古墳時代前期になってから急速に進行する。

古墳時代の遺跡は、前期の段階から丘陵部や低地部を問わず多くの集落が形成される。これら前期の遺跡は、低地部では外来系の土器を主体とする遺跡が顕著であるが、丘陵部の遺跡では当地方における弥生時代後期からの系譜を引く在地系の土器が色濃く残存する。また、前期には集落の増加とともに、弥生時代にはあまり顕著ではなかった方形周溝墓の造営も盛んに行われているが、それらの周溝墓群の中に前方後方形周溝墓を含むものが多く見られることも当地方の特徴の一つである。中期では、前期集落の進展を基盤としてさらに集落が展開し、比較的大規模な集落も低地部を中心にいくつか形成されるようになる。また当地方では、中期の前半段階にやや多様ながら据え付けカマドを持つ住居が出現し、後半段階には集落内のほとんどの住居に普及し一般化している。後期中葉以降になると、低地部周辺では比較的規模の小さな集落が多く形成されるようになり、集落数が増加する傾向が見られる。また、当地域ではこれらの集落遺跡の発展に応じて古墳も数多く築造され、前期は前方後方墳の鷲山古墳（坂本他1986、恋河内2001）が、中期は造り出し付き円墳の物見塚古墳（大熊2002）・金鑽神社古墳（坂本他1986）・生野山将軍塚古墳（柳田1964）が、後期には各地に首長墓級の前方後円墳とともに、残丘上や河川沿いの氾濫原や台地上に、長沖古墳群（菅谷他1980）・生野山古墳群（菅谷他1973）・広木大町古墳群（菅谷・笹森1975、小渕他1980、長滝1992）・秋山古墳群（菅谷・坂本他1990）などの群集墳が墓域として造営されている。

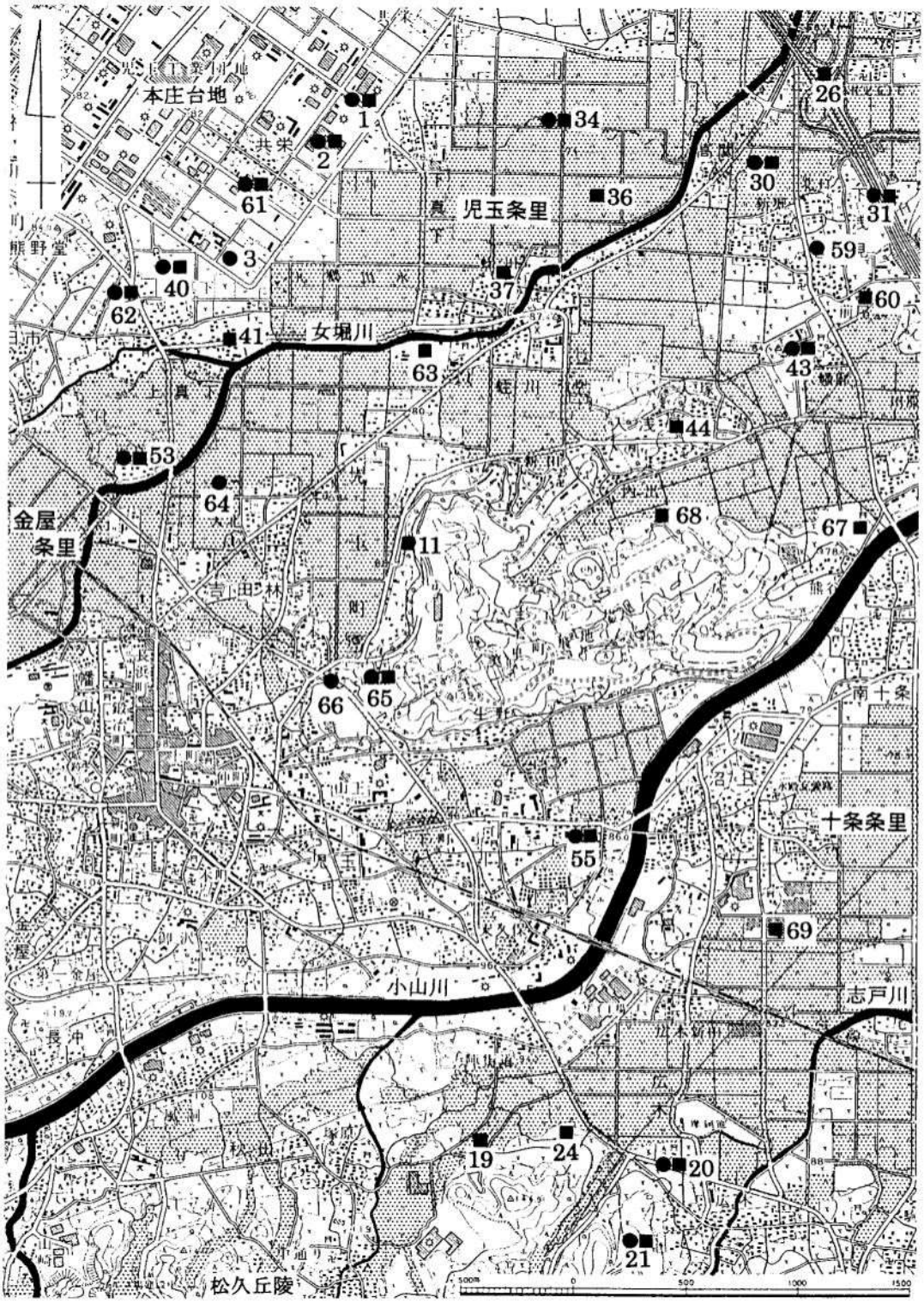
7世紀後半の白鳳時代になると、当地域の低地部における集落は、大規模な再編成が行われたようで、それまで低地内にあった集落の多くが廃絶されて、低地周辺部の台地上や残丘上に移動する現象が見られる。これらの集落の中で、本庄台地縁辺部に新たに形成された将監塚・古井戸遺跡（井上1986、赤熊1989）・南共和遺跡（恋河内1995）・新宮遺跡（恋河内1995）・辻ノ内遺跡（鈴木他1991）などは、平安時代の前期（9世紀）前半頃まで継続的に集落が営まれた様相が窺えるが、後半以降になると徐々に衰退し、中期（10世紀）には低地内の自然堤防上や微高地上と丘陵（残丘）上やその斜面下の台地上に、再び小規模な集落が多く進出するようになる。



第４図　周辺の縄文・弥生時代主要遺跡　　（●－縄文、■－弥生）



第５図　周辺の古墳時代主要遺跡　　（■－前期、●－中期、▲－後期）



第６図　周辺の奈良・平安時代主要遺跡　　（●－奈良、■－平安）

周辺の主要遺跡一覧表

番号	遺跡名	備考・参考文献	番号	遺跡名	備考・参考文献
1	将監塚遺跡	(石塚1986、井上1986、赤熊1989)	45	城の内遺跡	(鈴木他1981、恋河内1997)
2	古井戸遺跡	(井上1986、宮井1989、赤熊1989)	46	日延遺跡	(恋河内1999)
3	新宮遺跡	(恋河内1995)	47	辻堂遺跡	(恋河内1996)
4	将監塚東遺跡	(増田1995、鈴木他1997)	48	南街道遺跡	(恋河内1996)
5	平塚遺跡	(徳山他1994、鈴木他1997)	49	宮田遺跡	(恋河内1996)
6	中下田遺跡	(鈴木他1991)	50	高縄田遺跡	(恋河内1995)
7	藤塚遺跡	(徳山他1996、鈴木他1997)	51	八荒神南遺跡	(篠崎1995)
8	石橋遺跡	(恋河内1995)	52	反り町遺跡	(篠崎1995)
9	飯玉東遺跡	(駒宮1979、恋河内1995)	53	金佐奈遺跡	(徳山他1997、1998)
10	女池遺跡	(恋河内2001)	54	仲町遺跡	
11	吉田林割山遺跡	児玉町遺跡調査会が1990年調査	55	**大久保遺跡**	(本報告)
12	生野山遺跡	(埼玉県1982)	56	広木大町古墳群内遺跡	(小渕他1980)
13	上生野遺跡	(大熊2002)	57	後山王遺跡	(長滝1992)
14	児玉清水遺跡	児玉町遺跡調査会が1995・96年調査	58	樋之口遺跡	(菅谷・笹森1976)
15	長沖久保遺跡	(恋河内1984、君島1999)	59	中畑遺跡	児玉町が1996年にB地点を調査
16	江ノ浜遺跡	(埼玉県1980)	60	南ノ前遺跡	(恋河内1999)
17	賀家ノ上遺跡	(埼玉県1980)	61	南共和遺跡	(恋河内1995)
18	塚原遺跡	(徳山1988)	62	真下境東遺跡	(鈴木他1989)
19	秋山大町遺跡	児玉町遺跡調査会が1997～99年調査	63	蛭川坊田遺跡	児玉町遺跡調査会が1990年調査
20	瓶薮神社前遺跡	(中村1980)	64	樋越遺跡	(恋河内1995)
21	広木上宿遺跡	(山本1996、上野1997)	65	阿知越遺跡	(鈴木他1983、1984)
22	秋山東遺跡	(恋河内1987)	66	御林下遺跡	(駒宮1977、利根川1998)
23	秋山大町東遺跡	児玉町遺跡調査会が1999年調査	67	宮ヶ谷戸遺跡	(美里町が1986年調査)
24	諏訪平遺跡	児玉町遺跡調査会が1996～99年調査	68	向田A遺跡	(恋河内1998)
25	四方田遺跡	(増田1989)	69	宮下遺跡	(菅谷・笹森1976)
26	後張遺跡	(立石他1982、1983)			
27	川越田遺跡	(赤熊・富田1985、恋河内1993)	A	鷲山古墳	(坂本他1986、恋河内2001)
28	梅沢遺跡	(赤熊・富田1985、恋河内1995)	B	金鑽神社古墳	(坂本他1986)
29	今井川越田遺跡	(磯崎1995、伴瀬1996、瀧瀬1997)	C	生野山将軍塚古墳	(柳田1964)
30	東牧西分遺跡	(恋河内1995)	D	物見塚古墳	(大熊2002)
31	雷電下遺跡	(駒宮1979、恋河内1990、1999)	E	生野山銚子塚古墳	(菅谷1984)
32	浅見境北遺跡	(恋河内1997)	F	生野山16号古墳	(菅谷1984)
33	浅見境遺跡	児玉町遺跡調査会が1986年調査	G	熊谷後1号墳	(美里町1986)
34	前田甲遺跡	(増田1992、1995)	H	長沖31号墳	(菅谷他1980)
35	堀向遺跡	(徳山1995)	I	長沖32号墳	(菅谷他1980)
36	柿島遺跡	(徳山1995)	J	長沖25号墳	(菅谷他1980)
37	左口遺跡	(徳山1994)	K	長沖8号墳	(菅谷他1980)
38	古井戸南遺跡	(井上1986)	L	長沖79号墳	(菅谷他1980)
39	塚畠遺跡	(鈴木他1991)	M	広木大町40号墳	(小渕他1980)
40	辻ノ内遺跡	(鈴木他1991)	N	広木大町9号墳	(菅谷・笹森1975)
41	上真下東遺跡	児玉町が1987年に確認調査	O	広木大町8号墳	(菅谷・笹森1975)
42	共和小学校校庭遺跡	(恋河内1989、大熊2000)	P	大町両子塚古墳	(福島1975)
43	鷲山南遺跡	児玉町が1983年調査	Q	秋山諏訪山古墳	(菅谷・坂本他1990)
44	新屋敷遺跡	児玉町が1989年調査	R	八幡山埴輪窯跡	(柳1961)

Ⅲ. 遺　跡　の　概　要

大久保遺跡は、縄文時代後期や弥生時代中期の遺物も少量出土している（第70図）が、概ね古墳時代後期～平安時代中期の集落跡を主体とする複合遺跡である。本遺跡は、すでに分譲住宅建設や倉庫建設に伴ってＡ・Ｂ・Ｃの３地点が発掘調査されているが、本報告以外のＡ地点とＣ地点については現在未報告のため、ここではＢ地点を中心にその概要を述べる。

今回報告するＢ地点は、小山川左岸の標高87mを測る南西から北東方向に細長い自然堤防上の北東端付近に位置しており、調査区の東側は段丘崖状に一段低くなっている。本地点やその周辺は、地形的には微高地ではあるが、昭和40年代頃には陸田が行われていたようで、Ｂ地点の調査区内にも陸田用の井戸が１基存在している。

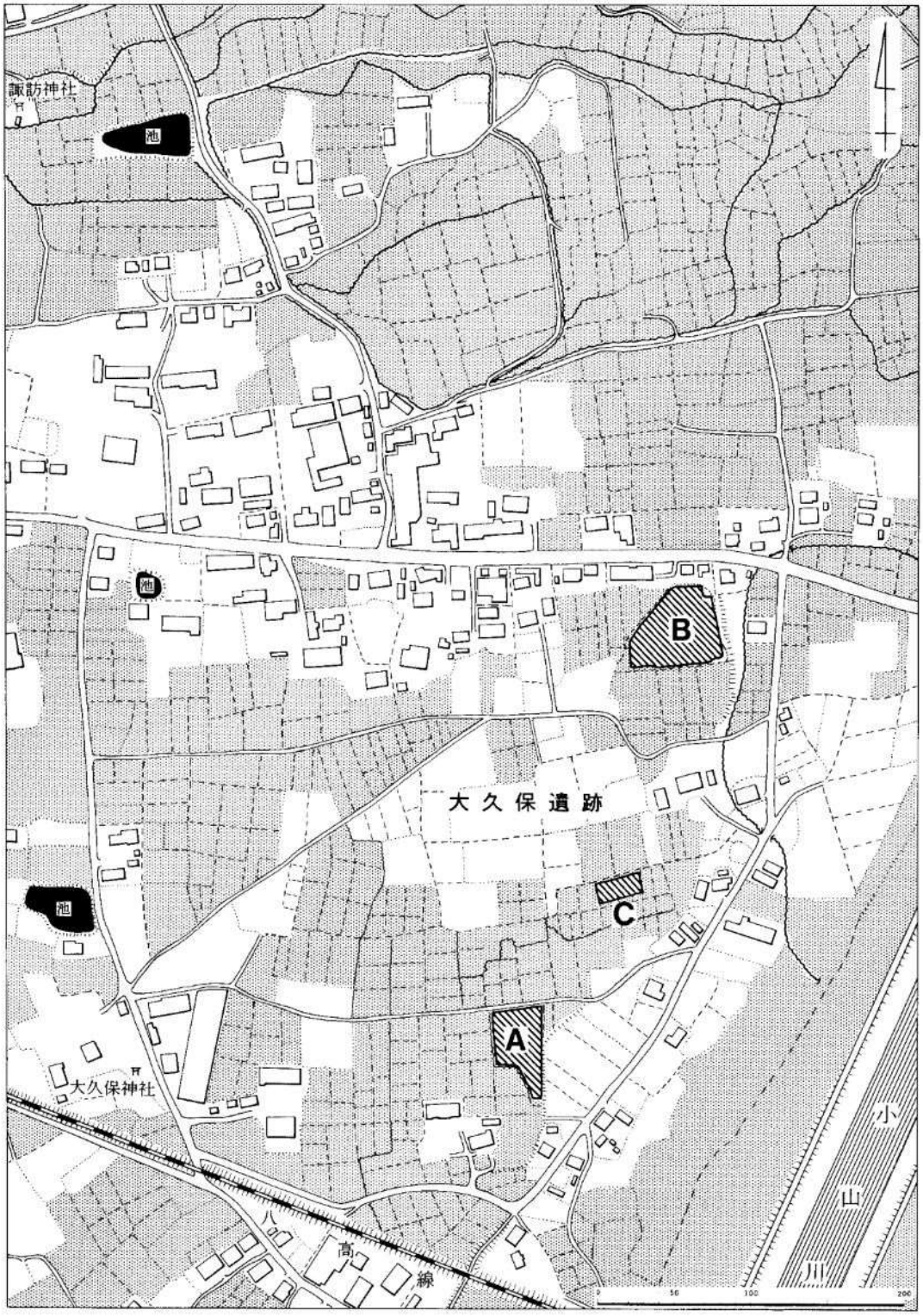
Ｂ地点の調査で検出された遺構は、竪穴式住居跡21軒、掘立柱建物跡４棟、土壙14基、溝跡１条である。これらの遺構は、古墳時代後期の６世紀中頃から平安時代中期の10世紀にわたるものであるが、現在までの調査では長期間継続する集落ではなく、何時期か断絶が認められる。また、Ｂ地点調査区内の北側から北西側半分にかけては、古墳時代後期から奈良時代中頃までと奈良時代後半以降では、遺構の確認面が若干異なっており、調査区内の地形も古墳時代後期では調査区の北西側に向かって低く傾斜しているが、奈良・平安時代には傾斜がかなり緩やかになっている。

古墳時代後期の遺構は、第29・34・37・41・43・46号住居跡６軒である。この６軒の住居跡は、相互に重複せず、出土土器からもあまり時間差が見られないことから、比較的短期間に営まれた集落の一部と考えられる。調査区内では２軒１組で３グループに分かれたような配置をとっており、いずれの住居跡も向きを地形の等高線に合わせて南西から北東方向に向けている。カマドは、住居の北東側壁が４軒、南西側壁が２軒で、いずれも器受部の土器の架け方が２個並置式である。出土遺物は、いずれの住居跡からも土師器の土器が比較的多く出土しているが、須恵器は一片も見られない。また、第37号住居跡・第41号住居跡・第43号住居跡・第46号住居跡の４軒からは、いわゆる「編物石」と呼ばれる石の集石が見られる。

白鳳時代の遺構は、第45号住居跡の１軒である。この住居跡も、古墳時代後期の住居跡と同じく、その向きを北東方向に向けている。住居跡の掘り込みは比較的深く、他の時代の住居跡に比べて遺存状態は良好であるが、遺物は非常に少なく、土器片が少量出土しただけである。その床面上に熱によって赤色化した部分が広範囲に見られるが、その関係は不明である。

奈良時代の遺構は、第40・42号住居跡の２軒と第４・９・10・11号土壙の４基で、いずれも８世紀中頃から後半の時期を主体にしている。第40号住居跡は、これまでと違って東西方向に向いているが、これはこの時期までに北側の谷の堆積が進行して地形条件が変化したためと考えられる。

平安時代の遺構は、竪穴式住居跡12軒、掘立柱建物跡４棟、土壙７基である。これらの遺構は、概ね９世紀から10世紀のもので、第31・36・44号住居跡、第１・２号掘立柱建物跡、第４・５・12号土壙以外は、すべて10世紀以降のものと推測される。住居の向きは東西方向が多く、カマドの位置も当地方で一般的な東カマドがほとんどであるが、第28号住居跡は当地方でも珍しい南カマドである。遺物は、土器が主体であるが、これまでの時代に比べて鉄製品の出土が多いようである。



第７図　大久保遺跡Ｂ地点位置図（昭和44年児玉町役場作成1/2500地図を一部改変）

Ⅳ. 検出された遺構と遺物

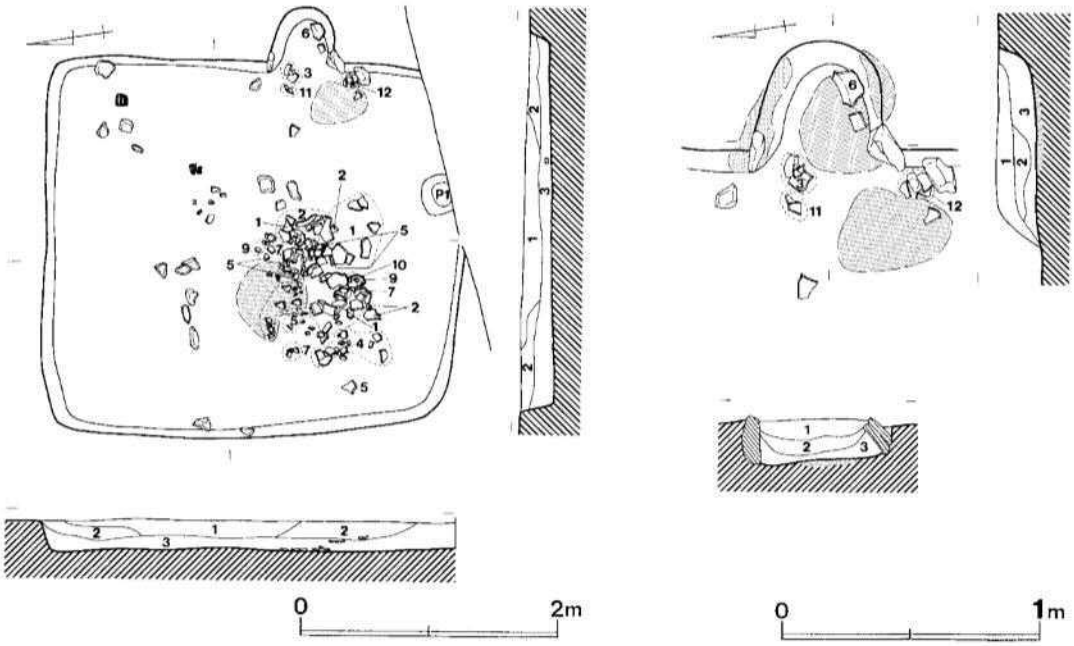
1．竪穴式住居跡

第 27 号住居跡（第９図、図版７）

調査区の南西端近くに位置し、東側約５mには第28号住居跡がある。住居跡の一部が南側の調査区外に位置するため、遺構の全容は不明である。本住居跡は、地山の暗茶褐色粘土層まで掘り込まず上面の黒色土中に構築されているが、遺存状態は比較的良好である。

平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、やや不整の方形を呈するものと思われる。規模は、東西方向が3.00m、南北方向は3.28mまで測れる。住居の主軸方向は、N―100°―Eを向いている。

壁は、若干傾斜して直線的に立ち上がり、確認面からの深さは26cmある。各壁下には壁溝は見ら



第９図　第27号住居跡

第27号住居跡土層説明

第１層：暗褐色土層（白色粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第２層：暗褐色土層（白色粒子・砂利を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第３層：暗褐色土層（赤色粒子・炭化粒子を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第27号住居跡カマド土層説明

第１層：暗褐色土層（炭化粒子・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第２層：暗赤褐色土層（焼土粒子・焼土ブロックを多量に、炭化粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第３層：暗褐色土層（焼土ブロック・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

れない。床面は、黒色土を埋め戻した貼床式である。住居中央部は比較的硬くしまっているが、壁際に近い周辺部はやや軟弱である。また、中央部の西側寄りには床面が炉のように赤く円形に焼けて堅化した部分が見られる。

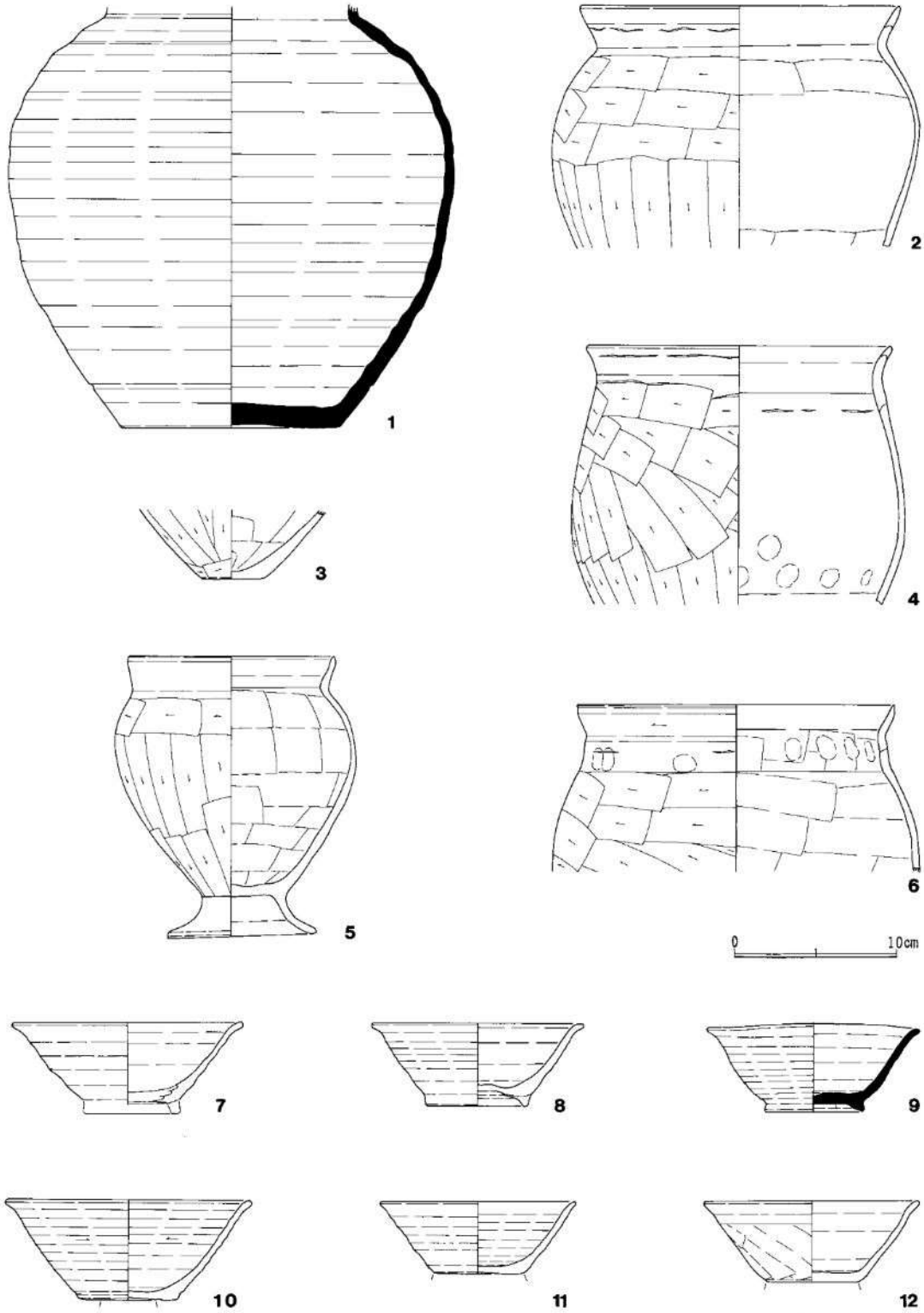
ピットは、南側壁際の中央付近からＰ１が検出されただけである。Ｐ１は、直径約30cm程度の円形ぎみの形態で、床面からの深さは15cmある。

カマドは、住居東側壁の中央やや南側寄りの位置にあり、壁をほぼ直角に掘り込んで構築されている。煙道部はすでに削平されており、燃焼部だけが残存している。残存する部分の規模は、全長53cm・最大幅50cmである。住居内に袖部の痕跡はなく、住居の壁に接する部分の両側に、扁平な自然石（片岩）が左側に１枚、右側に２枚縦に据えられていることから、カマドの焚口部は住居の壁の位置とほぼ一致していたと考えられる。燃焼部は、全面良く焼けて赤色化している。燃焼面（火床）は、住居の床面とほぼ同じ高さである。

遺物は、主に住居中央部の床面付近とカマド周辺の２箇所から、比較的まとまって土器が出土している。このうちの住居中央部の土器群は、床面が炉のように赤く焼けた部分の近くにまとまって分布しており、あるいはそれと関係するものかもしれない。

第27号住居跡出土遺物観察表

1	須恵器 壺	A．残存高27.1、底部径13.6。B．粘土紐積み上げ成形。C．胴部内外面回転ナデ。底部外面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－淡灰褐色。F．胴部1/2。G．床面付近。H．外面に煤付着、須恵質。
2	甕	A．口縁部19.8、残存高15.0。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－淡褐色。F．3/4。G．床面付近。
3	甕	A．底部径4.0。B．粘土紐積み上げ成形。C．胴部外面下半ケズリ、内面篦ナデ。底部外面ケズリ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－明橙褐色。F．1/2。G．カマド内。
4	甕	A．口縁部径（18.8）、残存高16.1。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D．赤色粒、白色粒、片岩粒。E．外－暗茶褐色、内－淡黄褐色。F．1/3。G．床面付近。
5	小　形 台付甕	A．口縁部径12.8、器高17.4、台端部径9.2。B．粘土紐積み上げ成形、台部貼り付け。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。台部内外面ヨコナデ。D．赤色粒。E．外－淡橙褐色、内－淡褐色。F．ほぼ完形。G．床面付近。
6	甕	A．口縁部径（19.6）。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。D．赤色粒、白色粒、片岩粒。E．外－淡褐色、内－淡橙褐色。F．1/4。G．カマド内。
7	高台付 坏	A．口縁部径（14.4）、残存高5.0、底部径（5.9）。B．ロクロ成形。高台部貼り付け。C．体部内外面回転ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－暗橙褐色。F．3/4。G．床面付近。H．高台部剥離。
8	高台付 坏	A．口縁部径（13.2）、器高5.1、高台部径6.4。B．ロクロ成形。高台部貼り付け。C．体部及び高台部内外面回転ナデ。底部外面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－淡灰褐色。F．1/2。G．カマド内。
9	高台付 坏	A．口縁部径13.2、器高5.5、高台部径6.2。B．ロクロ成形。高台部貼り付け。C．体部及び高台部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D．白色粒、黒色粒。E．内外－暗灰色。F．3/4。G．カマド内。H．須恵質。
10	坏	A．口縁部径（15.2）、器高6.2、底部径6.0。B．ロクロ成形。C．体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D．赤色粒、白色粒。E．内外－茶褐色。F．1/2。G．覆土中。
11	坏	A．口縁部径12.2、器高4.5、底部径5.5。B．ロクロ成形。C．体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D．赤色粒、白色粒。E．内外－淡茶褐色。F．1/2。G．床面付近。
12	坏	A．口縁部径13.4、器高5.0、底部径5.7。B．ロクロ成形。C．口縁部内外面回転ナデ。体部外面篦ナデ、内面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D．赤色粒、白色粒。E．外－暗橙褐色、内－暗茶褐色。F．3/4。G．覆土中。



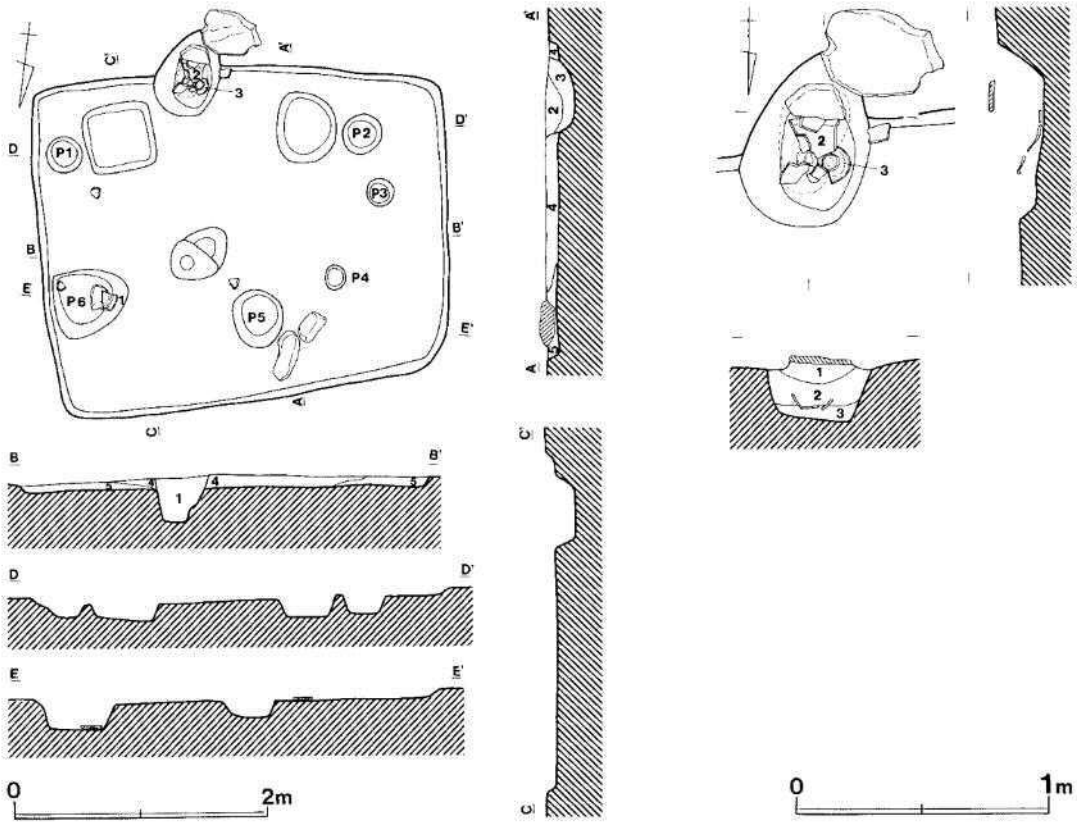
第10図　第27号住居跡出土遺物

第 28 号住居跡（第 11 図、図版 8）

調査区の南西側に位置し、西側約５ｍには第27号住居跡が、南側約２ｍには第２号溝跡がある。本住居跡は、地山の暗茶褐色粘土層まで掘り込まず、上面の黒色土中に構築されている。そのため、遺構の上面は後世の耕作等による強い削平を受けており、遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、やや不整の長方形を呈している。規模は東西方向が3.26m、南北方向が2.68mを測る。住居の主軸方向は、Ｎ－172°－Ｅを向いている。

壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは最高で８cmしか残存していない。各壁下には壁



第11図　第28号住居跡

第28号住居跡土層説明

第１層：暗褐色土層（焼土粒子・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第２層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第３層：暗茶褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第４層：暗褐色土層（白色粒子・焼土粒子・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第５層：暗茶褐色土層（ローム粒子を均一に、炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第28号住居跡カマド土層説明

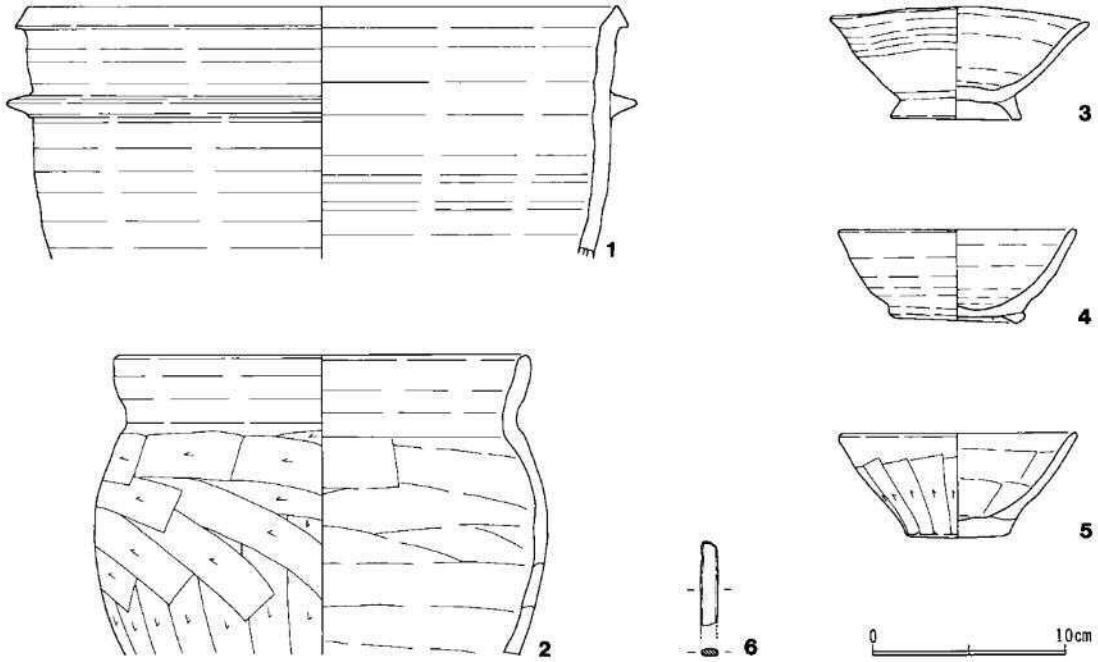
第１層：暗褐色土層（炭化粒子・焼土粒子を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第２層：暗褐色土層（炭化粒子・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第３層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

溝は見られない。床面は、黒色土を埋め戻した貼床式で、全体的にやや軟弱である。

ピットは、住居跡内からＰ１～Ｐ６の６箇所が検出されている。この他はすべて後世の掘り込みである。Ｐ１とＰ２は、直径30cm程度の円形を呈し、床面からの深さは８cmと13cmある。Ｐ３とＰ４は比較的小規模なもので、いずれも直径20cm程度の円形を呈し、床面からの深さは４cmと12cmある。Ｐ５は、45cm×40cmの不整円形で、床面からの深さは13cmある。Ｐ６は、東側壁の中央やや北側寄りの壁際に位置する。60cm×52cmの不整形を呈し、床面からの深さは26cmある。中からは、比較的大きな自然石１個と№１の大形甑の破片が出土している。

カマドは、本遺跡はもちろんのこと当地域でも比較的珍しく、住居の南側壁に構築されている。位置は、南側壁の中央よりやや東側寄りで、住居の壁に対して若干斜めに掘り込まれているようである。煙道部はすでに削平されており、規模は残存する部分で全長70cm、最大幅53cmである。住居内に袖の痕跡はなく、カマド周辺にも粘土等による構築材の崩壊土は見られないが、燃焼部の上面やカマド南端の上面から、板状の大きな自然石が出土しており、これらの自然石を構築材として利用していた可能性も考えられる。燃焼部は、住居の床面を５cm～10cm程度掘り込んでいるが、あまり焼けていない。

遺物は、主にカマド内やＰ６内から土器が出土し、覆土中からは№６の鉄製品の破片が１点出土している。また、住居北側の壁際の床面上からは、比較的大形の自然石が２個並んで出土しているが、その性格は不明である。



第12図　第28号住居跡出土遺物

第28号住居跡出土遺物観察表

1	大形甕	A．口縁部径（30.6）。B．粘土紐積み上げ成形。鍔貼り付け。C．内外面回転ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－淡褐色。F．1/5。G．P６内。
2	甕	A．口縁部径（21.6）、残存高15.5。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。D．赤色粒、白色粒、片岩粒。E．外－暗茶褐色、内－茶褐色。F．1/3。G．カマド内。
3	高台付坏	A．口縁部径13.4、器高5.8、高台部径6.8。B．ロクロ成形。高台部貼り付け。C．体部外面上半回転ナデ、下半ナデ。内面回転ナデ。底部外面ナデ。高台部内外面回転ナデ。D．赤色粒、白色粒、黒色粒。E．内外－明茶褐色。F．1/2。G．カマド内。
4	高台付坏	A．口縁部径12.4、器高4.8、高台部径7.1。B．ロクロ成形。高台部貼り付け。C．体部及び高台部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D．赤色粒、白色粒、片岩粒。E．内外－暗褐色。F．完形。G．覆土中。H．体部外面に黒斑あり。
5	坏	A．口縁部径（12.4）、器高5.4、底部径5.4。B．粘土紐積み上げ成形。C．体部外面ナデの後下半ケズリ、内面篦ナデ。底部外面ケズリ。D．白色粒、片岩粒。E．内外－明褐色。F．1/3。G．覆土中。H．体部外面に黒斑あり。
6	鉄製品	A．残存長（4.3）、幅0.9、厚さ0.35。C．扁平な棒状を呈する。錆は地金まで浸透し、比較的安定している。F．端部破片。G．覆土中。

第29号住居跡（第13図、図版9）

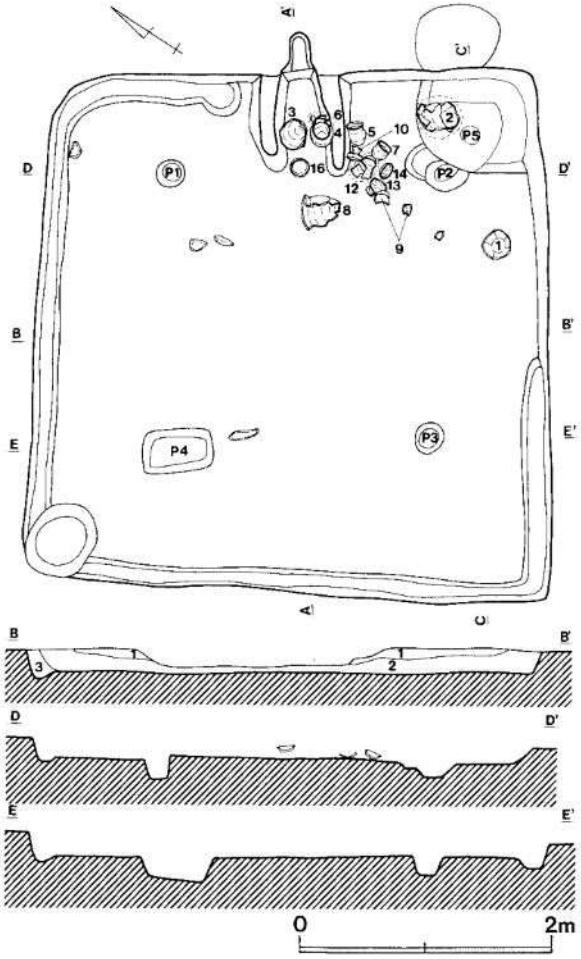
調査区の南東側に位置し、東側約３ｍには第46号住居跡がある。第２号掘立柱建物跡と重複し、その柱穴によって住居の西側コーナー部を切られている。遺構の遺存在状態は、比較的良好である。

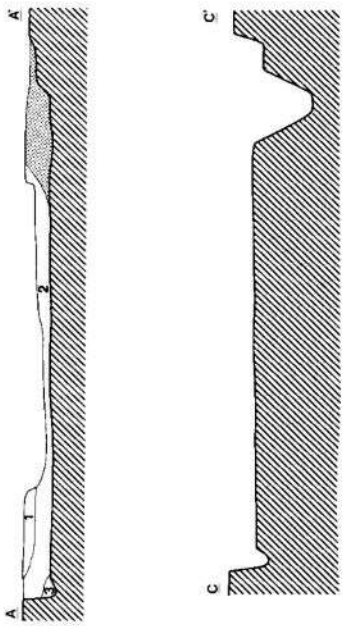
平面形は、住居の南西側壁が若干歪んだ方形を呈している。規模は、北西から南東方向が4.34m、北東から南西方向が4.16mある。住居の主軸方向は、N―55°－Eを向いている。

壁は、若干傾斜して直線的に立ち上がり、確認面からの深さは最高24cmある。各壁下には幅20cm・深さ10cm程度の壁溝が巡っているが、住居の東側コーナー部周辺には見られず途切れている。床面は、地山の暗茶褐色粘土層のブロックを埋め戻した貼床式で、ほぼ平坦に作られている。カマド周辺から住居中央部は比較的堅くしまっているが、周辺部はやや軟弱である。

ピットは、住居内から５箇所検出されている。Ｐ１～Ｐ４は、住居のほぼ対角線上に位置し、その配置から主柱穴と考えられるものである。Ｐ４以外はいずれも直径20cm前後の円形を呈し、床面からの深さはいずれも10cm～20cmで比較的浅い。Ｐ５は、住居の東側コーナー部にあり、その位置や形態からいわゆる貯蔵穴と考えられるものである。形態は、86cm×74cmの隅丸長方形のような形態で、二段に深くなっている。床面からの深さは、上段が10cm、下段が47cmある。

カマドは、住居北東側壁のほぼ中央に位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、残存する部分で全長115cm、最大幅82cmを測る。袖は、左右とも幅が25cm程度の比較的整った形態で、粘質ロームブロックを、床面上で壁に直接貼り付けて構築している。燃焼部は、住居の壁を掘り込まないで、奥壁を住居の壁と一致させている。全体に比較的良く焼けて、袖の内側は赤色化している。燃焼面（火床）は、住居の床面とほとんど同じ高さで、ほぼ水平をなしている。燃焼部内には、No.３とNo.４の甕が２個体横に並置して据えられており、左側のNo.３の甕の下にはNo.11の高坏が支脚の代わりに伏せて置かれている。また、右側のNo.４の中形の甕は、そのすぐ北東側でNo.６の小形甕が転落したような状態で出土しており、おそらくNo.４の甕の上にNo.６の小形甕を重ねていたのではないかと推測される。煙道部は、やや傾斜して住居の壁外に30cmほど残存しているが、その



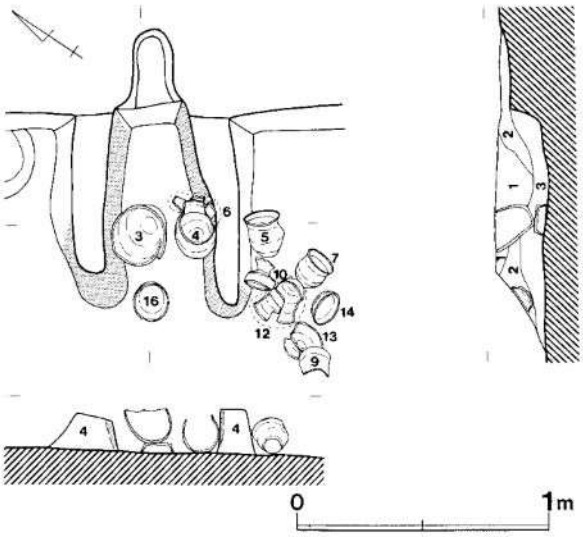


第29号住居跡土層説明

第１層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第２層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第３層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）



第29号住居跡カマド土層説明

第１層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第２層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に含み、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第３層：暗赤褐色土層（焼土ブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第４層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

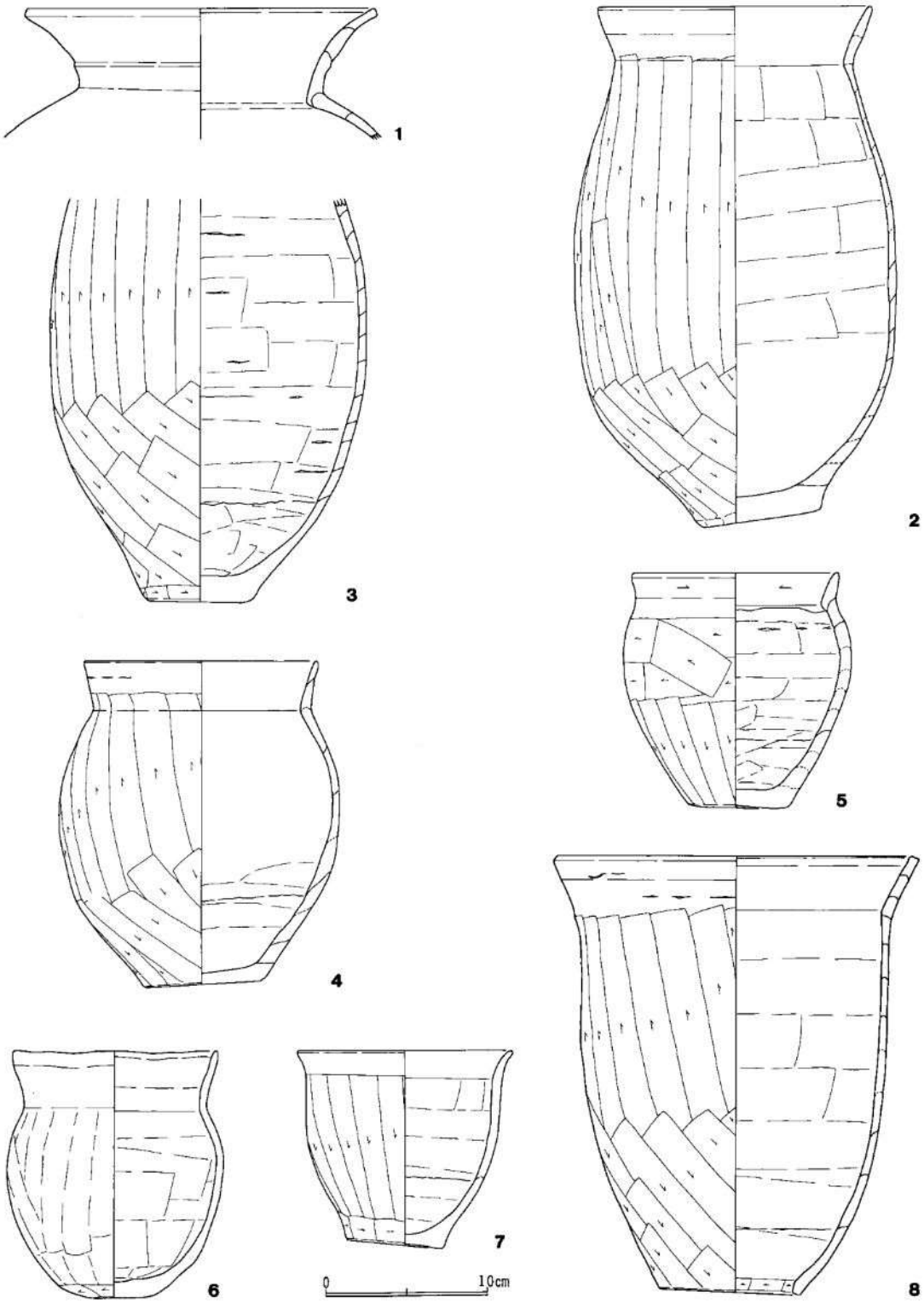
第13図　第29号住居跡

先が削平されているため全容は不明である。

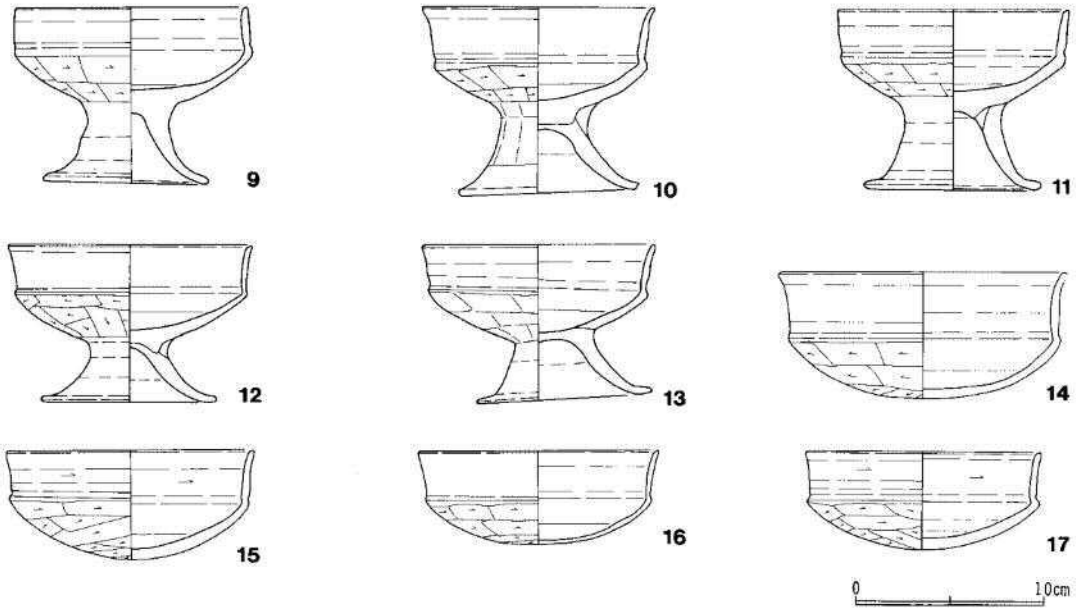
遺物は、カマドや貯蔵穴（Ｐ５）の内部及びその間の床面上から、土器がまとまって出土している。これらの土器は、それぞれの出土状態から見て、本住居跡の住人が住居の廃絶に伴ってそのまま遺棄していったものと推測され、良好な一括資料と言える。

第29号住居跡出土遺物観察表

1	壺	A．口縁部径21.8。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ナデ。胴部内外面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－明橙褐色。F．口縁部のみ。G．床面直上。
2	甕	A．口縁部径17.0、器高32.5、底部径7.4。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面箆ナデ。底部外面ケズリ。D．片岩粒、白色粒。E．内外－黒褐色。F．1/2。G．貯蔵穴（Ｐ５）内。
3	甕	A．残存高25.1、底部径6.2。B．粘土紐積み上げ成形。C．胴部外面ケズリ、内面箆ナデ。底部外面ケズリ。D．片岩粒、白色粒。E．外－暗褐色、内－淡褐色。F．2/3。G．カマド内。
4	甕	A．口縁部径14.4、器高20.4、底部径7.2。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリの後ナデ。D．片岩粒、白色粒。E．外－明茶褐色、内－暗褐色。F．ほぼ完形。G．カマド内。
5	小形甕	A．口縁部径12.8、器高14.6、底部径6.1。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面指ナデ。底部外面ナデ。D．片岩粒、白色粒。E．内外－淡褐色。F．完形。G．床面直上。
6	小形甕	A．口縁部径（12.6）、器高15.4、底部径4.0。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面箆ナデ。底部外面ケズリ。D．片岩粒、白色粒。E．内外－茶褐色。F．1/2。G．カマド内。H．外面は２次焼成を受けて荒れている。
7	小形甕	A．口縁部径13.4、器高12.4、底部径6.0。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．外－茶褐色、内－暗茶褐色。F．完形。G．床面付近。
8	大形甑	A．口縁部径22.6、器高27.2、底部径8.7。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面箆ナデ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外－淡褐色。F．1/2。G．床面直上。H．底部外面に黒斑あり。
9	高　坏	A．口縁部径12.2、器高9.4、脚端部径8.8。B．粘土紐積み上げ成形。脚部貼り付け。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。脚部内外面ヨコナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－明茶褐色。F．ほぼ完形。G．床面付近。
10	高　坏	A．口縁部径12.4、器高10.1、脚端部径9.5。B．粘土紐積み上げ成形。脚部貼り付け。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。脚部外面ケズリの後ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－明茶褐色。F．完形。G．床面直上。
11	高　坏	A．口縁部径（12.4）、器高9.6、脚端部径（9.4）。B．粘土紐積み上げ成形。脚部貼り付け。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。脚部内外面ヨコナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－明茶褐色。F．2/3。G．カマド内。H．支脚に転用。
12	高　坏	A．口縁部径13.0、器高8.3、脚端部径（9.4）。B．粘土紐積み上げ成形。脚部貼り付け。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。脚部内外面ヨコナデ。D．白色粒。E．内外－茶褐色。F．4/5。G．床面直上。
13	高　坏	A．口縁部径12.4、器高8.4、脚端部径9.1。B．粘土紐積み上げ成形。脚部貼り付け。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。脚部内外面ヨコナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－明橙褐色。F．ほぼ完形。G．床面直上。
14	坏	A．口縁部径15.4、器高6.7。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－明茶褐色。F．完形。G．床面付近。H．体部外面に黒斑あり。
15	坏	A．口縁部径13.2、器高5.8。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－茶褐色。F．ほぼ完形。G．カマド内。
16	坏	A．口縁部径12.4、器高5.0。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－明橙褐色。F．ほぼ完形。G．カマド内。
17	坏	A．口縁部径12.6、器高5.2。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－明茶褐色。F．ほぼ完形。G．床面付近。H．外面に黒斑あり。



第14図　第29号住居跡出土遺物（１）



第15図　第29号住居跡出土遺物（２）

第30号住居跡（第16図、図版10･11）

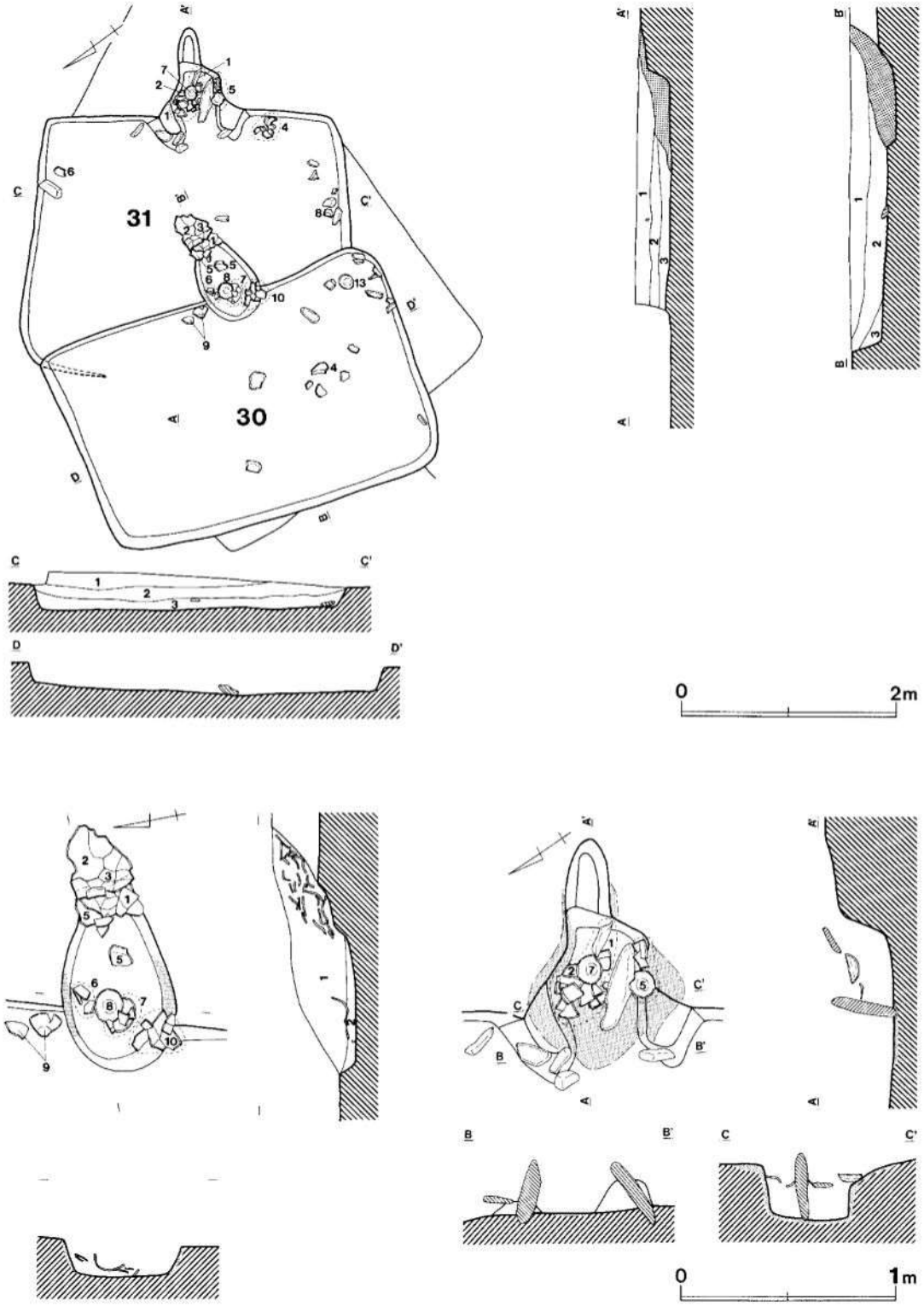
調査区中央部のやや東寄りに位置する。第31・36・37号住居跡と重複し、それらのすべてを切っている。遺構の遺存状態は、比較的良好である。

平面形は、コーナー部が若干丸みをもつやや不整の長方形を呈する。規模は、南北方向が3.28m、東西方向が2.18mを測る。住居の主軸方向は、N―105°―Eを向いている。

壁は、やや傾斜して直線的に立ち上がり、確認面からの深さは最高で32cmある。各壁下には、壁溝は見られない。床面は、地山粘質ロームのブロックを若干埋め戻した貼床式である。全体的に平坦に作られているが、比較的軟弱である。住居跡内からは、ピットは検出されなかった。

カマドは、住居東側壁の中央やや南寄りに位置し、住居の壁をやや斜めに掘り込んで構築されている。規模は、残存する部分で全長114cm、最大幅52cmある。住居跡内には、袖の痕跡は見られない。燃焼部は、住居の壁を掘り込んで作られ、その大半は住居の壁外にある。内面の壁は部分的に焼けて赤色化している。燃焼面（火床）は、住居の床面よりも８cm程度ほぼ平に掘り下げている。煙道部は、燃焼部から斜め上方に立ち上がるが、そこには№１～３の甕が口縁部を下にして入れ子状に重ねて据えられている。これら３個体の甕は、その状態から見て煙道部の補強として使用されていた可能性が高いと考えられるが、いずれも胴部下半や底部を大きく打ち欠いたものではなく、その一部を欠いた程度のものであり、排煙機能については甚だ疑問が残るものである。

遺物は、土器と鉄器が出土している。土器は、煙道部の穂居に使用されていた№１～３の甕の他に、小形台付甕（№５～７）・高台付坏（№８・９・11）・坏（№10・12・13）などがあり、カマドの燃焼部内や住居の南東側コーナー部付近から比較的多く出土している。鉄器は、棒状のものや箆かあるいは匙状のものがあり、いずれも破片で覆土中から出土している。



第16図　第30・31号住居跡

第30号住居跡土層説明

第１層：暗褐色土層（白色粒子・小石を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第２層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第３層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第31号住居跡土層説明

第１層：暗褐色土層（白色粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子・小石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第２層：暗褐色土層（白色粒子・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第３層：暗褐色土層（焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）

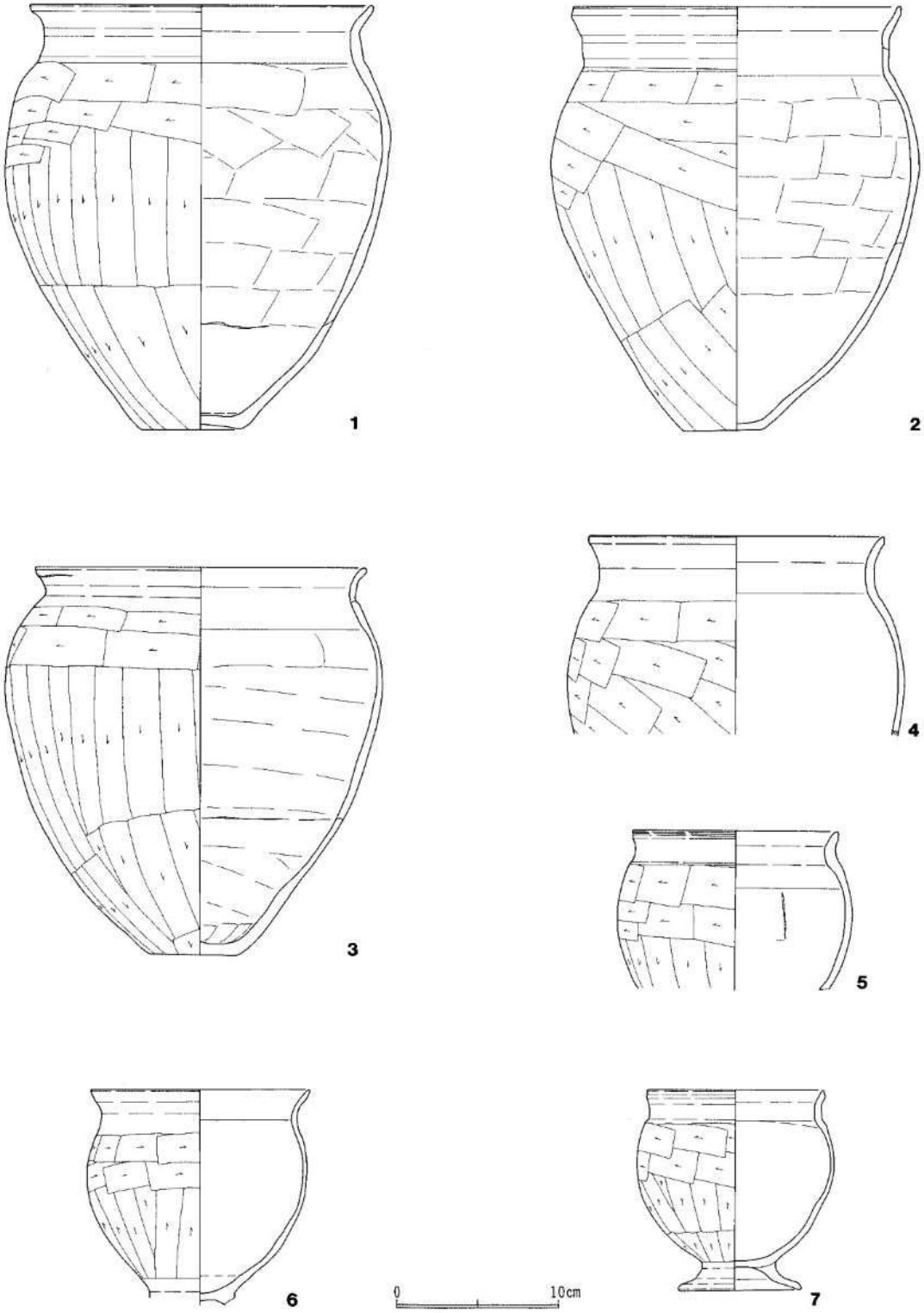
第30号住居跡カマド土層説明

第１層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

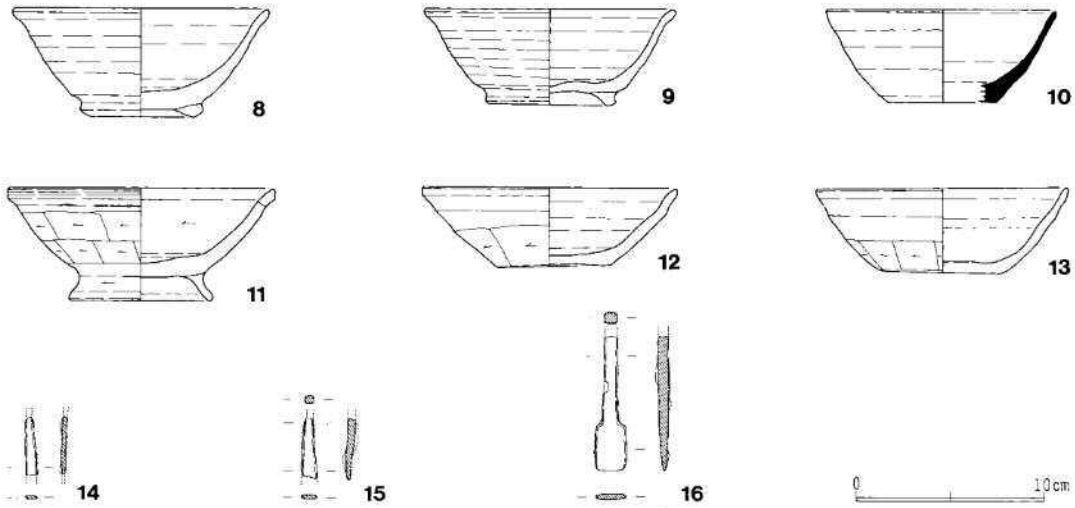
第２層：暗赤褐色土層（焼土ブロック・炭化粒子を多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第30号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A．口縁部径21.0、器高26.2、底部径（6.1）。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。底部外面ケズリ。D．赤色粒・白色粒。E．内外－暗茶褐色。F．ほぼ完形。G．カマド煙道部。H．外面に煤付着。
2	甕	A．口縁部径20.3、器高26.2、底部径（4.8）。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。底部外面ケズリ。D．赤色粒・白色粒。E．内外－明茶褐色。F．2/3。G．カマド煙道部。
3	甕	A．口縁部径20.3、器高23.9、底部径5.5。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D．片岩粒、赤色粒・白色粒。E．内外－茶褐色。F．4/5。G．カマド煙道部。
4	甕	A．口縁部径（18.2）。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D．片岩粒・赤色粒・白色粒。E．内外－明橙褐色。F．1/2。G．床面直上。
5	小　形 台付甕	A．口縁部径12.8。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。D．片岩粒・赤色粒。E．内外－明茶褐色。F．2/3。G．カマド内。
6	小　形 台付甕	A．口縁部径（13.6）、残存高13.3。B．粘土紐積み上げ成形。台部貼り付け。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D．片岩粒・白色粒。E．内外－暗褐色。F．4/5。G．カマド内。
7	小　形 台付甕	A．口縁部径10.8、器高12.4、台端部径7.6。B．粘土紐積み上げ成形。台部貼り付け。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。台部内外面ヨコナデ。D．片岩粒・赤色粒。E．内外－淡褐色。F．3/4。G．カマド内。H．外面に煤付着。
8	高台付 坏	A．口縁部径13.6、器高5.8、高台部径6.5。B．ロクロ成形。高台部貼り付け。C．体部及び高台部内外面回転ナデ。D．片岩粒・赤色粒・白色粒。E．内外－暗褐色。F．完形。G．カマド内。
9	高台付 坏	A．口縁部径13.4、器高5.1、高台部径6.9。B．ロクロ成形。高台部貼り付け。C．体部及び高台部内外面回転ナデ。D．片岩粒・赤色粒。E．内外－暗褐色。F．ほぼ完形。G．床面付近。
10	須恵器 坏	A．口縁部径13.6、器高5.8、高台部径6.5。B．ロクロ成形。高台部貼り付け。C．体部及び高台部内外面回転ナデ。D．片岩粒・赤色粒・白色粒。E．内外－暗褐色。F．完形。G．カマド内。
11	高台付 坏	A．口縁部径（14.2）、器高6.0、高台部径7.6。B．粘土紐積み上げ成形。高台部貼り付け。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。高台部内外面ナデ。D．片岩粒・赤色粒・白色粒。E．内外－明茶褐色。F．1/3。G．覆土中。
12	坏	A．口縁部径13.6、器高4.3、底部径6.0。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ。内面ナデ。底部外面ケズリ。D．片岩粒・赤色粒・白色粒。E．内外－暗茶褐色。F．3/4。G．覆土中。
13	坏	A．口縁部径13.4、器高4.5、底部径6.6。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ。内面ナデ。底部外面ケズリの後ナデ。D．片岩粒・赤色粒・白色粒。E．内外－明茶褐色。F．完形。G．床面付近。
14	鉄製品	A．残存長3.1、幅0.5、厚さ0.2。C．扁平で片側に向かって薄くなっている。F．両側欠失。G．覆土中。
15	鉄製品	A．残存長3.2、幅0.8、厚さ0.2。C．扁平で片側に向かって薄くなっている。F．両側欠失。G．覆土中。
16	鉄製品	A．残存長7.1、先端部幅1.6、厚さ0.5。C．先端部は扁平で箆状に幅が広くなっている。柄は断面四角形である。F．片方側欠失。G．覆土中。



第17図　第30号住居跡出土遺物（１）



第18図　第30号住居跡出土遺物（２）

第31号住居跡（第16図、図版10･11）

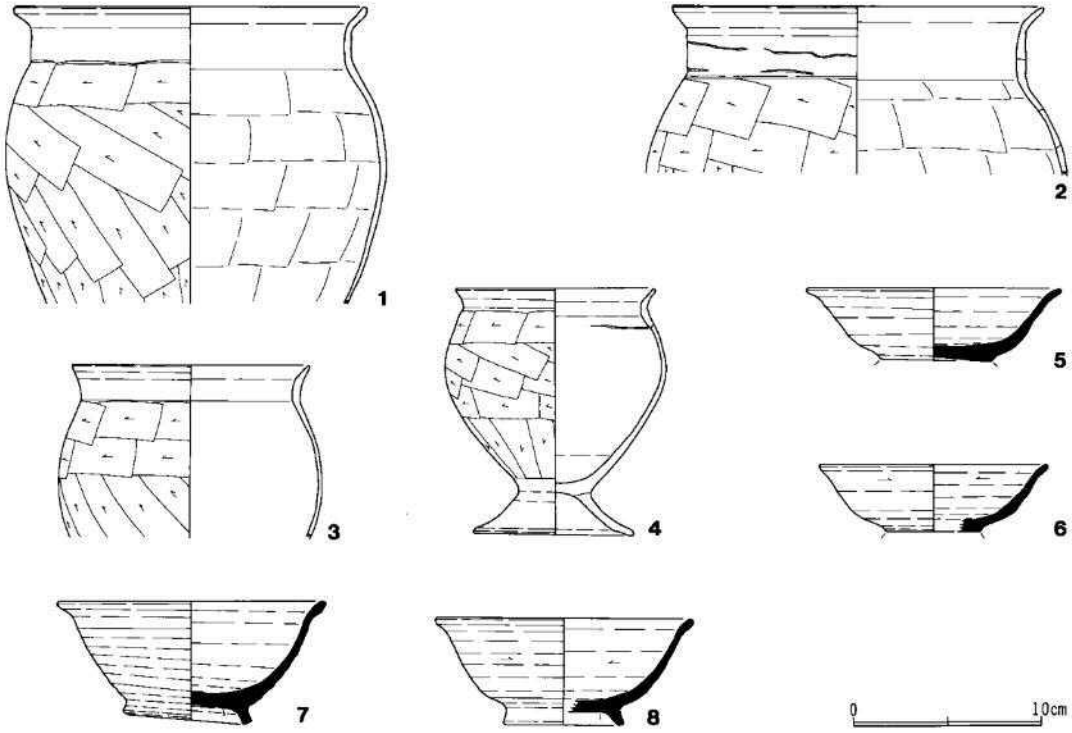
調査区中央部のやや東寄りに位置する。重複する第36・37号住居跡を切り、住居跡の西側を第30号住居跡に切られている。遺構の遺存状態は、あまり良好とは言えない。

平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部がやや丸みをもつ長方形を呈するようである。規模は、北東から南西方向が3.00m、北西から南東方向が2.24mある。住居の主軸方向は、N―129°―Eを向いている。

壁は、やや傾斜して直線的に立ち上がり、確認面からの深さは最高で40cmある。残存する各壁下には壁溝は見られない。床面は、地山粘質ローム土のブロックを埋め戻した貼床式で、全体的に平坦に作られ、堅くしまっている。カマド焚口部の前面から住居中央部の比較的広範囲にわたる床面上には、多量の焼土粒子と炭化粒子が貼り付いた状態で検出されている。住居跡内からは、ピットは検出されなかった。

カマドは、住居南東側壁のほぼ中央に位置し、住居の壁をほぼ直角に掘り込んで構築されている。規模は、残存する部分で全長115cm、最大幅96cmある。袖は、地山粘土ブロックを住居の壁に貼り付けて構築しており、その先端部には細長い自然石を立てて、焚口部の補強にしている。燃焼部は、住居の壁を掘り込んでおり、その半分以上は住居の壁外に位置する。全体的に良く焼けて、ほぼ全面が赤色化している。中央には長さ30cmの棒状の自然石が立てて据えられており、支脚として使用されていたものと推測される。煙道部は、燃焼部よりも一段高く、上方に緩やかに傾斜しながら燃焼部外に34cmほど延びて削平されている。

遺物は、カマド内や住居の壁際から、土師器や須恵器の土器が出土している。カマド内からは、No.１とNo.２の土師器甕とNo.５の須恵器坏やNo.７の須恵器高台付椀が出土しているが、この中のNo.５とNo.７の須恵器は、その出土状態から見てカマドの上に置かれていたものが、天井部の崩落とともに燃焼部内に落ち込んだものと推測される。



第19図　第31号住居跡出土遺物

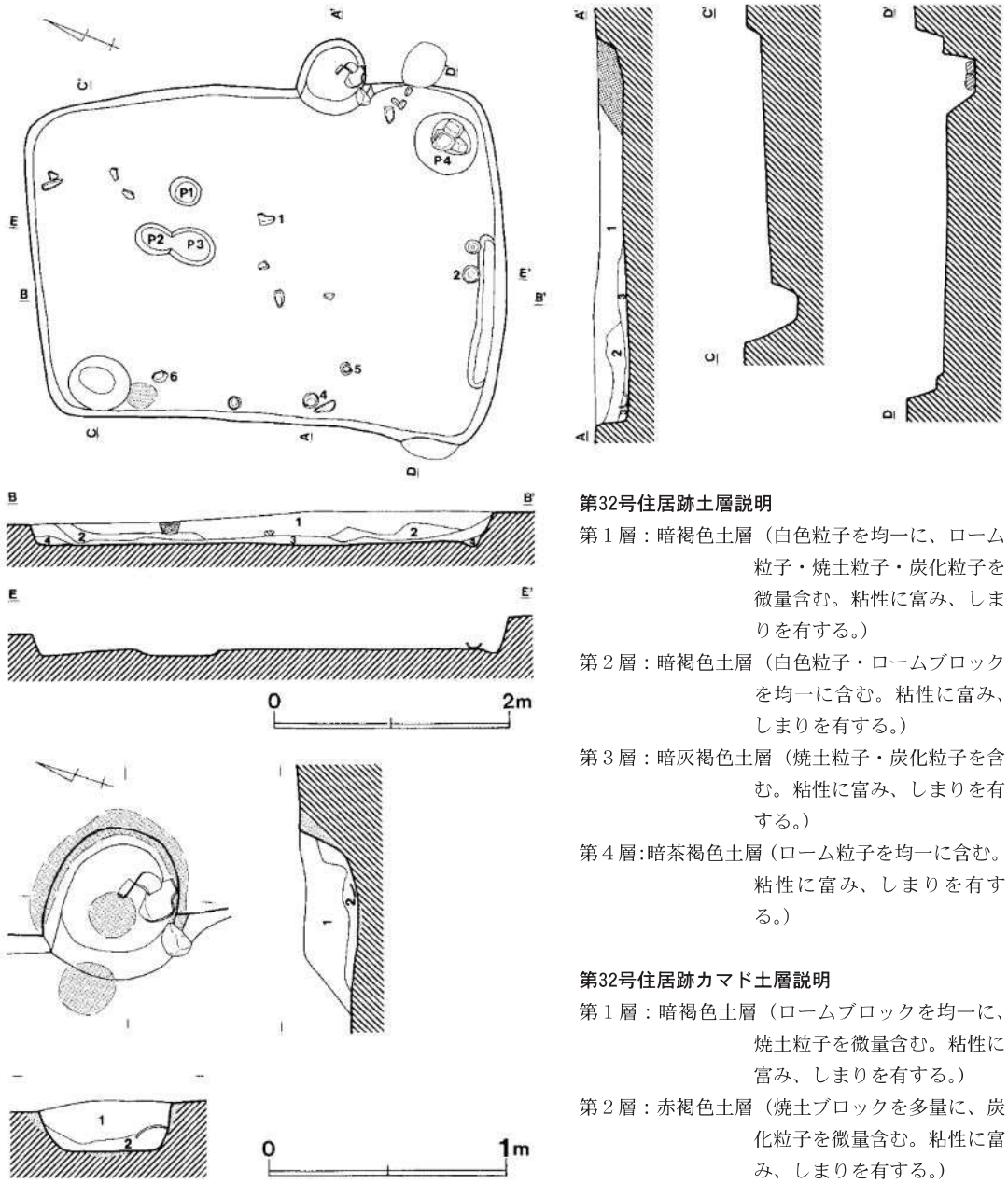
第31号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A．口縁部径18.8。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。D．白色粒、赤色粒。E．内外－淡褐色。F．2/3。G．カマド内。
2	甕	A．口縁部径19.8。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。D．片岩粒、白色粒、赤色粒。E．内外－淡褐色。F．3/4。G．カマド内。
3	小形甕	A．口縁部径（12.6）。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D．白色粒、赤色粒。E．内外－暗橙褐色。F．1/2。G．カマド内。
4	小形台付甕	A．口縁部径10.6、器高13.3、台端部径8.6。B．粘土紐積み上げ成形。台部貼り付け。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。台部内外面ヨコナデ。D．白色粒、赤色粒。E．内外－淡褐色。F．2/3。G．覆土中。
5	須恵器坏	A．口縁部径13.6、器高4.9、底部径5.9。B．ロクロ成形。C．体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D．片岩粒、赤色粒。E．内外－黒褐色。F．ほぼ完形。G．カマド内。
6	須恵器坏	A．口縁部径（12.2）、器高3.6、底部径（5.0）。B．ロクロ成形。C．体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D．白色粒。E．内外－暗灰色。F．1/3。G．床面付近。
7	須恵器高台付埦	A．口縁部径14.4、器高6.7、高台部径6.9。B．ロクロ成形。高台部貼り付け。C．体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。高台部内外面ヨコナデ。D．白色粒、小石。E．内外－暗灰色。F．4/5。G．カマド内。
8	須恵器高台付埦	A．口縁部径（13.8）、器高5.8、高台部径（6.4）。B．ロクロ成形。高台部貼り付け。C．体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。高台部内外面ヨコナデ。D．白色粒、黒色粒。E．内外－淡灰色。F．1/3。G．覆土中。

第 32 号住居跡（第 20 図、図版 12）

調査区の中央部に位置し、住居跡の西側は古墳時代後期の第34号住居跡と一部接している。遺構の遺存状態は、比較的良好である。

平面形は、コーナー部の丸みがやや強い長方形を呈する。規模は、北西から南東方向が4.00ｍ、北東から南西方向が3.04mを測る。住居の主軸方向は、Ｎ－66°－Ｅを向いている。



第32号住居跡土層説明

第１層：暗褐色土層（白色粒子を均一に、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第２層：暗褐色土層（白色粒子・ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第３層：暗灰褐色土層（焼土粒子・炭化粒子を含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第４層:暗茶褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第32号住居跡カマド土層説明

第１層：暗褐色土層（ロームブロックを均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第２層：赤褐色土層（焼土ブロックを多量に、炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

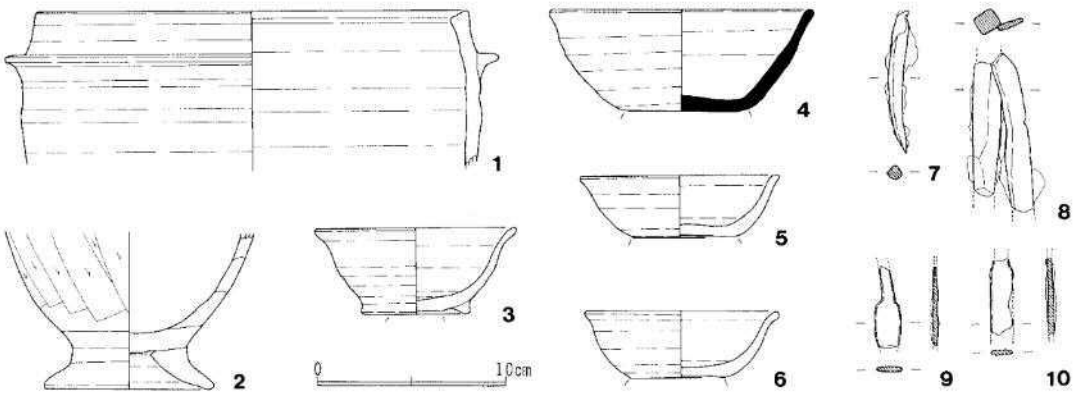
第20図　第32号住居跡

壁は、やや傾斜して直線的に立ち上がり、確認面からの深さは最高で38cmある。壁溝は、住居の南東側壁下の一部に見られ、長さ130cm、幅20cmで、床面からの深さは３cm程度である。床面は、地山の暗茶褐色粘土ブロックを埋め戻した貼床式で、住居中央部は比較的堅くしまっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。

ピットは、住居内から５箇所検出されているが、本住居跡に伴う可能性があるものは、Ｐ１～Ｐ４の４箇所であり、その他は後世の掘り込みである。Ｐ１～Ｐ３は、住居中央部の北側寄りにかたまって位置している。形態は、いずれも直径25cm～30cmの円形もしくは楕円形を呈し、床面からの深さは５cm～10cmと比較的浅い。Ｐ４は、住居の東側コーナー部に位置する。形態は、直径52cmの円形を呈し、床面からの深さは25cmある。底面は平坦で、底面直情上からは15cm～20cmの自然石が４個重なって出土している。

カマドは、住居北東側壁の中央より東側コーナー部寄りにあり、住居の壁をほぼ直角に掘り込んで構築されている。煙道部はすでに削平されており、燃焼部だけが残存している。規模は、残存する部分で全長64cm、最大幅58cmある。住居内に袖の痕跡は見られず、カマド右側の住居の壁と接する部分に自然石が１個据えられていることからすると、第27号住居跡のカマドと同じく、カマド焚口部は住居の壁の位置とほぼ一致していたと考えられる。燃焼部は、その大半が住居の壁外に位置し、内部は比較的良く焼けて赤色化している。燃焼面（火床）は、住居の床面を若干掘り込んで、ほぼ平に作られている。

遺物は、土器と鉄製品が出土している。土器は、羽釜（No.１）や小形台付甕（No.２）と坏類（No.３～６）があり、多くは壁際の床面上から出土している。鉄製品（No.７～No.10）は、住居中央部の床面付近から多く出土しているが、No.７の鉄釘以外はいずれも破片であり、その明細は不明である。



第21図　第32号住居跡出土遺物

第32号住居跡出土遺物観察表

1	羽　釜	A．口縁部径（22.6）。B．粘土紐積み上げ成形。鍔貼り付け。C．内外面回転ナデ。D．白色粒。E．内外－黒褐色。F．1/5。G．覆土中。
2	小　形 台付甕	A．台端部径9.0。B．粘土紐積み上げ成形。台部貼り付け。C．胴部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。台部内外面ヨコナデ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外－暗茶褐色。F．胴部下半のみ。G．床面直上。

3	高台付坏	A．口縁部径（10.8）、器高4.6、高台部径（5.8）。B．ロクロ成形。高台部貼り付け。C．体部及び高台部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D．片岩粒、白色粒。E．内外－明褐色。F．1/4。G．覆土中。
4	須恵器坏	A．口縁部径14.0、器高5.5、高台部径6.6。B．ロクロ成形。C．体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D．赤色粒、白色粒。E．内外－暗灰色。F．完形。G．床面付近。
5	坏	A．口縁部径10.6、器高3.3、高台部径5.5。B．ロクロ成形。C．体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外－淡灰褐色。F．ほぼ完形。G．床面付近。
6	坏	A．口縁部径10.4、器高3.6、高台部径5.0。B．ロクロ成形。C．体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D．赤色粒、白色粒。E．内外－淡灰褐色。F．3/4。G．床面付近。
7	鉄　釘	A．長さ7.6、幅0.6。C．頭部は薄く若干曲げられ、断面は四角形を呈する。F．ほぼ完形。G．覆土中。
8	鉄製品	A．右側（残存長8.5、幅1.4、厚さ0.3）、左側（残存長7.2、幅1.1）。C．いずれも棒状であるが、断面は右側が扁平で、左側は四角形を呈する。F．左側両端部欠失。右側下半欠失。G．覆土中。
9	鉄製品	A．残存長4.3、先端部幅1.4、柄部幅0.6、厚さ0.35。C．先端部は箆状に幅が広くなっている。F．両端部欠失。G．覆土中。
10	鉄製品	A．残存長4.0、先端部幅1.3、柄部幅0.8、厚さ0.3。C．先端部は箆状に長く若干幅が広くなっている。F．両端部欠失。G．覆土中。

第33号住居跡（第22図、図版13・14）

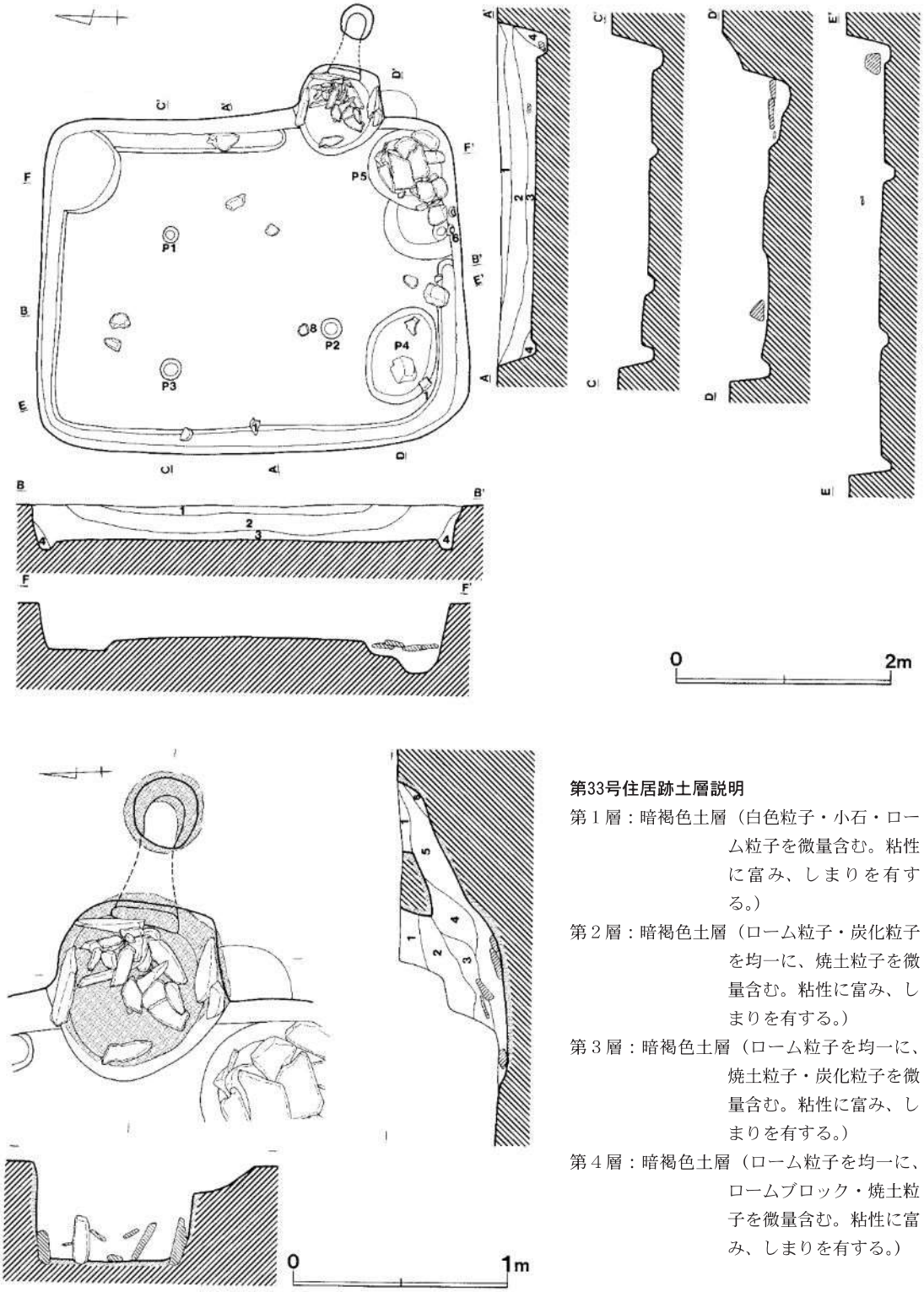
調査区の中央部のやや南側寄りに位置し、北側には古墳時代後期の第34号住居跡が近接し、東側約3.5mには第32号住居跡がある。遺構の遺存状態は、比較的良好である。

平面形は、コーナー部がやや丸みを持つ長方形を呈している。規模は、南北方向が4.04m、東西方向が3.12mを測る。住居の主軸方向は、N―86°―Eを向いている。

壁は、若干傾斜して直線的に立ち上がり、確認面からの深さは最高で46cmある。各壁下には、幅20cm・深さ８cm程度の比較的整った壁溝が巡っているが、カマド左側と南東側コーナー部周辺は途切れている。床面は、地山粘質ロームのブロックを埋め戻した貼床式で、住居中央部は比較的堅くしまっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。

ピットは、住居内でＰ１～Ｐ５の５箇所が検出されている。Ｐ１～Ｐ３は、住居中央部の周辺に位置する。いずれも直径20cm前後の円形を呈し、床面からの深さが５cm～10cm程度の浅いものである。Ｐ４は、住居の南西コーナー部付近に位置する。平面形は、96cm×68cmの楕円形を呈する土壙状の形態であるが、床面からの深さは５cm程度である。覆土中には焼土粒子と炭化粒子を均一に含み、中からは長さ20cm程度の比較的大きな自然石が１個と、No.１の甕の破片などが出土している。Ｐ５は、カマド右側の住居南東側コーナー部に位置し、その形状からいわゆる貯蔵穴と考えられるものである。形態は、76cm×64cmの楕円形を呈し、床面からの深さは30cmで、底面は２段に深くなっている。上面からは、複数の比較的大きな板状の石が、床面の高さに石の平坦面を合わせて敷かれたような状態で出土している。覆土中には焼土粒子と炭化粒子を多量に含んでいるが、中からはNo.７の高台付坏の破片が出土しただけである。

カマドは、住居東側壁の中央より南側寄りに位置し、壁を若干斜めに掘り込んで構築されている。規模は、残存する部分で全長146cm、最大幅82cmある。燃焼部は、大半が住居の壁外にあり、その奥壁側は四角に掘り込まれている。内部は良く焼けてほぼ全面赤色化している。燃焼部と住居の壁が接する部分には、補強として比較的大きな板状の自然石（片岩）を横にして貼り付けていることか



第33号住居跡土層説明

第１層：暗褐色土層（白色粒子・小石・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第２層：暗褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第３層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

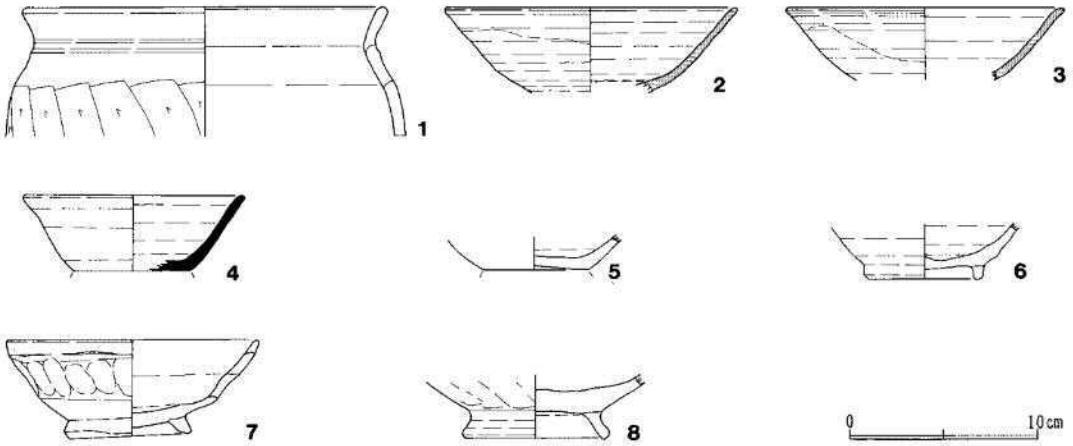
第４層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロック・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第22図　第33号住居跡

第33号住居跡カマド土層説明

第１層：暗黄褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第２層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第３層：暗黄褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一煮含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第４層：暗赤褐色土層（焼土粒子を多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第５層：暗褐色土層（焼土粒子・炭化粒子を均一に、ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第６層：暗黄褐色土層（ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

ら、第27号住居跡や第32号住居跡と同様に、カマドの焚口部は住居の壁の位置とほぼ一致していたと考えられる。燃焼面（火床）は、住居の床面よりも５cm程度掘り下げて、焚口部から煙道部に向かって若干傾斜をつけている。燃焼部内には、支脚として長さ23cmの棒状の自然石（片岩）が１個立てられているが、その位置が中央からやや左側（北側）に片寄っていることからすると、本カマドの器受部における土器の架け方は、２個並置式であったことが推測される。また、内部からは比較的多くの自然石が出土しているが、これらはおそらくカマドの補強に使用されていたものと思われる。煙道部は、トンネル状の掘り抜き式である。燃焼部とはあまり明確な段を持たず、比較的緩やかに移行し、燃焼部の奥壁から緩やかに傾斜しながら約30cm程外に延びて上方に立ち上がっている。遺物は、住居跡の覆土中を主体に、土器の破片が少量出土している。土器以外では住居跡内の床面付近に比較的大きな自然石が複数見られるが、その性格については不明である。



第23図　第33号住居跡出土遺物

第33号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A．口縁部径（19.4）。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外－明橙褐色。F．1/3。G．床面直上。
2	灰　釉 埦	A．口縁部径（15.6）。B．ロクロ成形。C．体部内外面回転ナデ。D．黒色粒、白色粒。E．内外－淡灰褐色。F．1/5。G．覆土中。H．内外面に施釉。
3	灰　釉 埦	A．口縁部径（14.8）。B．ロクロ成形。C．体部内外面回転ナデ。D．黒色粒、白色粒。E．内外－淡灰褐色。F．1/4。G．覆土中。H．内外面に施釉。
4	須恵器 坏	A．口縁部径（11.8）、器高4.0、底部径（6.2）。B．ロクロ成形。C．体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切りの後ナデ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外－淡灰褐色、肉－淡褐色。F．1/2。G．覆土中。

5	坏	A．口縁部径5.4。B．ロクロ成形。C．体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D．黒色粒、白色粒。E．内外－淡褐色。F．底2/3。G．覆土中。H．黒斑あり。
6	高台付坏	A．高台部径6.3。B．ロクロ成形。高台部貼り付け。C．体部及び高台部内外面回転ナデ。底部外面ナデ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．外－明茶褐色、内－淡茶褐色。F．体部下半のみ。G．床面付近。
7	高台付坏	A．口縁部径13.4、器高5.3、高台部径6.5。B．粘土紐積み上げ成形。高台部貼り付け。C．口縁部及び高台部内外面ナデ。体部外面中位未調整、内面ナデ。D．赤色粒。E．内外－明茶褐色。F．1/2。G．貯蔵穴（P５）内。
8	高台付坏	A．高台部径（7.8）。B．高台部貼り付け。C．体部外面筦ナデ、内面ナデ。高台部内外面ナデ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．外－淡橙褐色、内－黒褐色。F．底部のみ。G．覆土中。

第34号住居跡（第24図、図版15）

調査区の中央部に位置し、住居跡の東側は第32号住居跡と接している。遺構の遺存状態は、比較的良好である。

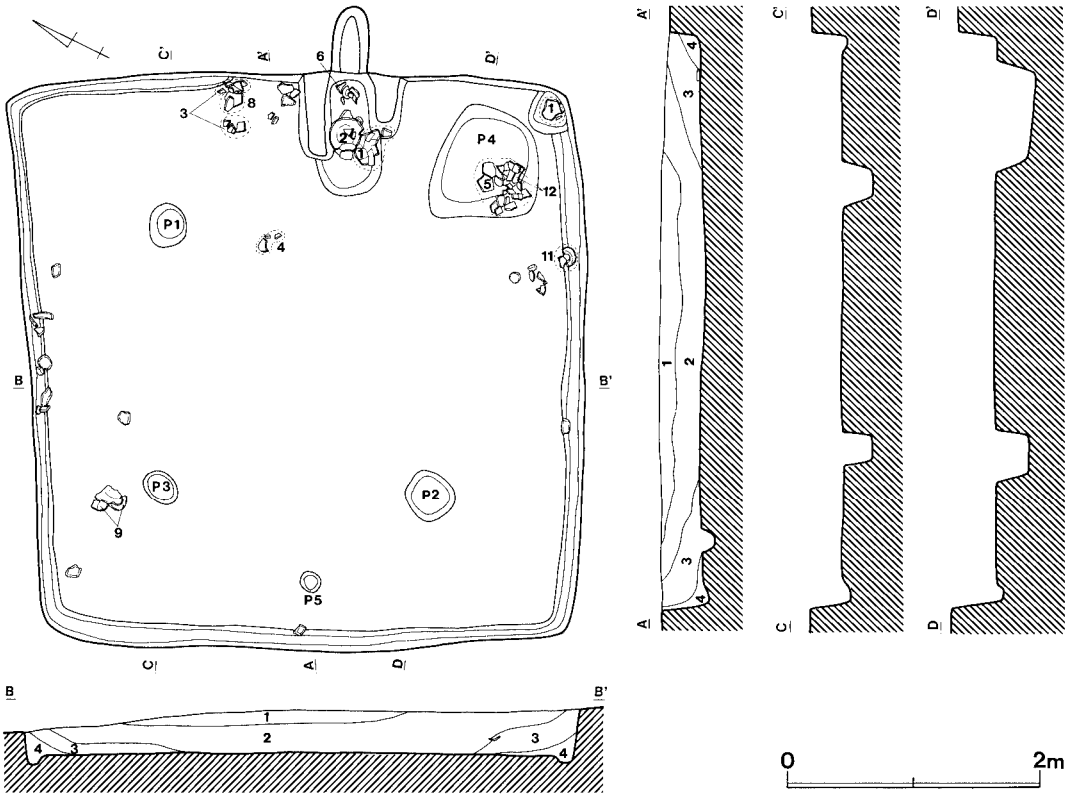
平面形は、コーナー部がやや丸みをもつ方形を呈している。規模は、北東から南西方向が4.60m、北西から南東方向が4.52mを測る。住居の主軸方向は、N－62°－Eを向いている。

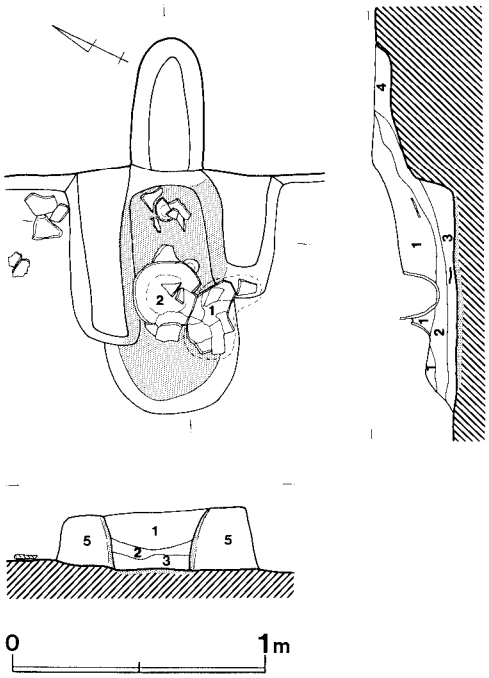
壁は、若干傾斜しながら直線的に立ち上がり、確認面からの深さは最高で40cmある。各壁下には、幅15cm・深さ５cm程度の壁溝が巡っているが、カマドがある住居北東側壁の南東側半分には見られない。床面は、地山粘質ローム土のブロックを埋め戻した貼床式で、全体的に堅くしまっている。

ピットは、住居内からＰ１～Ｐ５の５箇所が検出されている。Ｐ１～Ｐ３は、住居のほぼ対角線上に位置し、その配置からおそらく４本主柱穴を構成するものと考えられる。形態は、直径30cm～40cmの円形や楕円形を呈し、床面からの深さはいずれも25cm前後である。Ｐ４は、住居の東側コーナー部に位置し、その位置や形態からいわゆる貯蔵穴と考えられるものである。形態は、90cm×87cmの不整形を呈し、床面からの深さは32cmある。中からは、№５の鉢と№12の坏が落ち込んだ状態で出土している。Ｐ５は、住居の南西側壁中央付近の壁際に位置する。形態は、直径15cm程度の円形を呈し、床面からの深さは10cmである。その位置や形態からは、住居の入口部施設のピットの可能性も推測されるが、詳細は不明である。

カマドは、住居北東側壁の中央から若干南東側に寄った位置にあり、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、残存する部分で、全長150cm、最大幅86cmある。袖は、左右とも幅が26cm程度の比較的整った形態であるが、粘質ロームブロックを床面上で住居の壁に直接貼り付けて構築している。両袖とも先端部はすでに崩壊している。燃焼部は、住居の壁を掘り込まないで、燃焼部の奥壁と住居の壁を一致させている。比較的良く焼けており、内面は赤色化している。燃焼面（火床）は、住居の床面と同じ高さで、ほぼ水平に作られている。燃焼部内からは、№１と№２の甕が横に並んだ状態で出土しており、本カマドの器受部における甕の架け方は、２個並置式であったことがわかる。また、№２の甕の下には№13の土製支脚が据えられていたが、№１の下には支脚は見られない。煙道部は、燃焼部よりも一段高く、若干傾斜しながら住居外に50cmほど延びて、その先は削平されている。

遺物は、カマド内や貯蔵穴内及びその周辺や、住居の壁際付近から比較的多くの土器が出土している。これらの土器は、その原形を留めているものが多く、比較的良好な一括資料と言える。





第34号住居跡土層説明

第１層：暗褐色土層（白色粒子・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第２層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロックを微量含む。

第３層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第４層：暗褐色土層（ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第34号住居跡カマド土層説明

第１層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

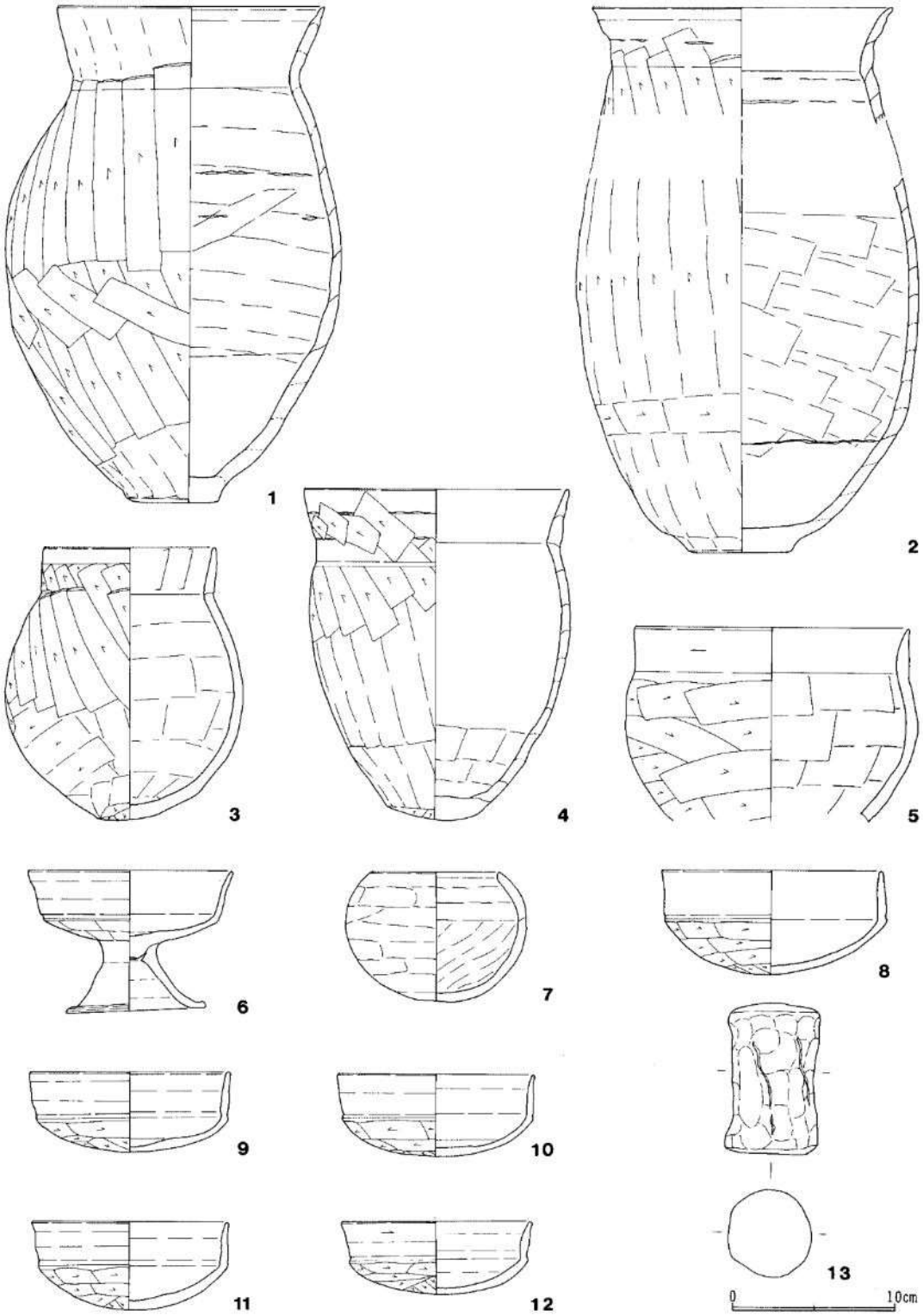
第２層：暗赤褐色土層（焼土粒子を多量に、焼土ブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第３層：暗褐色土層（焼土粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第４層：暗褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第５層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第24図　第34号住居跡



第25図　第34号住居跡出土遺物

第34号住居跡出土遺物観察表

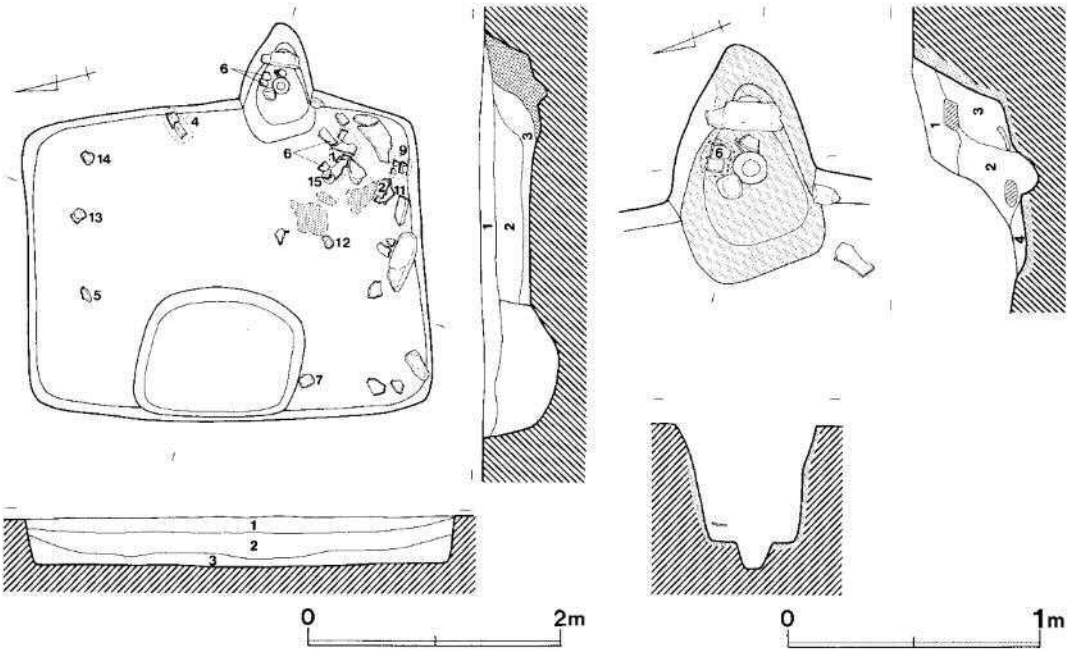
1	甕	A．口縁部径16.4、器高30.4、底部径5.6。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ナデ。胴部外面ナデの後ケズリ、内面ナデの後上半指ナデ。D．片岩粒、白色粒。E．内外－暗褐色。F．4/5。G．カマド内。H．底部外面の一部に布目圧痕あり。
2	甕	A．口縁部径（18.6）、推定高（32.5）、底部径6.4。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後雑なナデ、内面ナデの後篦ナデ。底部外面ケズリの後ナデ。D．片岩粒、白色粒。E．内外－淡茶褐色。F．口縁部1/4。胴部下半完存。G．カマド内。
3	小形甕	A．口縁部径10.6、器高16.8。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後ケズリ、内面篦ナデ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外－暗褐色。F．4/5。G．覆土中。H．胴部外面に黒斑あり。
4	小形甕	A．口縁部径16.4、器高20.4、底部径5.6。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ナデ。胴部外面ナデの後上半ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D．白色粒、赤色粒。E．内外－淡褐色。F．4/5。G．床面付近。H．外面に煤の付着あり。外面は二次焼成を受けて荒れている。
5	鉢	A．口縁部径17.0、残存高11.9。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。D．片岩粒、白色粒。E．外－淡茶褐色、内－黒褐色。F．2/3。G．貯蔵穴（P４）内。
6	高　坏	A．口縁部径（12.7）、器高8.7、脚端部径8.6。B．粘土紐積み上げ成形。脚部貼り付け。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。脚部内外面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－明茶褐色。F．2/3。G．カマド内。
7	鉢	A．口縁部径7.9、器高8.0。B．粘土紐積み上げ成形。C．外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。D．片岩粒、白色粒。E．内外－淡褐色。F．ほぼ完形。G．カマド内。
8	坏	A．口縁部径13.6、器高6.4。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－明茶褐色。F．ほぼ完形。G．覆土中。
9	坏	A．口縁部径12.4、器高5.0。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－明茶褐色。F．完形。G．床面直上。
10	坏	A．口縁部径12.2、器高5.0。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－淡茶褐色。F．3/4。G．覆土中。
11	坏	A．口縁部径12.2、器高5.3。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D．片岩粒、白色粒。E．内外－明茶褐色。F．完形。G．床面付近。
12	坏	A．口縁部径11.8、器高4.5。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－淡茶褐色。F．ほぼ完形。G．貯蔵穴（P４）内。H．黒斑あり。
13	土　製 支　脚	A．長さ9.3、幅5.0。B．手捏成形。C．外面ナデ。D．片岩粒、白色粒。E．内外－茶褐色。F．完形。G．カマド内No２の下。

第 35 号住居跡（第 26 図、図版 16）

調査区の北側に位置し、北西側約6.5mには第44号住居跡が、北東側約2.5mには第40号住居跡があり、南東側約2.5mには第４号掘立柱建物跡が近接している。住居跡の一部を第13号土壙に切られているが、遺構の遺存状態は比較的良好である。本住居跡の周辺には、古墳時代後期の住居跡もいくつか見られるが、調査区の北西側では古墳時代後期の遺構と平安時代の遺構とでは、その確認面が異なっている。

平面形は、コーナー部がやや丸みを持つ長方形を呈している。規模は、南北方向が3.20m、東西方向が2.60mを測る。住居の主軸方向は、N－104°－Eを向いている。

壁は、若干傾斜しながら直線的に立ち上がり、確認面からの深さは45cmある。各壁下には壁溝は見られない。床面は、地山粘質ロームのブロックを埋め戻した貼床式で、全体的に堅くしまっており、ほぼ平に作られている。住居南東側の床面直上には、炭化材や炭化粒子の分布が見られるが、住居の焼失に伴うものとは思われない。住居跡内からは、ピットはまったく検出されなかった。



第26図　第35号住居跡

第35号住居跡土層説明

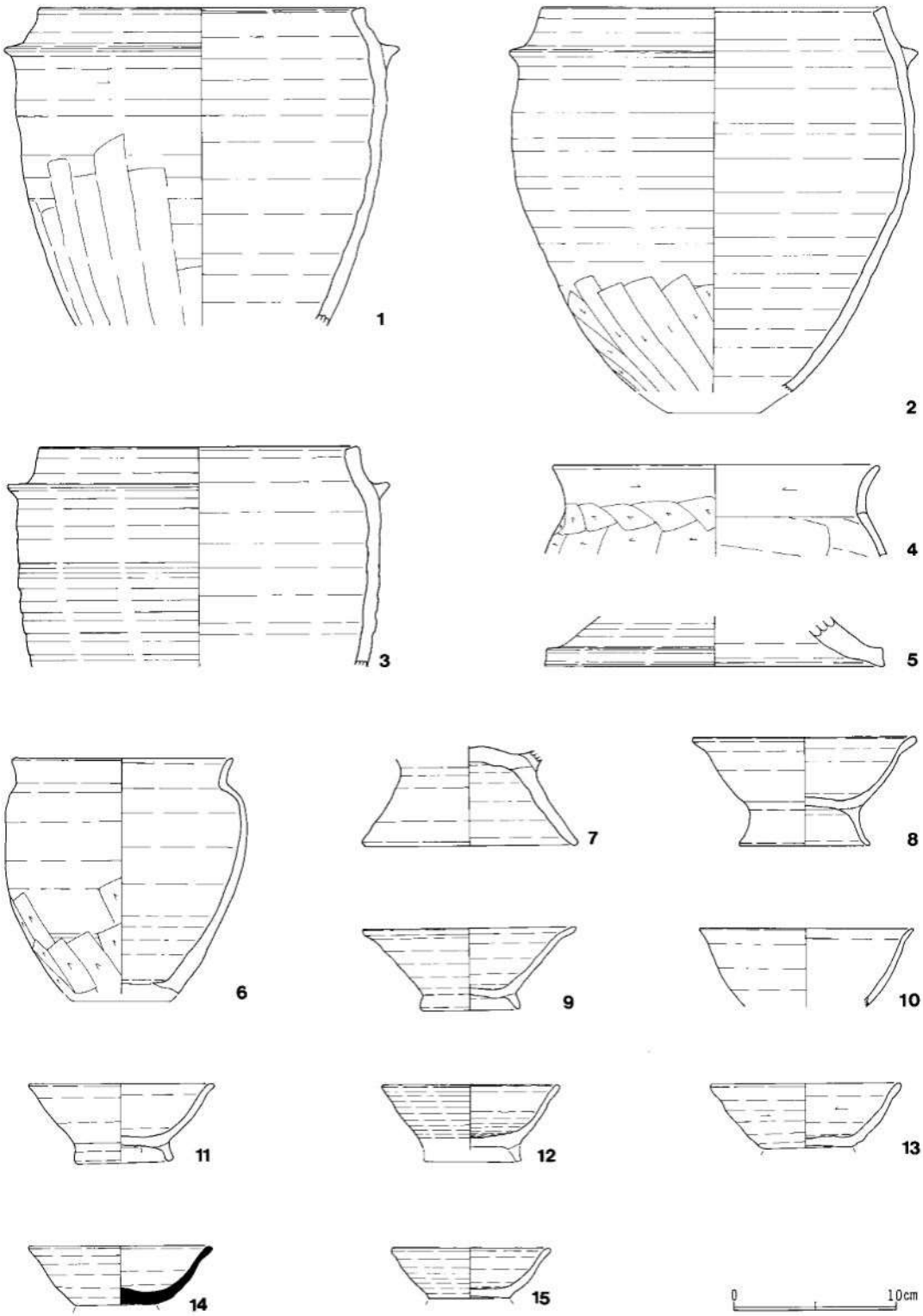
第１層：暗褐色土層（白色粒子を均一に、焼土粒子･炭化粒子･ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第２層：暗褐色土層（ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第３層：暗褐色土層（焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第35号住居跡カマド土層説明

第１層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第２層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を均一に、炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第３層：暗褐色土層（焼土ブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第４層：暗赤褐色土層（焼土ブロックを・焼土粒子を多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

カマドは、住居東側壁の中央よりやや南側寄りに位置し、壁をほぼ直角に掘り込んで構築されている。規模は、残存する部分で全長96cm、最大幅62cmある。燃焼部は、その大半が住居の壁外に位置し、内面は非常に良く焼けて赤色化している。カマド右側の住居の壁と接する部分に、板状の自然石を１個補強に貼り付けていることから、該期の他の住居跡と同じく、カマド焚口部が住居の壁の位置とほぼ一致する構造であったものと推測される。燃焼部の奥側には、長さ30cm・幅12cmの角状の自然石が１個見られる。この石は、石の両端を燃焼部の壁に掛けてほぼ水平の状態で出土しており、おそらく燃焼部と煙道部の境の補強に使用されていたものではないかと思われる。燃焼面（火床）は、住居の床面を８cm程度掘り下げ、奥壁に向かって緩やかに傾斜させている。燃焼面の中央には浅い小規模なピットが見られるが、これは支脚の据え穴ではなく、住居廃絶後に掘り込まれたものである。煙道部は、削平されているため不明である。

遺物は、カマド内や住居跡の覆土中から比較的多くの土器片が出土している。土器以外では、住居南東側コーナー部から南側壁の壁際に、比較的大きな自然石が列状に並んで出土している。



第27図　第35号住居跡出土遺物

第35号住居跡出土遺物観察表

1	羽　釜	A．口縁部径（20.2）、残存高19.6。B．粘土紐積み上げ成形。鍔部貼り付け。C．内外面回転ナデの後、胴部外面下半縦方向のナデ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．外－茶褐色、内－淡褐色。F．1/3。G．床面付近。
2	羽　釜	A．口縁部径（21.2）、残存高23.7。B．粘土紐積み上げ成形。鍔部貼り付け。C．内外面回転ナデの後、胴部外面下半縦方向のケズリ。D．片岩粒、白色粒。E．外－淡灰褐色、内－暗灰褐色。F．1/4。G．覆土中。
3	羽　釜	A．口縁部径（19.8）、残存高13.6。B．粘土紐積み上げ成形。鍔部貼り付け。C．内外面回転ナデ。D．黒色粒、白色粒。E．内外－暗灰褐色。F．1/2。G．覆土中。
4	甕	A．口縁部径（20.2）。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外－暗茶褐色。F．1/4。G．覆土中。
5	大形甑	A．口縁部径（21.0）。B．粘土紐積み上げ成形。C．端部内外面回転ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－淡灰褐色。F．1/5。G．床面付近。
6	小形甑	A．口縁部径13.6、器高14.5。B．粘土紐積み上げ成形。C．内外面回転ナデの後、胴部外面下半ケズリ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外－淡茶褐色。F．2/3。G．カマド内。
7	台　付	A．台端部径（13.2）。B．ロクロ成形。C．台部内外面回転ナデ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外－明茶褐色。F．台部1/2。G．覆土中。
8	高台付椀	A．口縁部径（13.8）、器高6.7、高台部径（8.0）。B．ロクロ成形。高台部貼り付け。C．体部及び高台部内外面回転ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－暗灰褐色。F．1/4。G．覆土中。
9	高台付坏	A．口縁部径（13.2）、器高5.1、高台部径（6.2）。B．ロクロ成形。高台部貼り付け。C．体部及び高台部内外面回転ナデ。底部外面ナデ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外－明茶褐色。F．1/3。G．床面付近。
10	坏	A．口縁部径（13.2）。B．ロクロ成形。C．体部内外面回転ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．外－淡褐色、内－黒褐色。F．1/4。G．覆土中。
11	高台付坏	A．口縁部径11.4、器高4.9、高台部径6.1。B．ロクロ成形。高台部貼り付け。C．体部及び高台部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り後ナデ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外－明茶褐色。F．3/4。G．床面付近。
12	高台付坏	A．口縁部径（11.0）。B．ロクロ成形。高台部貼り付け。C．体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り後ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－黒褐色。F．1/3。G．覆土中。
13	坏	A．口縁部径11.8、器高5.0、底部径5.4。B．ロクロ成形。C．体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D．赤色粒、白色粒。E．内外－淡茶褐色。F．4/5。G．覆土中。
14	坏	A．口縁部径11.2、器高3.2、底部径4.8。B．ロクロ成形。C．体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D．黒色粒、白色粒。E．内外－淡灰色。F．3/4。G．覆土中。
15	坏	A．口縁部径9.8、器高3.1、底部径5.0。B．ロクロ成形。C．体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D．赤色粒、白色粒。E．内外－茶褐色。F．ほぼ完形。G．床面付近。

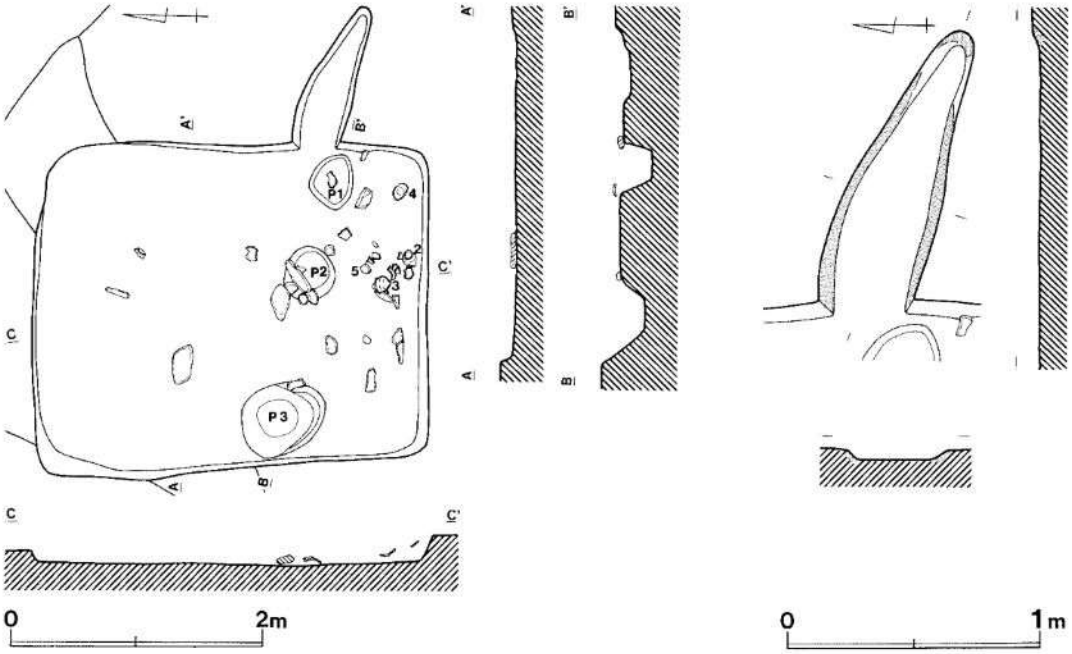
第36号住居跡（第28図、図版17）

調査区中央部のやや東側寄りに位置する。重複する第37号住居跡を切り、第30号住居跡と第31号住居跡に切られている。遺構の遺存状態は、あまり良好とは言えない。

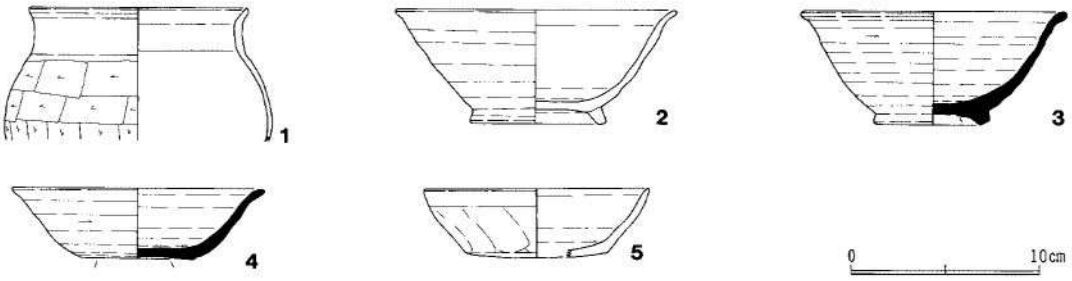
平面形は、コーナー部が丸みをもつ長方形を呈している。規模は、南北方向が3.14m、東西方向が2.70mを測る。住居の主軸方向は、N―91°―Eを向いている。

壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは最高で42cmある。各壁下には、壁溝は見られない。床面は、地山粘質ロームのブロックを埋め戻した貼床式で、全体的にやや軟弱である。

ピットは、住居内よりＰ１～Ｐ３の３箇所が検出されている。Ｐ１は、カマドの右前に位置し、40cm×35cmの不整円形を呈している。床面からの深さは５cm程度の浅いもので、中からは土器の破片が１点出土している。Ｐ２は、住居中央部の南側寄りに位置する。直径45cmの円形を呈し、床面からの深さは22cmある。Ｐ３は、住居西側壁の中央からやや南側に寄った壁際に位置する。形態は、



第28図　第36号住居跡



第29図　第36号住居跡出土遺物

70cm×55cmの楕円形ぎみの土壙状の形態で、床面からの深さは20cmある。

カマドは、住居東側壁の中央より南側寄りに位置し、壁に対してやや斜めに掘り込んで構築している。燃焼部は明確ではなく、煙道部だけ残存している。煙道部は、長さ125cm・最大幅40cmで、壁は焼けて赤色化している。燃焼部とは段を持たず、そのままほぼ水平に住居外に延びている。

遺物は、住居跡の覆土中を主体に、土器の破片が少量ながら出土している。土器以外では、住居内より大小様々な自然石が比較的多く出土している。この中で住居中央部では、長さ30cm程度の比較的大きな自然石が２個床面上に置かれたような状態で出土しており、その形態から台石として使用されていた可能性も考えられる。

第36号住居跡出土遺物観察表

1	小形甕	A．口縁部径11.6。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D．白色粒。E．内外－淡褐色。F．口縁部1/2。G．覆土中。H．外面に煤の付着あり。

2	高台付 埦	A．口縁部径15.0、器高6.1、高台部径7.3。B．ロクロ成形。高台部貼り付け。C．体部及び高台部内外面回転ナデ。底部外面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－淡灰褐色。F．3/4。G．覆土中。H．体部外面下半は荒れている。
3	須恵器 高台付 坏	A．口縁部径（14.2)、器高6.0、高台部径6.2。B．ロクロ成形。高台部貼り付け。C．体部及び高台部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D．片岩粒、白色粒。E．内外－暗灰色。F．1/2。G．覆土中。
4	須恵器 坏	A．口縁部径13.4、器高4.8、底部径6.1。B．ロクロ成形。C．体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．外－黒灰褐色、内－暗茶褐色。F．完形。G．覆土中。
5	坏	A．口縁部径（12.0)、器高3.6、底部径（7.5)。C．体部内外面ナデ。底部外面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－茶褐色。F．1/3。G．覆土中。

第37号住居跡（第30図、図版18･19）

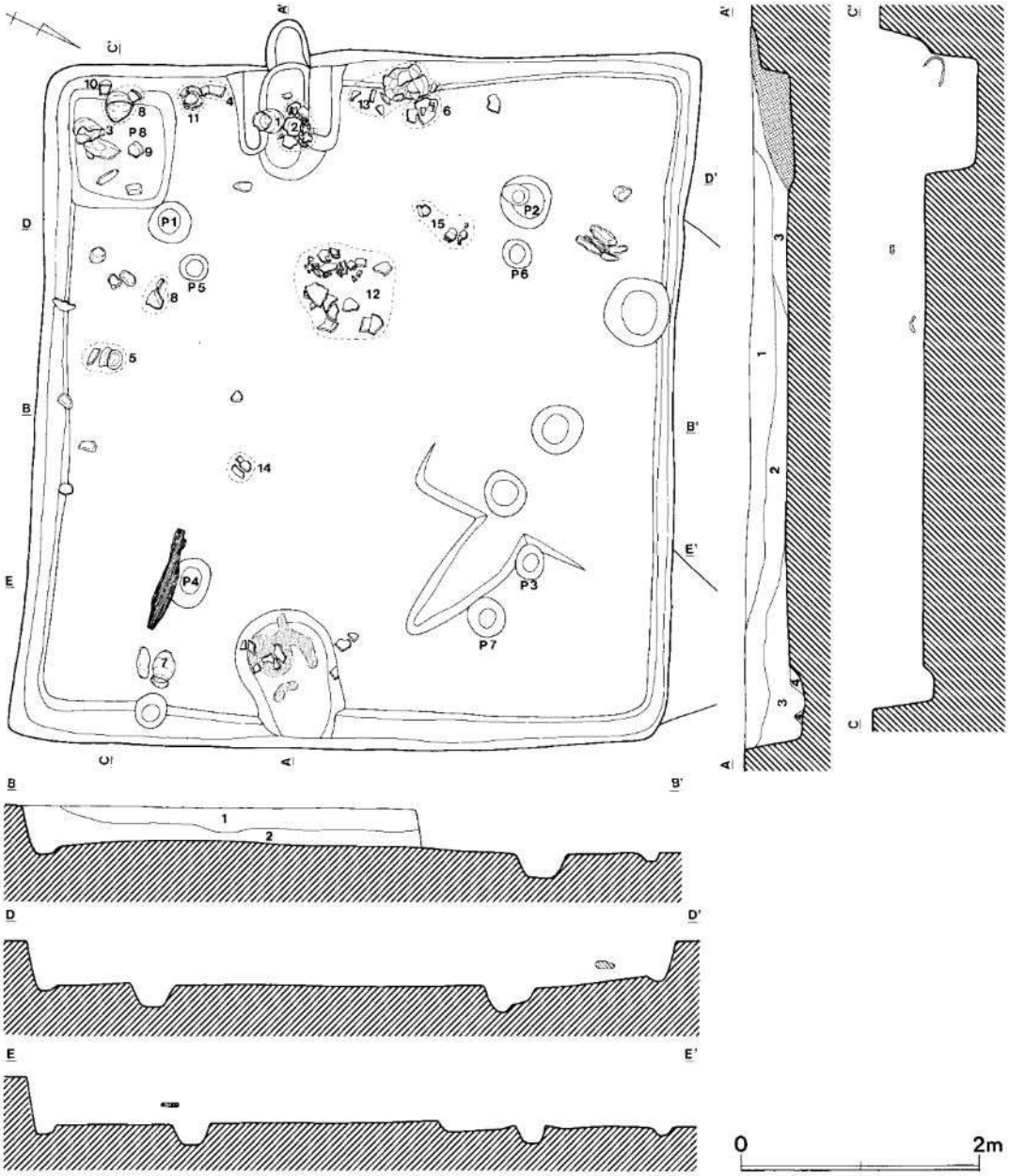
調査区中央部のやや東側寄りに位置し、西側約7.5mには第34号住居跡が、南東側約12.5mには第29号住居跡がある。平安時代の第30・31・36号住居跡と重複し、それらによって住居跡の北側の一部を切られている。遺構の遺存状態は、比較的良好である。

平面形は、コーナー部がやや丸みをもつ比較的整った方形を呈しているが、若干平行四辺形状に歪んでいる。規模は、南西から北東方向が5.91m、北西から南東方向が5.56mを測り、B地点で検出された住居跡の中では最大である。住居の主軸方向は、N―112°―Wを向いている。

壁は、やや傾斜しながら直線的に立ち上がり、確認面からの深さは最高で45cmある。各壁下には、幅20cm～30cm･深さ５cm～10cmの壁溝が、途切れずに巡っている。床面は、地山粘質ロームのブロックを埋め戻した貼床式で、全体にやや大きな凹凸が見られる。住居の中央部は比較的堅くしまっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。

ピットは、住居跡内からＰ１～Ｐ８の８箇所が検出されている。Ｐ１～Ｐ４は、住居のほぼ対角線上に位置し、その配置から主柱穴と考えられるものである。形態は、直径25cm～40cmの円形を呈し、床面からの深さはいずれも20cm程度である。Ｐ５とＰ６は、いずれも主柱穴Ｐ１とＰ２の内側の同じような位置にある。形態は、直径25cm程度の円形を呈し、床面からの深さは19cmと12cmである。本住居跡は、カマドの移設から建替えられた可能性もあり、Ｐ５とＰ６はあるいは建替え前の住居の主柱穴の一部であったことも推測される。Ｐ７は、住居の北側に位置する。直径35cmの円形を呈し、床面からの深さは18cmある。Ｐ８は、住居の南側コーナー部に位置し、その位置と形態からいわゆる貯蔵穴と考えられるものである。形態は、100cm×90cmの長方形で、床面からの深さは42cmある。底面は広く平坦である。上面からは、長さ35cmの比較的大きな自然石とともに、№３の甕・№８の胴張甕・№10の小形甕が、中に倒れこんだような状態で出土し、底面直上からは№９の小形甕が出土している。

カマドは、当初は住居の北東側壁の中央から若干南東側に寄った位置に作られていたようで、その場所に比較的規模の大きなカマド燃焼部か掘り方の痕跡が見られる。その後南西側壁の中央からやや南東側に寄った位置に移設されたようであり、そのカマドが住居の廃絶まで使用されている。規模は、残存する部分で全長136cm･最大幅100cmある。袖は、幅25cm～30cmの比較的整った形態で、粘質ロームのブロックを住居の床面上で壁に直接貼り付けて構築している。燃焼部は、住居の壁を掘り込まないで、燃焼部の奥壁と住居の壁を一致させる形態で、全体に良く焼けて赤色化している。



第30図　第37号住居跡

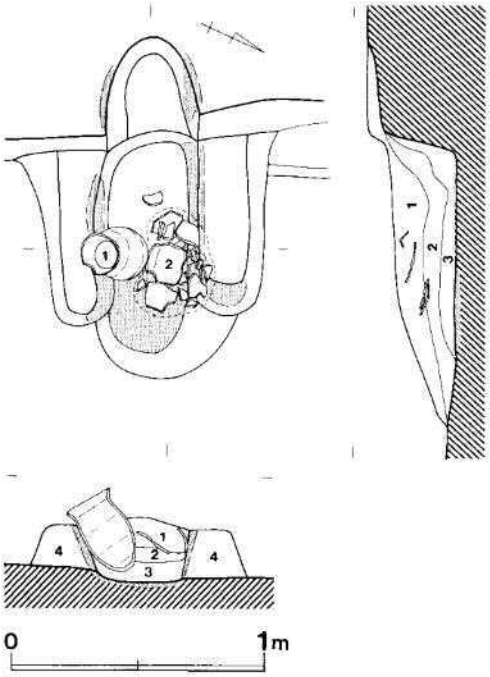
第37号住居跡土層説明

第１層：暗茶褐色土層（白色粒子を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第２層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、小石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第３層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、小石・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第４層：暗褐色土層（焼土ブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）



第37号住居跡カマド土層説明

第１層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第２層：暗赤褐色土層（焼土粒子を均一に、焼土ブロック・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第３層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第４層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

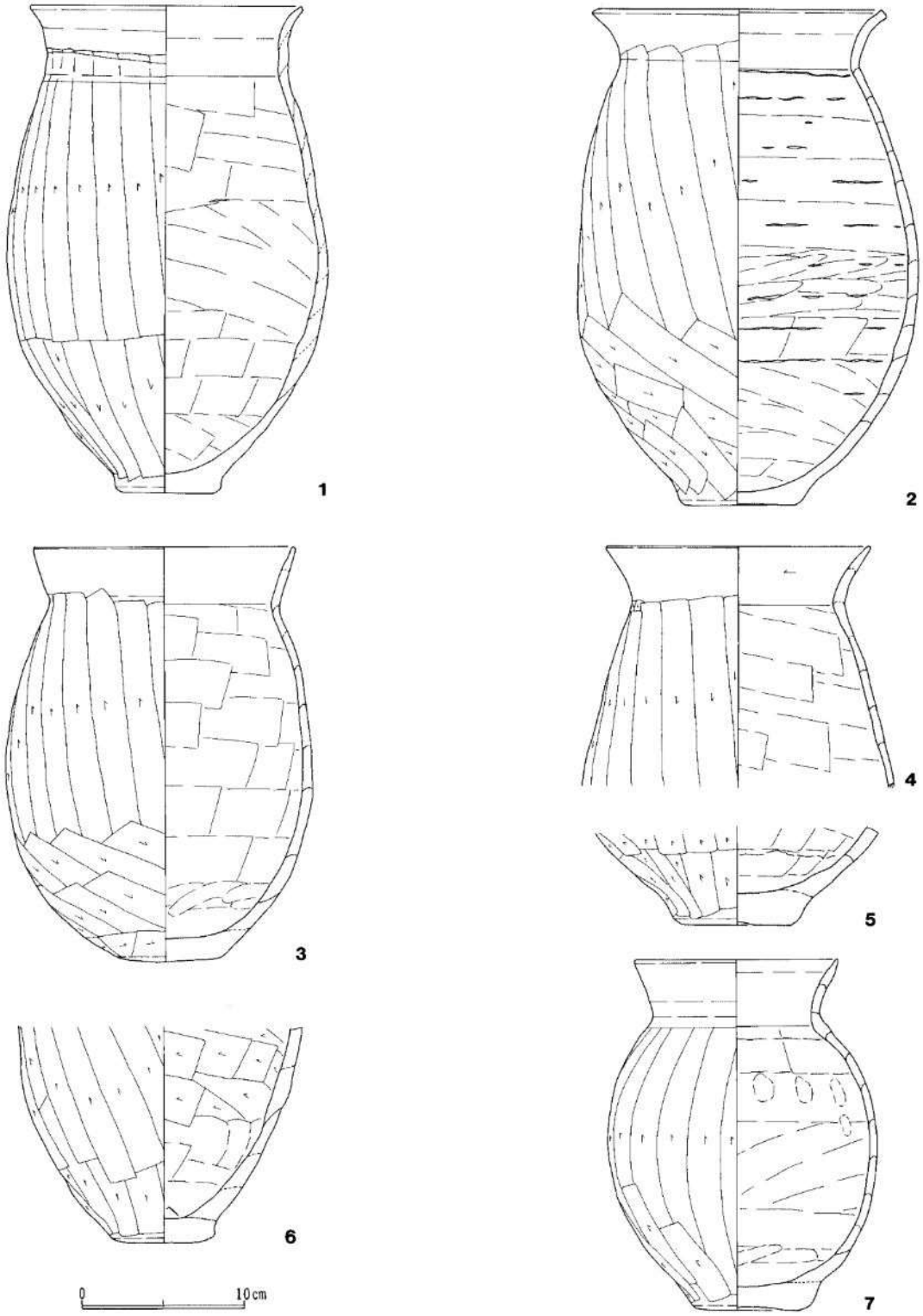
第31図　第37号住居跡カマド

いる。内部からは№.１と№.２の甕が横に並んで出土しており、器受部における土器の架け方は、第29号住居跡や第34号住居跡と同じく、２個並置式である。左側の№.１の甕の下には何もないが、右側の№.２の甕の下には棒状の自然石を使用した石製支脚が１個据えられている。燃焼面（火床）は、住居の床面を５cm程度掘り下げてほぼ水平に作られている。煙道部は、燃焼部より一段高く、若干傾斜しながら住居の壁外に40cm程度延びてその先は削平されている。

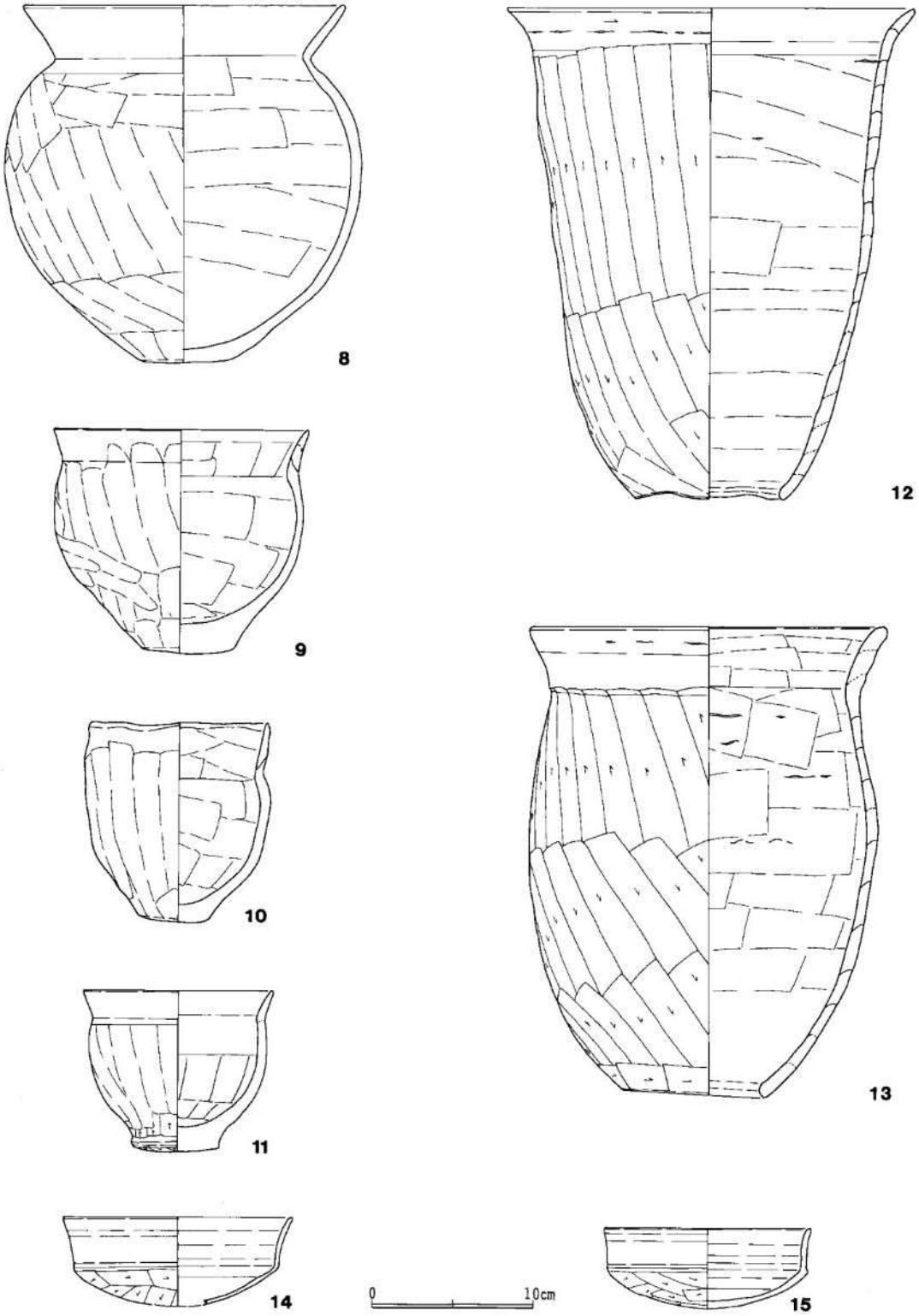
遺物は、カマドや貯蔵穴の内外及び住居の壁際から、比較的多くの土器が出土している。これらの土器は、住居の床面付近でその原形を留めているものが多く、その出土状態からも本住居で使用されていたものが、住居の廃絶とともにそのまま遺棄されたものと推測され、良好な一括資料と言える。土器以外では、棒状や拳大の自然石が多く見られるが、住居の西側コーナー部に寄った北西側壁の壁際では、長さ15cm～25cmの棒状の自然石が６個集めて並べたような状態で出土しており、いわゆる「編物石」と言われる集石の状況と類似している。この他には、主柱穴Ｐ４近くの覆土中から長さ１ｍ弱の板状の炭化材が１点出土しているが、住居跡内からは他に炭化材の出土がなく、住居廃絶後の覆土埋没過程で投棄されたものではないかと思われる。

第37号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A．口縁部径16.8、器高30.0、底部径6.5。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。D．片岩粒、白色粒、赤色粒。E．外－淡茶褐色、内－茶褐色。F．ほぼ完形。G．カマド内。H．外面に黒斑あり。
2	甕	A．口縁部径18.2、器高30.6、底部径7.5。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデの後中位指ナデ。底部外面ナデ。D．片岩粒、白色粒、赤色粒。E．外－淡茶褐色、内－黒褐色。F．ほぼ完形。G．カマド内。



第32図　第37号住居跡出土遺物（１）



第33図　第37号住居跡出土遺物（２）

3	甕	A．口縁部径16.1、器高25.6、底部径6.5。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．外－明茶褐色、内－淡褐色。F．ほぼ完形。G．貯蔵穴（P８）内。
4	甕	A．口縁部径16.4。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。D．白色粒。E．内外－黒褐色。F．1/3。G．床面付近。
5	甕	A．底部径7.8。B．粘土紐積み上げ成形。C．胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。底部外面ナデ。D．片岩粒、白色粒。E．外－明茶褐色、内－淡褐色。F．底部のみ。G．覆土中。
6	甕	A．底部径6.2。B．粘土紐積み上げ成形。C．胴部外面ケズリ、内面ケズリの後下半ナデ。底部外面ケズリ。D．片岩粒、白色粒。E．外－茶褐色、内－暗茶褐色。F．胴部下半のみ。G．床面付近。
7	甕	A．口縁部径12.6、器高21.6、底部径7.2。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外－淡褐色。F．ほぼ完形。G．床面付近。H．胴部外面に黒斑あり。底部外面に木葉痕あり。
8	甕	A．口縁部径19.8、器高22.0、底部径5.0。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面篦ナデ。底部外面ナデ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外－淡茶褐色。F．4/5。G．貯蔵穴（P８）内。H．胴部外面に黒斑あり。
9	小形甕	A．口縁部径15.8、器高13.9、底部径5.8。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面篦ナデ。底部外面ケズリの後ナデ。D．片岩粒、白色粒。E．外－明橙褐色、内－暗茶褐色。F．4/5。G．貯蔵穴（P８）内。
10	小形甕	A．口縁部径11.0、器高12.3、底部径4.4。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部外面ナデ、内面篦ナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面篦ナデ。底部外面ナデ。D．片岩粒、赤色粒。E．外－淡茶褐色、内－黒褐色。F．4/5。G．貯蔵穴（P８）内。
11	小形甕	A．口縁部径11.8、器高9.9、底部径5.4。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面篦ナデ。底部外面ケズリ。D．片岩粒、白色粒。E．外－淡茶褐色、内－淡褐色。F．完形。G．床面直上。H．胴部外面に煤の付着あり。
12	大形甑	A．口縁部径25.2、器高30.3、底部径9.0。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後下端部ナデ、内面篦ナデ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外－明茶褐色。F．ほぼ完形。G．床面付近。
13	大形甑	A．口縁部径22.2、器高29.1、底部径8.5。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部外面ヨコナデ、内面篦ナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。D．片岩粒、白色粒。E．内外－明茶褐色。F．ほぼ完形。G．床面付近。H．胴部外面に黒斑あり。
14	坏	A．口縁部径14.2、器高5.5。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－淡茶褐色。F．2/3。G．床面付近。H．底部外面に黒斑あり。
15	坏	A．口縁部径12.8、器高5.0。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－暗茶褐色。F．3/4。G．床面直上。

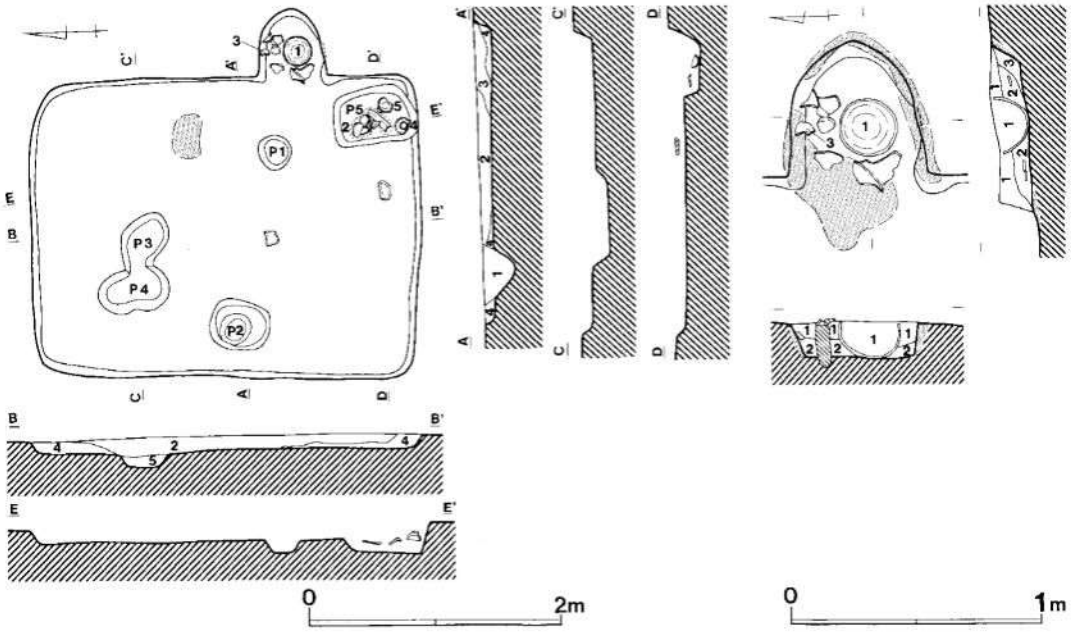
第38号住居跡（第34図、図版20）

調査区内中央部のやや北西寄りに位置し、西側約３mには第39号住居跡が、東側約10mには第30号住居跡がある。遺構の掘り込みは浅く、遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、コーナー部が丸みをもつ比較的整った長方形を呈している。規模は、南北方向が3.12m、東西方向が2.42mを測る。住居の主軸方向は、N―94°―Eを向いている。

壁は、緩やかに傾斜しながら立ち上がり、確認面からの深さは18cmある。各壁下には壁溝は見られない。床面は、地山粘質ロームのブロックを埋め戻した貼床式で、全体的にやや軟弱である。

ピットは、住居内からＰ１～Ｐ５の５箇所が検出されている。Ｐ１は、住居中央部の東側寄りに位置する。形態は、直径25cmの円形を呈し、床面からの深さは10cm程度である。Ｐ２は、住居西側壁中央の壁際付近に位置する。48cm×40cmの隅丸長方形ぎみの形態で、床面からの深さは20cmあり、中央に円形のピットを伴っている。Ｐ３とＰ４は、住居の北西側に位置する。いずれも不整形を呈し、床面からの深さは10cm程度である。Ｐ５は、カマド右側の住居南東側コーナー部に位置し、その



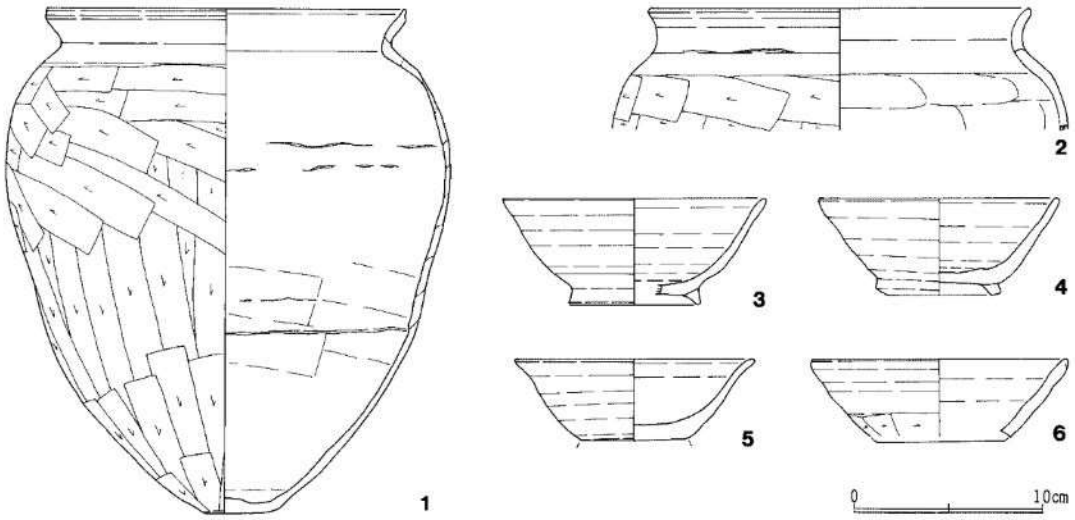
第34図　第38号住居跡

第38号住居跡土層説明

第１層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第２層：暗茶褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第３層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第４層：暗茶褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第５層：暗黄褐色土層（ローム粒子を均一に、炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第38号住居跡カマド土層説明

第１層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第２層：暗赤褐色土層（焼土ブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第３層：暗褐色土層（焼土粒子・焼土ブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）



第35図　第38号住居跡出土遺物

位置や形態からいわゆる貯蔵穴と考えられるものである。形態は、66cm×45cmの隅丸長方形ぎみで、床面からの深さは15cmある。底面は広く平坦をなしている。中からは、№.２の甕や№.４の高台付坏と№.５の坏が出土している。

カマドは、住居東側壁の中央から南側に寄った位置に、壁をほぼ直角に掘り込んで付設されている。規模は、残存する部分で全長62cm、最大幅56cmある。燃焼部は、その大半が住居の壁外に位置し、壁の内側と焚口付近は非常に良く焼けて赤色化し堅化している。燃焼面（火床）は、住居の床面とほぼ同じ高さで、水平に作られている。燃焼部の中央には、右側に№.１の甕が据えられ、左側には長さ17cmの棒状の自然石が支脚として立てられており、土器の架け方が２個並置式であったことがわかる。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、カマドや貯蔵穴（Ｐ５）内から土器が出土しただけである。この他では、住居中央部東側寄りの覆土中に焼土が見られるが、本住居跡と直接関係するものか不明である。

第38号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A．口縁部径（19.2）、器高26.7、底部径4.0。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．外－淡茶褐色、内－茶褐色。F．3/4。G．カマド内。H．外面に黒斑あり。
2	甕	A．口縁部径（20.4）。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－淡茶褐色。F．1/2。G．貯蔵穴（Ｐ５）内。H．外面に黒斑あり。
3	高台付坏	A．口縁部径（14.0）、器高5.6、高台部径（7.0）。B．ロクロ成形。高台部貼り付け。C．体部内外面及び高台部内外面回転ナデ。D．片岩粒、赤色粒。E．内外－淡褐色。F．1/6。G．カマド内。
4	高台付坏	A．口縁部径12.8、器高5.1、高台部径6.6。B．ロクロ成形。高台部貼り付け。C．体部内外面回転ナデ。底部外面ナデ。D．片岩粒、赤色粒。E．内外－淡灰褐色。F．3/4。G．貯蔵穴（Ｐ５）内。
5	坏	A．口縁部径12.4、器高4.3、底部径5.7。B．ロクロ成形。C．体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D．赤色粒、白色粒。E．内外－暗灰褐色。F．ほぼ完形。G．貯蔵穴（Ｐ５）内。H．底部内面に焼成後の「×」字状の刻線あり。
6	坏	A．口縁部径（13.6）。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D．片岩粒、赤色粒。E．外－茶褐色、内－暗褐色。F．口縁部1/5。G．覆土中。

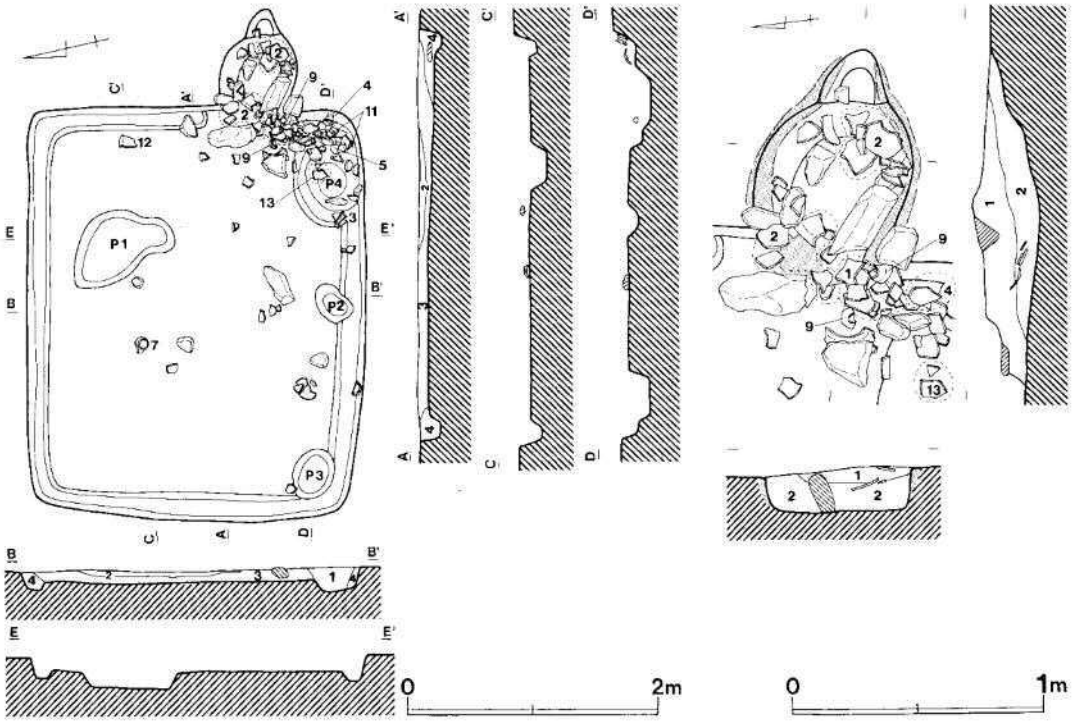
第39号住居跡（第36図、図版21）

調査区の北西側寄りに位置し、東側約３mには第38号住居跡が南東側約13mには第33号住居跡がある。遺構の掘り込みは浅く、遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、コーナー部がやや丸みをもつ比較的整った長方形を呈している。規模は、東西方向が3.32m、南北方向が2.68mを測る。住居の主軸方向は、N―103°―Eを向いている。

壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは15cmある。各壁の壁下には、幅15cm～20cm・深さ７cmの比較的整った形態の壁溝が途切れずに巡っている。床面は、地山粘質ロームのブロックを埋め戻した貼床式で、全体的に堅くしまっている。

ピットは、住居内よりＰ１～Ｐ４の４箇所が検出されているが、この中のＰ２は本住居跡に伴うものではなく、後世の掘り込みである。Ｐ１は、住居中央部の北側寄りに位置する。不整形を呈し、床面からの深さは10cm程度である。Ｐ３は、南西側コーナー部に位置する。42cm×32cmの楕円形ぎみの形態で、床面からの深さは16cmある。Ｐ４は、カマド右側の南東側コーナー部に位置し、その



第36図　第39号住居跡

第39号住居跡土層説明

第１層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第２層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第３層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第４層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

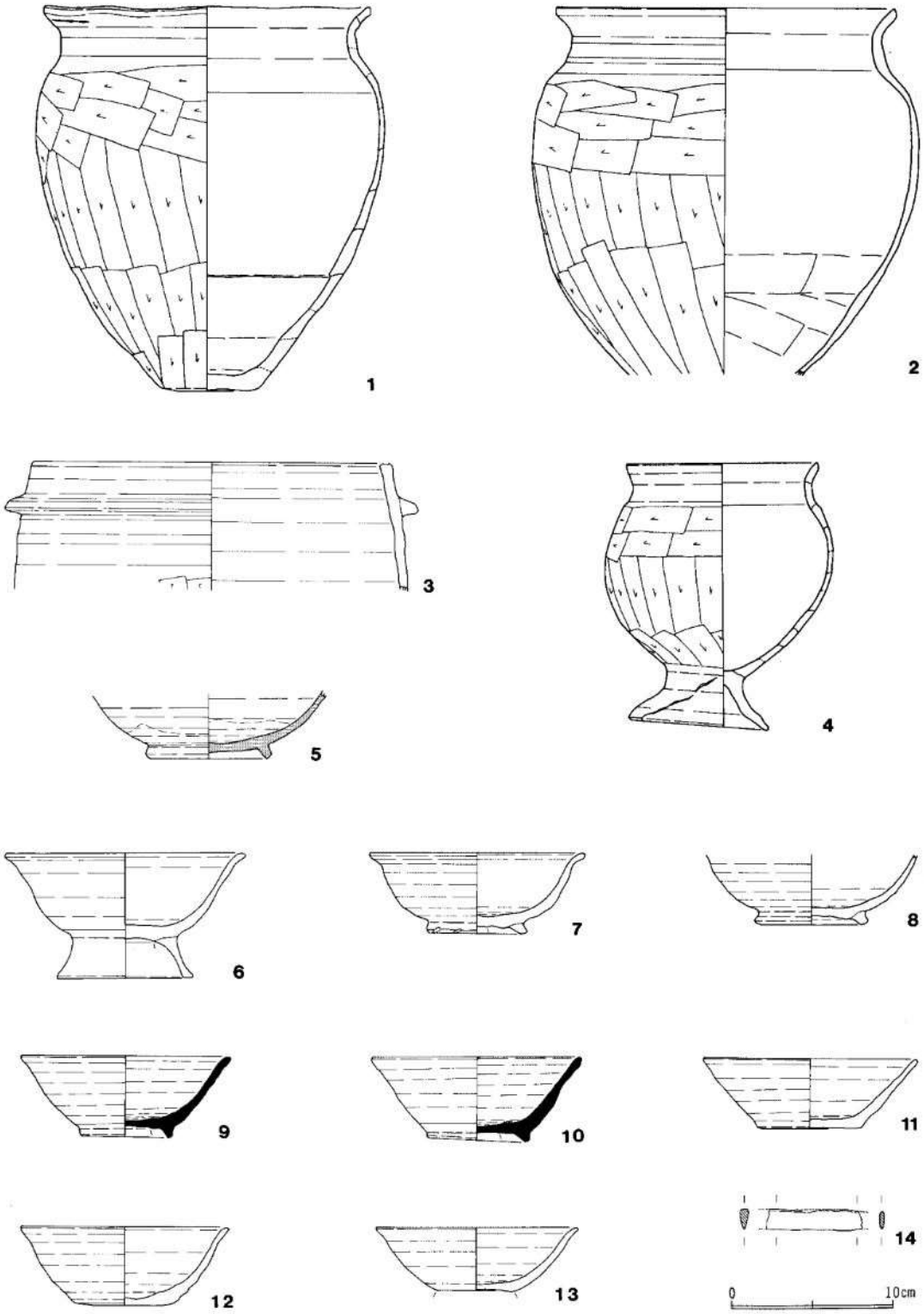
第39号住居跡カマド土層説明

第１層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第２層：暗赤褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を均一に、焼土ブロック・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

位置と形態からいわゆる貯蔵穴と考えられるものである。形態は、66cm×53cmの楕円形で、床面からの深さは16cmある。底面は、やや狭く丸みを持ち、２段に深くなっている。中からは、№５の小形台付甕・№５の灰釉埦・№11や№13の坏などが出土している。

カマドは、住居東側壁の中央から南側寄りに位置し、住居の壁をやや斜めに掘り込んで付設されている。規模は、残存する部分で全長94cm・最大幅60cmある。燃焼部は、その大半が住居の壁外に位置し、内面や焚口部付近は非常に良く焼けて赤色化している。燃焼面（火床）は、住居の床面を若干掘り下げた程度である。燃焼部内には支脚やその痕跡は見られない。煙道部は、燃焼部より８cm程度高く、やや傾斜しながら20cmほど外に延びて削平されている。本カマドは、カマドの内部やその周辺から、比較的大形の自然石が多数出土している。その大半はすでに崩れて原位置から動いているが、石組カマドかあるいは構築材の補強にこれらの石を利用していたものと推測される。



第37図　第39号住居跡出土遺物

遺物は、カマド内や貯蔵穴（Ｐ４）内及びその周辺から、土器が多数破片となって出土している。土器以外では、覆土中より№14の鉄製品の破片が１点出土しただけである。

第39号住居跡出土遺物観察表

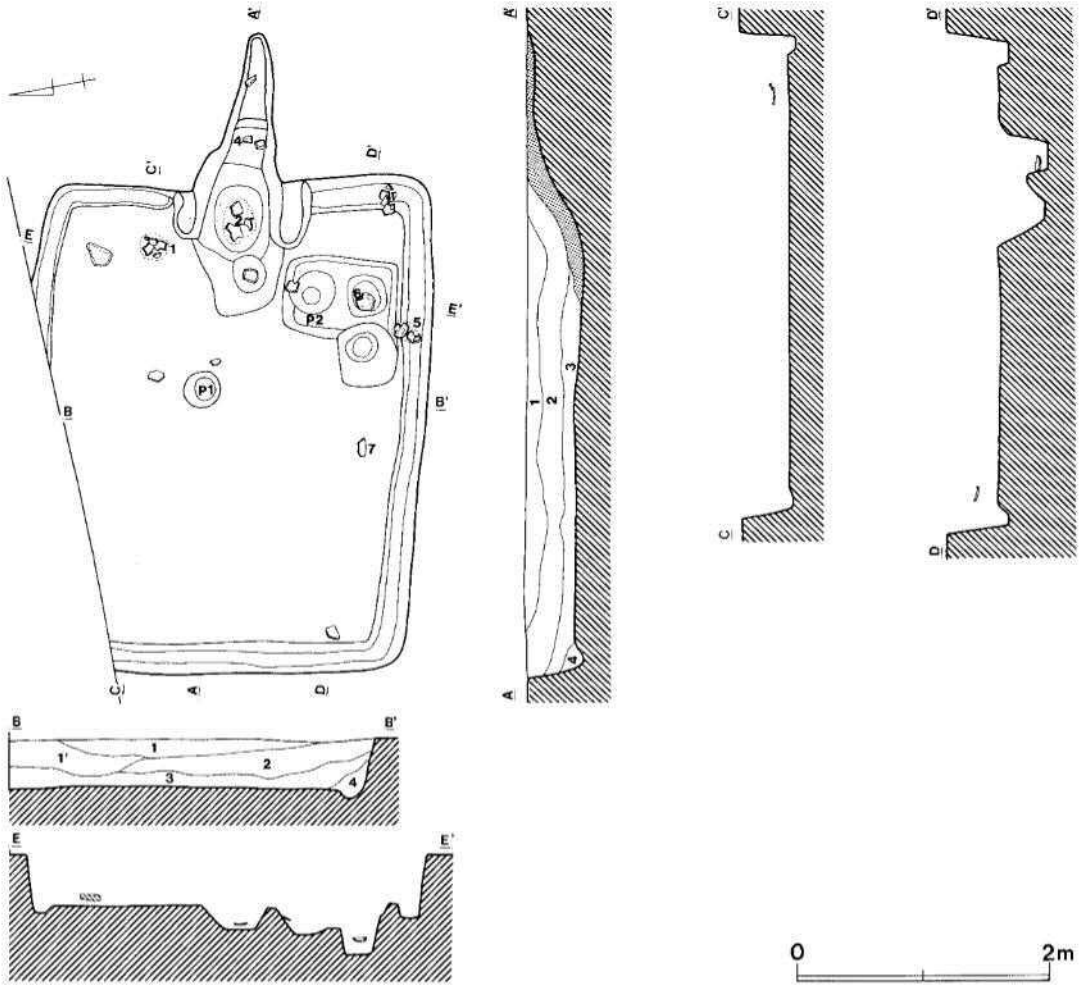
1	甕	A．口縁部径20.2、器高23.7、底部径5.8。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ナデ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外－暗茶褐色。F．ほぼ完形。G．床面直上。H．外面に黒斑あり。
2	甕	A．口縁部径21.0、器高22.7。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－茶褐色。F．3/4。G．カマド内。
3	羽　釜	A．口縁部径（22.0）。B．粘土紐積み上げ成形。鍔部貼り付け。C．内外面回転ナデの後、胴部外面ケズリ。D．片岩粒、白色粒。E．内外－明茶褐色。F．1/5。G．貯蔵穴（Ｐ４）内。
4	小　形 台付甕	A．口縁部径11.8、器高16.5、台部径8.6。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。台部内外面ヨコナデ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．外－暗茶褐色、内－茶褐色。F．2/3。G．貯蔵穴（Ｐ４）内。
5	灰　釉 高台付椀	A．高台部径7.8。B．ロクロ成形。C．体部及び高台部内外面回転ナデ。D．白色粒。E．内外－淡灰褐色。F．1/2。G．貯蔵穴（Ｐ４）内。
6	高台付 椀	A．口縁部径（14.8）、器高7.7、高台部径8.4。B．ロクロ成形。高台部貼り付け。C．体部及び高台部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D．片岩粒、白色粒。E．外－淡褐色、内－暗褐色。F．1/2。G．覆土中。
7	高台付 坏	A．口縁部径（13.4）、器高5.0、高台部径6.2。B．ロクロ成形。高台部貼り付け。C．体部及び高台部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外－淡褐色。F．1/3。G．床面付近。H．内外面に黒斑あり。
8	高台付 坏	A．高台部径7.0。B．ロクロ成形。高台部貼り付け。C．体部及び高台部内外面回転ナデ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外－明茶褐色。F．1/3。G．覆土中。
9	須恵器 高台付 坏	A．口縁部径13.0、器高5.0、高台部径5.6。B．ロクロ成形。高台部貼り付け。C．体部及び高台部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D．片岩粒、白色粒。E．内外－淡灰褐色。F．1/2。G．床面直上。
10	須恵器 高台付 坏	A．口縁部径13.0、器高5.3、高台部径6.3。B．ロクロ成形。高台部貼り付け。C．体部及び高台部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外－淡灰色。F．1/2。G．覆土中。
11	坏	A．口縁部径13.2、器高4.3、底部径6.4。B．ロクロ成形。C．体部内外面回転ナデ。底部外面ナデ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外－淡褐色。F．3/4。G．貯蔵穴（Ｐ４）内。
12	坏	A．口縁部径（12.8）、器高4.9、底部径6.0。B．ロクロ成形。C．体部内外面回転ナデ。底部外面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－暗灰褐色。F．1/4。G．床面付近。
13	坏	A．口縁部径（12.4）、器高4.0、底部径5.0。B．ロクロ成形。C．体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D．黒色粒、白色粒。E．内外－淡灰褐色。F．1/3。G．貯蔵穴（Ｐ４）内。
14	鉄製品	A．残存長5.9、幅1.3、厚さ0.6。C．片側が薄くなって尖っている。F．両側欠失。G．覆土中。H．刀子の可能性あり。

第40号住居跡（第36図、図版22）

調査区の北端に位置し、重複する第45号住居跡を切っている。住居跡の北西コーナー部は調査区外にあるため、本住居跡の全容は不明である。遺構の遺存状態は、比較的良好である。

平面形は、コーナー部がやや丸みをもつ長方形を呈するものと思われる。規模は、東西方向が3.96m、南北方向が3.18mを測る。住居の主軸方向は、N―106°―Eを向いている。

壁は、やや傾斜しながら直線的に立ち上がり、確認面からの深さは最高で44cmある。各壁の壁下には、幅20cm前後・深さ５cm程度の壁溝が途切れずに巡っている。床面は、地山粘質ロームのブロックを埋め戻した貼床式で、全体的に緩やかな起伏が見られる。住居の中央部は堅くしまっているが、



第38図　第40号住居跡

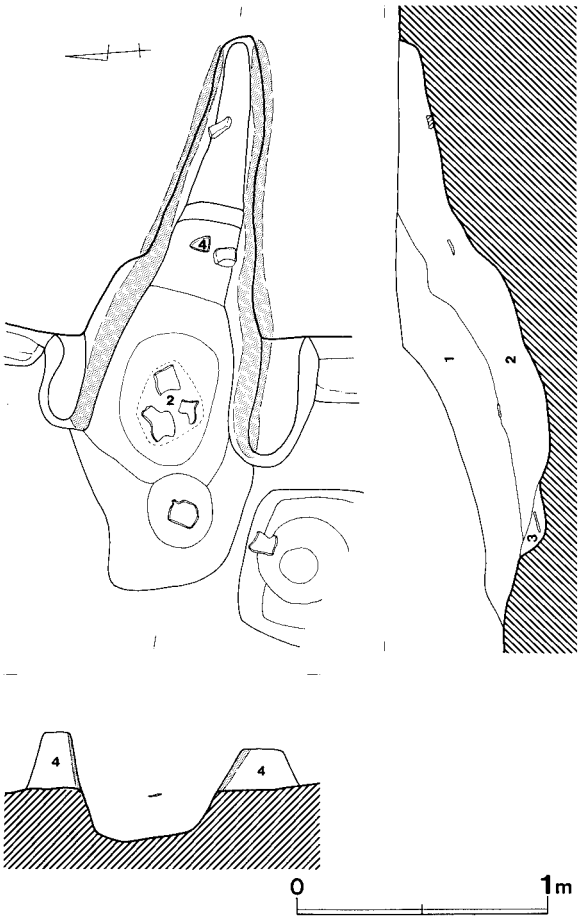
第40号住居跡土層説明

第１層：黒褐色土層（白色粒子を均一に、小石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第1′層：黒褐色土層（第１層に比べ小石を多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第２層：黒褐色土層（白色粒子・ローム粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第３層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第４層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

壁際の周辺部はやや軟弱である。

ピットは、住居内からＰ１とＰ２の２箇所が検出されている。Ｐ１は、住居の中央部に位置する。直径30cmの円形を呈し、床面からの深さは15cmある。Ｐ２は、カマド右側の南東側コーナー部付近に位置し、その位置や形態からいわゆる貯蔵穴と考えられるものである。形態は、90cm×65cmの長方形を呈し、底面は広く平坦である。底面の南側は一部ピット状に深くなっており、床面からの深さは40cmある。中からはNo.６の坏が出土している。

カマドは、住居の東側壁のほぼ中央に、壁を若干斜めに掘り込んで付設している。規模は、残存



第40号住居跡カマド土層説明

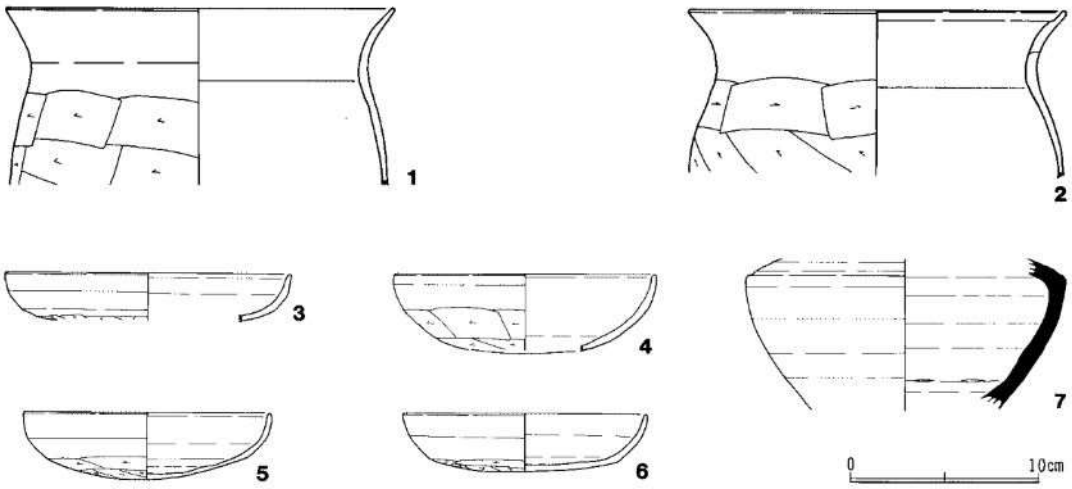
第１層：黒褐色土層（焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第２層：暗赤褐色土層（焼土粒子を多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第３層：暗褐色土層（焼土粒子を均一に、炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第４層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第39図　第40号住居跡カマド



第40図　第40号住居跡出土遺物

する部分で全長225cm・最大幅108cmある。袖は、左右とも幅が25cm～30cmあり、暗褐色粘土を床面上で壁に直接貼り付けて構築している。燃焼部は、住居の壁を掘り込んでおり、その約半分が壁外に位置する。内面は非常に良く焼けて赤色化している。燃焼面（火床）は、住居の床面よりも20cm程度深く、窪み状に丸みをもって、煙道部に向かって傾斜している。煙道部は、燃焼部より一段高く、燃焼部の外に若干傾斜をもって70cmほど延びて上方に立ち上がっている。

遺物は、カマド内や貯蔵穴（Ｐ２）内及びその周辺から、土器が少量出土している。土器以外では、住居の北東側コーナー部の床面付近から、長さ23cmの平らな自然石が１個出土している。

第40号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A．口縁部径（20.6）。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D．白色粒、赤色粒。E．内外－明茶褐色。F．1/4。G．覆土中。
2	甕	A．口縁部径（20.6）。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D．片岩粒、白色粒。E．内外－茶褐色。F．1/4。G．覆土中。
3	坏	A．口縁部径（13.2）。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後底部外面ケズリ。D．片岩粒、白色粒。E．内外－明褐色。F．1/4。G．覆土中。
4	坏	A．口縁部径（14.0）。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D．黒色粒、白色粒。E．内外－淡茶褐色。F．1/4。G．カマド内。
5	坏	A．口縁部径13.2、器高3.6。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D．白色粒、赤色粒、黒色粒。E．内外－暗茶褐色。F．ほぼ完形。G．床面直上。
6	坏	A．口縁部径13.0、器高3.1。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ。D．片岩粒、白色粒。E．内外－明茶褐色。F．完形。G．貯蔵穴（Ｐ２）内。
7	須恵器瓶	A．最大径17.0。B．粘土紐積み上げ成形。C．胴部内外面回転ナデ。D．黒色粒、白色粒。E．外－暗褐色、内－灰色。F．1/3。G．覆土中。

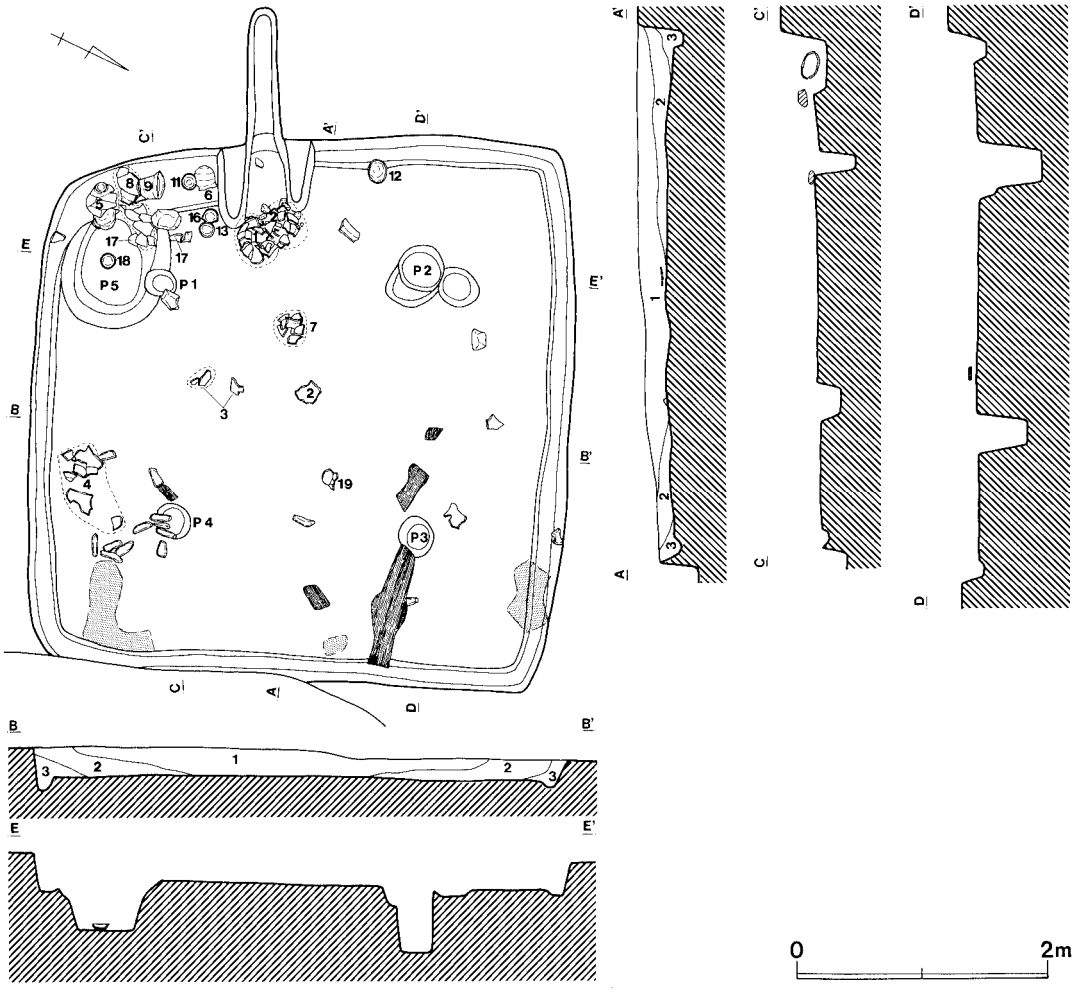
第41号住居跡（第41図、図版23・24）

調査区の北西側に位置し、北東側約4.5mには第43号住居跡が、南東側約14mには第34号住居跡がある。第42号住居跡と重複し、それによって住居跡の北東側壁の一部を切られている。遺構の遺存状態は、比較的良好である。

平面形は、住居の南側と東側のコーナー部の丸みが強い方形を呈している。規模は、南西から北東方向が4.38m、南東から北西方向が4.28mを測る。住居の主軸方向は、N―113°―Wを向いている。

壁は、若干傾斜しながら直線的に立ち上がり、確認面からの深さは最高で33cmある。各壁の壁下には、幅15cm～20cm・深さ５cm程度の比較的整った形態の壁溝が途切れずに巡っているが、カマド左側の南側コーナー部はやや不明瞭で、他に比べて幅が倍に広くなっている。床面は、地山粘質ロームのブロックを埋め戻した貼床式で、全体的にやや起伏が見られる。住居の中央部は比較的堅くしまっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。

ピットは、住居内からＰ１～Ｐ５の５箇所が検出されている。Ｐ１～Ｐ４は、住居のほぼ対角線上に位置し、その配置から主柱穴と考えられるものである。形態は、直径25cm～35cmの円形を呈し、床面からの深さは20cm～55cmある。Ｐ５は、カマド左側の住居南側コーナー部に位置し、その位置と形態からいわゆる貯蔵穴と考えられるものである。形態は、100cm×86cmの楕円形で、底面は広く



第41図　第41号住居跡

第41号住居跡土層説明

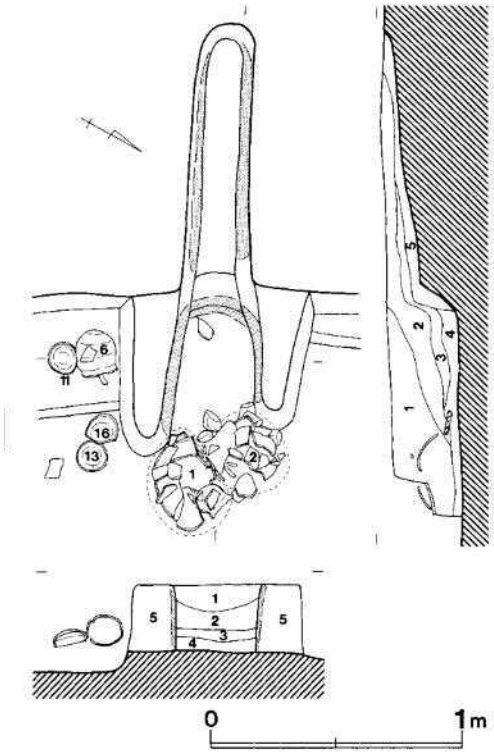
第１層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第２層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第３層：暗褐色土層（ロームブロックを均一に、炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

平坦をなし、床面からの深さは40cmある。上面からはNo.５の甕やNo.８の大形甑などが貯蔵穴内に倒れ込んだような状態で出土し、中からはNo.18の坏が１点出土している。

カマドは、住居の南西側壁の中央から南東側寄りに位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、残存する部分で全長174cm・最大幅78cmある。袖は、左右とも幅が25cm程度の比較的整った形態で、粘質ロームのブロックを住居の床面上で壁に直接貼り付けて構築している。燃焼部は、住居の壁を掘り込まない形態で、燃焼部の奥壁と住居の壁を一致させている。内面は、非常に良く焼けて赤色化している。燃焼面（火床）は、住居の床面とほぼ同じ高さで、水平に作られている。燃焼部の焚口部付近では、No.１とNo.２の甕が、カマド天井部の崩壊に伴って燃焼部内からその



第41号住居跡カマド土層説明

第１層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第２層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第３層:暗褐色土層（焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第４層：暗赤褐色土層（焼土粒子・焼土ブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第５層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

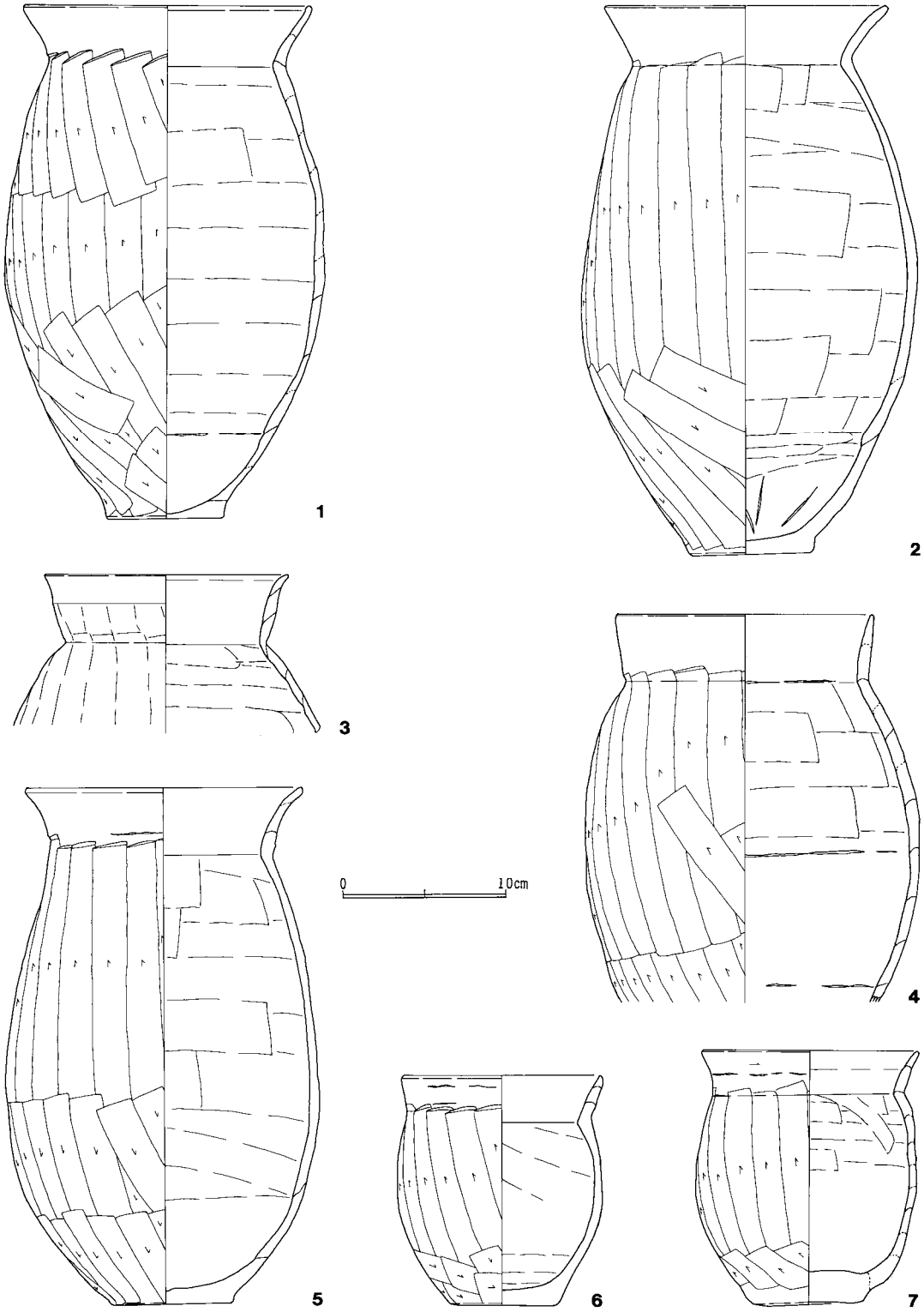
第42図　第41号住居跡カマド

まま並んで前に倒れたような状態で出土しており、本カマドの器受部における土器の架け方が、第29号住居跡や第34号住居跡や第37号住居跡と同じく、２個並置式であったことが窺える。煙道部は、燃焼部より一段高く、やや傾斜しながら住居の壁外に１mほど延びて先端が削平されている。煙道部の壁面は、熱によって赤色化している。

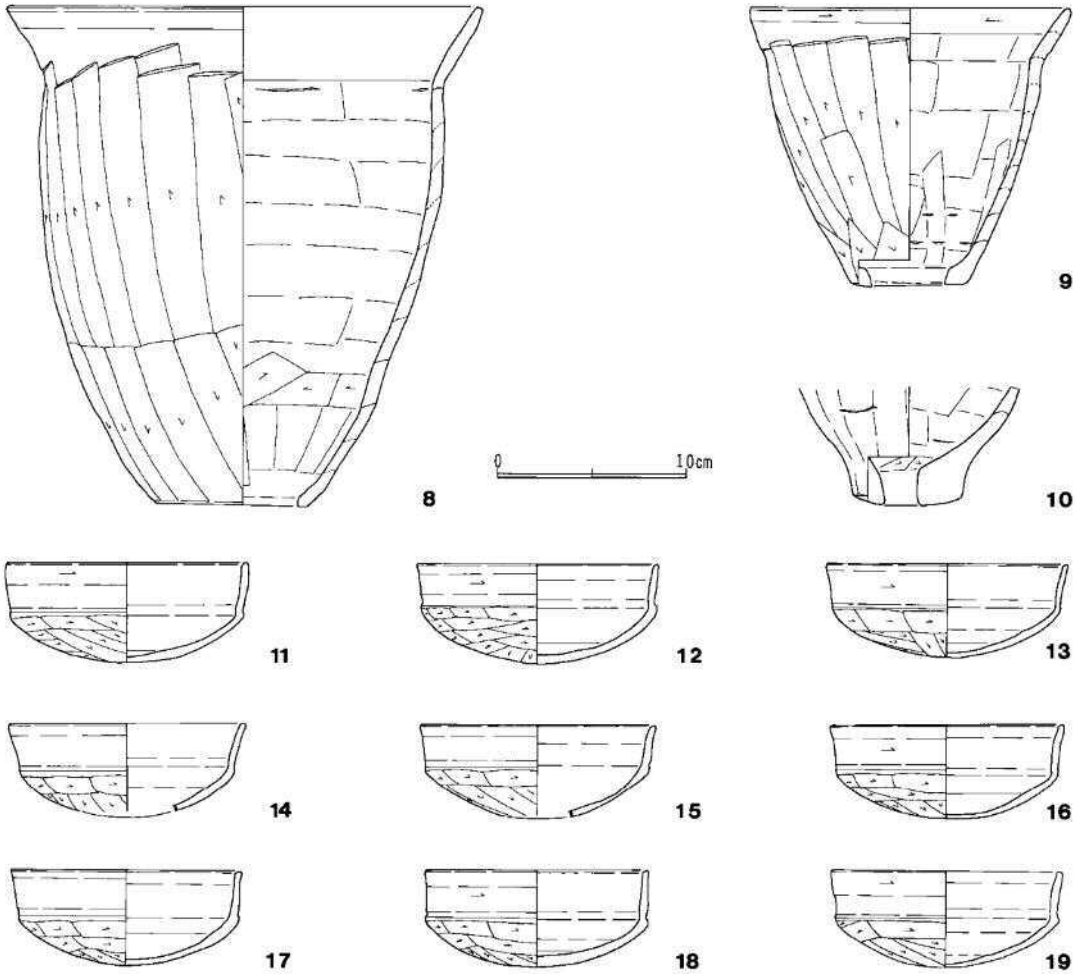
遺物は、カマドや貯蔵穴（Ｐ５）内及びその周辺から集中して出土している。これらの土器の大半は、その出土状態から見ても本住居で使用されていたものが、住居の廃絶に伴ってそのまま遺棄されたものと推測され、良好な一括資料と言える。土器以外では、主柱穴Ｐ４東側の床面上に、長さ15cm程度の棒状の自然石10個が比較的まとまって出土しており、いわゆる「編物石」の出土状況に類似している。この他には、住居北東側の壁際の覆土中から、焼土や比較的大きな炭化材が検出されている。

第41号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A．口縁部径17.8、器高31.7、底部径7.0。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。底部外面ナデ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外ー淡茶褐色。F．ほぼ完形。G．床面直上。H．外面に黒斑あり。
2	甕	A．口縁部径17.4、器高34.0、底部径7.2。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。底部外面ナデ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外ー淡茶褐色。F．ほぼ完形。G．床面直上。H．外面に黒斑あり。
3	甕	A．口縁部径（15.0)。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－淡褐色。F．1/2。G．床面付近。



第43図　第41号住居跡出土遺物（１）



第44図　第41号住居跡出土遺物（2）

4	甕	A．口縁部径16.0、残存高24.0。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外ー暗褐色。F．3/4。G．床面付近。
5	甕	A．口縁部径17.0、器高31.9、底部径7.3。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。底部外面ケズリ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外ー明茶褐色。F．ほぼ完形。G．床面直上。
6	小形甕	A．口縁部径12.4、器高14.2、底部径6.4。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。底部外面ケズリ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外ー明茶褐色。F．ほぼ完形。G．床面付近。
7	小形甕	A．口縁部径13.4、器高15.8、底部径6.8。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデの後上半篦ナデ。底部外面ケズリ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外ー淡茶褐色。F．ほぼ完形。G．床面直上。H．外面は二次焼成を受けて荒れている。
8	大形甑	A．口縁部径25.0、器高26.6、底部径7.9。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデの後下半接合部ケズリ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外ー淡茶褐色。F．ほぼ完形。G．床面付近。H．外面に黒斑あり。
9	小形甑	A．口縁部径17.0、器高14.9、底部径6.2。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。D．片岩粒、白色粒。E．内外ー淡灰褐色。F．完形。G．床面付近。H．外面に黒斑あり。

10	小形甑	A．底部径5.7。B．粘土紐積み上げ成形。C．胴部外面ケズリの後ナデ、内面箆ナデ。底部外面ケズリの後ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－淡茶褐色。F．底部のみ。G．覆土中。
11	坏	A．口縁部径12.8、器高5.3。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外－明橙褐色。F．完形。G．床面付近。
12	坏	A．口縁部径12.8、器高5.3。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－淡茶褐色。F．完形。G．床面直上。
13	坏	A．口縁部径12.8、器高5.0。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－明茶褐色。F．ほぼ完形。G．床面直上。
14	坏	A．口縁部径（12.6）、器高4.7。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．外－淡茶褐色、内－明茶褐色。F．1/3。G．覆土中。
15	坏	A．口縁部径（12.4）、器高4.9。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－淡茶褐色。F．1/2。G．貯蔵穴（P５）内。
16	坏	A．口縁部径12.4、器高5.0。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－明茶褐色。F．ほぼ完形。G．床面直上。H．体部外面黒斑あり。
17	坏	A．口縁部径12.2、器高5.1。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－明茶褐色。F．ほぼ完形。G．　貯蔵穴（P５）内。
18	坏	A．口縁部径11.8、器高5.1。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－明茶褐色。F．ほぼ完形。G．　貯蔵穴（P５）内。
19	坏	A．口縁部径12.2、器高5.1。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外－明茶褐色。F．ほぼ完形。G．　№２の甕の中より出土。

第42号住居跡（第45図、図版25）

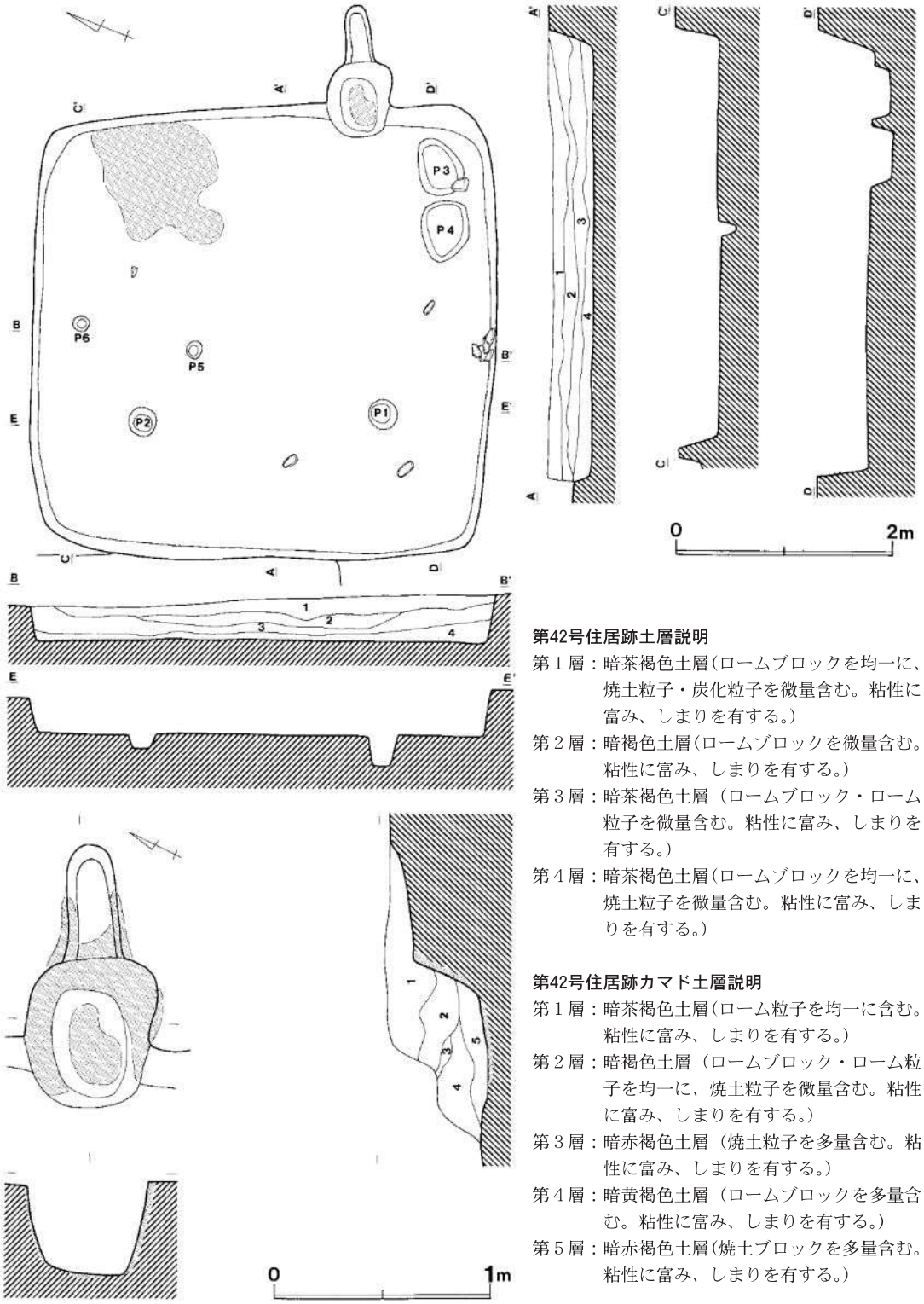
調査区の北西側に位置し、重複する第41号住居跡を切っている。遺構の遺存状態は、比較的良好である。

平面形は、コーナー部が丸みを持つ比較的整った方形を呈している。規模は、北東から南西方向が4.20m、北西から南東方向が4.34mを測る。住居の主軸方向は、N―68°―Eを向いている。

壁は、やや傾斜しながら直線的に立ち上がり、確認面からの深さは最高で48cmある。各壁の壁下には壁溝は見られない。床面は、地山の暗褐色土と粘質ロームのブロックを埋め戻した貼床式で、細かな凹凸が見られるもののほぼ平坦である。住居の中央部は比較的堅くしまっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。北側コーナー部付近の床面上では、比較的広範囲にわたって熱によって赤色化した部分が見られる。

ピットは、住居内からＰ１～Ｐ６の６箇所が検出されている。Ｐ１とＰ２は、ほぼ住居の対角線上に位置し、その配置から４本主柱穴の一部を構成していた柱穴である可能性が考えられる。形態は、いずれも直径27cm程度の円形を呈し、床面からの深さはＰ１が14cm・Ｐ２が28cmある。Ｐ３とＰ４は、住居の東側コーナー部付近に隣接して位置し、その位置から貯蔵穴の可能性も考えられる。形態は、いずれも55cm×40cm程度の不整形で、床面からの深さは20cmある。Ｐ５とＰ６は、いずれも直径15cmの小規模な円形を呈し、床面からの深さは17cmある。

カマドは、住居北東側壁の中央から南東側寄りに位置し、住居の壁をほぼ直角に掘り込んで付設されている。規模は、残存する部分で全長122cm、最大幅62cmある。燃焼部は、その大半が住居の壁外に位置し、内面は非常に良く焼けて赤色化している。燃焼面（火床）は、住居の床面よりも３cm程度低く、煙道部に向かって若干傾斜している。支脚の痕跡は見られない。煙道部は、燃焼部よりも一段高く、若干傾斜しながら燃焼部の外に53cmほど延びて、その先は削平されている。



第42号住居跡土層説明

第１層：暗茶褐色土層(ロームブロックを均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。)

第２層：暗褐色土層(ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。)

第３層：暗茶褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。)

第４層：暗茶褐色土層(ロームブロックを均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。)

第42号住居跡カマド土層説明

第１層：暗茶褐色土層(ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。)

第２層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。)

第３層：暗赤褐色土層（焼土粒子を多量含む。粘性に富み、しまりを有する。)

第４層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。)

第５層：暗赤褐色土層(焼土ブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。)

第45図　第42号住居跡

遺物は、非常に少なく、覆土中より土器片が少量出土しただけである。土器以外では、住居南東側壁の壁際中央から、長さ15cm前後の棒状の自然石が集められた状態で５個出土しており、いわゆる「編物石」の状況と類似している。

第46図　第42号住居跡出土遺物

第42号住居跡出土遺物観察表

1	皿	A．口縁部径（19.6）。C．口縁部内外面ヨコナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外－明茶褐色。F．1/4。G．覆土中。
2	坏	A．口縁部径（17.6）。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ。内面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－淡茶褐色。F．1/5。G．覆土中。
3	須恵器瓶	A．口縁部径（6.0）。C．ロクロ成形。口縁部内外面回転ナデ。D．白色粒。E．内外－黒灰色、肉－淡灰色。F．1/4。G．覆土中。

第43号住居跡（第47図、図版26･27）

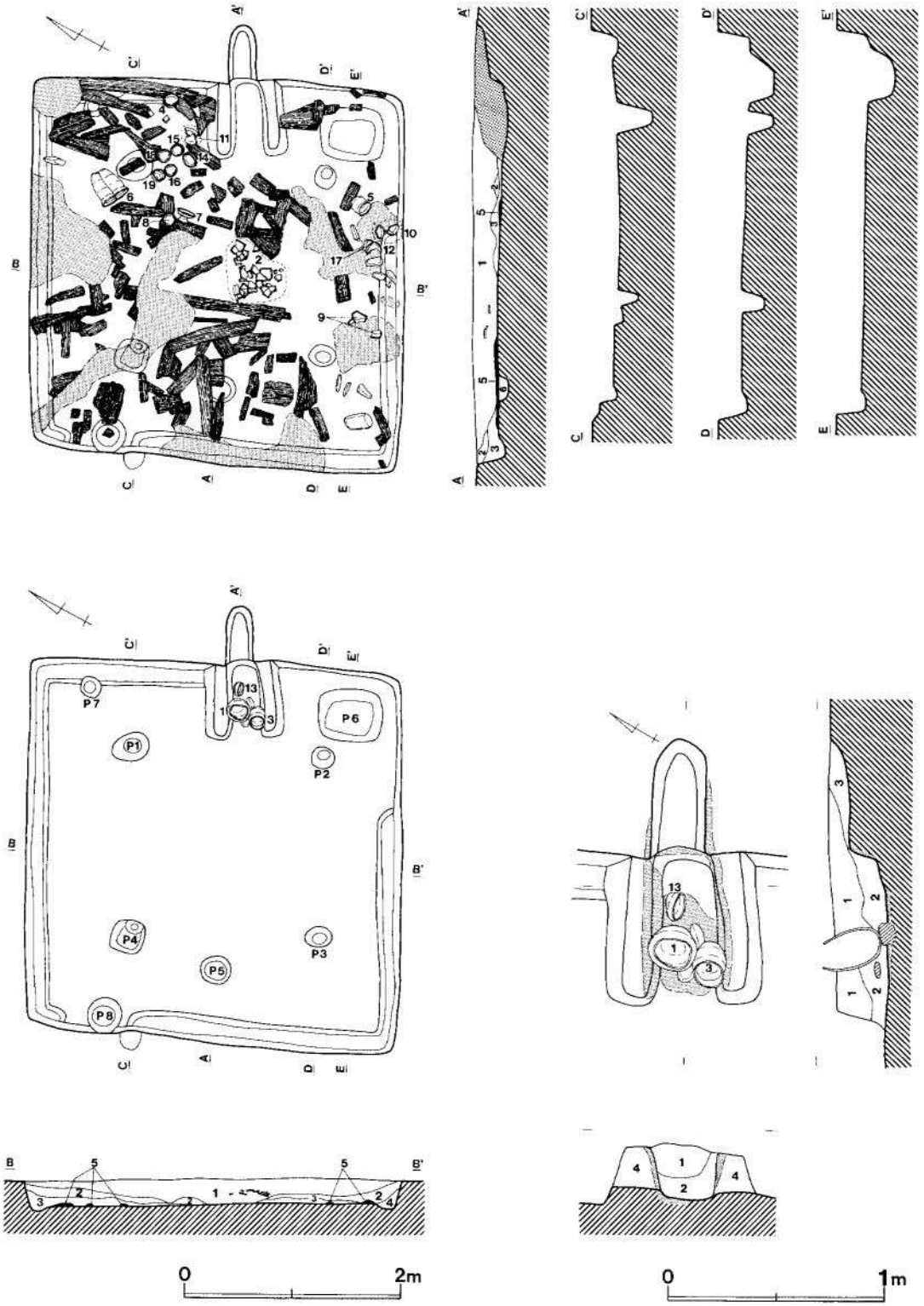
調査区の北端に位置し、南西側約4.5mには第41号住居跡がある。遺構の遺存状態は、比較的良好である。

平面形は、比較的整った方形を呈しているが、若干平行四辺形状に歪んでいる。規模は、北東から南西方向が3.62m、北西から南東方向が3.50mを測る。住居の主軸方向は、N―61°―Eを向いている。

壁は、やや傾斜しながら直線的に立ち上がり、確認面からの深さは28cmある。各壁の壁下には、幅20cm・深さ５cm程度の比較的整った形態の壁溝が巡っているが、カマド右側の住居東側コーナー部と西側コーナー部付近は途切れている。床面は、地山粘質ロームのブロックを埋め戻した貼床式で、全体的に堅くしまっている。ほぼ住居内全域の床面上から、多くの炭化材と焼土が見られることから、本住居跡は火災によって焼失したものと考えられる。

ピットは、住居内よりＰ１～Ｐ８の８箇所が検出されている。Ｐ１～Ｐ４は、住居の対角線上に位置し、その配置から主柱穴と考えられるものである。形態は、Ｐ４が四角形ぎみである他は、直径20cm～25cmの円形や楕円形を呈し、床面からの深さは20cm～30cmある。Ｐ５は、直径26cmの円形を呈し、床面からの深さは10cm程度である。位置的には住居の入口部施設の可能性もあるが、明確ではない。Ｐ６は、カマド右側の住居東側コーナー部に位置し、その位置や形態からいわゆる貯蔵穴と考えられるものである。形態は、60cm×50cmの長方形を呈し、床面からの深さは30cmある。Ｐ７は、北側コーナー付近にある。直径20cmの円形を呈し、床面からの深さは７cmある。Ｐ８は、直径30cmの円形を呈し、床面からの深さは10cm程度である。ちょうどＰ７と反対側の壁下に位置し、Ｐ８の部分だけ壁溝が途切れている。

カマドは、住居の北東側壁の中央からやや南東側寄りに位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、残存する部分で全長124cm・最大幅73cmある。袖は、左右とも幅が20cm～25cmの



第47図　第43号住居跡

第43号住居跡土層説明

第１層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を均一に、炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第２層：暗赤褐色土層（焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第３層：暗褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第４層：暗黄褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第５層：黒色土層（炭化物層。）
第６層：暗褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）

第43号住居跡カマド土層説明

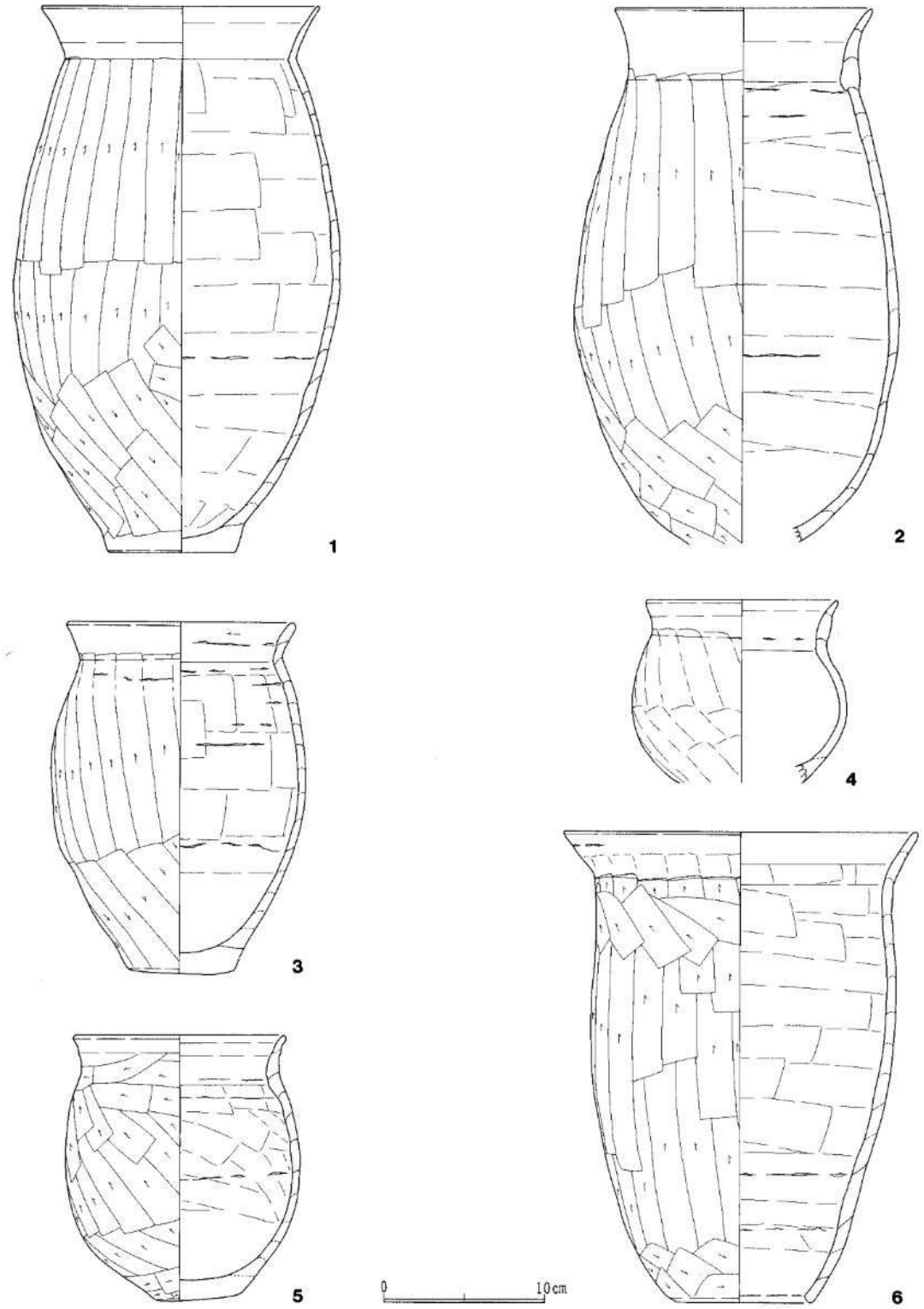
第１層：暗褐色土層（ロームブロックを均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第２層：暗赤褐色土層（焼土ブロック・焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第３層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第４層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

比較的整った形態で、粘質ロームのブロックを住居の床面上で壁に直接貼り付けて構築している。燃焼部は、住居の壁を掘り込まない形態で、内面は良く焼けて赤色化している。燃焼面（火床）は、住居の床面とほぼ同じ高さで、水平に作られている。燃焼部内からはNo.１とNo.３の甕が、２個並置式の掛け方で出土しており、左側のNo.１の甕の下には支脚として自然石が１個据えられている。煙道部は、燃焼部より一段高く、住居の壁外にほぼ水平に50cm程延びて上方に向きを変えている。

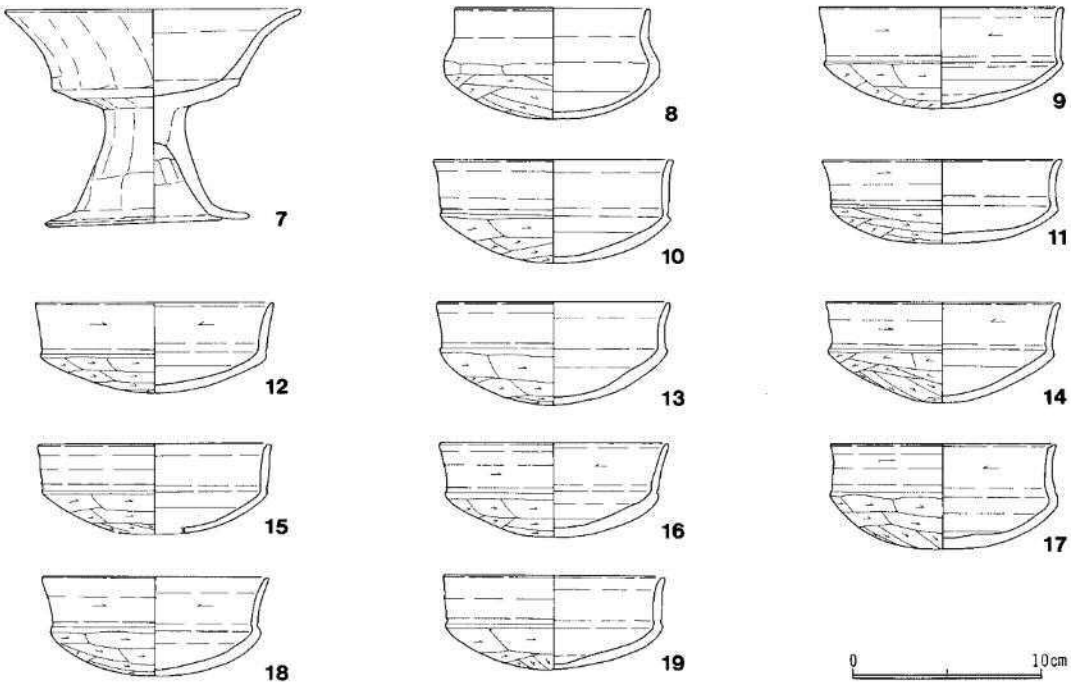
遺物は、住居の床面付近より、比較的多くの完形もしくはそれに近い土器が出土している。これらの土器の大半は、その出土状況から見て、本住居跡の焼失に伴ってそのまま遺棄されたものと考えられ、良好な一括資料と言える。土器以外では、住居南東側壁の中央壁際の壁溝上から、長さ15cm前後の自然石が４個出土し、近くの南側コーナー部付近からは３個出土している。

第43号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A．口縁部径（17.2）、器高33.9、底部径7.8。B．粘土紐巻上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。底部外面ケズリ。D．片岩粒、白色粒。E．内外－茶褐色。F．5/6。G．カマド内。H．外面に黒斑あり。
2	甕	A．口縁部径16.0、残存高33.3。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外－淡褐色。F．4/5。G．覆土中。H．外面に黒斑あり。
3	甕	A．口縁部径14.2、器高21.8、底部径6.6。B．粘土紐巻上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデの後上半篦ナデ。底部外面ケズリの後ナデ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．外－淡茶褐色、内－暗茶褐色。F．完形。G．カマド内。H．外面に黒斑あり。胴部下半は二次焼成により赤色化している。
4	小形甕	A．口縁部径12.0、残存高11.4。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。D．片岩粒、白色粒。E．内外－暗茶褐色。F．4/5。G．床面付近。
5	小形甕	A．口縁部径13.2、器高16.5、底部径5.3。B．粘土紐輪積み成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデの後上半篦ナデ。底部外面ケズリ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外－明茶褐色。F．完形。G．床面付近。
6	大形甑	A．口縁部径22.0、器高29.2、底部径8.4。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－淡茶褐色。F．ほぼ完形。G．床面直上。H．外面に黒斑あり。
7	高　坏	A．口縁部径15.8、器高11.5、脚端部径10.7。B．粘土紐積み上げ成形。C．坏部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。脚部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－明茶褐色。F．完形。G．床面付近。
8	広　口 短頸壺	A．口縁部径10.4、器高5.9。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ナデ。胴部外面ナデの後下半ケズリ。内面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－明茶褐色。F．完形。G．床面付近。



第48図　第43号住居跡出土遺物（１）



第49図　第43号住居跡出土遺物（2）

9	坏	A．口縁部径13.0、器高5.4。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－明茶褐色。F．ほぼ完形。G．覆土中。H．底部外面に黒斑あり。
10	坏	A．口縁部径12.8、器高5.5。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－明茶褐色。F．ほぼ完形。G．覆土中。
11	坏	A．口縁部径12.8、器高4.4。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D．片岩粒、赤色粒。E．内外－暗褐色。F．ほぼ完形。G．床面付近。H．器表面は、二次焼成を受けて荒れている。
12	坏	A．口縁部径12.6、器高4.8。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外－明茶褐色。F．ほぼ完形。G．覆土中。
13	坏	A．口縁部径12.4、器高5.5。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．外－明茶褐色、内－暗褐色。F．ほぼ完形。G．カマド内。
14	坏	A．口縁部径12.4、器高5.4。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－明茶褐色。F．完形。G．床面付近。H．底部外面に黒斑あり。
15	坏	A．口縁部径12.4、器高4.8。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－暗茶褐色。F．3/4。G．床面付近。
16	坏	A．口縁部径12.2、器高5.0。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．外－明茶褐色、内－暗褐色。F．ほぼ完形。G．床面付近。
17	坏	A．口縁部径12.0、器高5.6。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D．白色粒。E．外－淡褐色、内－明茶褐色。F．2/3。G．床面付近。H．底部外面に黒斑あり。
18	坏	A．口縁部径12.0、器高5.3。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．外－暗褐色、内－淡褐色。F．ほぼ完形。G．床面付近。
19	坏	A．口縁部径11.8、器高5.0。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－暗赤褐色。F．完形。G．床面付近。H．内外面は二次焼成を受けて荒れている。

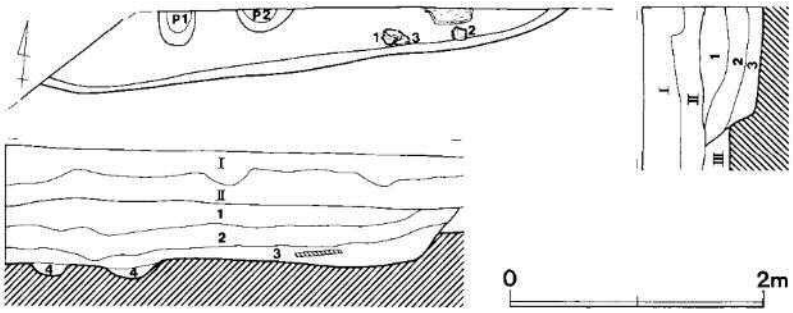
第44号住居跡（第50図、図版28）

調査区の北端に位置する。調査区内では、住居跡の南側壁の一部しか検出されず、住居跡の大部分は調査区外であるため、本住居跡の全容は不明である。遺構の遺存状態は、比較的良好である。

平面形や規模は不明であるが、住居の南側壁は、N－77°－Eの方向を向いている。壁は、基本第Ⅲ層の黒色土を切り込んで緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは36cmある。調査区内で検出された南側壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、地山粘質ロームのブロックを埋め戻した貼床式である。全体的に緩やかな起伏があり、壁際のためかやや軟弱である。

ピットは、南側の壁際よりＰ１とＰ２の２箇所が検出されている。いずれも調査区内では南側半分しか検出されていないため全容は不明であるが、いずれも床面からの深さは10cm程度である。

遺物は、南側壁の壁際の床面付近より、№1の甕や№2と№3の須恵器坏が出土している。土器以外では、住居の南東側コーナー部付近の床面上より、長さ38cmの比較的大きな板状の石が１個出土している。



第50図　第44号住居跡

第44号住居跡土層説明

第Ⅰ層：現耕作土。

第Ⅱ層：旧耕作土。

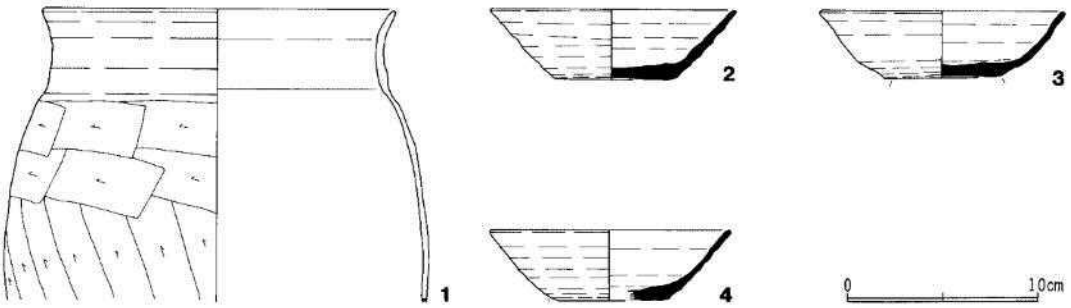
第Ⅲ層：黒色土。

第１層：黒褐色土層（小石を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第２層：黒褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第３層：暗褐色土層（ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第４層：暗褐色土層（ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）



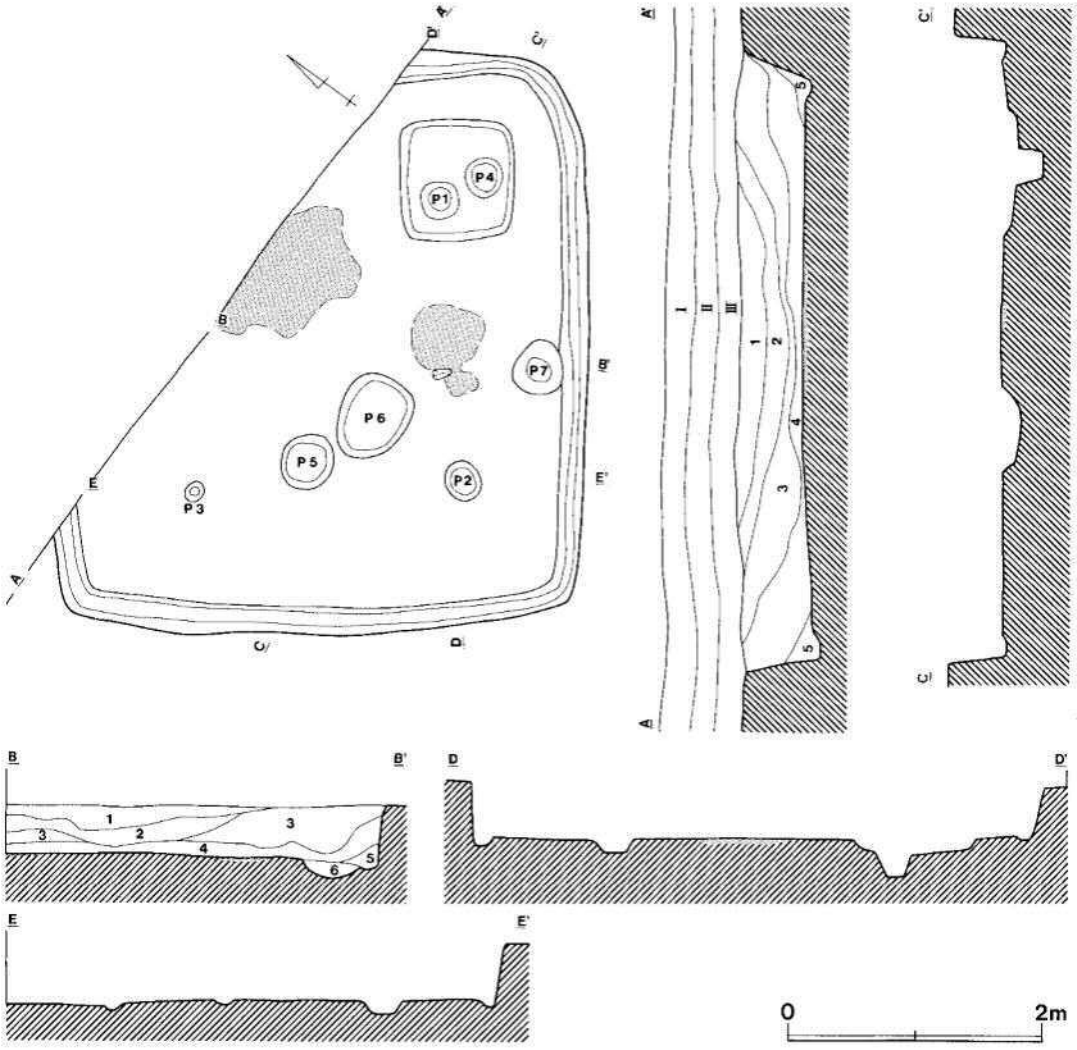
第51図　第44号住居跡出土遺物

第44号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A．口縁部径（18.6）。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外－明茶褐色。F．3/4。G．床面付近。
2	須恵器 坏	A．口縁部径13.1、器高3.7、底部径6.4。B．ロクロ成形。C．体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切りの後ナデ。D．片岩粒、白色粒。E．内外－淡灰褐色。F．3/4。G．床面付近。
3	須恵器 坏	A．口縁部径13.0、器高3.5、底部径6.1。B．ロクロ成形。C．体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D．黒色粒、白色粒。E．内外－淡灰色。F．3/4。G．床面付近。
4	須恵器 坏	A．口縁部径（12.8）、器高3.7、底部径5.4。B．ロクロ成形。C．体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切りの後ナデ。D．片岩粒、白色粒。E．内外－淡灰褐色。F．1/2。G．覆土中。

第45号住居跡（第52図、図版29）

調査区の北端に位置し、重複する第40号住居跡に住居跡の西側コーナー部の上面を切られている。住居跡の北側半分は調査区外のため、本住居跡の全容は不明であるが、遺構の遺存状態は比較的良



第52図　第45号住居跡

第45号住居跡土層説明

第Ⅰ層：現耕作土。
第Ⅱ層：旧耕作土。
第Ⅲ層：黒色土。
第１層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第２層：暗茶褐色土層（ロームブロックを均一に、焼土粒子・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第３層：暗褐色土層（ロームブロックを均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第４層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第５層：暗褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第６層：暗灰褐色土層（ロームブロック・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

好である。

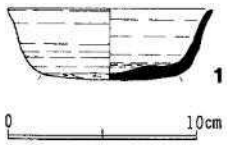
平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、コーナー部がやや丸みを持つ方形を呈していたものと思われる。規模は、北東から南西方向が4.60m、北西から南東方向が4.18mを測る。住居の主軸は不明であるが、南東側壁はN－51°－Eを向いている。

壁は、若干傾斜しながら直線的に立ち上がり、確認面からの深さは最高で53cmある。調査区内で検出された各壁下には、幅20cm・深さ５cm程度の比較的整った形態の壁溝が途切れずに巡っている。

床面は、地山粘質ロームのブロックを埋め戻した貼床式で、住居中央部は比較的堅くしまっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。住居中央部の床面上には、比較的広範囲にわたって熱によって赤色化した部分が２箇所見られる。

ピットは、住居内でＰ１～Ｐ７の７箇所が検出されている。Ｐ１～Ｐ３は、ほぼ住居の対角線上に位置し、その配置から主柱穴の可能性が推測されるものである。規模は、Ｐ１とＰ２が直径30cm、Ｐ３が直径15cmの円形を呈し、床面からの深さはＰ１が30cm、Ｐ２が10cm、Ｐ３が５cm程度である。Ｐ４は、Ｐ１の東側にあり、直径30cmの円形を呈し、床面からの深さは30cmある。Ｐ５とＰ６は、住居の中央部付近にある。いずれも比較的規模が大きく、床面からの深さが15cm程度の浅いものであるが、中には多量の焼土を含んでいる。Ｐ７は、南東側壁の中央壁下に位置する。直径40cmの円形を呈し、床面からの深さは14cmある。

遺物は、覆土中より土器の破片が少量出土しただけである。



第53図　第45号住居跡出土遺物

第45号住居跡出土遺物観察表

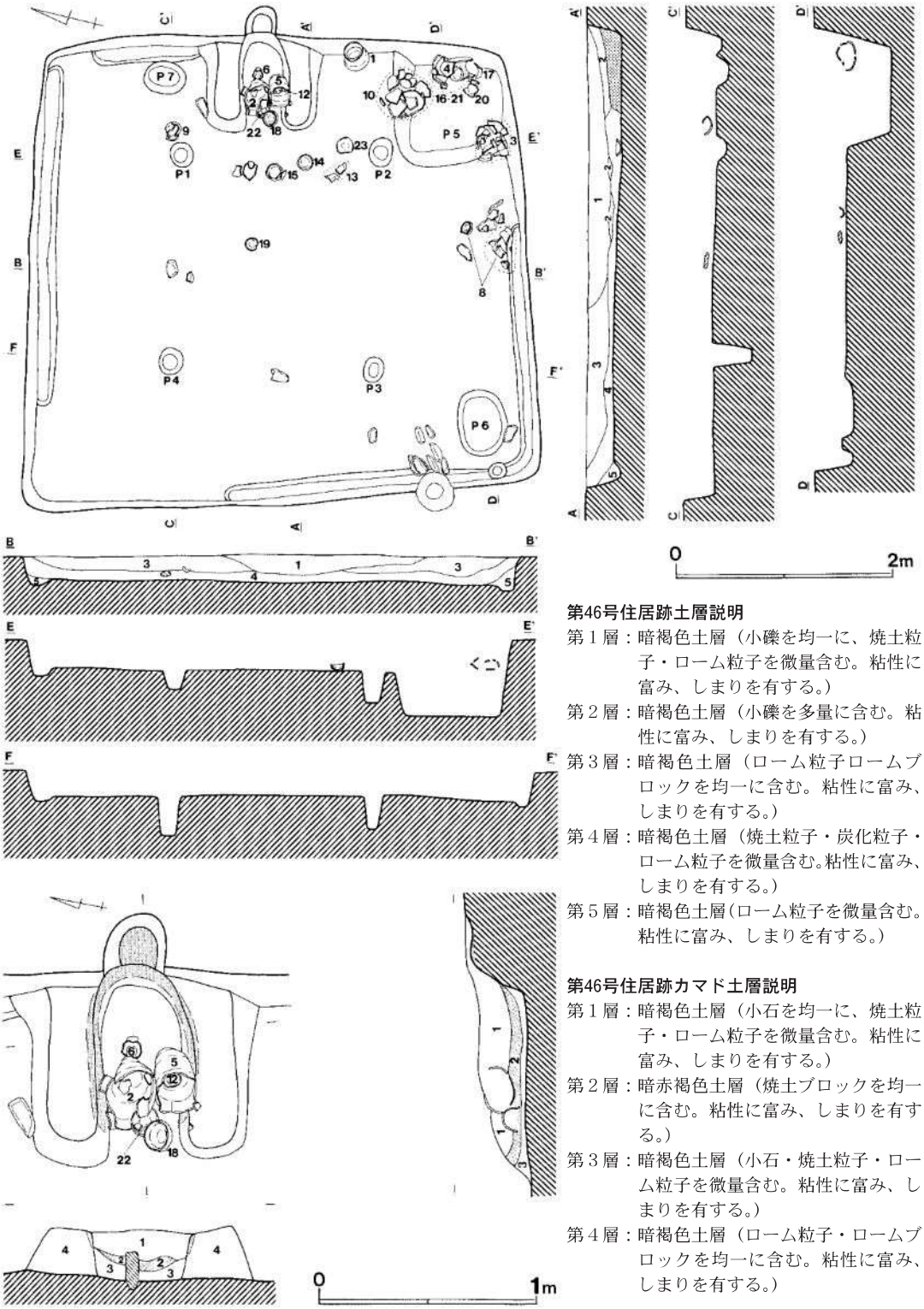
1	須恵器 坏	A．口縁部径（11.0）、器高3.7、底部径（7.2）。B．ロクロ成形。C．体部内外面回転ナデ。底部外面手持ち篦ケズリ。D．白色粒。E．内外－暗灰褐色。F．1/4。G．覆土中。

第46号住居跡（第54図、図版29・30）

調査区の南東端に位置し、西側約３mには第29号住居跡がある。遺構の遺存状態は、比較的良好である。

平面形は、コーナー部がやや丸みを持つ方形を呈している。規模は、東西方向が4.38m、南北方向が4.82mを測る。住居の主軸方向は、N－75°－Eを向いている。

壁は、やや傾斜しながら直線的に立ち上がり、確認面からの深さは最高で34cmある。各壁の壁下



第46号住居跡土層説明

第１層：暗褐色土層（小礫を均一に、焼土粒子・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第２層：暗褐色土層（小礫を多量に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第３層：暗褐色土層（ローム粒子ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第４層：暗褐色土層（焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第５層：暗褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第46号住居跡カマド土層説明

第１層：暗褐色土層（小石を均一に、焼土粒子・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第２層：暗赤褐色土層（焼土ブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第３層：暗褐色土層（小石・焼土粒子・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第４層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第54図　第46号住居跡

には、幅15cm～20cm・深さ５cmの比較的整った形態の壁溝が巡っているが、北東側コーナー部や北西側コーナー部と南東側コーナー部では途切れている。床面は、地山粘質ロームのブロックを埋め戻した貼床式で、住居中央部は比較的堅くしまっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。

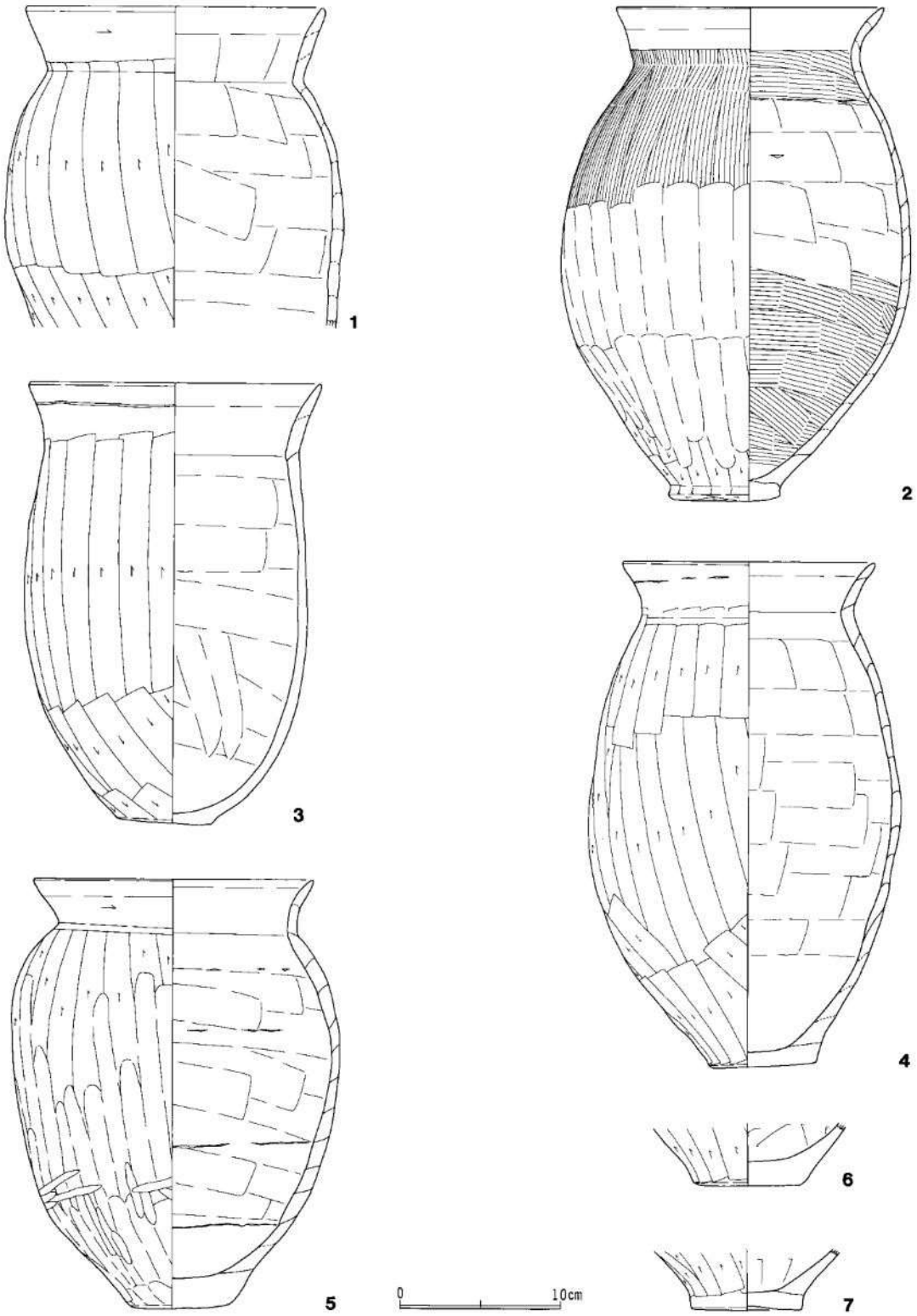
ピットは、住居内からＰ１～Ｐ７の７箇所が検出されている。Ｐ１～Ｐ４は、住居のほぼ対角線上に位置し、その配置から主柱穴と考えられるものである。いずれも直径25cm前後の円形を呈し、床面からの深さはＰ１が18cmでやや浅い他は、いずれも30cm～35cmある。Ｐ５は、カマド右側の住居の南東側コーナー部にあり、その位置や形態からいわゆる貯蔵穴と考えられるものである。形態は、110cm×105cmの方形を呈している。底面は広く平坦で、床面からの深さは40cmある。上面からは、№３と№４の甕や№10の大形甑と№16・17・20・21などの坏が、倒れこんだような状態で出土している。Ｐ６は、南西側コーナー部に位置する。60cm×44cmの楕円形ぎみの形態で、床面からの深さは10cm程度である。Ｐ７は、カマド左側の壁際に位置する。38cm×30cmの楕円形ぎみの形態で、床面からの深さは10cmある。

カマドは、住居東側壁のほぼ中央に位置し、住居の壁に対して直角に付設されている。規模は、残存する部分で全長116cm・最大幅110cmある。袖は、左右とも幅が35cm前後のしっかりした形態で、燃質ロームブロックを住居の床面上で壁に直接貼り付けて構築している。燃焼部は、住居の壁を掘り込まず、燃焼部の奥壁と住居の壁を一致させる形態で、内面は非常に良く焼けて赤色化している。燃焼面（火床）は、住居の床面上に第３層の暗褐色土を体積させ、その上の第２層を火床にしている。燃焼部内からは、№２と№５の甕が横に並んで出土しており、土器の架け方が本遺跡の他の古墳時代後期の住居跡と同じく２個並置式であったことがわかる。左側の№２の甕の後には、長さ17cmの棒状の自然石を使用した石製の支脚が据えられているが、右側の№５の甕の下には支脚は見られない。なお、№５の甕の中からは№12の埦が出土している。煙道部は、燃焼部より一段高く、住居外に24cm程延びたところでその先は削平されている。

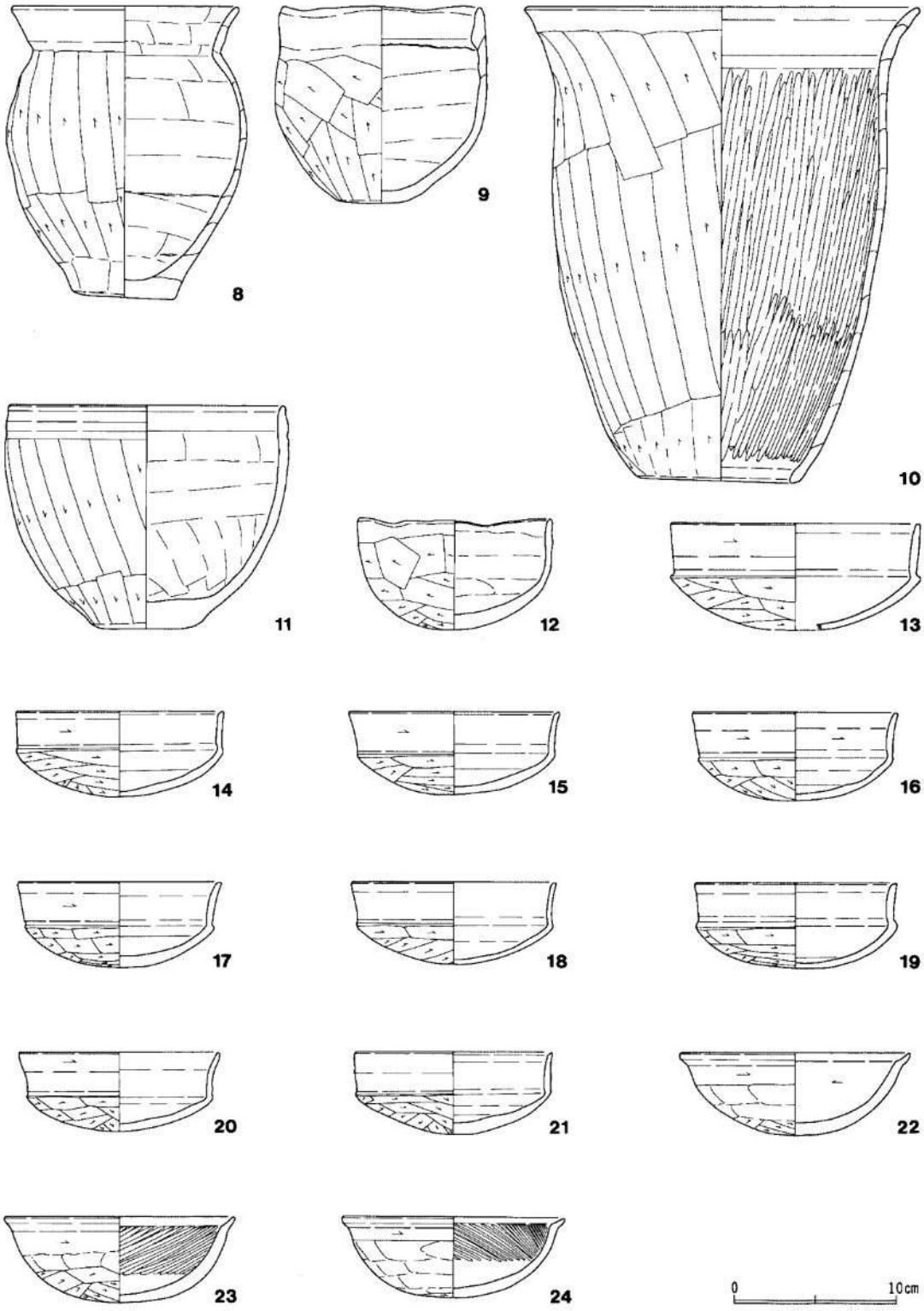
遺物は、カマドや貯蔵穴（Ｐ５）内及びその周辺から、比較的多くの土器が出土している。これらの土器は、その多くが床面上で原形を留めており、その出土状態から見ても住居内で使用されていたものが、住居の廃絶に伴ってそのまま遺棄されたものと推測され、良好な一括資料と言える。土器以外では、住居西側壁の壁際の床面上で、長さ15cm～20cmの棒状の自然石８固が、集めて並べられたような状態で出土しており、いわゆる「編物石」と呼ばれる石の集石の状況と類似している。

第46号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A．口縁部径18.6。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外－暗茶褐色。F．上半のみ。G．床面直上。
2	甕	A．口縁部径16.6、器高30.4、底部径6.9。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケの後ケズリ、その後中位にナデを加える。胴部内面ハケの後中位篦ナデ。底部外面ケズリ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外－明茶褐色。F．ほぼ完形。G．カマド内。
3	甕	A．口縁部径18.2、器高27.1、底部径5.8。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。底部外面ケズリ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外－淡茶褐色。F．ほぼ完形。G．床面付近。H．外面に黒斑あり。
4	甕	A．口縁部径15.7、器高31.1、底部径6.7。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。底部外面ケズリ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外－茶褐色。F．4/5。G．貯蔵穴（Ｐ５）内。H．外面に黒斑あり。



第55図　第46号住居跡出土遺物（１）



第56図　第46号住居跡出土遺物（２）

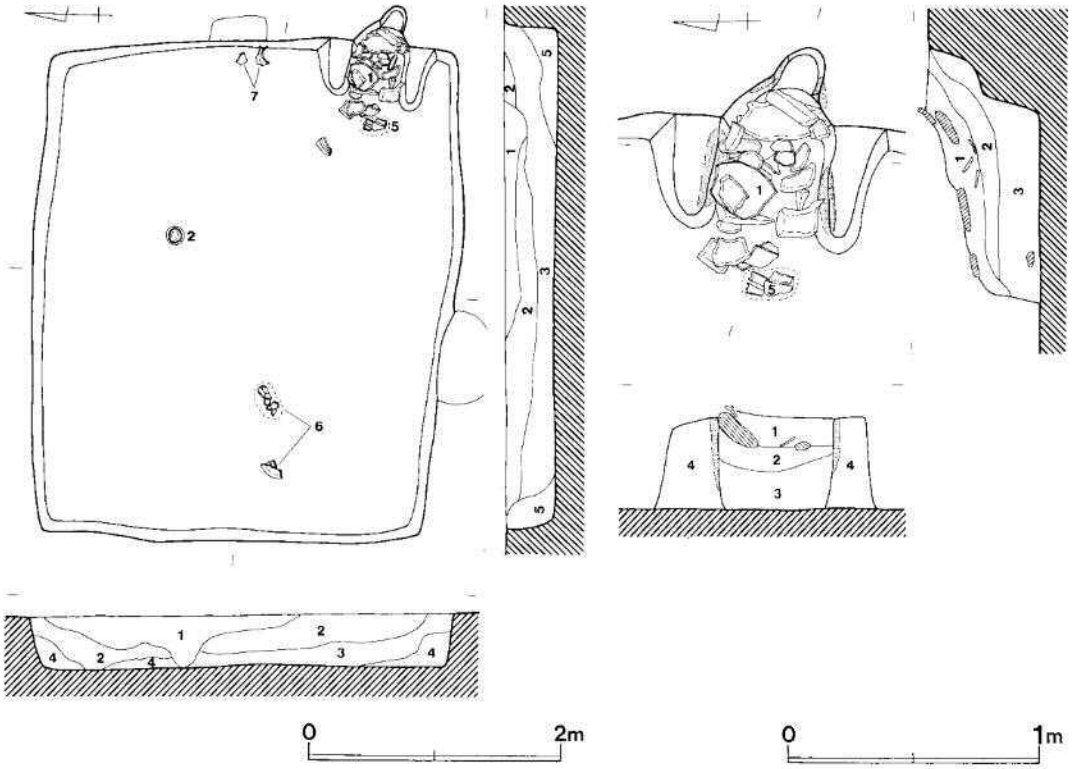
5	甕	A．口縁部径17.4、器高26.4、底部径6.1。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面篦ナデ。底部外面ケズリの後ナデ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外－暗茶褐色。F．ほぼ完形。G．カマド内。H．外面に黒斑あり。
6	甕	A．底部径6.6。B．粘土紐積み上げ成形。C．胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。底部外面ケズリ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外－暗茶褐色。F．底部のみ。G．カマド内。
7	甕	A．底部径7.0。B．粘土紐積み上げ成形。C．胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。底部外面ケズリ。D．片岩粒、白色粒。E．外－淡橙褐色、内－暗灰褐色。F．1/2。G．カマド内。
8	小形甕	A．口縁部径14.0、器高18.1、底部径6.4。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部外面ナデ、内面篦ナデ。胴部外面ケズリの後下端ナデ、内面篦ナデ。底部外面ケズリ。D．片岩粒、白色粒。E．外－明橙褐色、内－暗褐色。F．ほぼ完形。G．覆土中。
9	鉢	A．口縁部径12.2、器高12.2、底部径4.3。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外－淡茶褐色。F．4/5。G．覆土中。
10	大形甑	A．口縁部径24.2、器高29.5、底部径10.1。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後下端ナデ、内面ミガキ。D．片岩粒、赤色粒。E．外－明茶褐色、内－茶褐色。F．ほぼ完形。G．貯蔵穴（P５）内。H．外面に黒斑あり。
11	鉢	A．口縁部径16.8、器高13.9、底部径6.9。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。底部外面ナデ。D．片岩粒、白色粒。E．内外－暗茶褐色。F．1/2。G．貯蔵穴（P５）内。
12	椀	A．口縁部径12.0、器高6.9。C．口縁部内外面ナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D．片岩粒、白色粒。E．内外－淡褐色。F．完形。G．カマド内（No５の甕の中）。
13	坏	A．口縁部径15.4、器高6.6。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－明茶褐色。F．1/2。G．床面直上。
14	坏	A．口縁部径12.8、器高5.3。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－明茶褐色。F．完形。G．床面直上。H．体部外面に黒斑あり。
15	坏	A．口縁部径13.0、器高5.1。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－淡橙褐色。F．ほぼ完形。G．床面直上。
16	坏	A．口縁部径12.6、器高5.6。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－明茶褐色。F．ほぼ完形。G．貯蔵穴（P５）内。
17	坏	A．口縁部径12.6、器高5.3。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－明茶褐色。F．完形。G．貯蔵穴（P５）内。
18	坏	A．口縁部径12.6、器高5.1。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外－明橙褐色。F．完形。G．カマド内。H．外面に黒斑あり。
19	坏	A．口縁部径12.4、器高5.3。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．外－淡茶褐色、内－明茶褐色。F．ほぼ完形。G．床面直上。H．体部外面に黒斑あり。
20	坏	A．口縁部径12.4、器高4.9。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外－明橙褐色。F．ほぼ完形。G．貯蔵穴（P５）内。
21	坏	A．口縁部径12.2、器高5.1。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－淡茶褐色。F．完形。G．貯蔵穴（P５）内。
22	坏	A．口縁部径14.2、器高5.1。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリの後上半ナデ、内面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－明茶褐色。F．ほぼ完形。G．カマド内。
23	坏	A．口縁部径14.2、器高5.3。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリの後中位ナデ、内面ナデの後暗文風の斜方向のミガキ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－明茶褐色。F．ほぼ完形。G．床面直上。H．体部外面に黒斑あり。
24	坏	A．口縁部径13.8、器高5.0。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリの後上半ナデ、内面ナデの後暗文風の斜方向のミガキ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－茶褐色。F．ほぼ完形。G．カマド内。

第47号住居跡（第57図、図版31）

調査区の東端に位置し、西側約15mには第32号住居跡が、南西側約7mには第2号掘立柱建物跡がある。遺構の遺存状態は、比較的良好である。

平面形は、比較的整った長方形を呈している。規模は、東西方向が4.02m、南北方向が3.42mを測る。住居の主軸方向は、N—92°—Eを向いている。

壁は、やや傾斜しながら直線的に立ち上がり、確認面からの深さは最高で49cmある。各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、地山粘質ロームのブロックを埋め戻した貼床式で、住居の中央部は比較的堅くしまっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。



第57図　第47号住居跡

第47号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層（礫を多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第2層：暗茶褐色土層（小礫・ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第3層：暗褐色土層（小礫を均一に、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第4層：暗茶褐色土層（小礫を多量に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第5層：暗褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

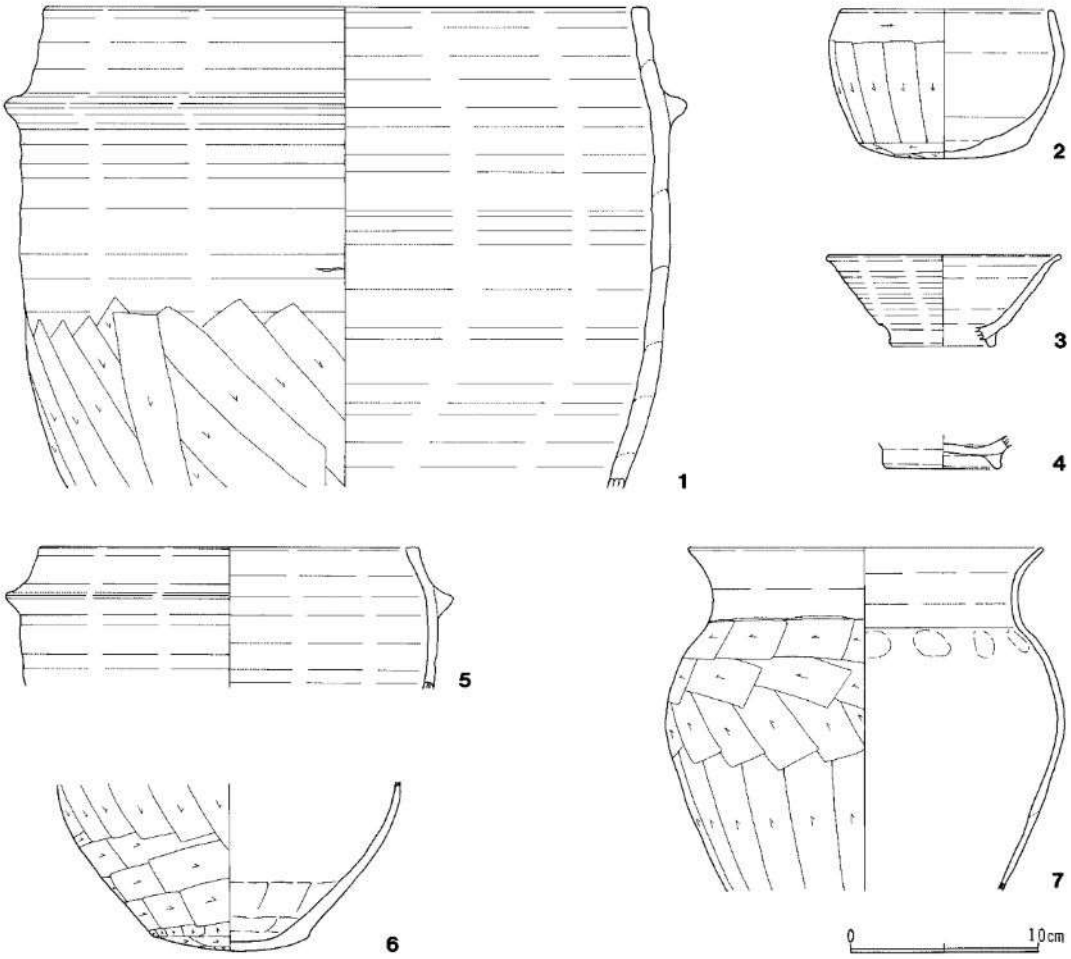
第47号住居跡カマド土層説明

第1層：暗褐色土層（焼土粒子・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第2層：暗赤褐色土層（焼土ブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第3層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第4層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に、小石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

ピットは、住居跡内からまったく検出されなかった。

カマドは、住居の東側壁の南側に寄った南東側コーナー部付近に位置し、壁に対して若干斜めに付設されている。本住居跡のカマドは，該期のカマドとしてはやや珍しく、燃焼部の大半が住居内にあり、しっかりした袖をもっている。袖は、左右とも幅20cm～25cmの整った形態で、粘質ロームのブロックを住居の床面上で壁に直接貼り付けて構築している。燃焼部は、住居の壁を若干掘り込んでいるが、その大半は住居内にある。内側は、比較的良く焼けて赤色化している。燃焼面（火床）は、住居の床面とほぼ同じ高さで、水平に作られている。支脚の痕跡は見られない。燃焼部内からは、比較的大きな自然石が多く出土している。これらはすでに崩れているが、袖や燃焼部などカマドの補強に使用されていたものと推測される。

遺物は比較的少なく、カマド内や住居の覆土中から、土器が出土しただけである。この中で覆土中から出土した№.6 と№.7 の甕は、本住居跡の他の土器よりも古い時期のものであり、本住居跡に伴うものではない。



第58図　第47号住居跡出土遺物

第47号住居跡出土遺物観察表

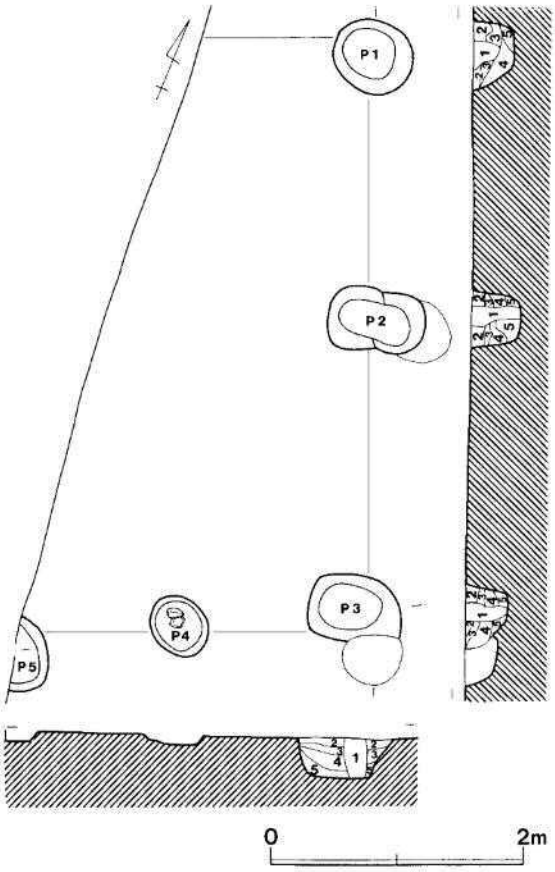
1	大形甕	A．口縁部径（31.8）、残存高25.5。B．粘土紐積み上げ成形。鍔貼り付け。C．内外面回転ナデの後、胴部下半ケズリ。D．片岩粒、赤色粒。E．内外－暗茶褐色。F．1/5。G．カマド内。
2	鉢	A．口縁部径11.5、器高7.9、底部径9.0。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外－明茶褐色。F．完形。G．覆土中。
3	高台付坏	A．口縁部径（12.4）、器高4.9、底部径（5.6）。B．ロクロ成形。高台部貼り付け。C．体部及び高台部内外面回転ナデ。D．白色粒。E．内外－淡白色。F．1/5。G．覆土中。
4	高台付	A．高台部径6.2。B．ロクロ成形。高台部貼り付け。C．高台部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切りの後ナデ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外－暗橙褐色。F．高台部のみ。G．覆土中。
5	羽　釜	A．口縁部径（20.0）。B．粘土紐積み上げ成形。鍔貼り付け。C．内外面回転ナデ。D．片岩粒、赤色粒。E．内外－明茶褐色。F．1/4。G．覆土中。
6	甕	A．底部径8.2。B．粘土紐積み上げ成形。C．胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D．片岩粒、白色粒。E．内外－明茶褐色。F．1/3。G．覆土中。H．外面に黒斑あり。
7	甕	A．口縁部径（18.8）、残存高18.3。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D．白色粒。E．内外－明茶褐色。F．1/3。G．覆土中。

2．掘立柱建物跡

第１号掘立柱建物跡（第59図、図版32）

調査区の西端に位置し、東側約３mには第２号掘立柱建物跡が、南東側約７mには第27号住居跡がある。調査区内で検出されたのは、建物跡の東端部の側柱穴だけであるため、本建物跡の全容は不明である。

建物跡の形態は、東西方向は不明であるが、南北方向は２間で、長さが4.40mを測る。建物



第59図　第１号掘立柱建物跡

第１号掘立柱建物跡土層説明

第１層：黒褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第２層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第３層：黒褐色土層（ローム粒子・白色粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第４層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第５層：黒褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。
第６層：暗褐色土層（ローム粒子・白色粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第７層：黒褐色土層（焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

跡の南北方向は、N－25°－Wを向いている。

柱心間は、P１～P３の南北方向はほぼ2.20mの等間隔である。東西方向については、P４とP５が本建物跡の柱穴として捉えられるか明確ではないが、一応P３～P５はほぼ70cmの等間隔になっている。

柱穴は、長さ60cm～70cmの円形か楕円形を呈している。確認面からの深さは、東西方向のP１～P３がいずれも35cm前後で揃っているが、南北方向のP４とP５はいずれも10cm程度でかなり浅くなっている。

柱穴覆土は、南北方向のP１～P３については、いずれも直径15cm程度の円形の柱痕（第１層）を持ち、黒褐色土（第３・５層）とロームブロックを含む暗黄褐色土（第２・４層）の互層によって、版築状に埋められている。

遺物は、柱穴覆土中から、７世紀後半～９世紀頃の土器片が数片出土しただけである。

第２号掘立柱建物跡（第60図、図版32）

調査区の南東側に位置し、北東側約７mには第47号住居跡が、北西側約5.5mには第32号住居跡がある。本建物跡は、第29号住居跡や第10号土壙と重複し、それらを切っている。

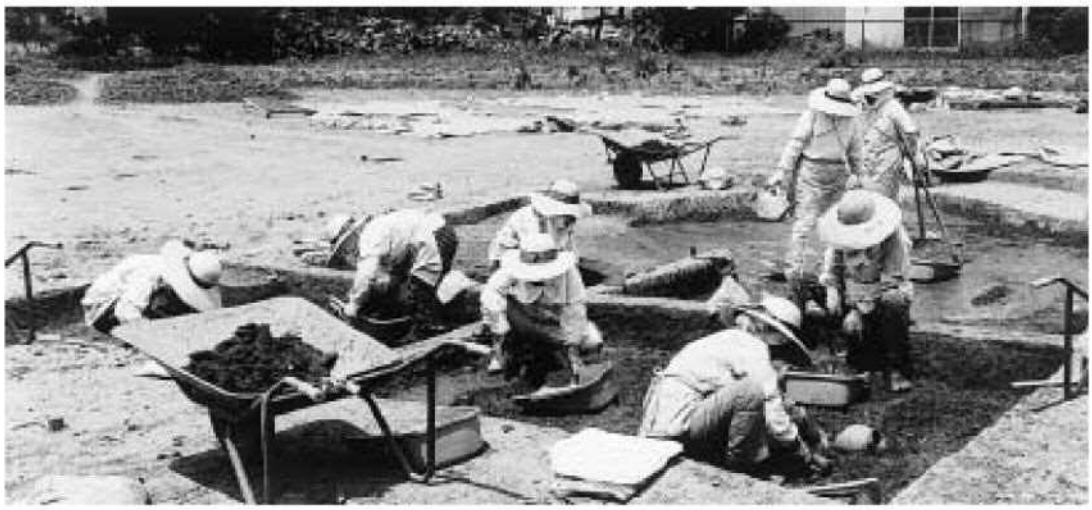
建物跡の形態は、南北方向が３間・東西方向が２間の南北に長い長方形を呈する側柱式である。規模は、梁行側が4.60m・桁行側が6.60mを測る。建物の南北方向は、N－10°－Eを向いている。

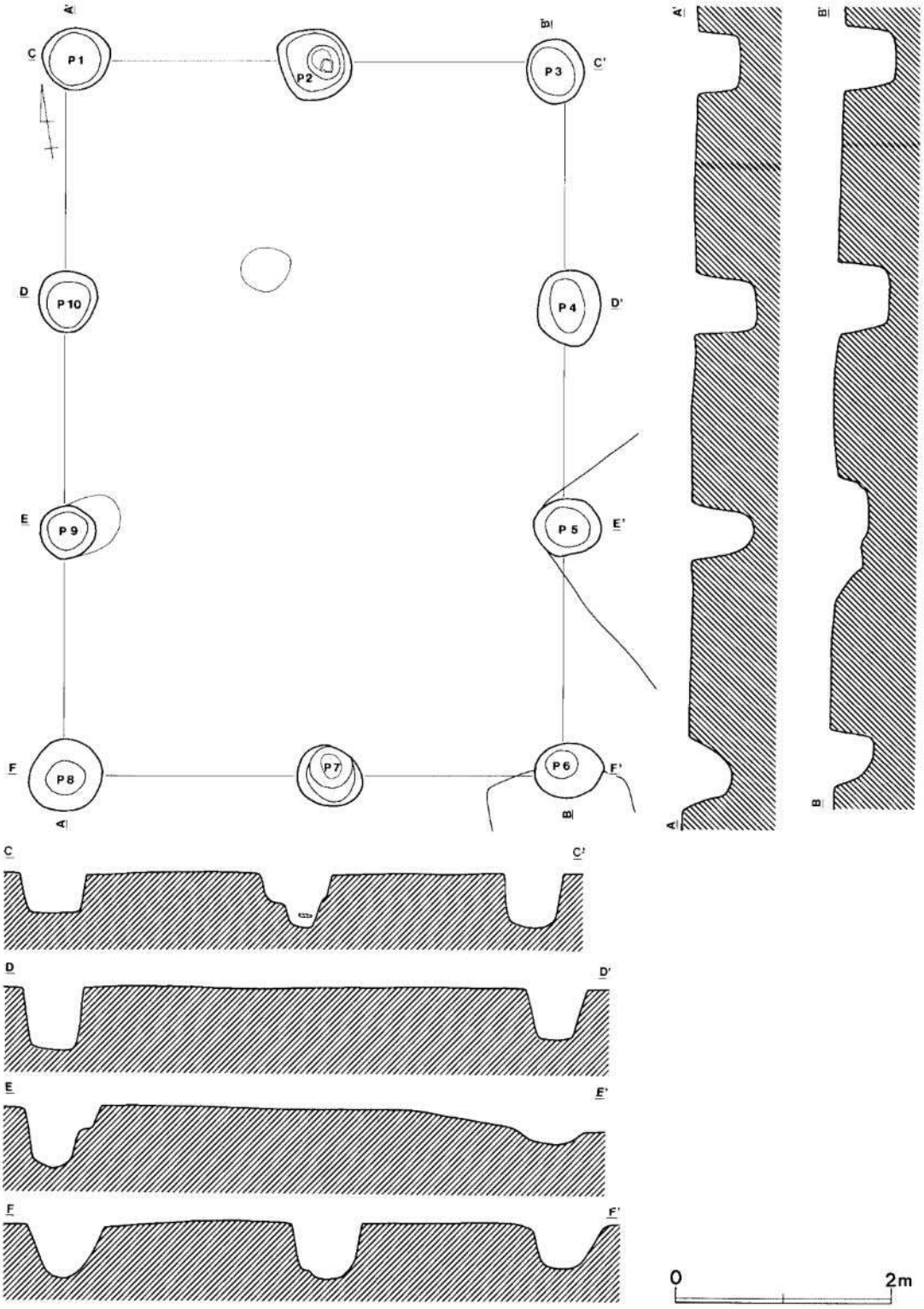
柱心間は、南北方向が2.20mの等間隔で、東西方向が2.30mの等間隔である。柱通りは、東西・南北とも比較的良い。

柱穴は、長さ50cm～70cmの円形か楕円形を呈し、確認面からの深さは35cm～60cmある。棟持柱のP２とP７は、他の側柱穴と違って２段に掘り込まれている。

柱穴覆土は、ロームブロック・ローム粒子・焼度粒子を微量含む暗褐色土で、いずれの柱穴も柱痕は見られない。

遺物は、柱穴覆土中から、平安時代を主体とする土器の破片が少量出土しただけである。





第60図　第２号掘立柱建物跡

第３号掘立柱建物跡（第61図、図版33）

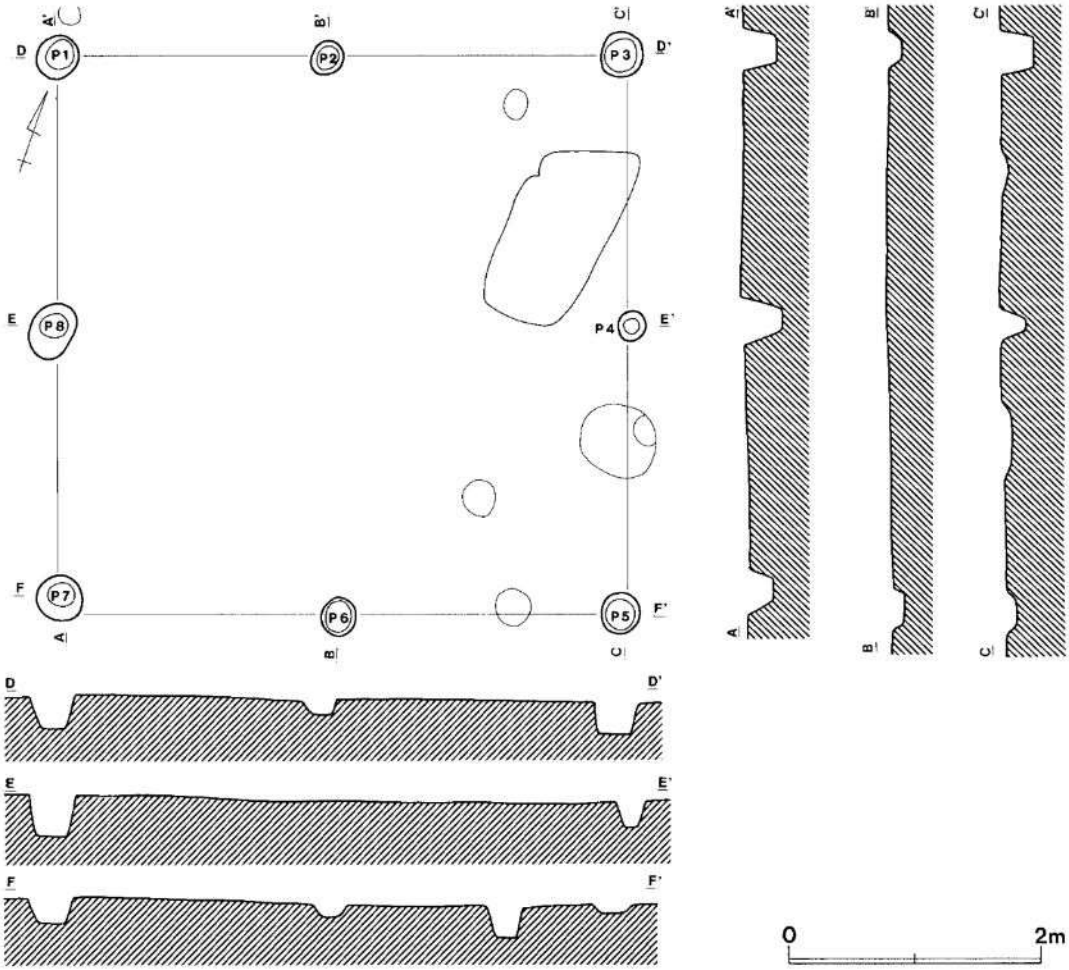
調査区の西側に位置し、西側約３ｍには第１号掘立柱建物跡が、南側約９ｍには第27号住居跡がある。本建物跡は、第７号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。

建物跡の形態は、東西・南北方向とも２間の方形を呈する側柱式のようで、真ん中に束柱の柱穴は見られない。規模は、東西・南北方向とも4.40mを測る。建物の南北方向は、N―18°－Wを向いている。

柱心間は、東西・南北方向とも１間が2.20mの等間隔である。柱通りは、各側柱穴列とも比較的良い。

柱穴は、直径25cm～38cmの円形を呈しているが、建物の各壁の中間に位置する柱穴に比べて、建物のコーナー部に位置する柱穴の方が、やや規模が大きい傾向が窺える。確認面からの深さは、10cm～30cmある。

柱穴覆土は、ローム粒や白色粒子を含む黒褐色土である。遺物は、何も出土しなかった。



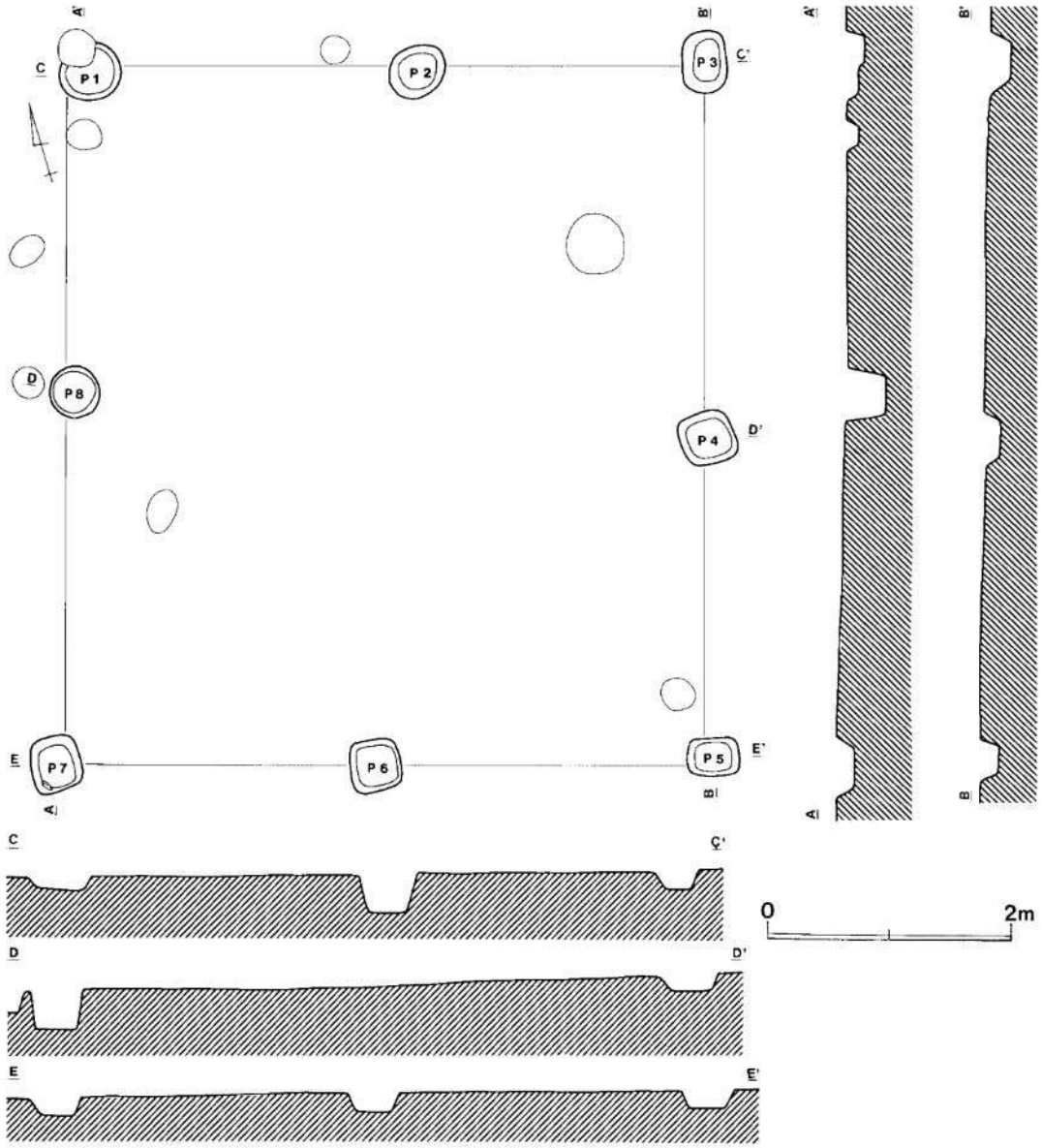
第61図　第３号掘立柱建物跡

第４号掘立柱建物跡（第62図、図版33）

調査区の北側に位置し、北側約２ｍには第40号住居跡が、北西側約2.5mには第35号住居跡が、南側約５ｍには第30号住居跡がある。

建物跡の形態は、東西･南北方向とも２間の方形を呈する側柱式である。規模は、南北方向が5.60ｍ、東西方向が5.20mを測る。建物の南北方向は、N―16°―Eを向いている。

柱心間は、南北方向が１間2.80m、東西方向が１間2.60mのほぼ等間隔である。柱通りは、各側柱穴列とも比較的良いが、中間柱の柱穴の対応関係は東西・南北方向ともやや悪い。



第62図　第４号掘立柱建物跡

柱穴は、長さ42cm～50cmの円形や四角形を呈している。確認面からの深さは、10cm～35cmあるが、15cm前後のものが大半である。

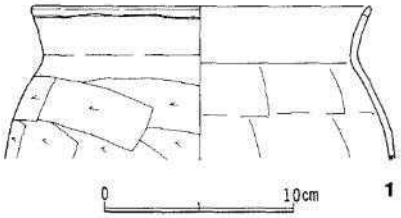
柱穴覆土は、ローム粒子や炭化粒子を含む暗褐色土である。遺物は、何も出土しなかった。

3．土　　壙

第４号土壙（第65図、図版34）

調査区の北西側に位置し、東側には第５号土壙が近接している。本土壙は、すでに西側半分が掘削によって破壊されているため、全容は不明である。平面形は、残存する部分から推測すると、円形に近い形態を呈していたものと思われる。規模は、南北方向が78cmあり、東西方向は47cmまで測れる。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは最高で20cmある。底面は広く、やや丸みを持っている。土壙内からは直径10cm程度の円形を呈する小ピットが３箇所検出されているが、これらは本土壙に伴うものではなく、後世の攪乱である。覆土は、黒褐色土の単一層で、焼土粒子や炭化粒子を多量に含んでいる。遺物は、覆土中より土器の破片が少量出土しただけである。

本土壙の時期は、覆土の状態や出土遺物から、８世紀後半頃と推測される。



第63図　第４号土壙出土遺物

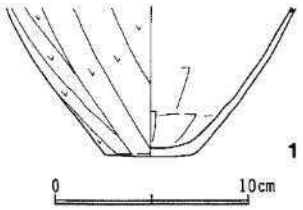
第４号土壙出土遺物観察表

1	甕	A．口縁部18.0。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－明茶褐色。F．1/2。G．覆土中。

第５号土壙（第65図、図版34）

調査区の北西側に位置し、西側には第４号土壙が近接している。平面形は、コーナー部の丸みが強い不整の四角形のような形態である。規模は、北西から南東方向が100cm、北東から南西方向が98cmある。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは最高で８cmある。底面は、広く平坦である。覆土は、暗褐色土を主体とし、焼土粒子や炭化粒子を均一に含んでいる。遺物は、底面付近より土器の破片が比較的多く出土している。

時期は、覆土の状態や出土遺物から、９世紀頃と推測される。



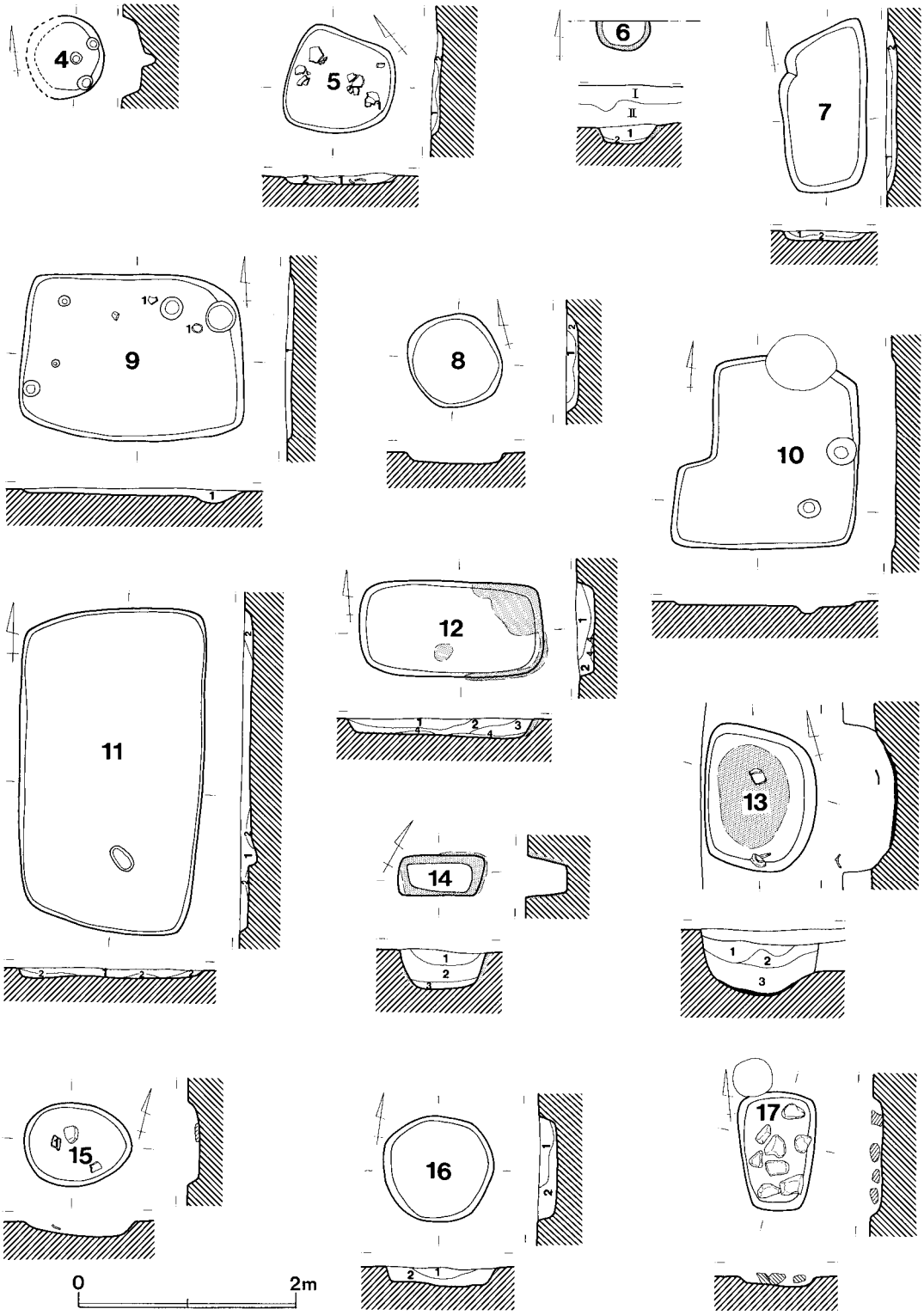
第64図　第５号土壙出土遺物

第５号土壙出土遺物観察表

1	甕	A．底部部4.6。B．粘土紐積み上げ成形。C．胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－淡茶褐色。F．胴部下半～底部のみ。G．床面付近。

第６号土壙（第65図、図版35）

調査区の北端に位置し、重複する第44号住居跡の上にのっている。遺構の北側半分は調査区外の



第65図　土　　壙

第５号土壙土層説明
第１層：暗褐色土層（焼土粒子・炭化粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第２層：暗茶褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第６号土壙土層説明
第Ⅰ層：現耕作土。
第Ⅱ層：氾濫土。
第１層：黒褐色土層（小石・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第２層：黒褐色土層（焼土粒子・炭化粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第７号土壙土層説明
第１層：暗褐色土層（焼土粒子・白色粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第２層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第８号土壙土層説明
第１層：暗褐色土層（白色火山灰粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第２層：黒褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第９号土壙土層説明
第１層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第11号土壙土層説明
第１層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第２層：暗茶褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第12号土壙土層説明
第１層：暗褐色土層（焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第２層：黒褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第３層：暗褐色土層（焼土粒子・炭化粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第４層：暗赤褐色土層（焼土粒子を多量に、炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第13号土壙土層説明
第１層：暗褐色土層（白色粒子・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第２層：暗茶褐色土層（ロームブロックを均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第３層：暗茶褐色土層（焼土粒子・炭化粒子を均一に、ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第14号土壙土層説明
第１層：暗褐色土層（焼土粒子・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第２層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第３層：黒褐色土層（炭化粒子を多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第16号土壙土層説明
第１層：暗褐色土層（Ｂ軽石を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第２層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、Ｂ軽石・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

ため、本土壙の全容は不明である。平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、円形か楕円形を呈するものと思われる。規模は、東西方向が50cmあり、南北方向は28cmまで測れる。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは18cmある。底面は、広く平坦である。本土壙の壁面は、焼けて赤色化しており、土壙内で火を焚いていたことが窺える。遺物は、覆土中より土器の小破片が数片出土しただけである。

時期は、遺構の重複関係や覆土の状態から、９世紀後半以降と考えられる。

第７号土壙（第65図、図版35）

調査区の西側に位置する。第３号掘立柱建物跡と重複しているが、相互の新旧関係は不明である。遺構の遺存状態は、あまり良好とは言えない。

平面形は、コーナー部の丸みが強い長方形を基調としているが、北側の壁がかなり斜めに歪んだ形態である。規模は、南北方向が152cm、東西方向が84cmを測る。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは最高で９cmある。底面は、広く平坦である。覆土は、暗褐色土を主体とし、遺物は何も出土しなかった。

本土壙の時期は、遺物が何も出土していないため、不明である。

第８号土壙（第65図、図版36）

調査区の西側に位置する。遺構の遺存状態は、あまり良好とは言えない。

平面形は、直径88cmの円形ぎみの形態を呈している。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは最高で12cmある。底面は、広く平坦である。覆土は、暗褐色土を主体し、Ｂ軽石を含んでいる。遺物は、土師器や須恵器の破片が少量しただけである。

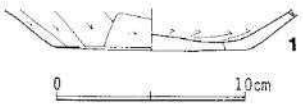
本土壙の時期は、覆土の状態から中世以降と推測される。

第９号土壙（第65図、図版36）

調査区の南側に位置し、北側約１ｍには第２号掘立柱建物跡が、東側約１ｍには第10号土壙が近接している。遺構の遺存状態は、あまり良好とは言えない。

平面形は、コーナー部の丸みが強い長方形を呈している。規模は、東西方向が208cm、南北方向が156cmを測る。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは最高で10cmある。底面は、広く平坦である。土壙内からは、小ピットが５箇所検出されているが、本土壙に伴うものか不明である。覆土は、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含む暗褐色土を主体にしている。遺物は、土器の破片が少量出土しただけである。

本土壙の時期は、覆土の状態や出土遺物より、古代（９世紀以前）の所産と推測される。



第66図　第９号土壙出土遺物

第９号土壙出土遺物観察表

1	鉢	A．底部径（10.2）。B．粘土紐積み上げ成形。C．胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D．片岩粒、白色粒。E．外ー暗赤褐色、内ー黒褐色。F．1/3。G．底面付近。H．底部外面は、二次焼成を受けて荒れている。

第10号土壙（第65図、図版37）

調査区の南側に位置し、西側約１ｍには第９号土壙が近接している。第２号掘立柱建物跡と重複しており、その柱穴（Ｐ６）によって、土壙の北側壁の一部を切られている。遺構の遺存状態は、

あまり良好とは言えない。

平面形は、若干コーナー部が丸みをもつ長方形を基調とするが、土壙の南西側コーナー部は、四角く張り出している。規模は、南北方向が180cm、東西方向が168cmを測る。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは最高で７cmある。底面は、広く平坦である。土壙内からは、小ピットが２箇所検出されているが、本土壙に伴うものか不明である。覆土は、第９号土壙と類似した暗褐色土を主体にしている。遺物は、土器の破片が少量出土しただけである。

本土壙の時期は、覆土の状態や出土遺物より、古代（９世紀以前）の所産と推測される。

第11号土壙（第65図、図版37）

調査区中央部の東側寄りに位置し、南側約２mには第２号掘立柱建物跡がある。遺構の遺存状態は、あまり良好とは言えない。

平面形は、コーナー部の丸みが強く、東側壁に比べて西側壁が短いやや台形ぎみの長方形を呈している。規模は、南北方向が302cm、東西方向が172cmを測る。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは最高で10cmある。底面は、広く平坦である。覆土は、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含む暗褐色土を主体にしている。遺物は、土器の破片が少量出土しただけである。

本土壙の時期は、覆土の状態や出土遺物より、古代（９世紀以前）の所産と推測される。

第12号土壙（第65図、図版38）

調査区中央部のやや北側寄りに位置し、西側約２mには第38号住居跡がある。遺構の遺存状態は、比較的良好な方である。

平面形は、コーナー部の丸みが強い比較的整った長方形を呈している。規模は、東西方向が170cm、南北方向が90cmを測る。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で19cmある。底面は、広く平坦である。覆土中には焼土粒子を多量に含み、また土壙底面が焼けて部分的に赤色化していることから、本土壙内で火を焚く行為が行われていたことが窺える。遺物は、土器の破片が少量出土しただけである。

本土壙の時期は、覆土の状態や出土遺物より、９世紀頃と推測される。

第13号土壙（第65図、図版38）

調査区の北側に位置し、西側には第４号土壙と第５号土壙がある。第35号住居跡と重複しており、その覆土中から切り込んでいる。遺構の遺存状態は、比較的良好である。

平面形は、コーナー部の丸みが強いやや不整の長方形ぎみの形態である。規模は、南北方向が134cm、東西方向が104cmを測る。壁は、緩やかに立ち上がり、深さは45cmある。底面は、広くやや丸みを持つ。覆土中には焼土粒子や炭化粒子を含み、底面上には炭化粒子の被覆が見られる。遺物は、何も出土しなかった。

本土壙の時期は、覆土の状態や遺構の重複関係から、10世紀以降の所産と推測される。

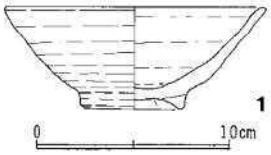
第14号土壙（第65図、図版39）

調査区の北東側に位置し、重複する第45号住居跡の覆土上面に形成されている。遺構の遺存状態は、比較的良好である。

平面形は、やや歪んだ長方形を呈している。規模は、南西から北東方向が80cm、北西から南東方向が40cmを測る。壁は、やや傾斜して直線的に立ち上がり、確認面からの深さは最高で33cmある。底面は、広く平坦である。底面直上の第３層には炭化粒子が多量に見られ、土壙の各壁面が非常に良く焼けて赤色化していることから、本土壙内で火を使用した行為が行われていたことが窺える。

遺物は、覆土中から完形に近い高台付坏が１点出土している。内面に黒斑をもつ酸化煙焼成の土器であるが、二次焼成を受けた形跡は見られない。

本土壙の時期は、覆土の状態や遺構の重複関係及び出土遺物より、10世紀頃の所産と考えられる。



第67図　第14号土壙出土遺物

第14号土壙出土遺物観察表

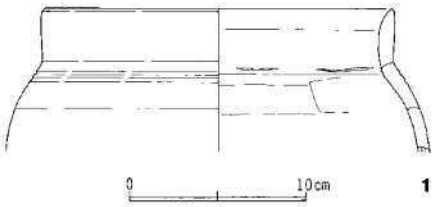
1	高台付坏	A．底部径13.6、器高5.3、高台部径5.3。B．ロクロ成形。高台部貼り付け。C．体部及び高台部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外ー淡茶褐色。F．ほぼ完形。G．覆土中。H．内面に黒斑あり。

第15号土壙（第65図、図版39）

調査区の東側に位置し、西側約１mには第37号住居跡がある。遺構の遺存状態は、あまり良好とは言えない。

平面形は、楕円形ぎみの形態を呈している。規模は、東西方向が100cm、南北方向が78cmを測る。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは15cmある。底面は、広く平坦である。覆土は、ローム粒子を含む暗褐色土である。遺物は、土器や灰釉陶器碗の破片が少量出土しただけである。

本土壙の時期は、覆土の状態や出土遺物から10世紀以降頃の所産と考えられる。



第68図　第15号土壙出土遺物

第15号土壙出土遺物観察表

1	甕	A．底部径（20.0）。B．粘土紐積み上げ成形。C．口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面箆ナデ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外ー淡褐色。F．1/5。G．底面付近。

第16号土壙（第65図、図版40）

調査区の北側に位置し、北側約1.5mには第45号住居跡が、南側約１mには第４号掘立柱建物跡がある。遺構の遺存状態は、あまり良好とは言えない。

平面形は、円形ぎみの形態を呈している。規模は、南北方向が103cm、東西方向が98cmを測る。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは20cmある。底面は、広く平坦である。覆土は、Ｂ軽石を含む暗褐色土を主体にしている。遺物は、土器の破片が少量出土しただけである。

本土壙の時期は、覆土中にＢ軽石を含むことから、中世以降の所産と考えられる。

第17号土壙（第65図、図版40）

調査区の南東側に位置し、東側約１ｍには第46号住居跡が、西側約２ｍには第29号住居跡がある。遺構の遺存状態は、あまり良好とは言えない。

平面形は、コーナー部の丸みが強く南北方向に長い台形ぎみの形態を呈している。規模は、南北方向が110cm、東西方向が72cmを測る。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは10cm程度である。底面は広く平坦である。底面上からは、長さ20cm前後の自然石が８個出土しているが、意図的に配列されたような状況は窺えない。覆土は、Ｂ軽石を含む暗褐色土である。遺物は、何も出土しなかった。

本土壙の時期は、覆土中にＢ軽石を含むことから、中世以降の所産と考えられる。

４．溝　　跡

第２号溝跡（第69図）

調査区の南端に位置し、調査区内ではほぼ東西方向に向いて直線的な流路をとっている。溝跡の東端部は途切れており、西端部は調査区外に延びている。形態は、上幅が35cm～50cmの比較的均一な幅で、断面は逆台形を呈している。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは10cm程度であるが、調査区南側壁での土層観察では36cmある。底面は、広く平坦である。覆土は、ローム粒子や小石を含む暗褐色土を主体とするが、流水の痕跡は見られない。遺物は、土器の破片が少量出土しただけである。

本溝跡の時期は、不明である。

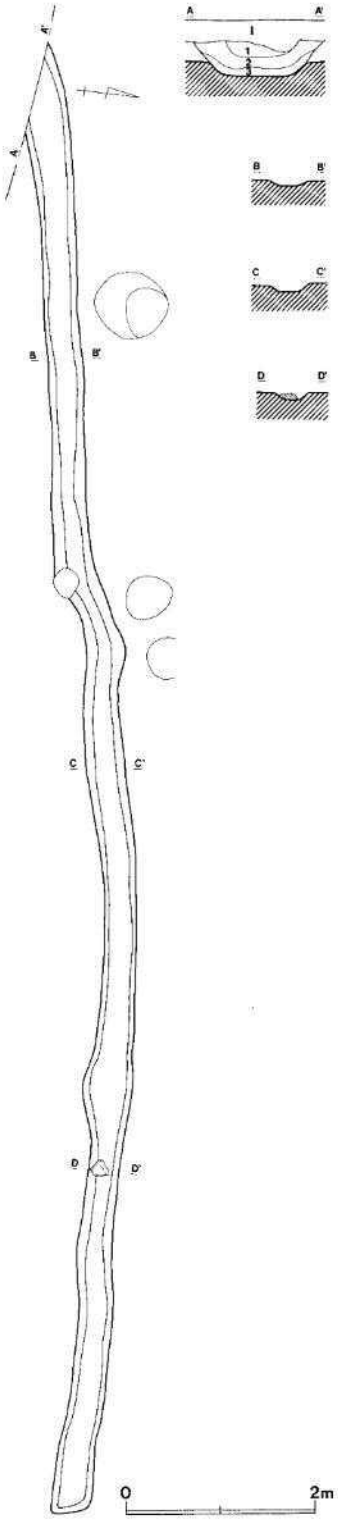
第２号溝跡土層説明

第Ｉ層：現耕作土。

第１層：暗褐色土層（ローム粒子・炭化粒子・小石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

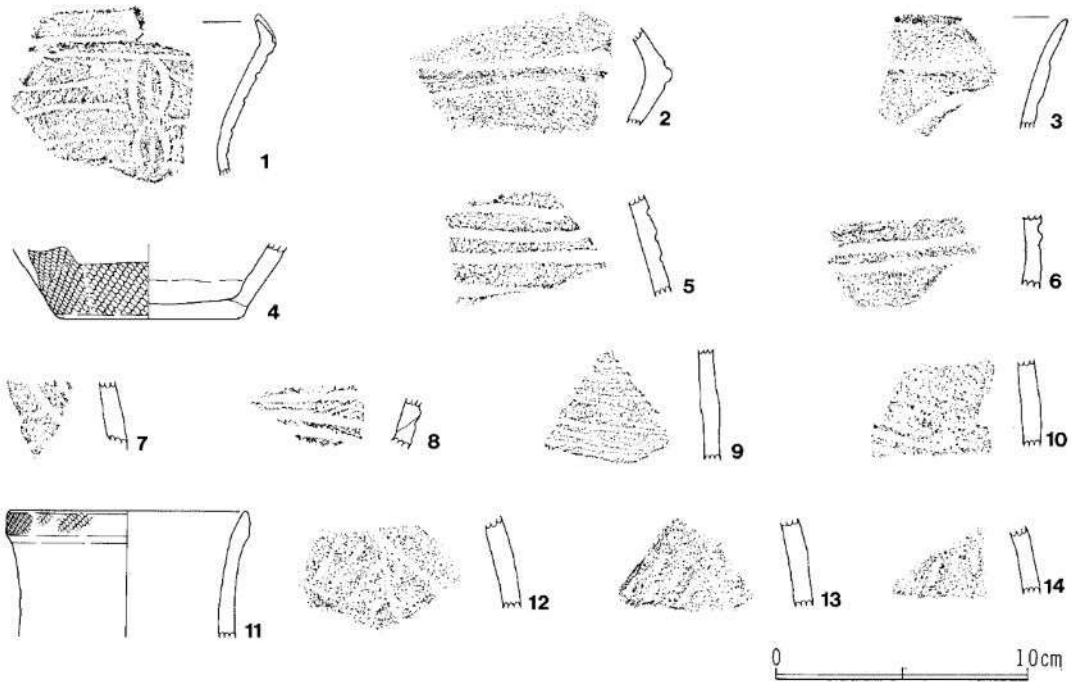
第２層：暗褐色土層（ローム粒子・小石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第３層：暗褐色土層（ローム粒子・小石・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）



第69図　第２号溝跡

５．Ｂ地点出土の縄文・弥生時代の遺物



第70図　Ｂ地点出土の縄文・弥生土器

Ｂ地点出土の縄文時代の石器

Ⅴ．ま　　と　　め

大久保遺跡のＢ地点からは、古墳時代後期（６世紀）から平安時代中期（10世紀）までの遺構や遺物が検出されている。このＢ地点の調査範囲は、本遺跡全体の面積からすると５％程度にすぎないため、その内容が本遺跡の様相をどの程度反映しているかはなはだ心もとないが、ここではこのＢ地点から出土した土器の様相と遺構の変遷を時期的に概観して、本書のまとめとしたい。

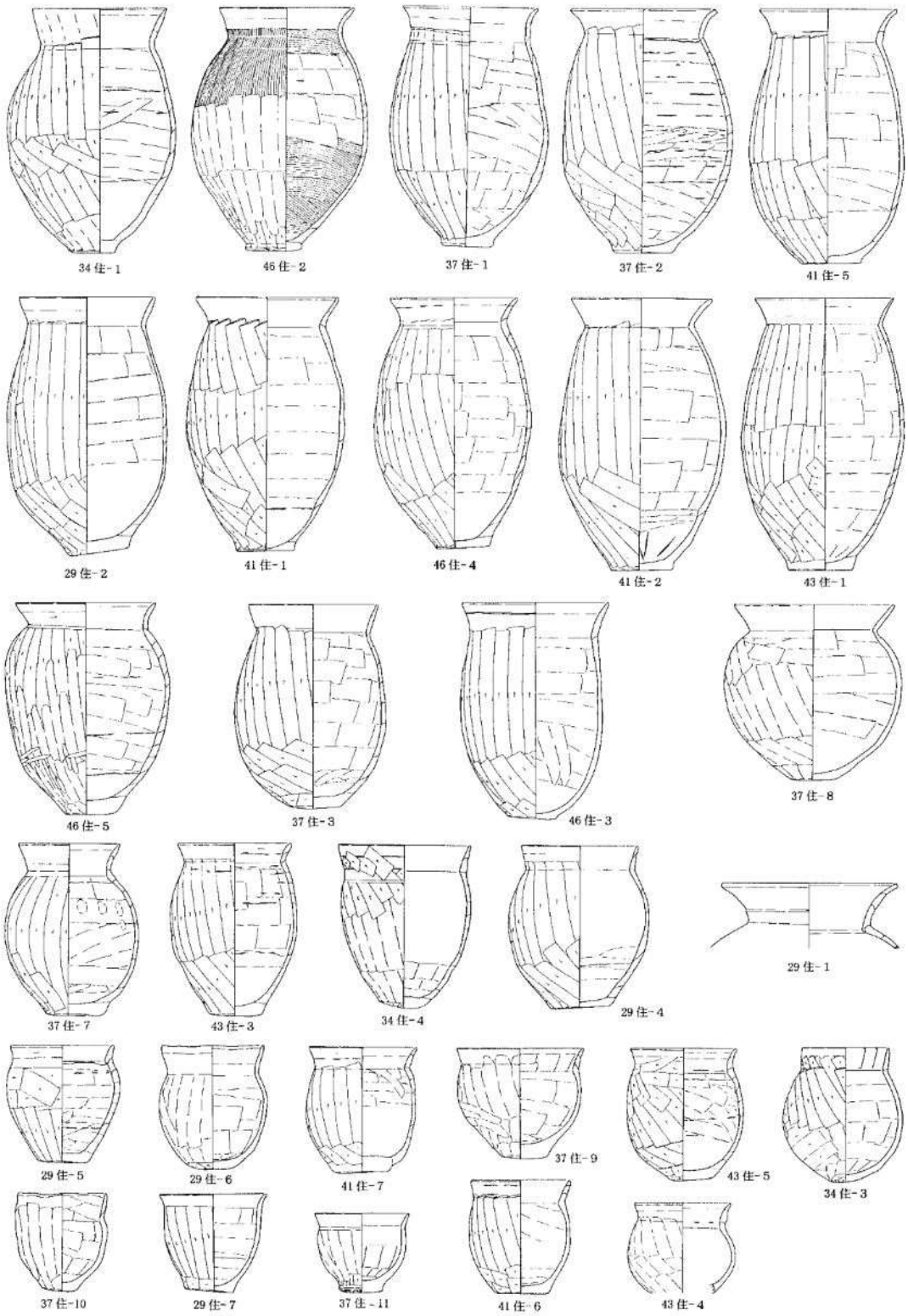
１．出土土器の様相

Ｂ地点の調査区内からは、縄文時代後期や弥生時代中期の土器片もごく少量出土しているが、大半は竪穴式住居跡や土壙から出土した、古墳時代後期（６世紀）から平安時代中期（10世紀）までの土器である。これらの土器は、概ね500年間の比較的長期にわたるものであるが、連綿と連続するものではなく、いくつかの時期的な断絶が見られる。ここでは、Ｂ地点出土のこれらの土器群を大雑把に第Ⅰ期～第Ⅸ期に分けて各時期の様相を概観したい。

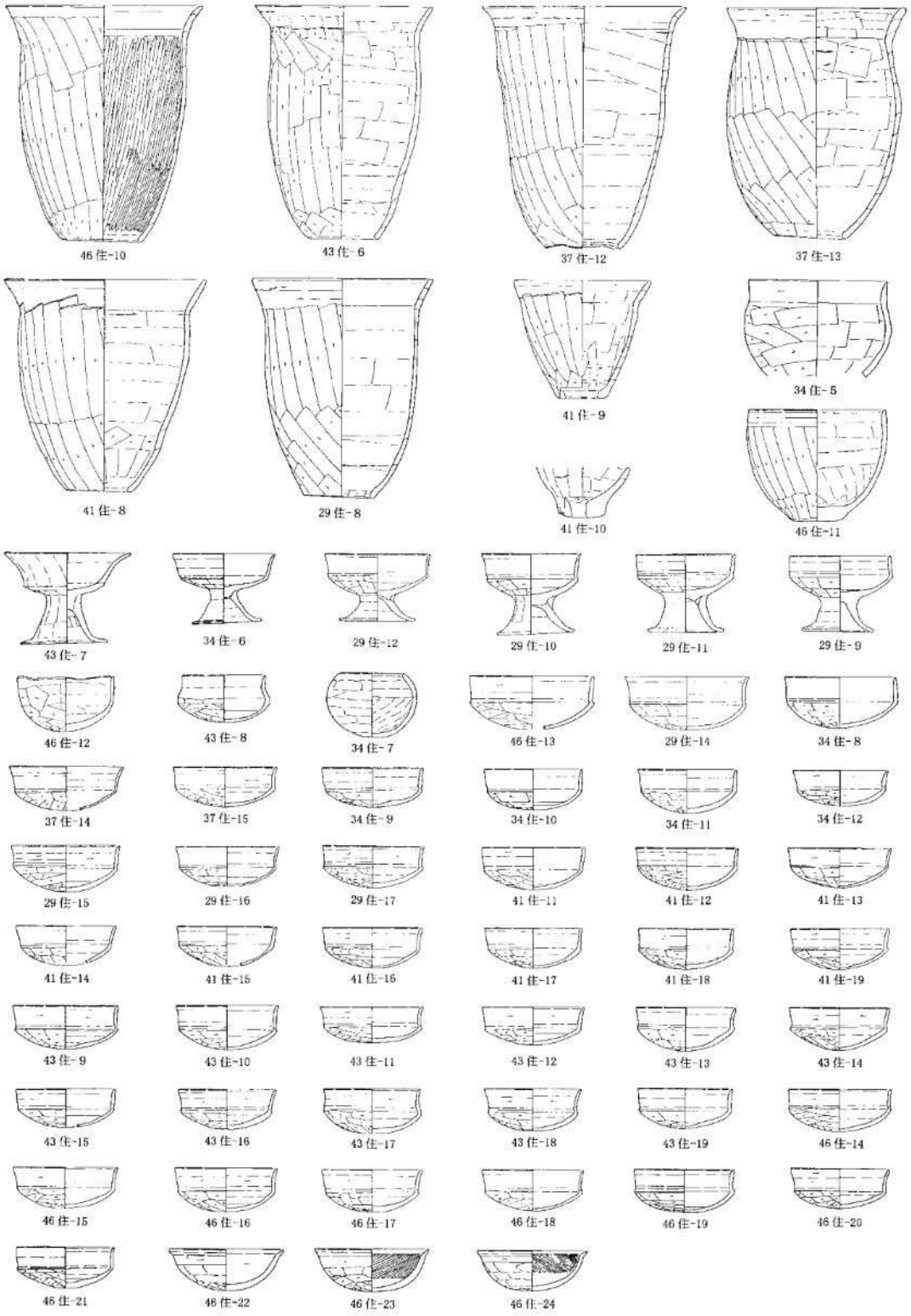
第Ⅰ期（第71・72図）

古墳時代後期の６世紀前半でも中頃に近い土器群で、第29・34・37・41・43・46号住居跡出土土器のすべてが該当する。これらの住居跡は、いずれも相互に重複していないが、調査区南東隅に位置する第29号住居跡と第46号住居跡はその位置がやや接近しすぎていることから、あるいは２時期に分かれる可能性もあるが、出土土器の様相からは細別は困難なように思える。

土器は、土師器の壷・甕・小形甕・鉢・甑・高坏・坏・椀・小形短頸壷・小形無頸壷などがあり、須恵器はまったく出土していない。壷は、第29号住居跡出土の№.１がある。口縁部外面の中位に１段の段をもつもので、いわゆる須恵器の模倣とされる特徴的な壷である。この壷は、５世紀末～６世紀前半頃にかけて見られる典型的なものであるが、第29号住居跡出土の壷は、口縁部の外反が強く、口縁部外面の段も中位よりやや下方にあり、概ね該期のものより古相である。おそらくその出土状態から見て、壷の口縁部だけを二次的に転用して使用していたものと思われる。甕は、その形態から長胴甕・胴張甕・小形甕がある。長胴甕は、その法量差によって相対的に［大］・［中］・［小］の３つのタイプに別れる。［大］は、器高が概ね30cm以上の最も一般的な甕で、各住居跡からはいずれも２個体以上出土している。形態は、既に長胴化しているが、まだ胴部に張りがあり、最大径を胴部の中位にもつものが主体である。底部は、いずれも突出した平底である。［中］は、器高が概ね25cm以上のもので、第37号住居跡と第46号住居跡から出土している。量が少ないため、ここでは長胴甕の法量差として一括して扱ったが、中にはその形態から見て６世紀後半に一般化する胴張甕の一形態に発展するものも含んでいる可能性があると思われる。［小］は、器高が概ね18cm以上のもので、ほぼ各住居跡から１個体程度出土している。形態は、いずれも［大］の甕を寸詰まりにしたような形のものが多い。長胴甕［大］の第46号住居跡出土№.２の甕は、胴部の内外面に刷毛目を残しているが、このような甕はほぼこの時期までであり、胴部外面の調整はほとんどがケズリのみとなる。



第71図　第Ⅰ期の土器（１）



第72図　第Ⅰ期の土器（２）

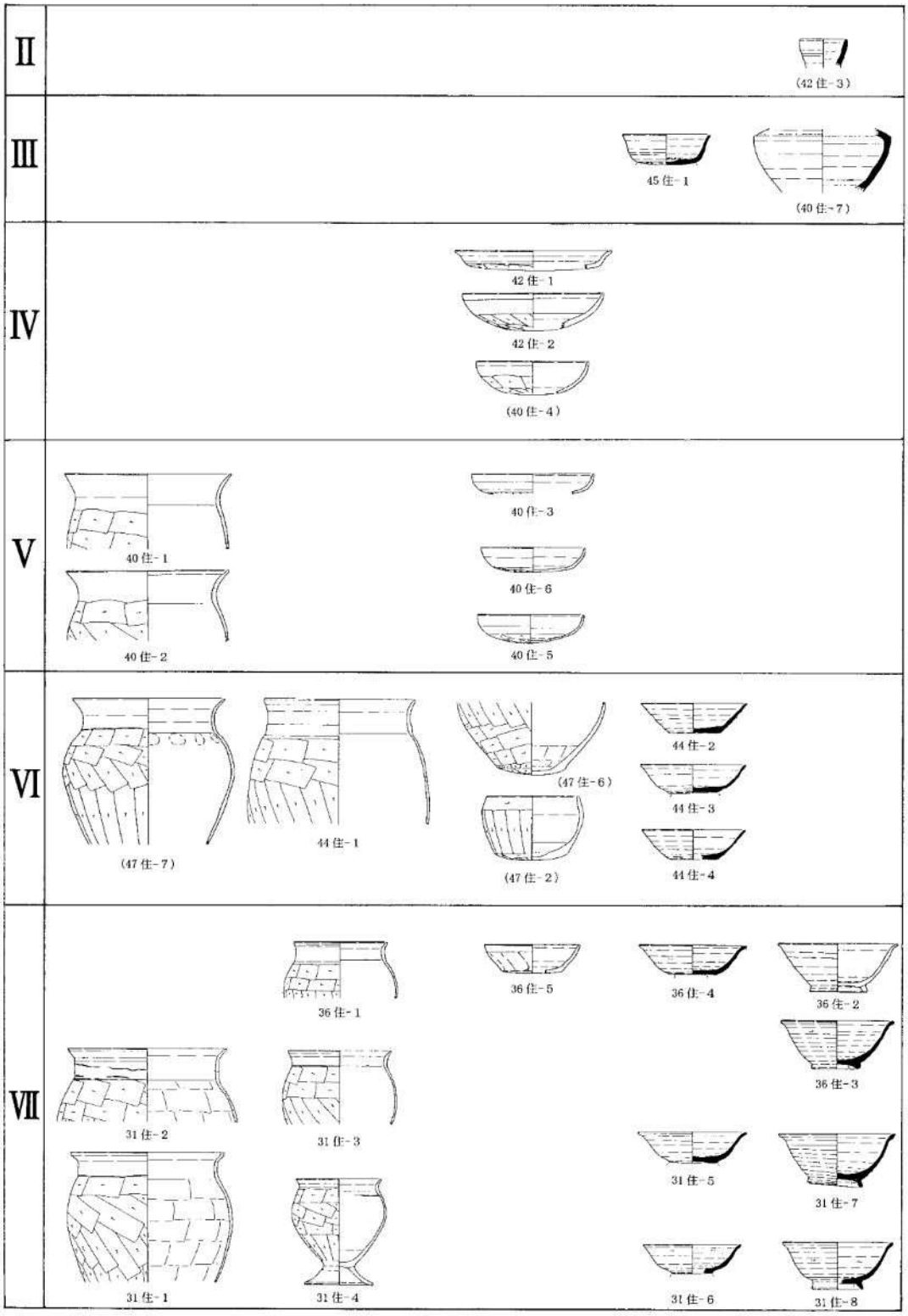
胴張甕は、第37号住居跡出土の№.８がある。この№.８のような胴張甕は、該期以降の６世紀後半に一般化する胴張甕とは異なるものであり、おそらくは５世紀代の胴張甕の系譜を引くものと推測される。小形甕は、器高が概ね18cm以下のもので、長胴甕の［大］と同じく、ほぼ各住居跡から２～３個体出土している。形態は様々で、中には鉢形に近いものも見られる。鉢は、器高よりも口縁部径の方が大きく頸部が不明瞭なもので、第34号住居跡出土の№.５と第46号住居跡出土の№.９と№.11がある。甑は、大形甑と小形甑がある。大形甑は、各住居跡からほぼ１個体程度出土している。いずれも当地方で一般的な底部をくり貫いた様な大きな単孔で、把手をもたないものである。胴部の形態は、胴部の最大径をやや上位にもち、丸みを持ちながら底部に向かってすぼまるものが主体的であるが、第37号住居跡では胴部がやや張り最大径を中位にもつ古相のもの（№.13）と、口縁部がやや短く胴部の張りがあまりなく直線的に近い新相のもの（№.12）の両者が見られる。小形甑は、第41号住居跡出土の№.９と№.10だけである。形態は、鉢形に近い小形甕の底部に、小さな単孔を穿ったものである。高坏は、半数の住居跡から出土している。いわゆる「和泉型高坏」と「鬼高型高坏」（中村1979）の両者が見られるが、量的には後者の方が多い。前者の「和泉型高坏」は、おそらく該期をもって衰退あるいは消滅するものと推測される。坏は、須恵器模倣の模倣坏と内斜口縁坏がある。模倣坏は、いずれも坏蓋模倣坏で、坏身模倣坏は見られない。この模倣坏には法量差があり、口縁部径が14cm以上の大形品と、12cm～13cmの一般的なものの二者があり、前者の大形品は各住居跡で１個体程度の出土である。形態は、口縁部と体部の高さがほぼ同じくらいのものが多く、口縁部は直立して上半が若干外反するものが主体的で、口唇部に平坦面を描出しているものもいくつか見られる。内斜口縁坏は、５世紀代の和泉式の坏の系譜を引くものである。６世紀になると大半は鬼高式の模倣坏によってその地位を奪われるが、６世紀前半代までは主に群馬県地方に多く残存して見られ、当地方でもあまり多くはないが、時たま見かけるものである。第46号住居跡出土の№.22は内面がナデ調整のままであるが、№.23と№.24は内面上半に暗文風の斜方向の細かなミガキを施しており、群馬県地方のものとかなり酷似している。埦は、第46号住居跡出土の№.12だけである。雑な作りで、底部が丸底の体部がやや深い形態である。小形短頸壷は、第43号住居跡出土の№.８だけである。器高が低く胴部上半までケズリが及ばす、頸部外面に段（稜）をもたないもので、川越田遺跡第１号住居跡（富田・赤熊1985）出土のものと類似している。小形無頸壷は、第34号住居跡出土の№.７だけであるが、当地域ではあまり見かけないもので一般的な器種ではない。

第Ⅱ期（第73図）

第42号住居跡出土№.３の須恵器平瓶の口縁部と思われる破片だけである。この破片は同住居跡の覆土中への混入と考えられ、該期の遺構はＢ地点の調査区内では検出されていない。７世紀前半頃の時期と推測される。

第Ⅲ期（第73図）

第45号住居跡出土№.１の須恵器坏と、第40号住居跡の覆土中に混入して出土した№.７の須恵器瓶だけである。№.１の須恵器坏は、口縁部径が推定で11.0cmあり、底部外面は手持ち箆ケズリされるものである。№.７の須恵器瓶は、高台付長頸瓶と考えられるものである。これらの須恵器は、おそらく７世紀末から８世紀初頭頃のものと推測される。



第73図　第Ⅱ～Ⅶ期の土器

第Ⅳ期（第73図）

第42号住居跡出土の№.１と№.２が該当し、第40号住居跡出土の№.４の坏も該期のものと思われる。No1の皿は、口縁部の作りにシャープさがなく、体部もあまり丸みをもたない形態のようである。№.２は大ぶりの坏で、口縁部は内屈せずに短く直立ぎみで、体部外面のケズリも上半に及ばないものである。いずれも破片であるため器形の復元にやや難があるが、それらの形態からは８世紀中頃の時期と推測される。

第Ⅴ期（第73図）

第40号住居跡出土の土師器が該当する。器種は、甕と坏が出土しているだけである。甕は、№.１・№.２とも器肉が薄く、口縁部の外反の開きが弱い形態で、胴部外面上半には横方向ケズリが施されているものである。坏は、№.５と№.６が該当する。器高はやや低く扁平ぎみで、体部と底部の境が明瞭になりつつあり、ケズリも底部外面のみ施されている。これらの土器の特徴から、該期は８世紀後半頃と推測される。

第Ⅵ期（第73図）

該期の土器は概して少ないが、第44号住居跡出土土器が該当し、第47号住居跡の覆土中から出土した№.２・６・７の土器も該期のものと考えられる。器種は、土師器の甕・小形甕・鉢と、須恵器の坏がある。甕は、器肉が薄く、口縁部の断面がいわゆる「コ」の字を呈するものであるが、段の屈曲がやや弱く、上段の外反がやや長く延びて口唇部に面を持たないものである。小形甕は、第47号住居跡の覆土中から出土した№.６だけであるが、胴部下半だけであり、底部がやや広めであることからすると大形の鉢の可能性もある。鉢は、第47号住居跡の覆土中から出土した№.２だけであるが、あまり一般的なものではなく、該期のものかあまり明確ではない。須恵器坏は、第44号住居跡から３個体出土している。いずれも口縁部径が13.0cm程度で、底部がやや小さく、外面が回転糸切りのものであるが、体部と口縁部が直線的に延びるもの（№.２・４）と、口縁部が外反するもの（№.３）がある。該期は、甕や須恵器坏の形態から、９世紀中頃の時期と推測される。

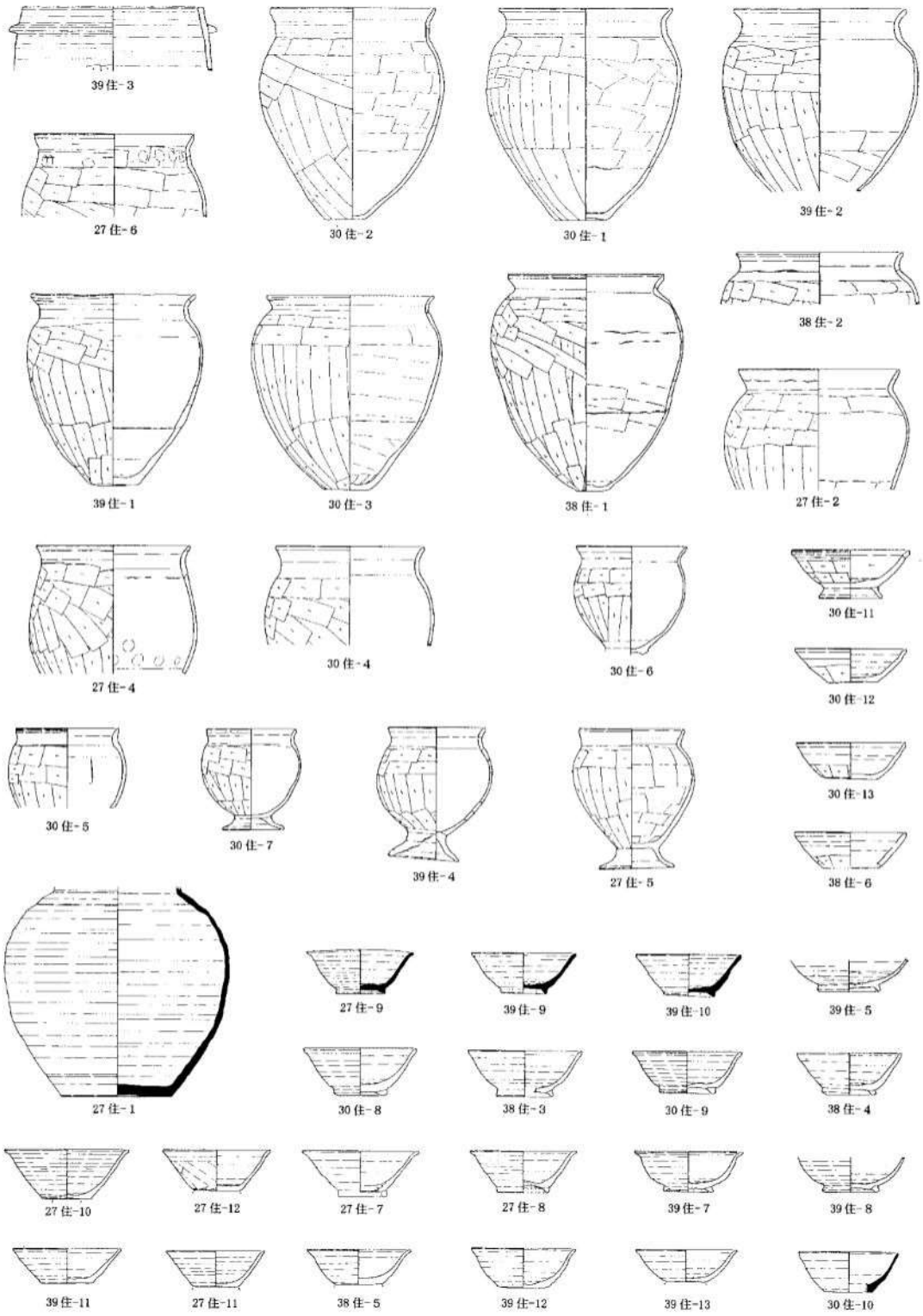
第Ⅶ期（第73図）

第31号住居跡と第36号住居跡の出土土器が該当する。この２軒の住居跡は同一場所で若干ずれて重複しているが、それぞれの出土土器には明確な時期差は見られない。器種は、土師器の甕・小形甕・小形台付甕・坏と、須恵器の高台付埦・坏がある。甕は、いわゆる「コ」の字口縁の甕で、Ⅵ期に比べると口縁部の段の屈曲が明瞭になり、口縁部上段の外反がやや短くなっている。また、第31号住居跡の№.１は、口唇部外面が面取りを意識したような形態になっている。小形甕は、第31号住居跡の№.３と第36号住居跡の№.１だけであるが、いずれも胴部下半を欠損しており、あるいは小形台付甕の可能性も考えられる。小形台付甕は、第31号住居跡の№.４がある。小形甕も小形台付甕も口縁部の形態は多様で、必ずしも甕のような明確な「コ」の字を呈するとは限らない。坏は、第36号住居跡出土の№.５だけである。該期に特徴的な坏の一タイプであるが、全面をナデによって仕上げている。須恵器の高台付埦は、両住居跡から出土している。第36号住居跡出土の№.２は、還元不良のものである。いずれも口縁部径が14cm～15cm程度で、口縁部は緩やかに外反し、口唇部は玉縁状に肥厚して丸くなっている。高台部もやや太く短くなって貼り付けられたものも見られる。須

恵器坏は、いずれも口縁部径が13.0cm～13.5cm程度で、口縁部は外反し、底部はやや小ぶりで回転糸切りが施されているものである。時期は、９世紀後半頃と推測される。

第Ⅷ期（第73図）

第27号住居跡・第30号住居跡・第38号住居跡・第39号住居跡の出土土器が該当する。器種は、土師器の甕・小形台付甕・高台付坏・坏や、須恵器系の羽釜・広口壷・高台付坏・坏と、灰釉陶器の高台付椀などがある。該期は、前段階と同様に煮沸具は土師器の甕が主体であるが、供膳具は須恵器系のものが主体となる。該期以降になると、古墳時代よりこれまで比較的明瞭であった土師器と須恵器の成形方法と焼成方法の一体化した概念区分では、特に須恵器の焼成方法の多様化と簡略化に伴って、焼成の違いだけでは区分が困難になる。そのため、該期以降の主に供膳具を主体とする土器群に対しては様々な呼称がされているが（福田2002）、ここでは両者の成･整形方法の違いを重視し、とりあえず基本的にロクロを使用しない土器を土師器、ロクロを使用する土器を須恵器系として便宜的に記述することにする。土師器の甕は、その口縁部の形状に「コ」の字の形態を留めるものと、「く」の字状のものが見られ多様であるが、後者も製作技法は前者と同一であり、その多くが基本的には前段階の「コ」の字状口縁甕の系譜を引くと考えられるものである。口縁部が「く」の字を呈する甕の中で、第30号住居跡№.３や第38号住居跡№.１のような口縁部の長さが短い形態のものは、「コ」の字状口縁の直立もしくは若干内傾する口縁部中位の部分が強く内側に傾斜しすぎたため、「コ」の字下段の胴部との境の屈曲部が不明瞭になり、上段の外反する屈曲部だけが強調されて「く」の字状の形態になったものと推測される。これらの該期の甕は、「コ」の字状口縁甕の全盛期である第Ⅵ期～第Ⅶ期の非常に器肉の薄い甕に比べて、全体的に土器の器肉が厚く、重量がやや重くなっている。小形台付甕も、甕と同様に口縁部の形態が「コ」の字状のものと、「く」の字状のものが見られ多様である。台部は、前段階の第Ⅶ期のものに比べてやや低くなり、下半の屈曲と外反が強くなる傾向が見られる。土師器の高台付坏は、第30号住居跡出土の№.11だけである。この土器は、該期の土師器坏に似た坏部に高台を付けたような形態をし、該期の「コ」の字状口縁甕に見られる口唇部の肥厚と、そこに沈線状あるいは凹線状のヨコナデを施したもので、鈴木徳雄氏によって「従来の形式論的組列から決定的に逸脱する」として注目されたものである（鈴木1984）。類例は量的には少ないものの、児玉町の鷺山南遺跡（鈴木1984）や南ノ前遺跡（恋河内1999）などでも同様なものが出土している。土師器の坏は、第30号住居跡と第38号住居跡から出土しているだけで、量的には少ない。いずれも口縁部径が13.5cm前後で、口唇部は肥厚し、底部が小さめの平底を呈するもので、底部外面と体部外面下半が箆ケズリされるが、器肉はやや厚めである。羽釜は、第39号住居跡出土の№.３だけである。破片のため明確ではないが、口縁部はほとんど内湾せずに、胴部からの内傾斜は弱く直線的である。胴部外面の縦方向の箆ケズリは、胴部のやや高い位置まで及ぶようである。須恵器系の高台付坏は、該期の須恵器系の坏に低く雑な作りの高台を付けたような形態である。高台付坏・坏ともに体部が若干丸みをもって開くものと直線的に開くものがあるが、いずれも口唇部は外反する。高台付坏は口縁部径が13～14cm代、坏は口縁部径が12～13cm代のものが主体である。焼成は、須恵質の還元焔焼成のものも少量見られるが、大半は還元不良か酸化焔焼成のものである。灰釉陶器は、第39号住居跡出土№.５の高台付椀だけである。破片のため器形の全容は


39住-3
27住-6
30住-2
30住-1
39住-2
38住-2
39住-1
30住-3
38住-1
27住-2
27住-4
30住-4
30住-6
30住-11
30住-12
30住-5
30住-7
39住-4
27住-5
30住-13
38住-6
27住-1
27住-9
39住-9
39住-10
39住-5
30住-8
38住-3
30住-9
38住-4
27住-10
27住-12
27住-7
27住-8
39住-7
39住-8
39住-11
27住-11
38住-5
39住-12
39住-13
30住-10

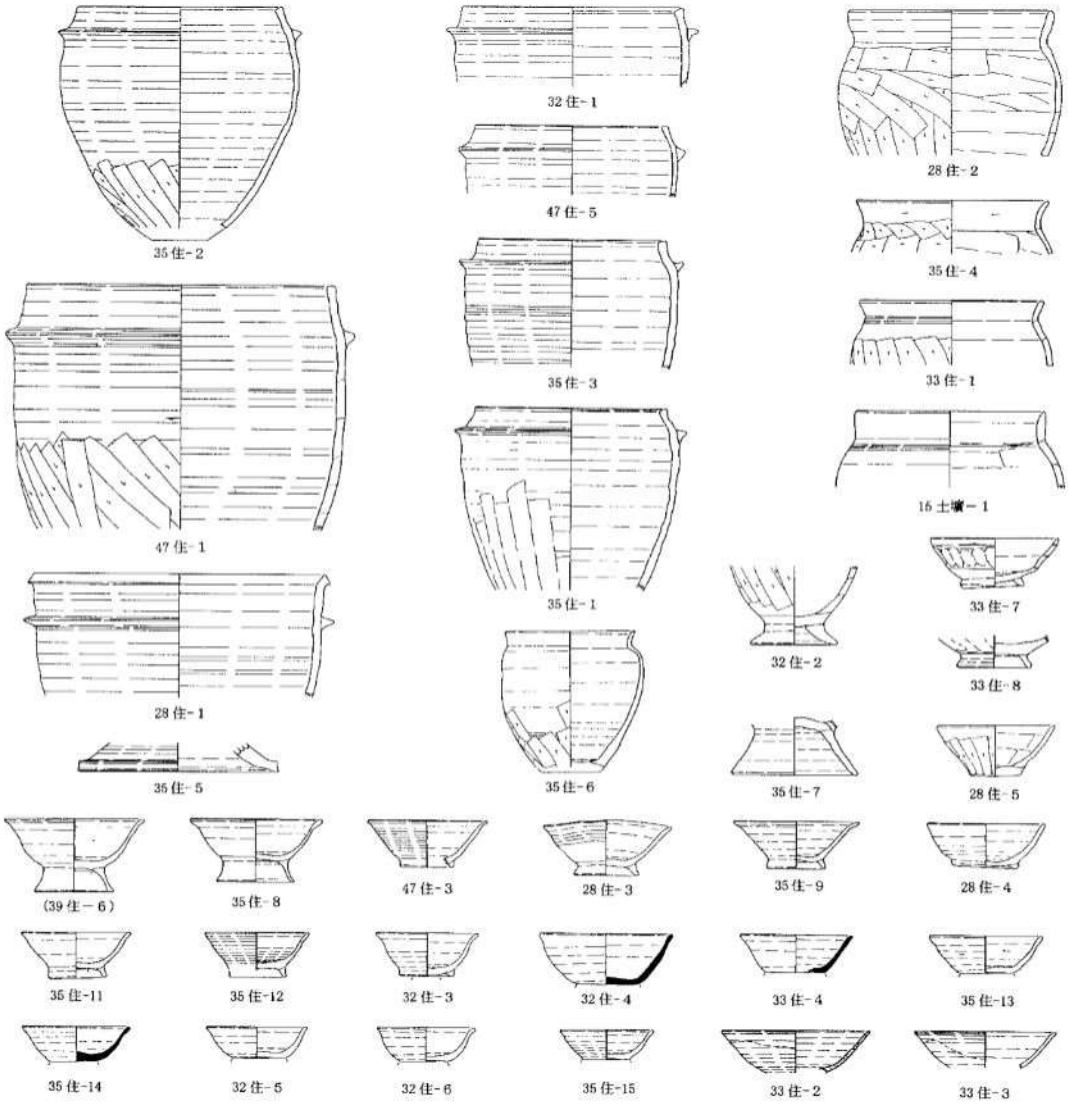
第74図　第Ⅷ期の土器

不明であるが、高台部の断面形態は四角形状を呈している。釉は、カケヌリのようである。該期の時期は、10世紀前葉頃と推測される。

第Ⅸ期（第73図）

第28号住居跡・第32号住居跡・第33号住居跡・第35号住居跡・第47号住居跡・第15号土壙の出土土器が該当する。該期とした土器群は、比較的多様でさらに時期を分別できる可能性もあるが、遺構毎の出土量に多寡があり、土器の直接的な対比が困難なものが多いことから、ここではとりあえず一括しておく。器種は、土師器の甕・小形台付甕・高台付坏・坏や、須恵器系の羽釜・甕・大形甑・高台付埦・高台付坏・坏、灰釉陶器の埦などがある。該期では、前段階の第Ⅷ期と異なり、煮沸具における須恵器系の羽釜や甕の割合が増加し、土師器の甕を凌駕するようになる。供膳具は、前段階と同様に須恵器系のものが主体であるが、形態や系統は多様なようで複雑な様相が窺える。

土師器の甕は、口縁部の形態が「コ」の字状のものは見られず、いずれも「く」の字状の形態を呈している。第28号住居跡出土の№.２は、胴部の篦ケズリの手法に前段階の「コ」の字状口縁甕の技法の面影が窺えるが、口縁部の形態はまったく異なったものになっている。第15号土壙出土の№.１は、胴部がナデ調整で器肉も厚く雑な作りの甕で、その形状からも本段階よりも新しい時期のものである可能性も考えられる。小形台付甕は、第32号住居跡出土の№.２だけである。胴部下半だけであるため全容は不明であるが、胴部外面のケズリは雑で器肉が厚く、台部はより低くなっている。土師器の高台付坏は、第33号住居跡出土の№.７と№.８がある。№.７は、該期にまれに見られる体部に指頭圧痕を明瞭に残した土師器坏に、高台を貼り付けたような形態で、全体に雑な作りである。土師器の坏は、第28号住居跡出土の№.５だけである。この坏は、第33号住居跡№.７の土師器高台付坏の坏部に見られるような、該期頃まで残存する伝統的な土師器坏とは異なり、小形台付甕の胴部下半の作りに似た形態のもので、一般的とは言えない坏である。羽釜は、いずれも胴部が丸みをもち、口縁部の内傾が強い形態で、胴部外面の下半に縦方向の篦ケズリが施されるものである。須恵器系の甕は、第35号住居跡出土の№.６の小形甕がある。このロクロ整形の甕は、この時期に特徴的な器種で、法量差や形態差が認められるが、比較的短期間にしか存在しない甕のようである（恋河内2000）。形態は異なるものの、その製作技法は該期の羽釜に類似している。第35号住居跡出土の№.７は、台部だけではあるがロクロ整形のもので、その大きさからは台付鉢か台付甕と考えられるものである。須恵器系の大形甑は、第28号住居跡出土№.１・第35号住居跡出土№.５・第47号住居跡出土№.１がある。第28号住居跡出土№.１は、口縁部は胴部からそのまま緩やかに外傾し、口唇部が強く外反してその端部に面を持つもので、群馬県から埼玉県北部地方にかけてよく見られる形態のものである。第47号住居跡出土№.１は、口縁部が長くその内傾が弱いもので、形態や製作技法は羽釜に類似しており、それを大形化したようなものである。須恵器系の高台付埦は、第35号住居跡出土№.８と第39号住居跡の覆土中から出土した№.６がある。この高台付埦は、若干肥厚した高台端部に凹線状の窪みや平坦面を施したやや薄く高い高台を付けたもので、その焼成が酸化焔焼成であるために「ロクロ土師器」とも呼ばれている（福田2002）。ここではロクロ使用の土器であるため便宜的に須恵器系としているが、これらの高台付埦は９世紀代に盛行した須恵器の高台付埦の系譜を引くものではなく、該期になって木器や漆器の模倣によって新たに出現するものであろう（福田2002）。



第75図　第Ⅸ期の土器

須恵器系の高台付坏は、前段階の第Ⅷ期からの系譜を引くものが多いが、全体的に法量が小さくなる傾向が見られる。この中で、第28号住居跡出土No.３や第47号住居跡出土No.３のような、非常に細かなロクロ目を施し、しっかりした高台の付いた、おそらくこれまでの高台付坏とは系譜を異にするものが出現することも該期の特徴である。須恵器系の坏も、全体的に法量が小さくなる傾向が見られ、第32号住居跡No.５・No.６や第35号住居跡No.15のように、口縁部径が10cm前後の小振りの坏も見られるようになる。灰釉陶器は、第33号住居跡の覆土中からNo.２とNo.３の破片が出土しているだけである。いずれも高台付埦で、釉はカケヌリである。該期の時期は、概ね10世紀中葉頃を中心とする時期と推測される。

2．遺構の変遷

Ｂ地点の調査で検出された遺構は、第Ⅲ章でも述べたように、竪穴式住居跡21軒、掘立柱建物跡４棟、土壙14基、溝跡１条である。土壙や溝跡の中には時期不明や中世以降のものもあるが、その多くは古墳時代後期（６世紀）から平安時代中期（10世紀）の古代を主体とするものである。ここでは、これらの遺構を第１節で行った土器による第Ⅰ期～第Ⅸ期の時期区分に合わせて、Ｂ地点における各期の遺構の様相とその変遷を概観したい。

第Ⅰ期の遺構（第76図）

第Ⅰ期の遺構（第76図）は、前節で述べたように、古墳時代後期の６世紀前半でも中頃に近い時期の土器群を出土した遺構で、第29号住居跡・第34号住居跡・第37号住居跡・第41号住居跡・第43号住居跡・第46号住居跡の６軒が該当する。これらの住居跡は、カマドを住居の東（北東）側壁か西（南西）側壁に付設し、いずれも地形の等高線のラインの方向に住居の主軸方向を一致させている。これは、第３章で述べたように、当時の古墳時代後期の地形が、奈良時代の後半（第Ⅴ期）以降よりも北西側に向かって傾斜がやや強かったためと思われる。住居跡の配置は、北から第41号住居跡と第43号住居跡、第34号住居跡と第37号住居跡、第29号住居跡と第46号住居跡といった、２軒１組のような分布のあり方をしているように見える。しかしながら、群馬県子持村の黒井峰遺跡（石井1990）で明らかになったような、１軒の竪穴式住居に柴垣等によって囲まれた数棟の平地式住居や家畜小屋と小規模な畠地が伴う屋敷地の居住形態が、当時の東国における一般的な単位集団のあり方であったとするならば、ここに見られる２軒１組のような竪穴式住居跡の配置は、その至近距離から見ても相互に緊密な関係性を窺わせながらも、西側の住居はその西側の空閑地に、東側の住居はその東側の空閑地にそれぞれ屋敷地の展開が想定され、そこにそれぞれ数棟の平地式住居や家庭菜園的な小規模な畠地をもつ独立した単位として見るか、または、至近距離にある２軒が同時存在しない２時期に分けて考えるべきかもしれない。しかしながら、前節で述べたように各住居跡から出土した土器によってその時期を分離するのは難しい。

第Ⅱ期の遺構

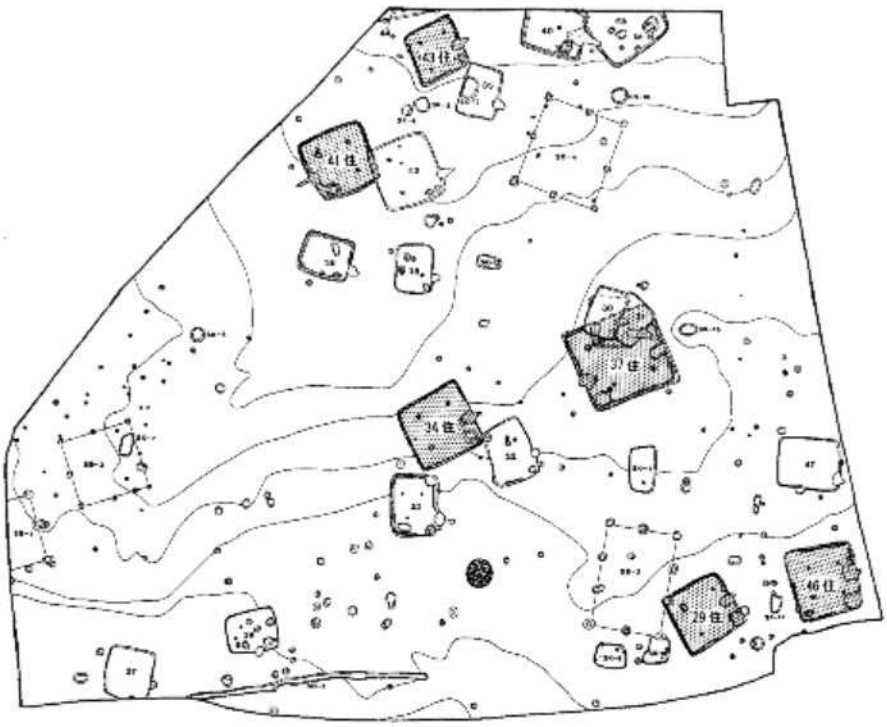
第Ⅱ期は、第１節で述べたように、第42号住居跡の覆土中に混じって、該期の須恵器平瓶の口縁部破片が出土しているだけであり、Ｂ地点の調査区内では該期の遺構は検出されていない。この須恵器の瓶類は、一般的な集落遺跡からはあまり出土せず、古墳等から供献品として出土する場合が多いものである。第Ⅰ期とは時間的に大きな断絶があるが、調査区外の近くに該期の遺構が存在する可能性は十分あろう。

第Ⅲ期の遺構（第77図）

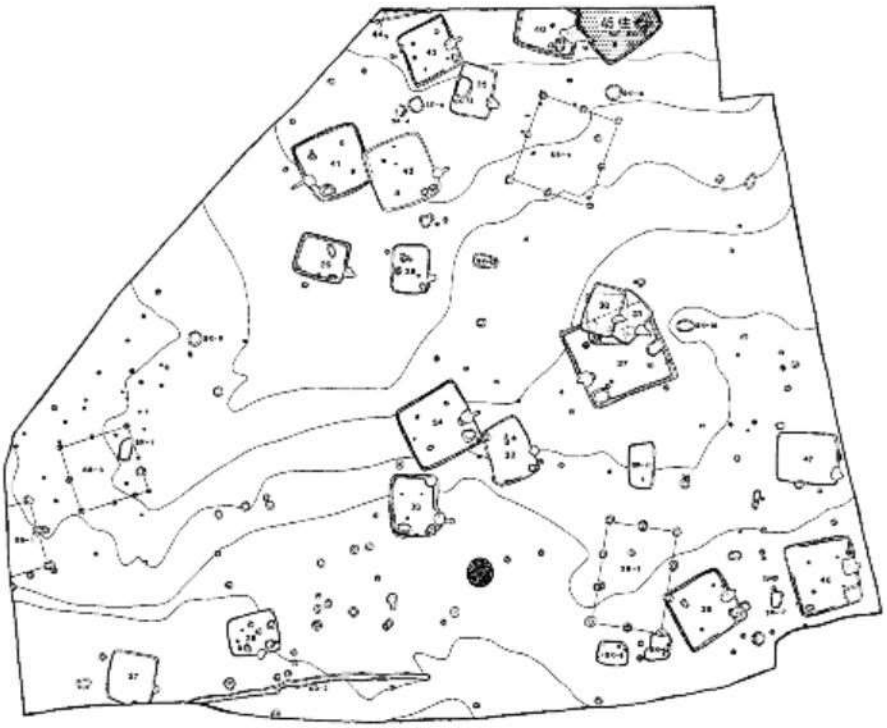
第Ⅲ期の遺構は、第45号住居跡だけである。調査区の北端から１軒だけ検出されたため、集落の様相は不明であるが、住居跡の主軸方向やカマドの位置は、第Ⅰ期の住居跡と概ね同じと推測され、古墳時代後期から集落立地場所の地形的条件にあまり変化が無かったことが窺える。

第Ⅳ期の遺構（第78図）

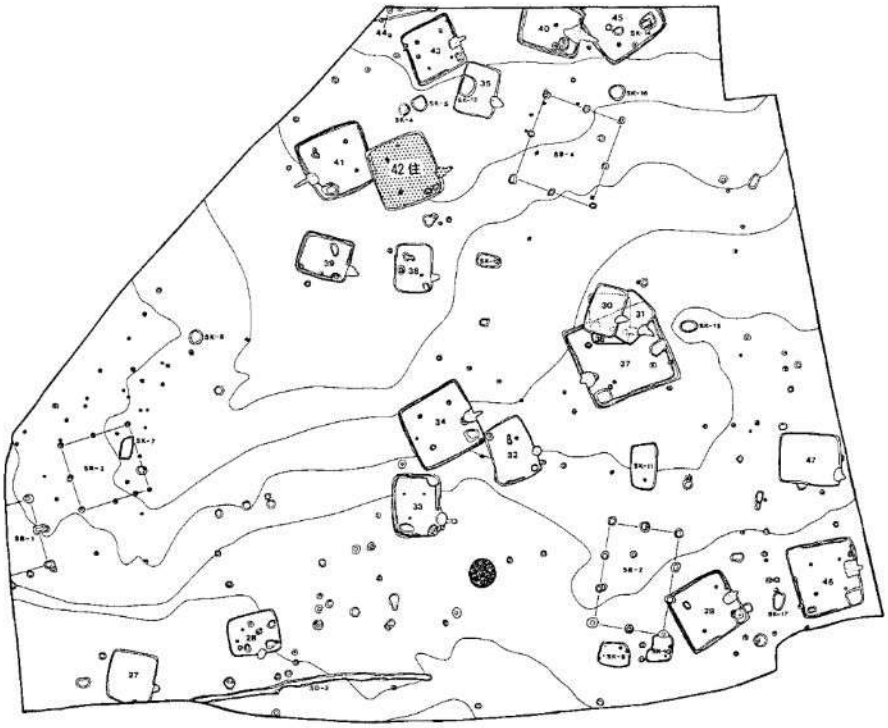
第Ⅳ期の遺構は、調査区北側の第42号住居跡だけである。該期も住居跡１軒だけであるため、集



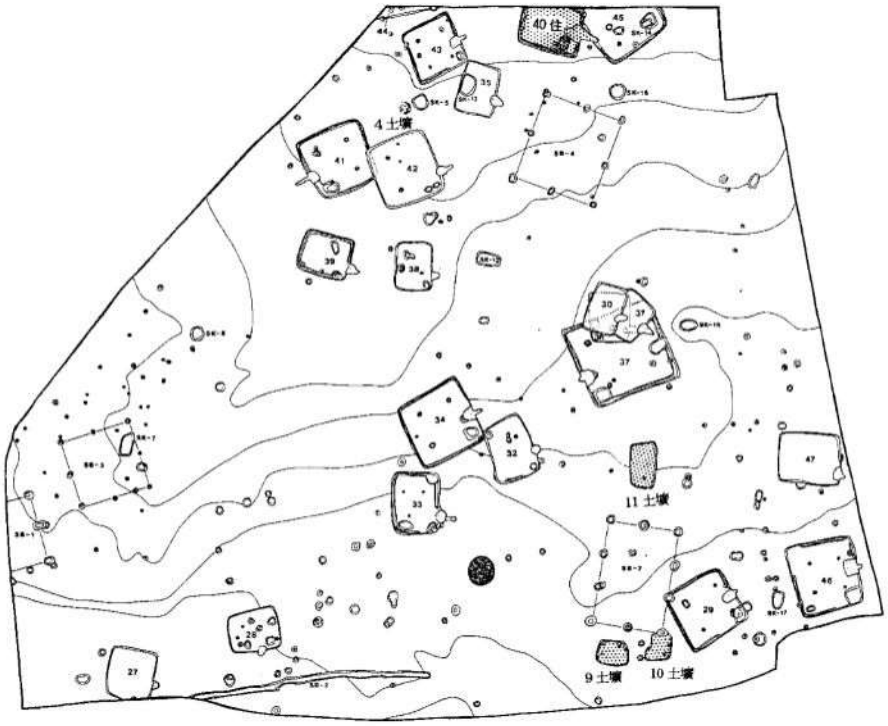
第76図　第Ⅰ期の遺構



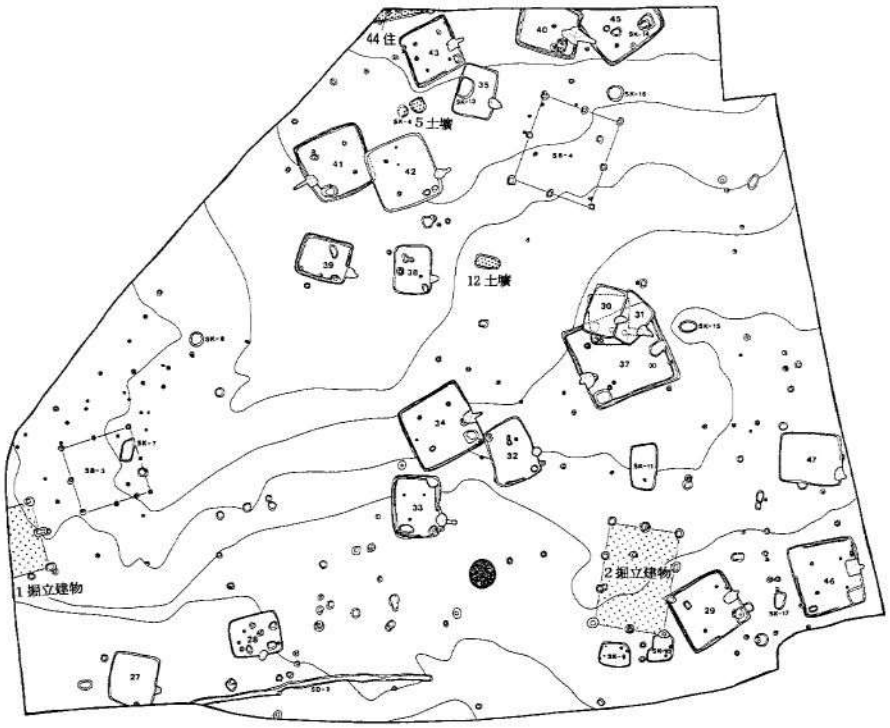
第77図　第Ⅲ期の遺構



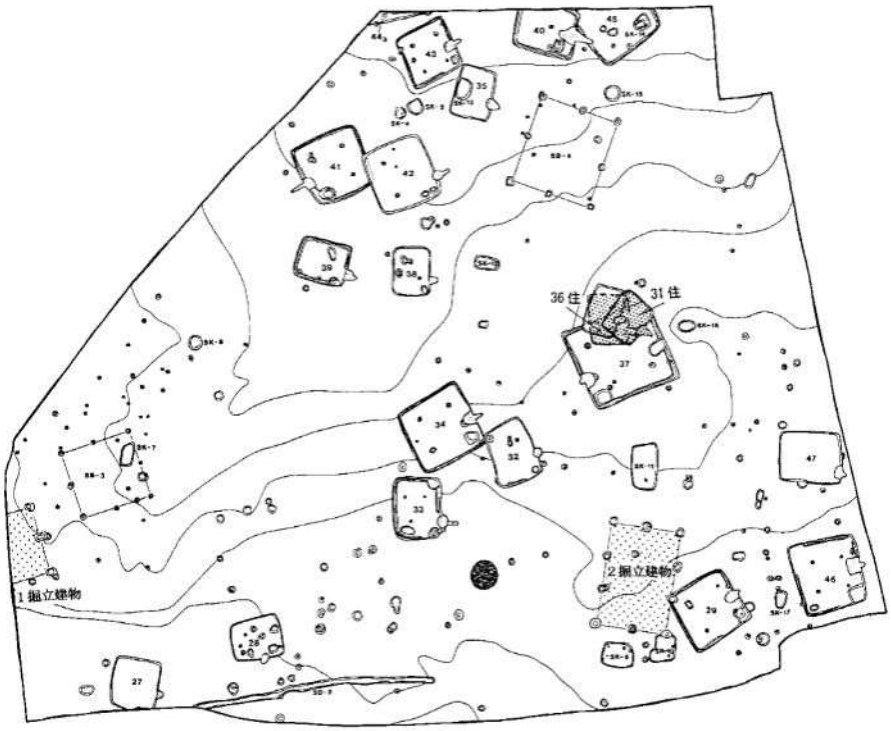
第78図　第Ⅳ期の遺構



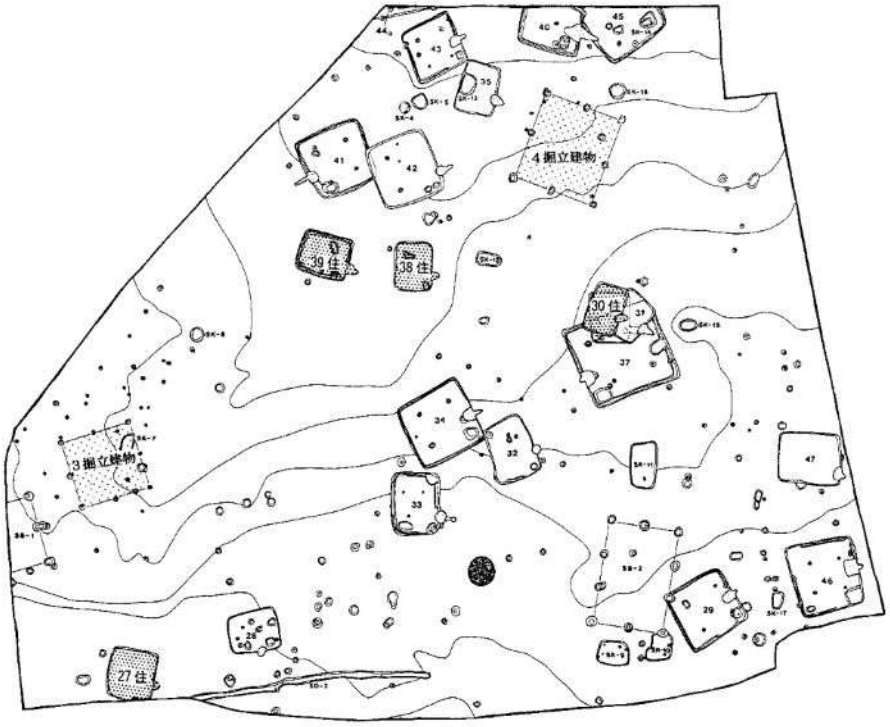
第79図　第Ⅴ期の遺構



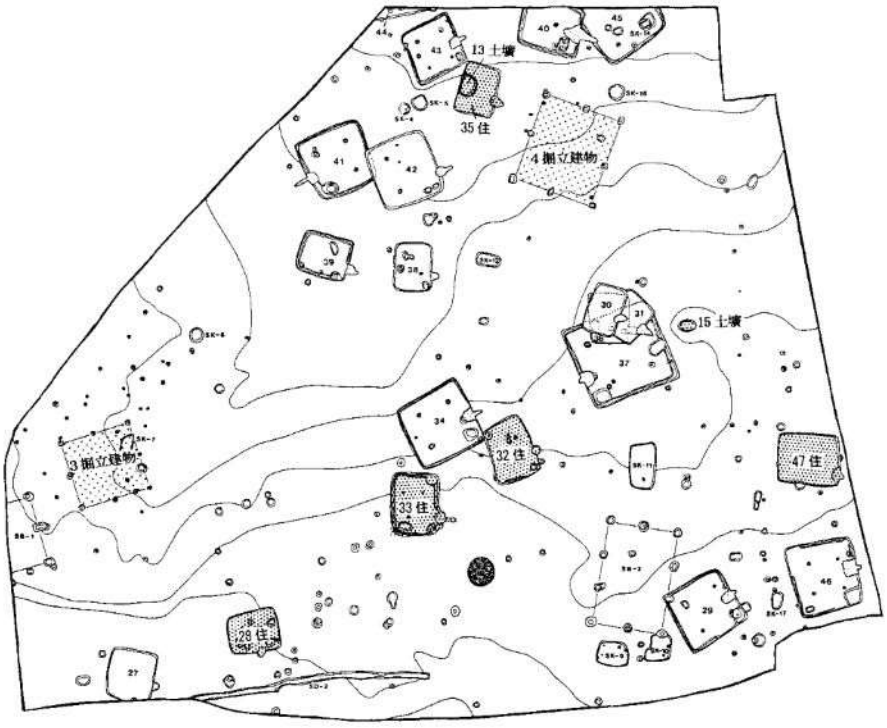
第80図　第Ⅵ期の遺構



第81図　第Ⅶ期の遺構



第82図　第Ⅷ期の遺構



第83図　第Ⅸ期の遺構

落の様相は不明であるが、住居跡の形態や主軸方向及びカマドの位置は、第Ⅲ期までの住居跡と概ね同じである。

第Ⅴ期の遺構（第79図）

第Ⅴ期の遺構は、第40号住居跡と第４号土壙・第９号土壙・第10号土壙・第11号土壙である。該期以降は、調査区北側斜面地の埋没が進行して、その傾斜が緩やかになっており、調査区北側の第Ⅳ期以前の遺構とはその確認面が異なっている。そのためか、第40号住居跡は、第Ⅳ期以前とは違って、住居跡の主軸方向を東西方向に近く向けている。ただし、カマドの位置はこれまでと同じく、住居の東側壁である。

第Ⅵ期の遺構（第80図）

第Ⅵ期の遺構は、調査区北端の第44号住居跡と第５号土壙・第12号土壙であるが、調査区西端の第１号掘立柱建物跡や調査区南側の第２号掘立柱建物跡も該期か次の第Ⅶ期に存在したものと思われる。第44号住居跡は、調査区内でその一部が検出されただけであるため、その全容は不明であるが、やや大形の住居跡の可能性もある。住居跡の向きは、第Ⅴ期と同じく東西方向に近いようである。これらの遺構は、調査区内に閑散とした状況で広がっており、その配置からは竪穴式住居跡と掘立柱建物跡との間に、個別的なつながりは窺えない。

第Ⅶ期の遺構（第81図）

第Ⅶ期の遺構は、調査区中央部の第31号住居跡と第36号住居跡であるが、この２軒の住居跡は同一場所で重複しており、厳密には時間差が存在する。住居跡の向きは、第Ⅴ期や第Ⅵ期とほぼ同じく、いずれも東西方向に近い向きである。前述のように、第１号掘立柱建物跡や第２号掘立柱建物跡も該期に存在した可能性があるが、竪穴式住居跡との関係は不明である。該期頃の住居跡より、全体的にその規模が小さくなる傾向が見られるが、カマドの位置はこれまでと同じく東側壁である。また、これまで主流であった方形かカマドのある軸線方向が若干長い長方形ぎみ平面形態から、カマドのある軸線方向よりもそれに直交する方向の方が長い横長の長方形ぎみの住居が、該期頃より顕著に見られるようになる。

第Ⅷ期の遺構（第82図）

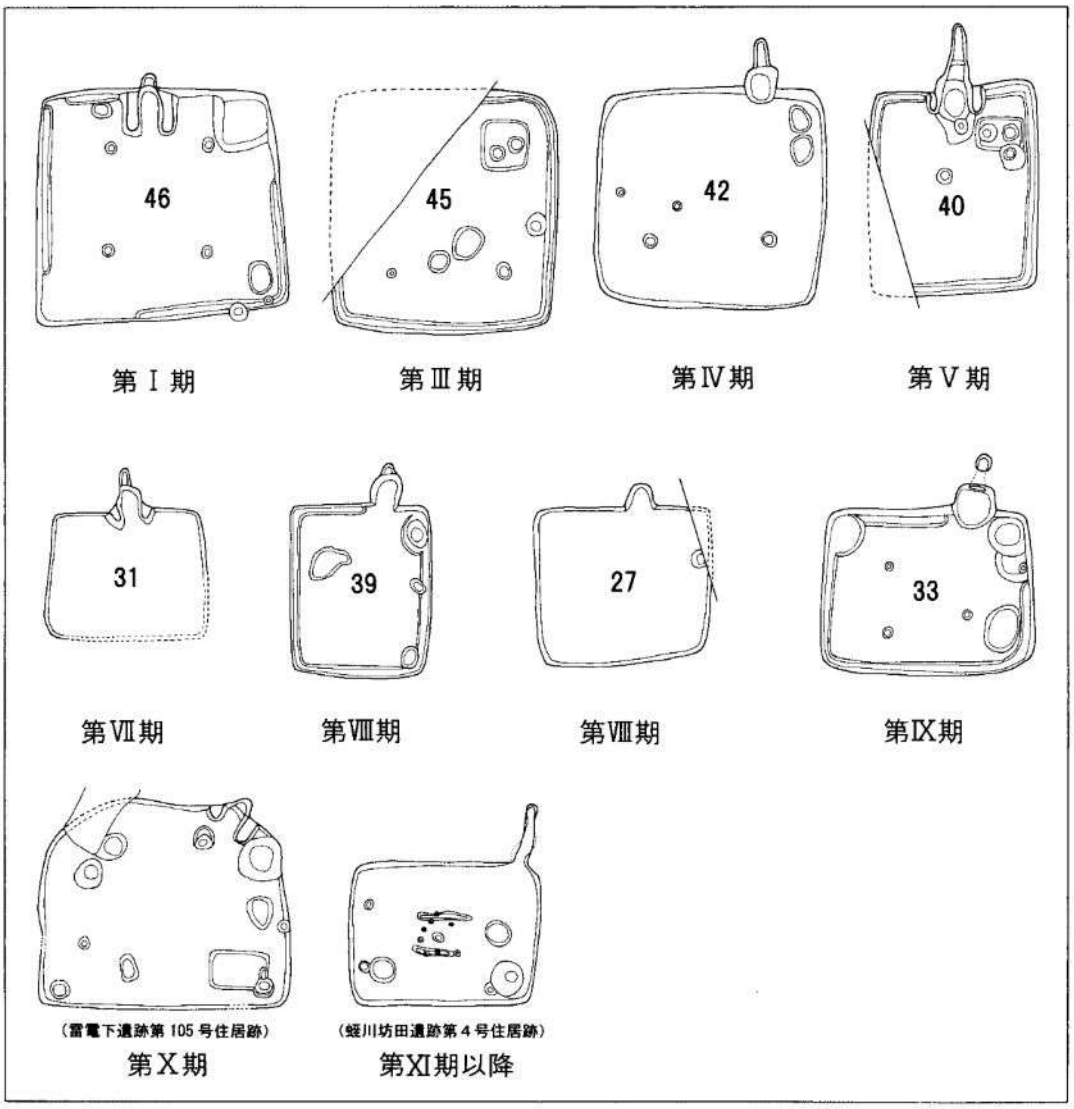
第Ⅷ期の遺構は、調査区南西端の第27号住居跡、中央部の第30号住居跡・第38号住居跡・第39号住居跡の４軒と第14号土壙があり、調査区西側の第３号掘立柱建物跡と北側の第４号掘立柱建物跡も、該期か次の第Ⅸ期に存在した可能性がある。住居跡の規模や形態は、第Ⅶ期のものと大差なく、住居跡の向きも第Ⅴ期以降の住居跡と同じく、いずれも東向きである。カマドの位置もこれまでと同じくいずれも東側壁であるが、該期頃の住居跡から壁の中央付近から右側のコーナー部に寄った位置に付設されるものが主流となる。また、カマドの構築にその補強として石材を利用するものも多く見られるようになる。

第Ⅸ期の遺構（第83図）

第Ⅸ期の遺構は、第28号住居跡・第32号住居跡・第33号住居跡・第35号住居跡・第47号住居跡の６軒と、第13号土壙・第15号土壙がある。前述のように第３号掘立柱建物跡と第４号掘立柱建物跡も第Ⅷ期か該期のものと推測されるが、該期にはこれらの建物跡の近くに建物と軸を同じ向きにと

る竪穴式住居跡が見られることから、これらの建物跡の時期は該期の可能性の方が高いかもしれない。住居跡の形態は、横長の長方形を基調とするものが大半となる。住居跡の向きは、これまでと同じく東向きが主体であるが、第28号住居跡は唯一南向きであり、当地方でも比較的珍しい例である。カマドは、東側壁で右側コーナー部寄りの位置に付設されるものがほとんどである。また、該期にはカマド構築の補強に一部石材を利用するものが大半となるが、該期以降にはカマド焚口の左右内側に、扁平な片岩を立てるか横に貼り付ける例が顕著になる。

以上のように、Ｂ地点の土器と遺構を第Ⅰ期～第Ⅸ期に分けて、その様相を概観してきたが、これらの各期は連続して継続するものではなく、現状では各期の間に長期や短期の断絶が認められる部分がいくつか存在する。しかしながら、それについては遺跡全体からすると未だ点的な調査にすぎないため、今後の周辺における調査の進展を待って、明らかにしていく必要があろう。



第84図　竪穴式住居跡の比較

参　考　文　献

赤熊　浩一（1989）『将監塚・古井戸Ⅱ』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第71集

荒川　正夫（2001）『大久保山Ⅹ』　早稲田大学本庄校地文化財調査報告10

石井　克己（1990）『黒井峯遺跡発掘調査報告書』　子持村文化財調査報告書第11集

石塚　和則（1986）『将監塚　―縄文時代―』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第63集

磯崎　　一（1995）『今井川越田遺跡Ⅰ』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第177集

井上　尚明（1986）『将監塚・古井戸Ⅰ』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第64集

上野真由美（1997）『広木上宿遺跡　―縄文時代編―』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第185集

大熊　季広（2000）『共和小学校校庭遺跡　－Ｃ地点の調査－』　児玉町遺跡調査会報告書第８集

（2002）「物見塚古墳の墳形および墳丘規模確認調査」『児玉郡市文化財担当者会会報』第２号

小澤　正人（1996）『大久保山Ⅳ』　早稲田大学本庄校地文化財調査報告４

小幡　喜一（2002）「埼玉県北部の地形・地質」　秩父・児玉・大里３郡合同文化財担当者研修会資料

小渕良樹他（1980）『広木大町古墳群』　埼玉県遺跡調査会報告第40集

柿沼　幹夫（1984）「美里村河輪神社境内出土の弥生土器」『埼玉県立博物館紀要』第10号

君島　勝秀（1999）『長沖古墳群』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第234集

恋河内昭彦（1984）「長沖古墳群の第７次調査」『第17回遺跡発掘調査報告会発表要旨』　埼玉考古学会　埼玉県遺跡調査会　埼玉県教育委員会

（1987）『秋山東遺跡』　児玉町遺跡調査会報告書第２集

（1989）『共和小学校校庭遺跡』　児玉町文化財調査報告書第10集

（1990）『雷電下遺跡　－Ｂ・Ｃ地点－』　児玉町文化財調査報告書第13集

（1993）『川越田遺跡Ⅱ』　児玉町遺跡調査会報告書第３集

（1995）『南共和・新宮遺跡』　児玉町遺跡調査会報告書第６・７集

（1995）『飯玉東Ⅱ・高縄田・樋越・梅沢Ⅱ・東牧西分・鶴蒔・毛無し屋敷・石橋』児玉町文化財調査報告書第17集

（1996）『辻堂遺跡Ⅰ』　児玉町文化財調査報告書第19集

（1996）『辻堂Ⅱ・南街道・宮田遺跡』　児玉町文化財調査報告書第20集

（1997）『城の内・日延・東田・浅見境北遺跡』　児玉町文化財調査報告書第23集

（1998）『向田Ａ・向田Ｂ・壱丁田遺跡』　児玉町文化財調査報告書第27集

（1999）『日延Ⅱ・児玉条里遺跡』　児玉町文化財調査報告書第31集

（1999）『雷電下Ⅲ・南ノ前遺跡』　児玉町文化財調査報告書第32集

（2000）『天田遺跡　―Ｂ地点の調査―』　児玉町遺跡調査会報告書第11集

（2001）「鷲山古墳の第２次墳形確認調査」『児玉郡市文化財担当者会会報』第１号

（2001）『女池遺跡　―Ｂ・Ｄ地点の調査―』　児玉町文化財調査報告書第35集

駒宮　史朗（1977）『御林下遺跡』　埼玉県遺跡発掘調査報告書第13集

(1979)『雷電下・飯玉東』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第22集
埼　玉　県 (1980)『新編埼玉県史』 資料編１
(1982)『新編埼玉県史』 資料編２
坂本　和俊 (1976)「埼玉県美里村河輪神社境内採集の弥生式土器」『史峰』第８号　新進考古学同人会
(1980)「神明ヶ谷戸遺跡の調査」『第13回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会　埼玉県遺跡調査会　埼玉県教育委員会
坂本和俊他 (1986)『埼玉県古式古墳調査報告書』 埼玉県県史編さん室
篠崎　　潔 (1992)『皀樹原・檜下遺跡Ⅳ』 皀樹原・檜下遺跡調査会報告書第４集
(1995)『真下境西・反り町・八荒神北・八荒神南遺跡』 神川町教育委員会文化財調査報告第12集
菅谷　浩之 (1984)『北武蔵における古式古墳の成立』 児玉町史資料調査報告古代第１集
菅谷浩之他 (1973)「児玉町・美里村生野山古墳群発掘調査概要」『第６回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉県考古学会　埼玉県遺跡調査会　埼玉県教育委員会
(1980)『長沖古墳群』 児玉町文化財調査報告書第１集
菅谷浩之・笹森健一 (1975)『広木大町古墳群発掘調査概報』 美里村教育委員会
(1976)『宮下・樋之口遺跡発掘調査概報』 美里村教育委員会
菅谷浩之・坂本和俊他 (1990)『秋山古墳群　一庚申塚古墳・諏訪山古墳の調査一』 児玉町史資料調査報告古代第２集
鈴木　徳雄 (1984)「いわゆる北武蔵系土師器坏の動態」『土曜考古』第９号　土曜考古学研究会
鈴木徳雄他 (1981)『深町・城の内遺跡』 深町遺跡調査会
(1983)『阿知越遺跡Ⅰ』 児玉町文化財調査報告書第３集
(1984)『阿知越遺跡Ⅱ』 児玉町文化財調査報告書第４集
(1989)『真下境東遺跡』 児玉町文化財調査報告書第９集
(1991)『辻ノ内・中下田・塚畠・児玉条里遺跡』 児玉町文化財調査報告書第15集
(1997)『将監塚東・平塚・藤塚遺跡』 児玉町文化財調査報告書第26集
瀧瀬　芳之 (1997)『今井川越田遺跡Ⅲ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第191集
立石盛詞他 (1982)『後張Ⅰ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第15集
(1982)『後張Ⅱ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第26集
田中広明・末木啓介 (1997)『中堀遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第190集
徳山　寿樹 (1988)「秋山塚原遺跡」『第９回三県シンポジウム東日本の墓制』 群馬県考古学研究所　千曲川水系古代文化研究所　北武蔵古代文化研究会
徳山寿樹他 (1994)『平塚・左口・児玉条里遺跡』 児玉町文化財調査報告書第16集
(1995)『堀向・藤塚Ａ・柿島・内手ＢＣ・児玉条里遺跡』 児玉町文化財調査報告書第18集
(1996)『東鹿沼・藤塚Ｂ１・児玉条里遺跡』 児玉町文化財調査報告書第21集

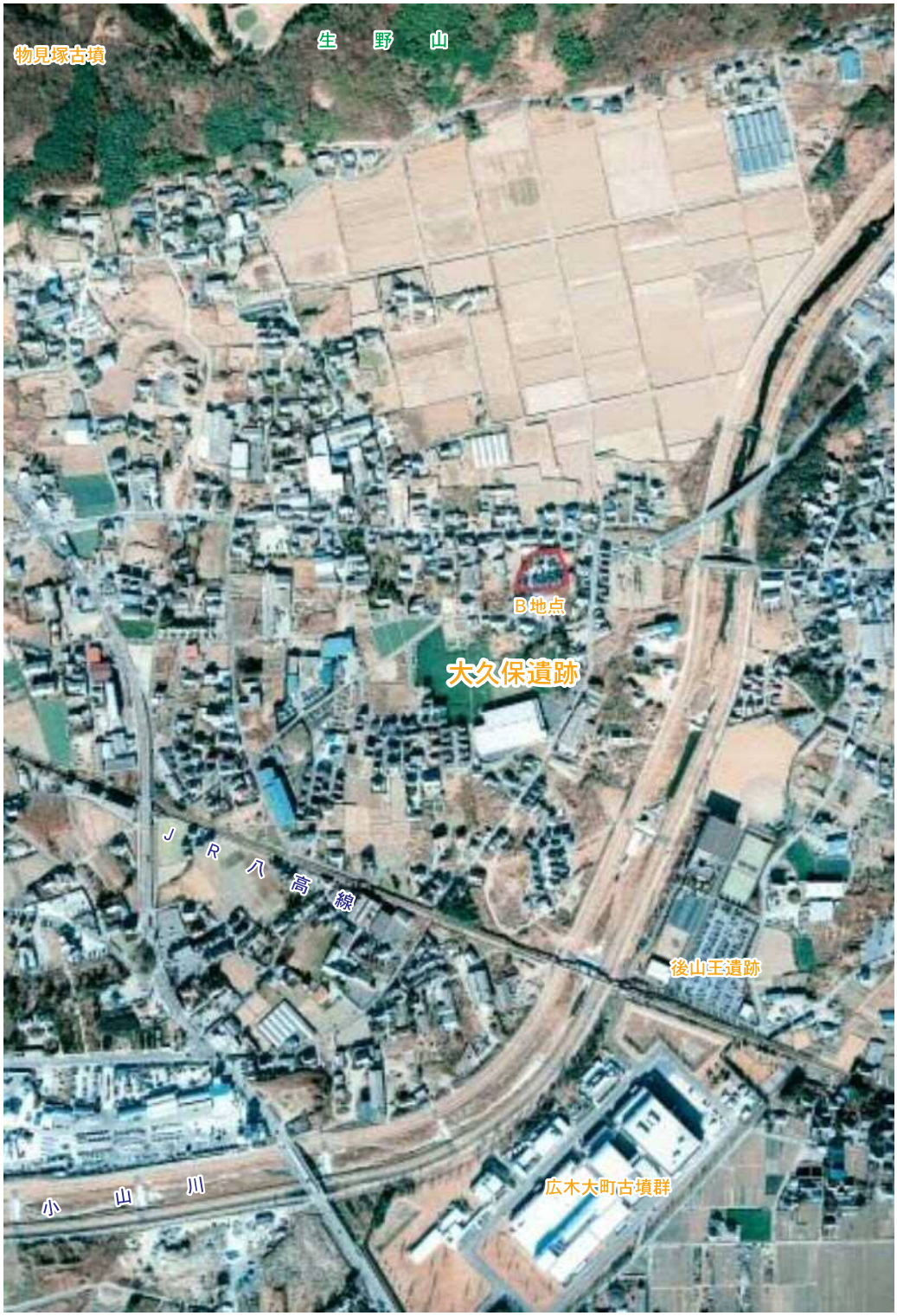
(1996)『藤塚遺跡　―Ｂ２地点の調査―』 児玉町文化財調査報告書第22集
(1997)『金佐奈遺跡　―Ａ１地点の調査―』 児玉町文化財調査報告書第24集
(1997)『金佐奈Ｃ・児玉条里遺跡上田地区』 児玉町文化財調査報告書第25集
(1998)『金佐奈遺跡　―Ａ２地点の調査―』 児玉町文化財調査報告書第29集
(1998)『金佐奈遺跡Ⅰ　―Ｂ地点の調査―』 児玉町文化財調査報告書第30集
(1999)『金佐奈遺跡Ⅱ　―Ｂ地点の調査―』 児玉町文化財調査報告書第33集
利根川章彦 (1998)『御林下遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第223集
富田　和夫 (2000)『大寄遺跡Ⅰ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第268集
富田和夫・赤熊浩一 (1985)『立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群・一丁田・川越田・梅沢』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第46集
中村　倉司 (1979)「児玉地方における鬼高式土器の編年について」『宇佐久保遺跡』 埼玉県遺跡調査会報告第38集
(1980)『瓰薤神社前遺跡・一本松古墳』 埼玉県遺跡調査会報告第39集
長瀧　歳康 (1992)『後山王遺跡　―Ｂ・Ｄ地点―』 美里町遺跡調査会報告書第１集
橋本　博文 (2001)「古墳時代の社会構造と組織」『村落と社会の考古学』 校倉書店
橋屋功・中村正芳 (1993)「丘陵の地質」『児玉町史』 自然編
服部　敬史 (2000)「古墳時代集落論」『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』 東京堂出版
伴瀬　宗一 (1996)『今井川越田遺跡Ⅱ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第178集
板野和信・富田和夫 (1996)「飛鳥時代の関東と畿内」『東アジアにおける古代国家成立期の諸問題』 国際古代史シンポジウム実行委員会
福島　基継 (1975)「大町両子塚古墳の現状」『いぶき』８・９合併号　埼玉県立本庄高等学校考古学部
福田　　聖 (2002)『大寄遺跡Ⅱ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第280集
細田　　勝 (1984)『向田・権現塚・村後』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第38集
増田　一裕 (1989)『四方田・後張遺跡群発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告第14集
(1992)『女堀川条里地区前田甲遺跡発掘調査報告書　―遺構編―』 本庄市埋蔵文化財調査報告第20集第１分冊
(1995)『前田甲遺跡発掘調査報告書　―遺物編―』 本庄市埋蔵文化財調査報告第20集第２分冊
丸山　陽一 (1996)『猪俣南古墳群・丸山遺跡』 美里町遺跡発掘調査報告書第８集
美　里　町 (1986)『美里町史』 通史編
宮井　栄一 (1989)『古井戸　―縄文時代―』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第75集
柳　　進 (1961)『児玉町八幡山焼場埴輪窯跡発掘報告書』 埼玉県立児玉高等学校
柳田　敏司 (1964)「埼玉県児玉郡生野山将軍塚古墳発掘調査概報」『上代文化』第34輯
山本　　禎 (1996)『広木上宿遺跡―古代・中世編―』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第170集

写真図版

図版 1

大久保遺跡Ｂ地点遠景（1984年頃）

図版２



大久保遺跡Ｂ地点航空写真（1995年頃）

図版３

大久保遺跡Ｂ地点調査区北側（西より）

大久保遺跡Ｂ地点調査区南側（北より）

図版４

大久保遺跡Ｂ地点調査区北側（東より）

大久保遺跡Ｂ地点調査区南側（西より）

図版５

大久保遺跡Ｂ地点調査区南東側（北より）

大久保遺跡Ｂ地点調査区中央部付近

図版６

大久保遺跡Ｂ地点調査区南西側（北より）

大久保遺跡Ｂ地点調査区北西側（南より）

図版７

第27号住居跡

第27号住居跡カマド

図版８

第28号住居跡

第28号住居跡カマド

図版９

第29号住居跡

第29号住居跡カマド

図版10

第30・31号住居跡

第30号住居跡カマド

図版11

第30号住居跡カマド煙道部土器出土状態

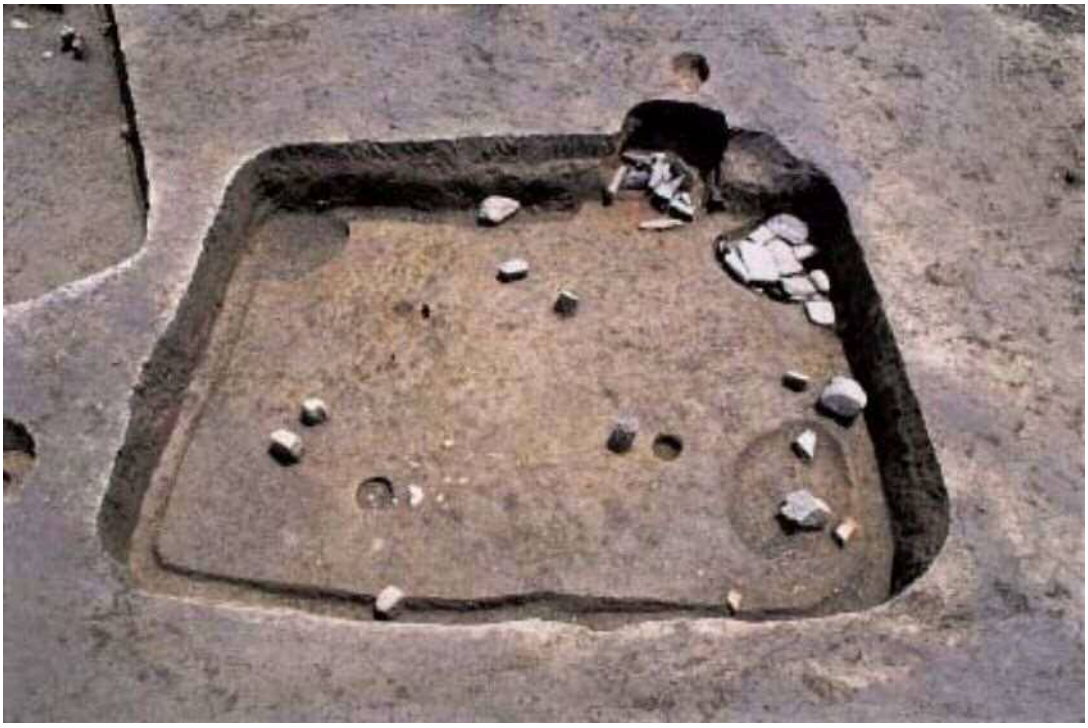
第31号住居跡カマド

図版12

第32号住居跡

第32号住居跡カマド

図版13



第33号住居跡

第33号住居跡貯蔵穴上面石出土状態

図版14

第33号住居跡カマド石出土状態

第33号住居跡カマド

図版15

第34号住居跡

第34号住居跡カマド

図版16

第35号住居跡

第35号住居跡カマド

図版17

第36号住居跡

第36号住居跡カマド

図版18

第37号住居跡

第37号住居跡　貯蔵穴

図版19

第37号住居跡カマド遺物出土状態

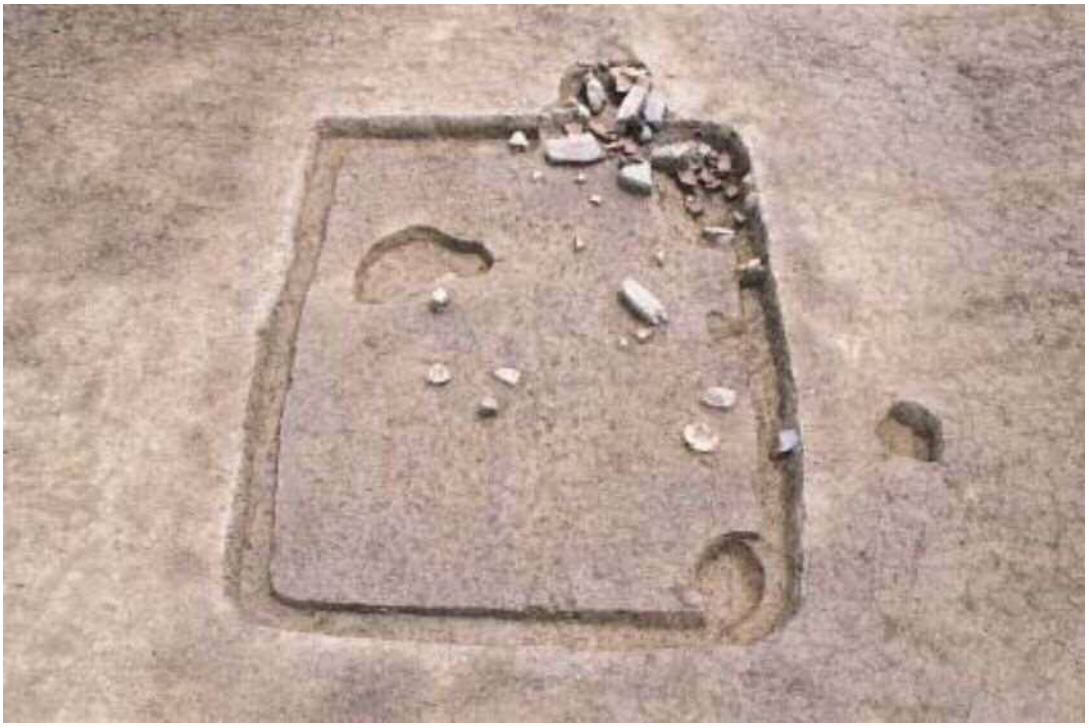
第37号住居跡カマド

図版20

第38号住居跡

第38号住居跡カマド

図版21



第39号住居跡

第39号住居跡カマド

図版22

第40号住居跡

第40号住居跡カマド

図版23

第41号住居跡

第41号住居跡カマド

図版24

第41号住居跡遺物出土状態（１）

第41号住居跡遺物出土状態（２）

図版25

第42号住居跡

第42号住居跡カマド

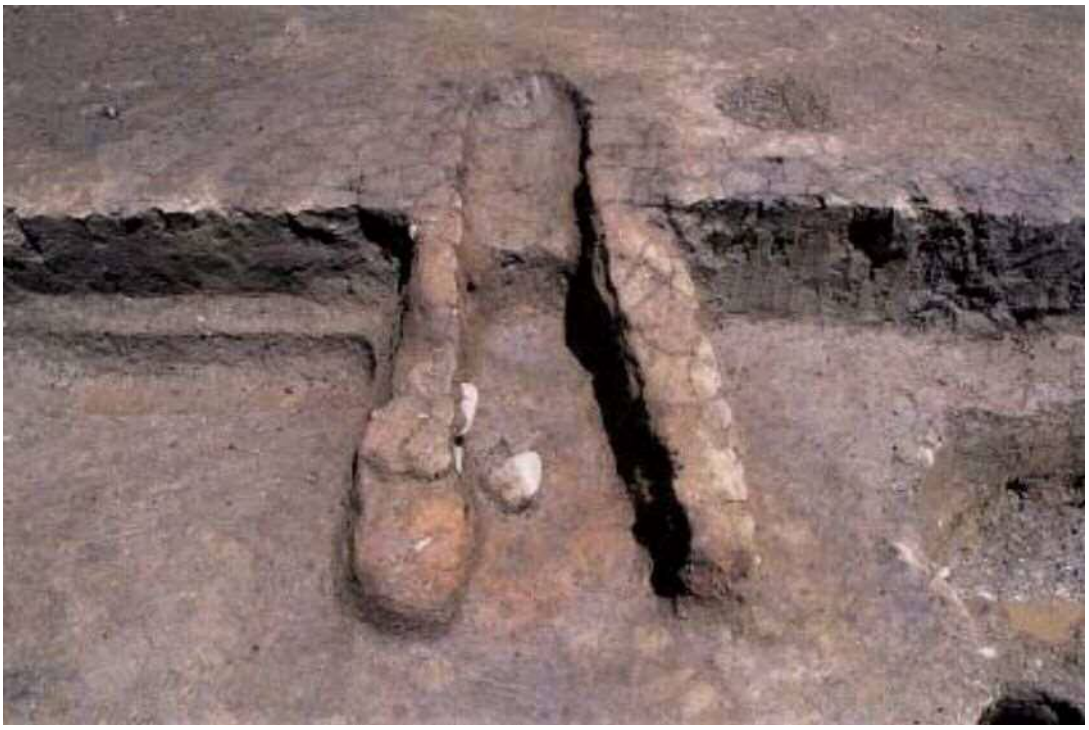
図版26

第43号住居跡遺物出土状態

第43号住居跡

図版27

第43号住居跡カマド遺物出土状態



第43号住居跡カマド

図版28

第44号住居跡

第44号住居跡遺物出土状態

図版29

第45号住居跡

第46号住居跡

図版30

第46号住居跡カマド

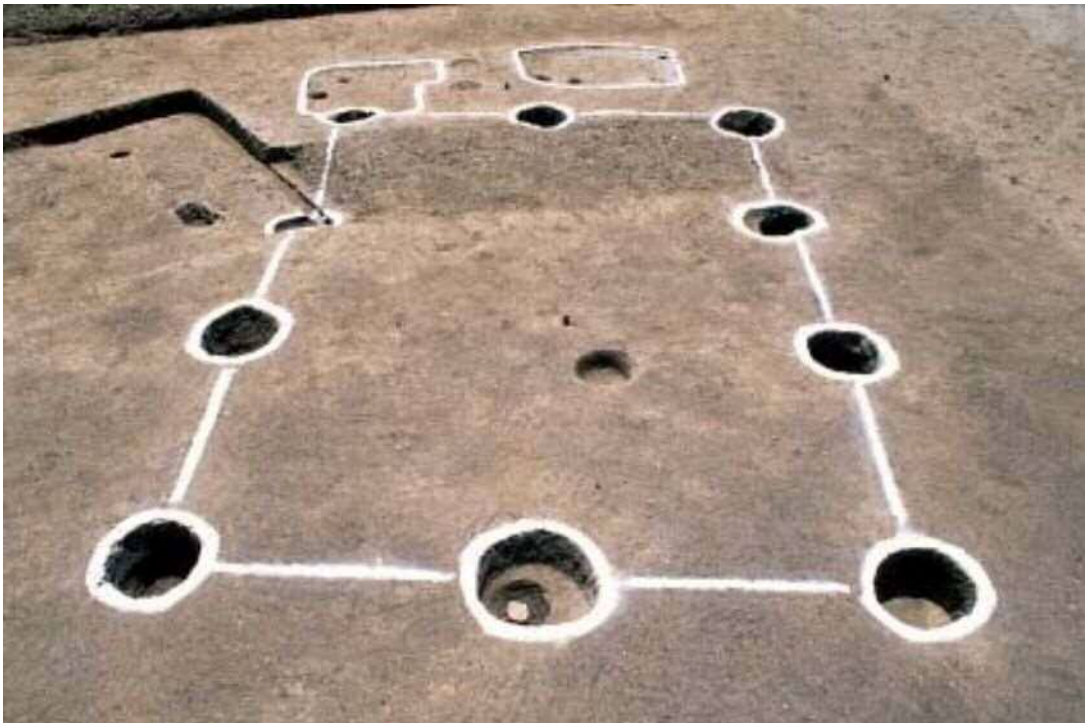
第46号住居跡遺物出土状態

図版31

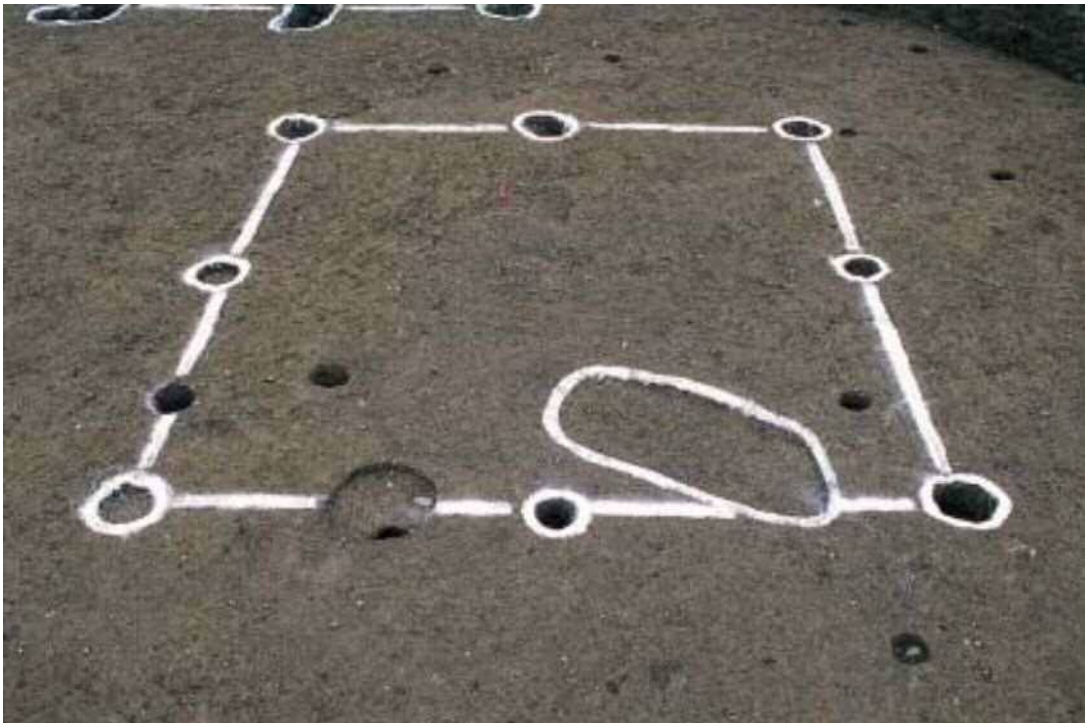
第47号住居跡

第47号住居跡カマド

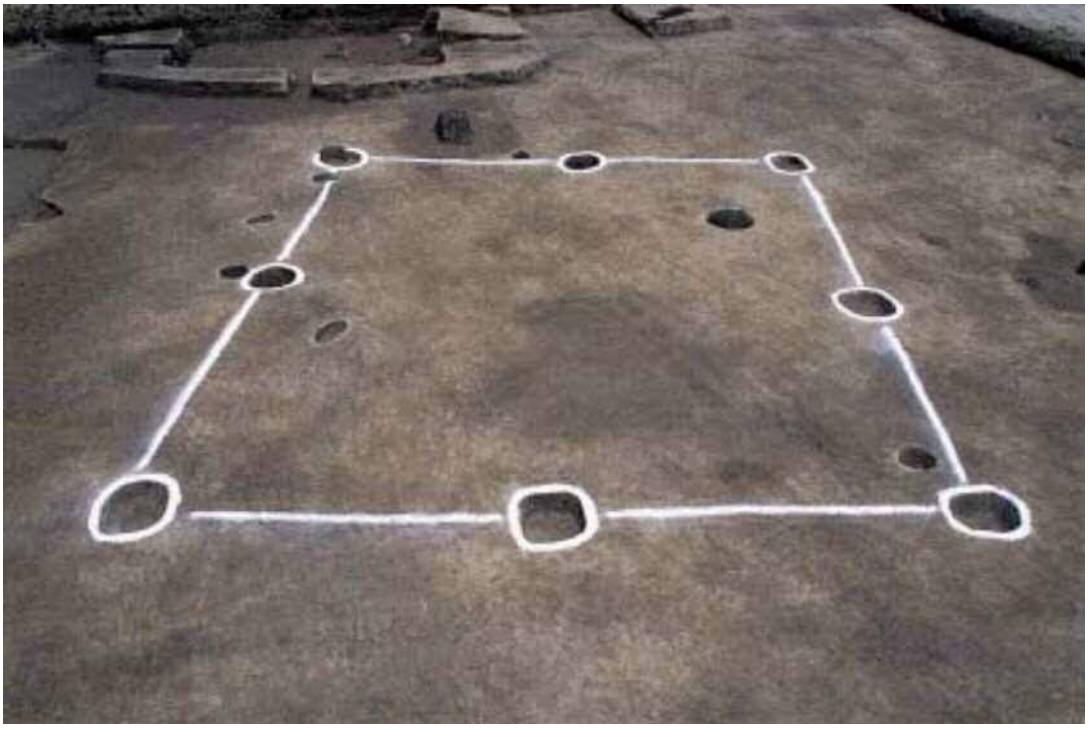
第１号掘立柱建物跡



第２号掘立柱建物跡



第３号掘立柱建物跡



第４号掘立柱建物跡

図版34

第４・５号土壙

第５号土壙

図版35

第６号土壙

第７号土壙

第８号土壙

第９号土壙

図版37

第10号土壙

第11号土壙

図版38

第12号土壙

第13号土壙

図版39

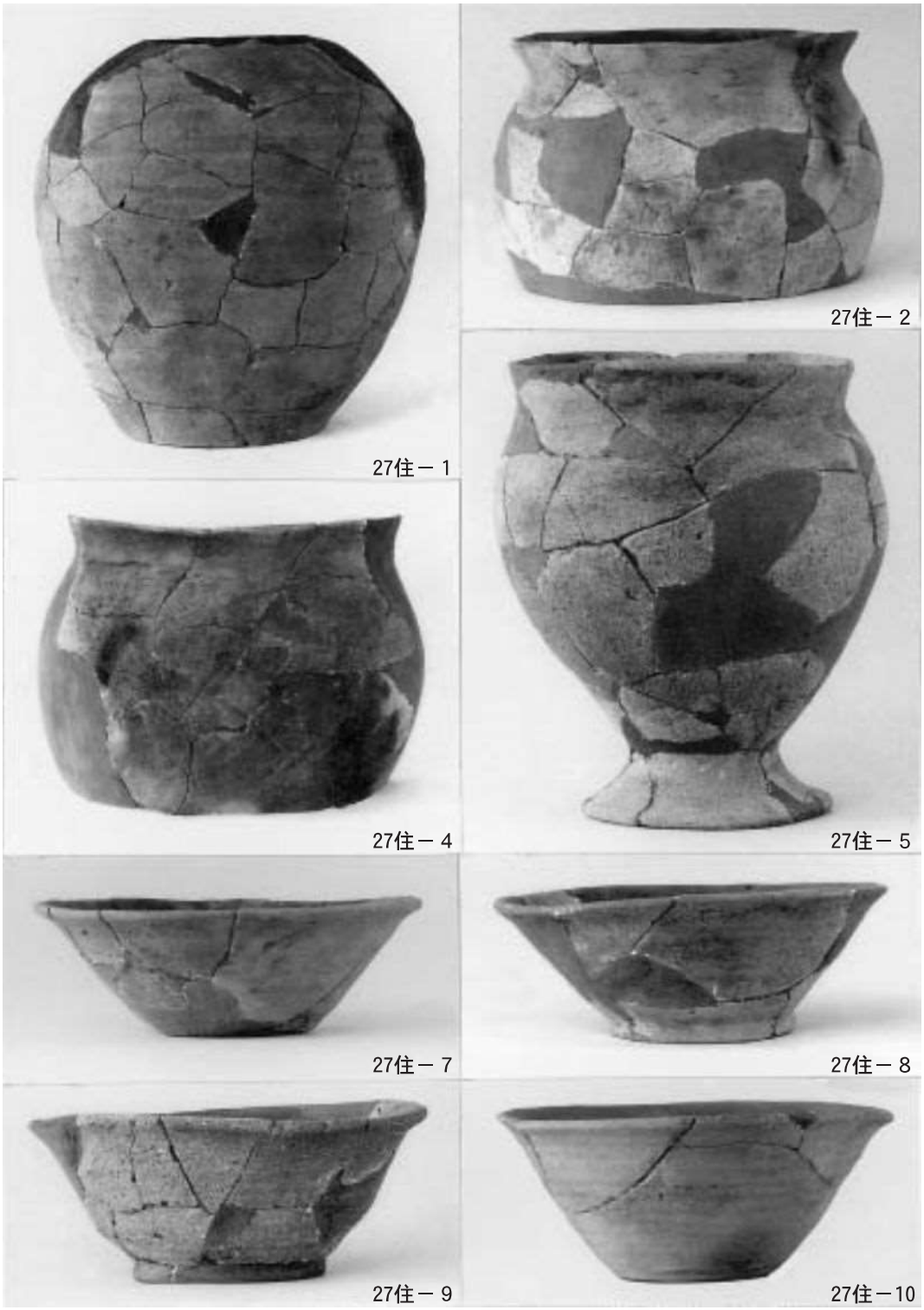
第14号土壙

第15号土壙

図版40

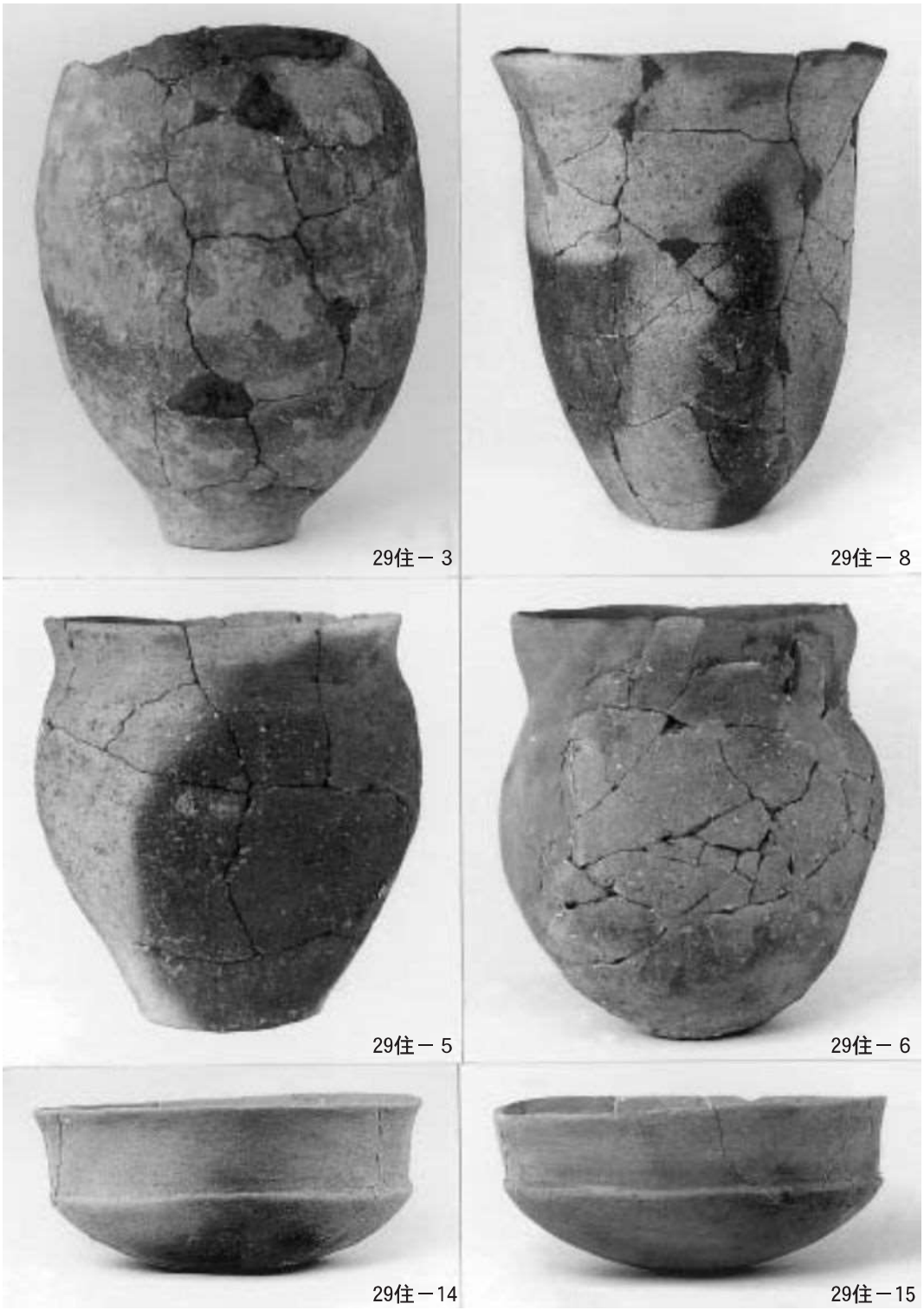
第16号土壙

第17号土壙



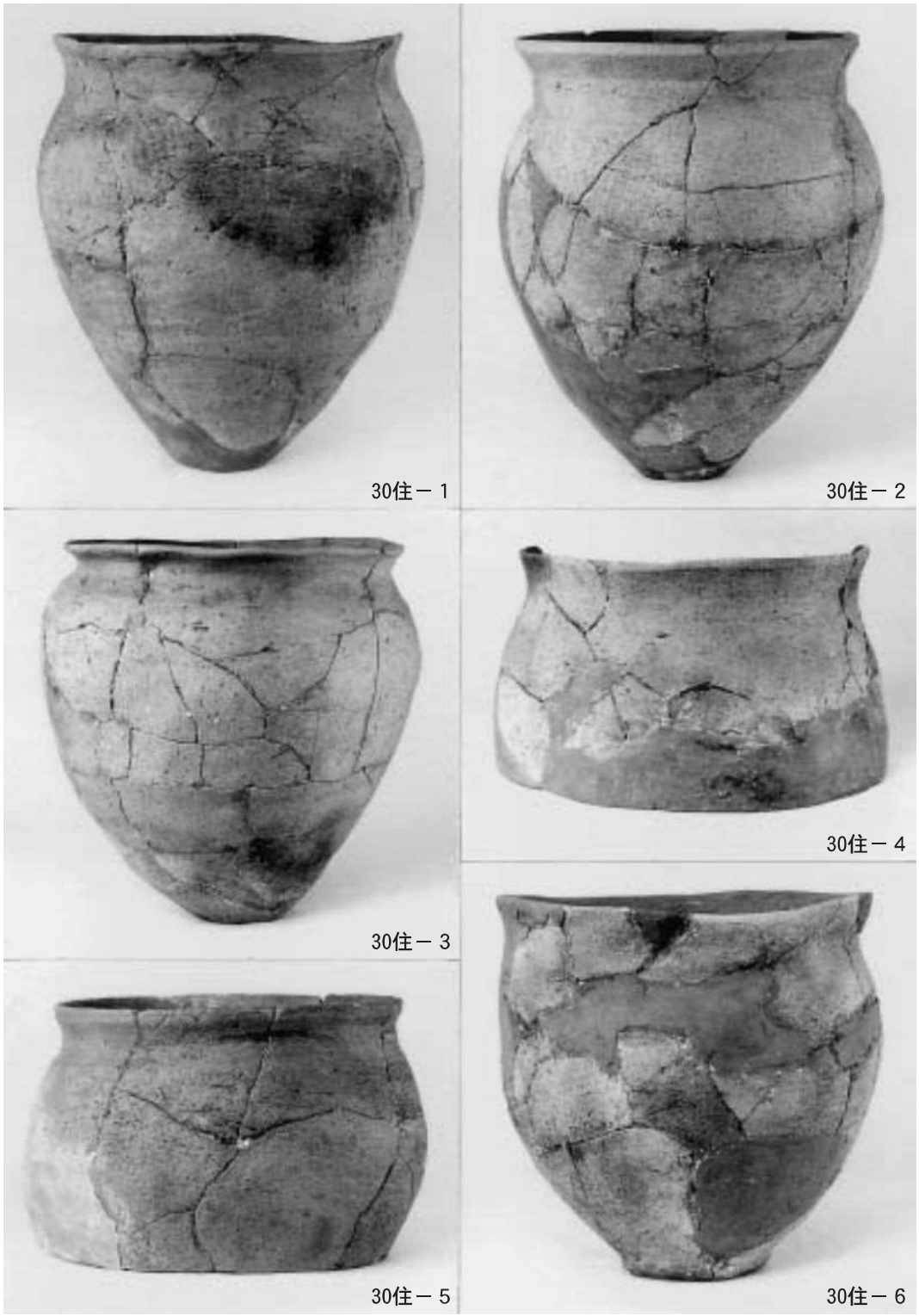
住居跡出土遺物（1）

住居跡出土遺物（２）

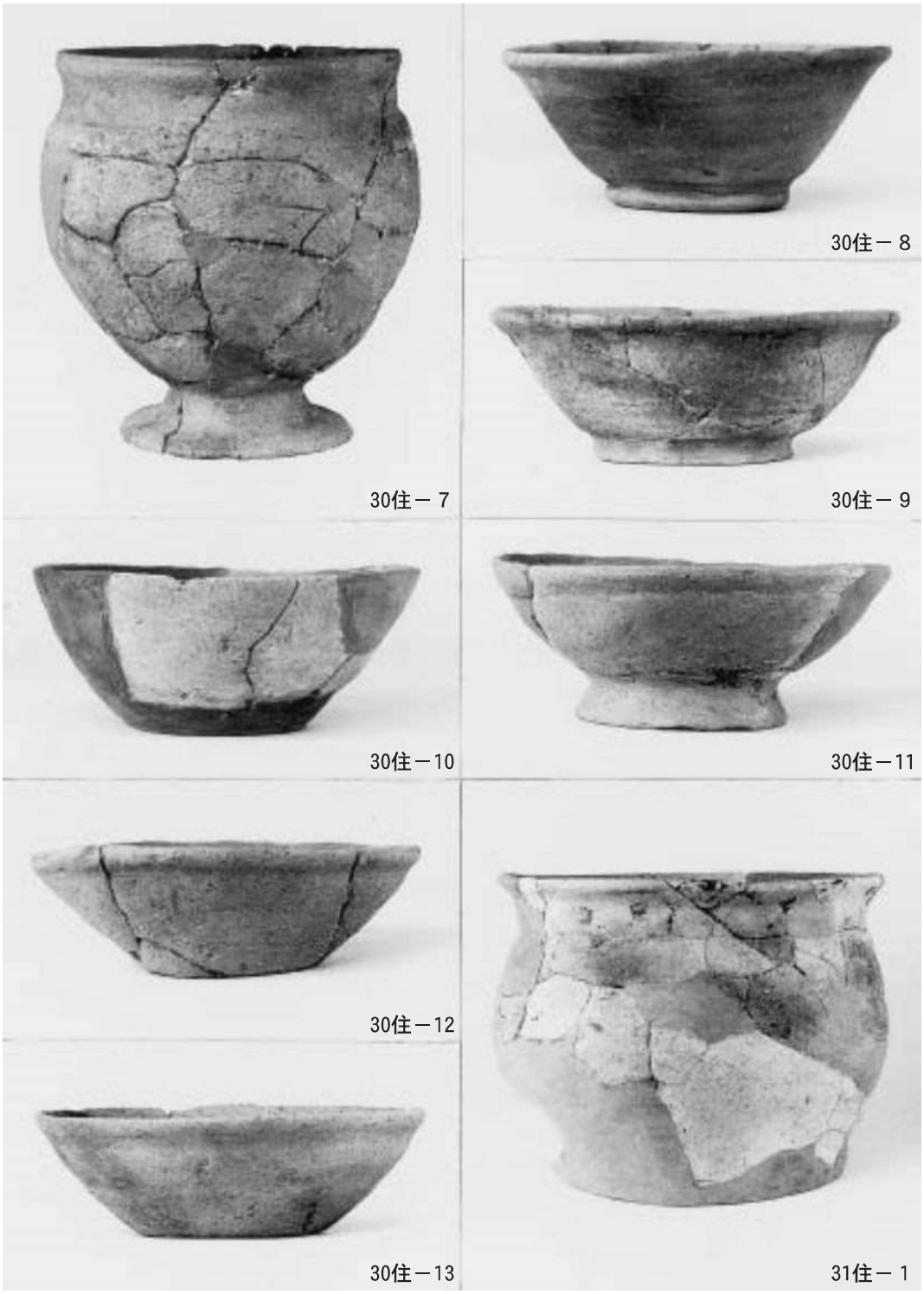


住居跡出土遺物（3）

住居跡出土遺物（4）



住居跡出土遺物（５）



住居跡出土遺物（6）

住居跡出土遺物（７）

33住－4

33住－7

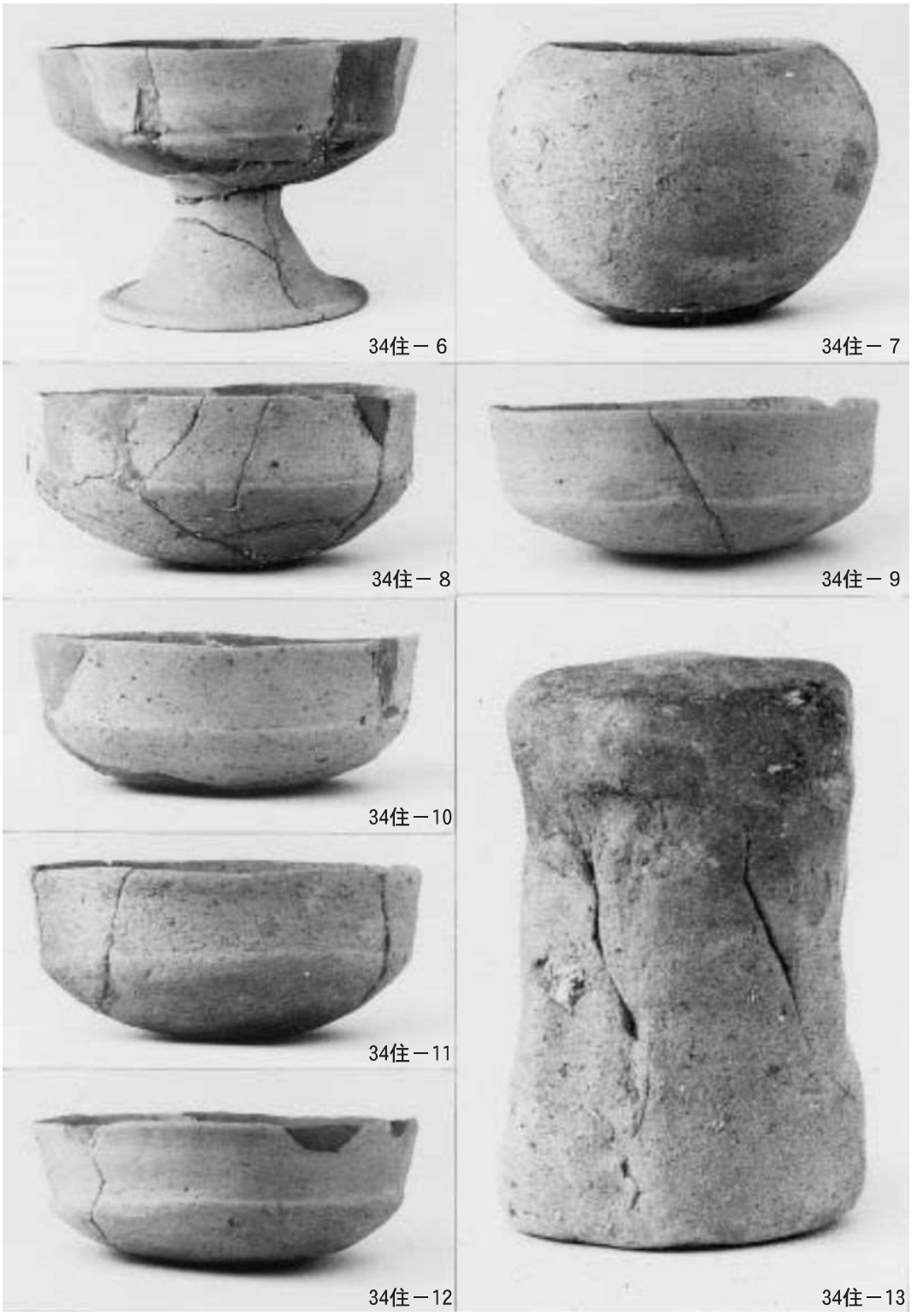
34住－1

34住－3

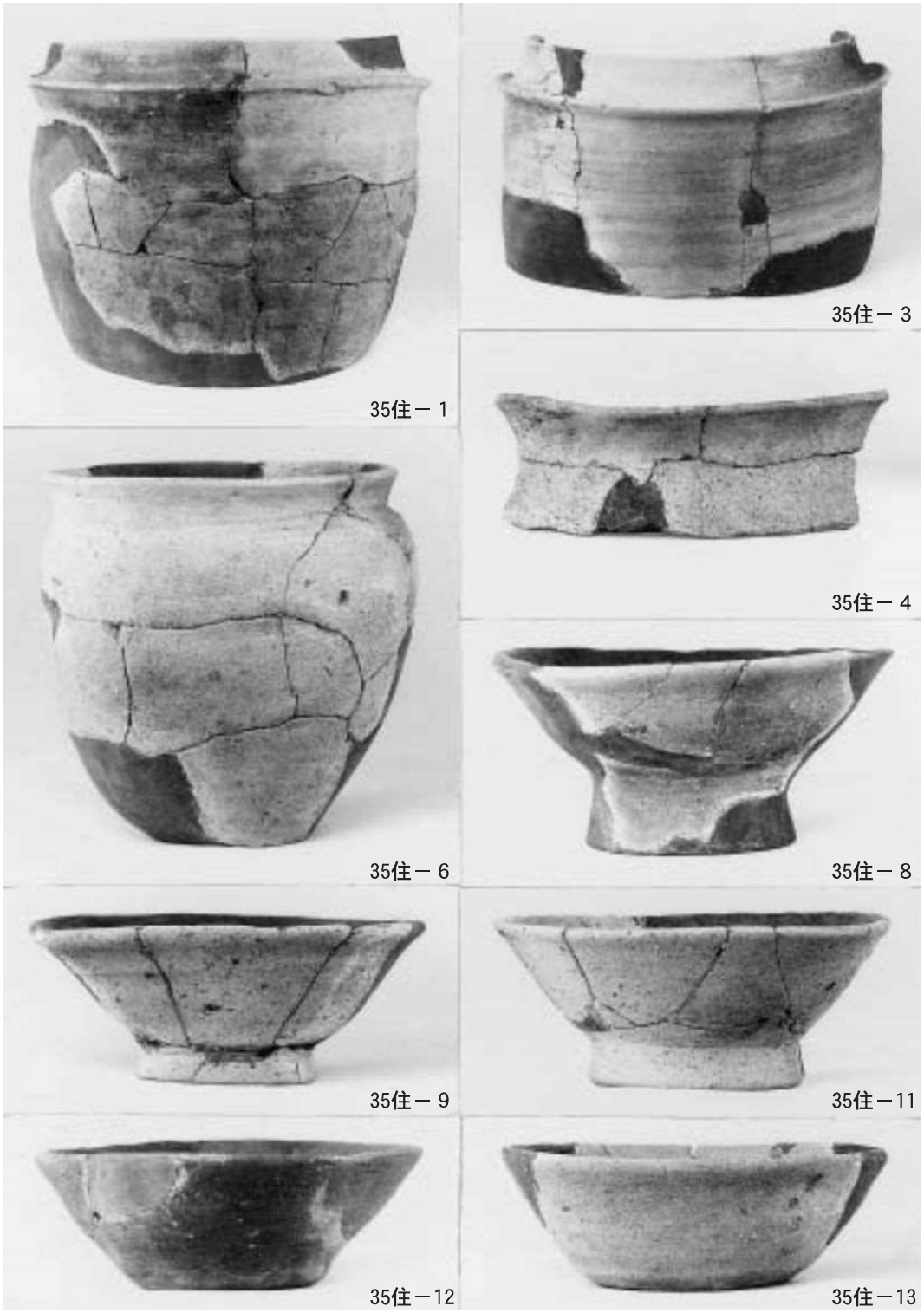
34住－5

34住－4

住居跡出土遺物（８）

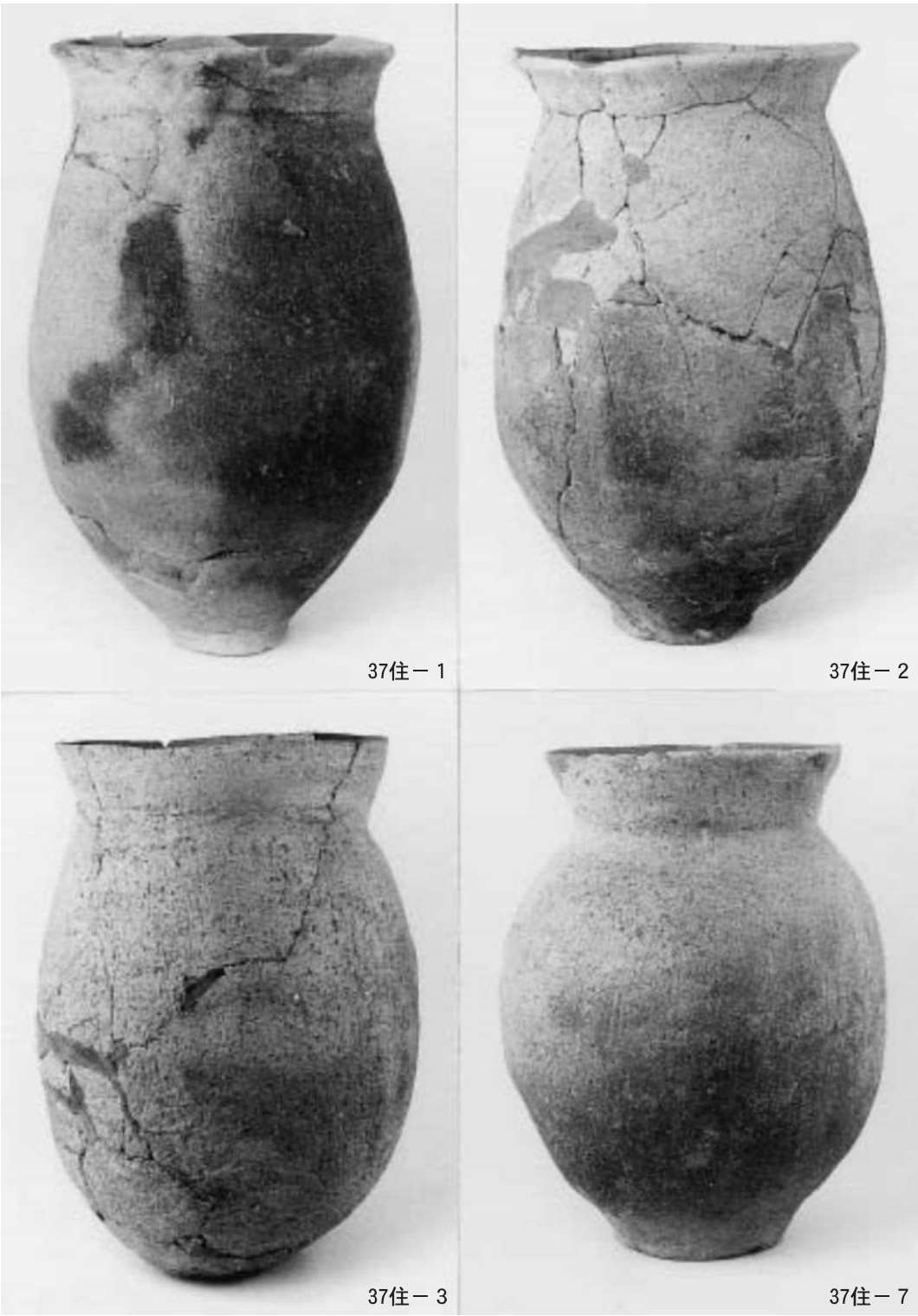


住居跡出土遺物（９）

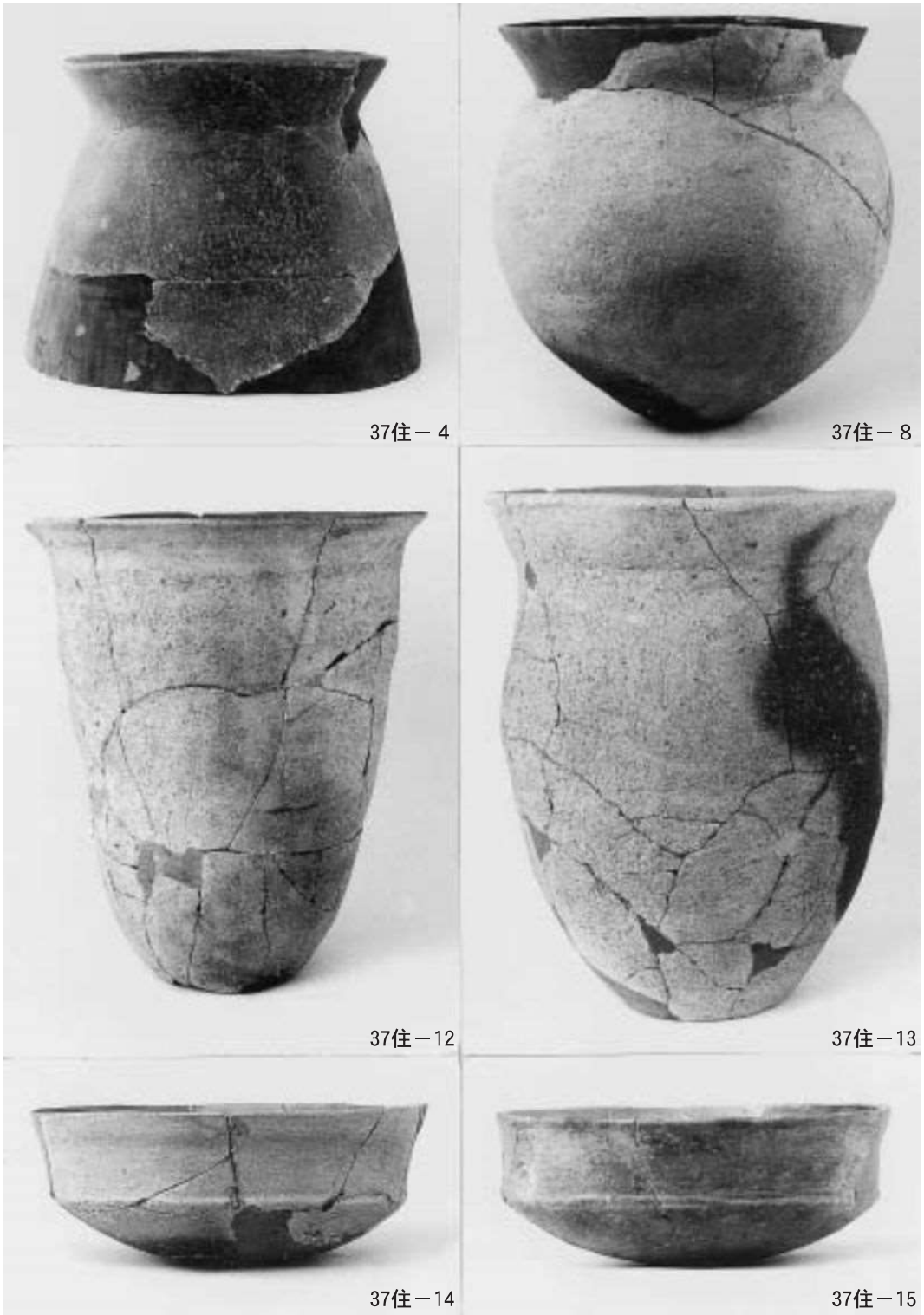


住居跡出土遺物（10）

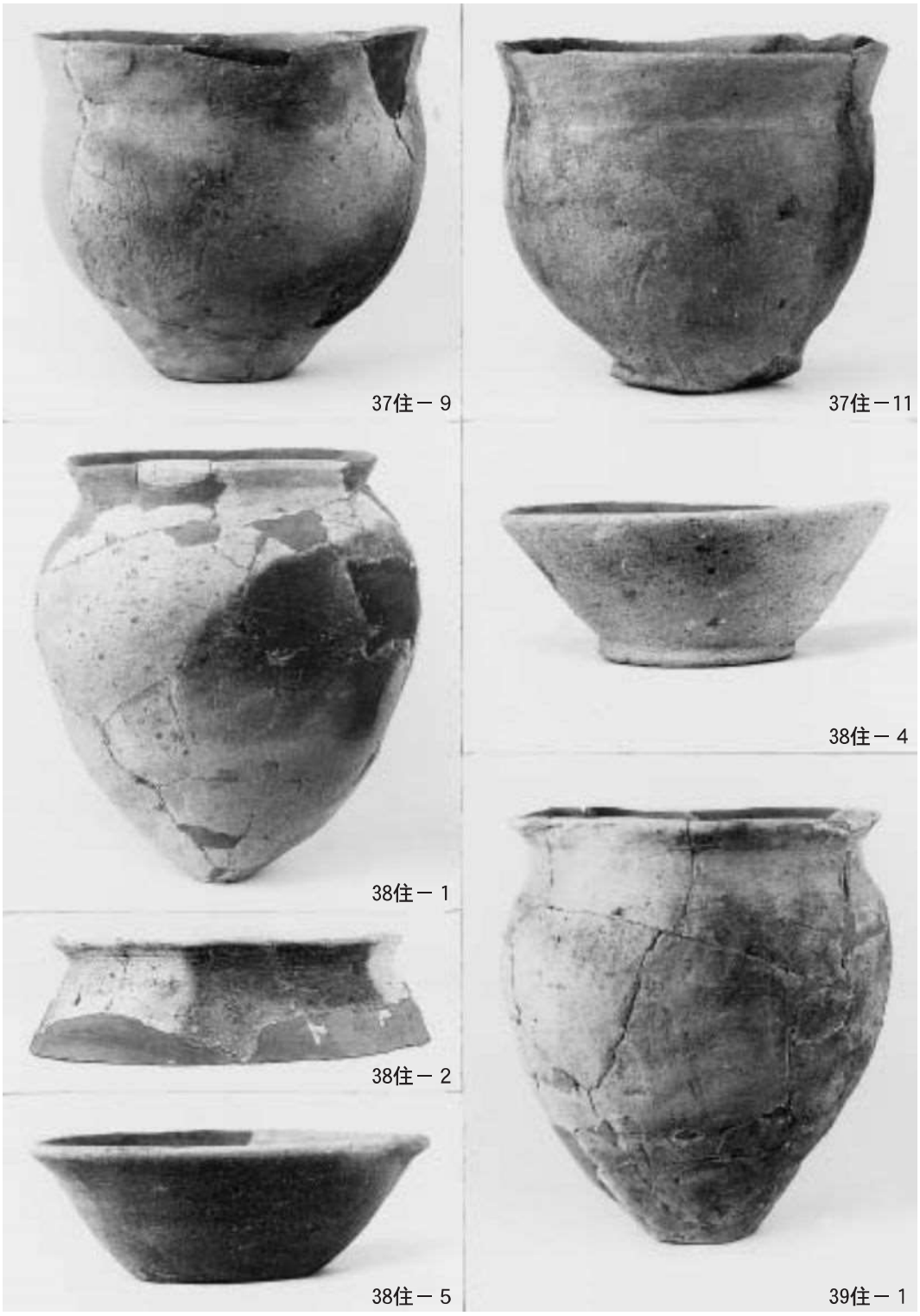
住居跡出土遺物（11）



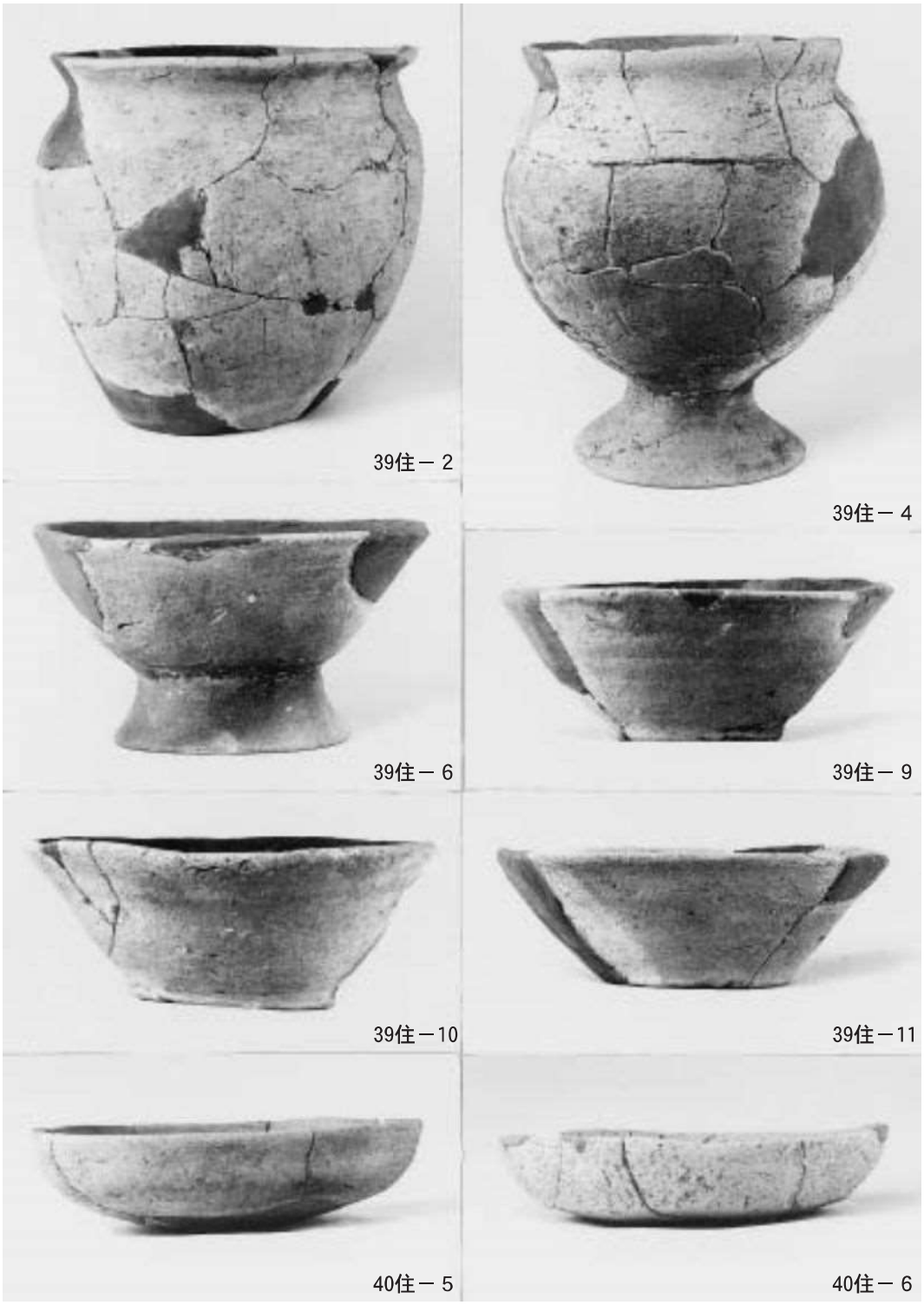
住居跡出土遺物（12）



住居跡出土遺物（13）



住居跡出土遺物（14）



住居跡出土遺物（15）

41住－1

41住－2

41住－4

41住－7

住居跡出土遺物（16）

41住－5

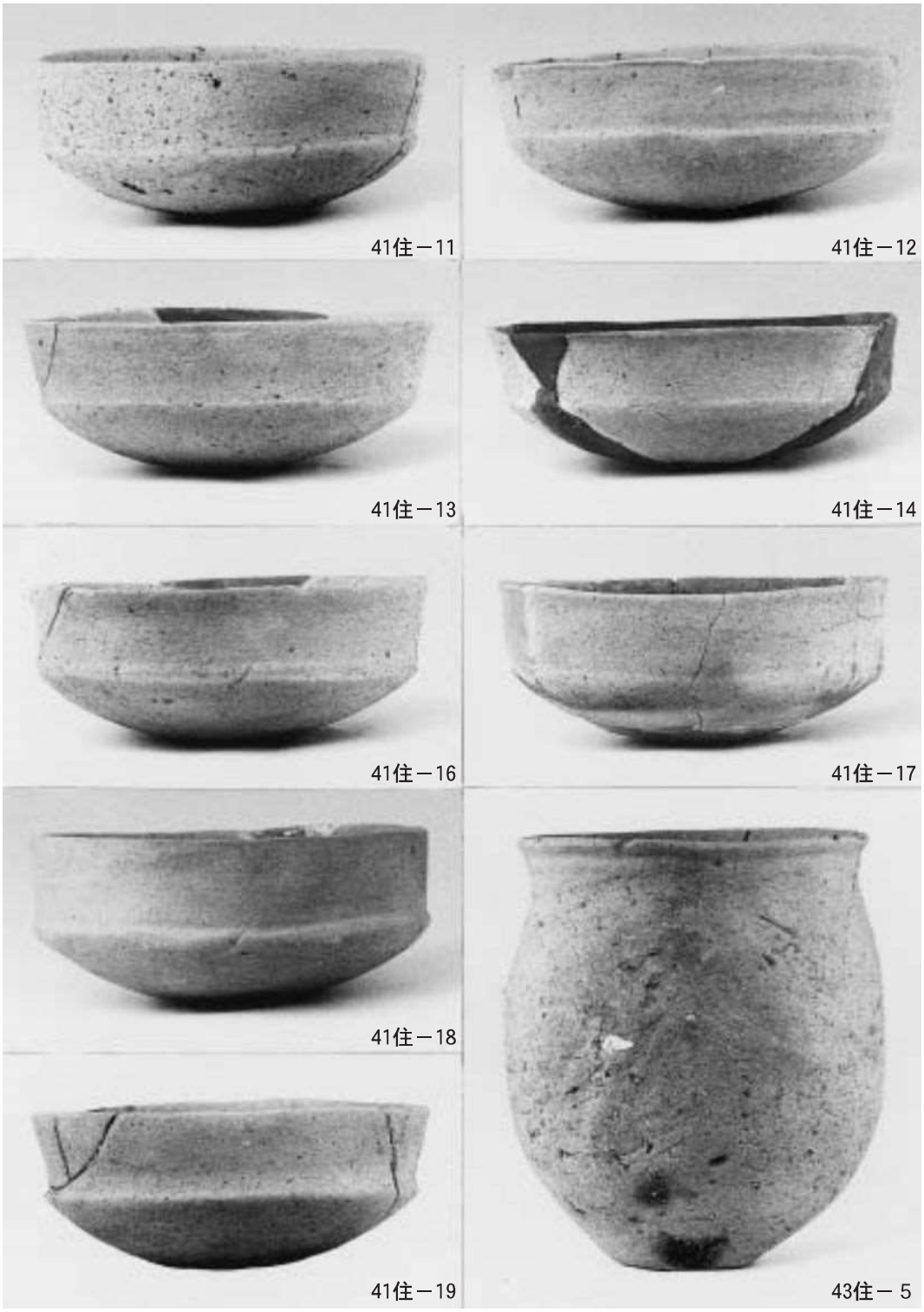
41住－3

41住－8

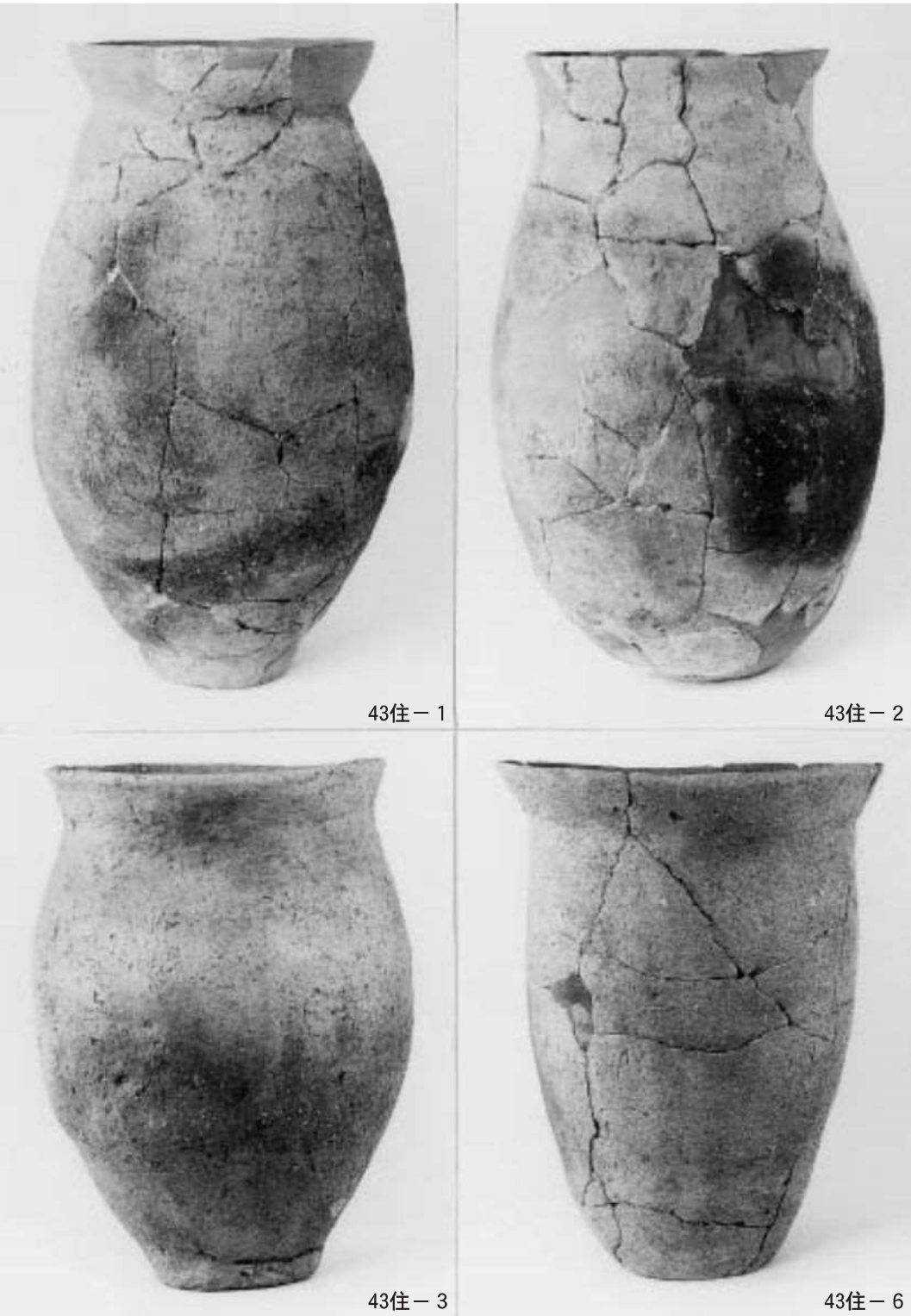
41住－6

41住－9

住居跡出土遺物（17）

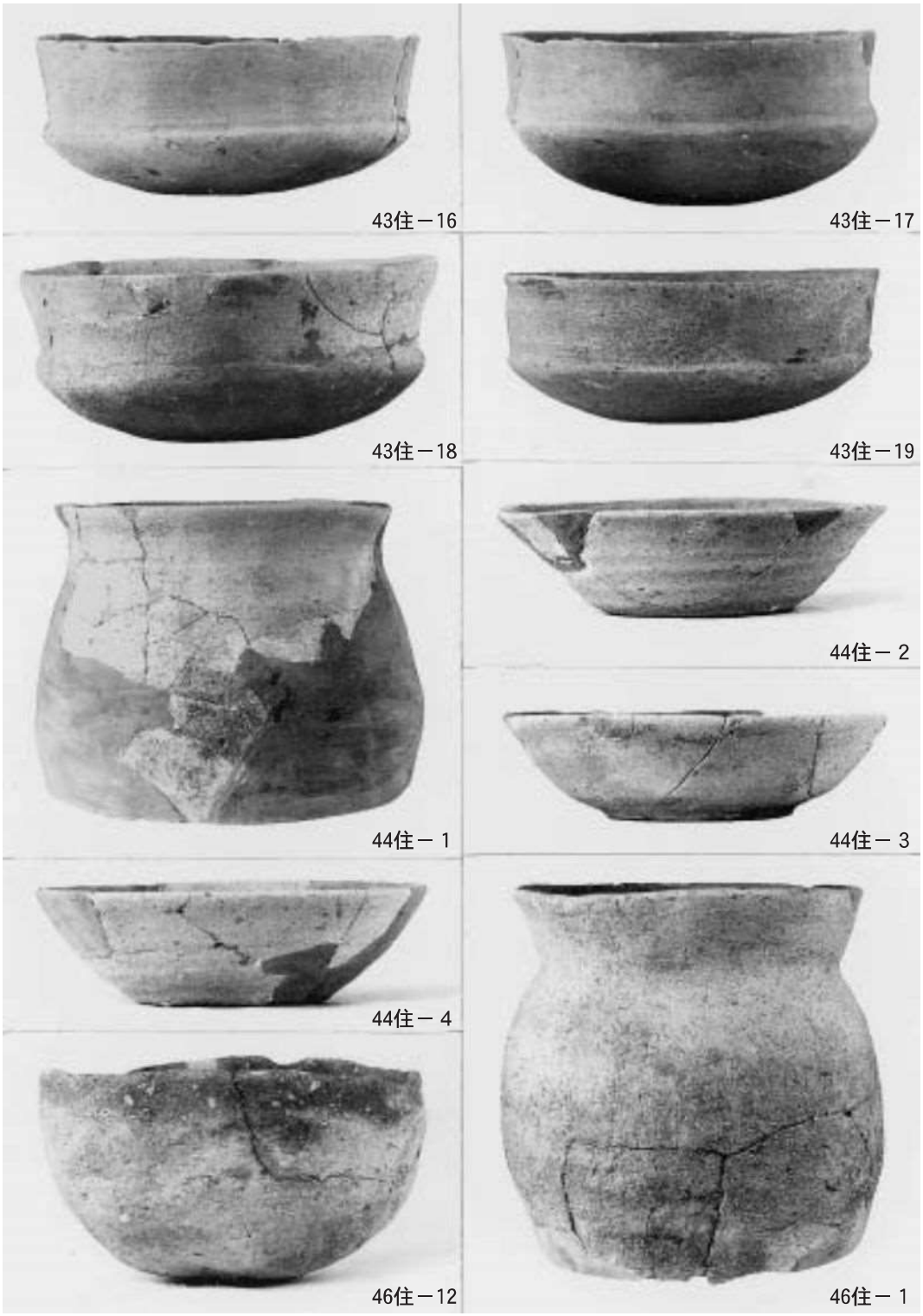


住居跡出土遺物（18）



住居跡出土遺物（19）

住居跡出土遺物（20）



住居跡出土遺物（21）

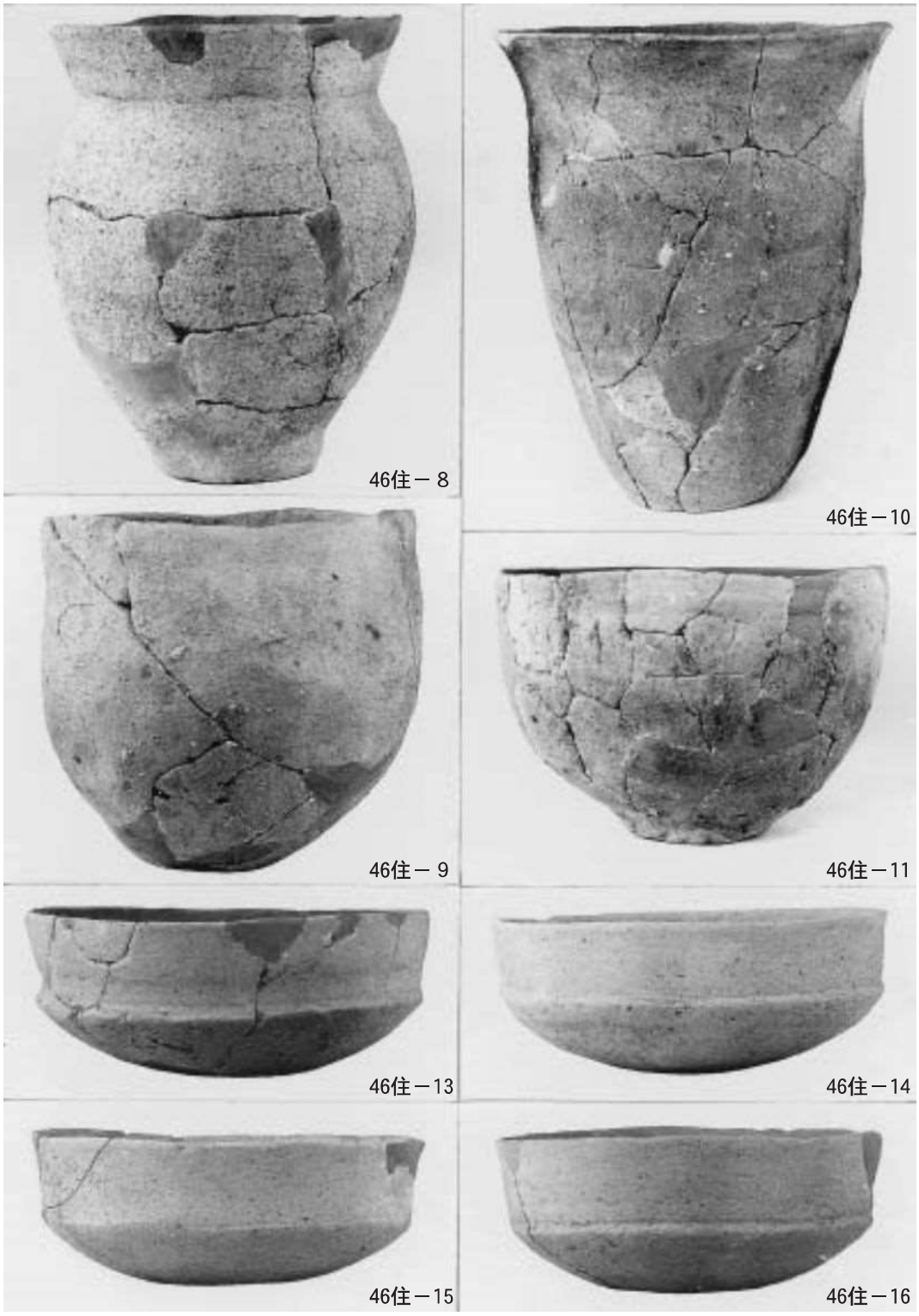
46住－2

46住－3

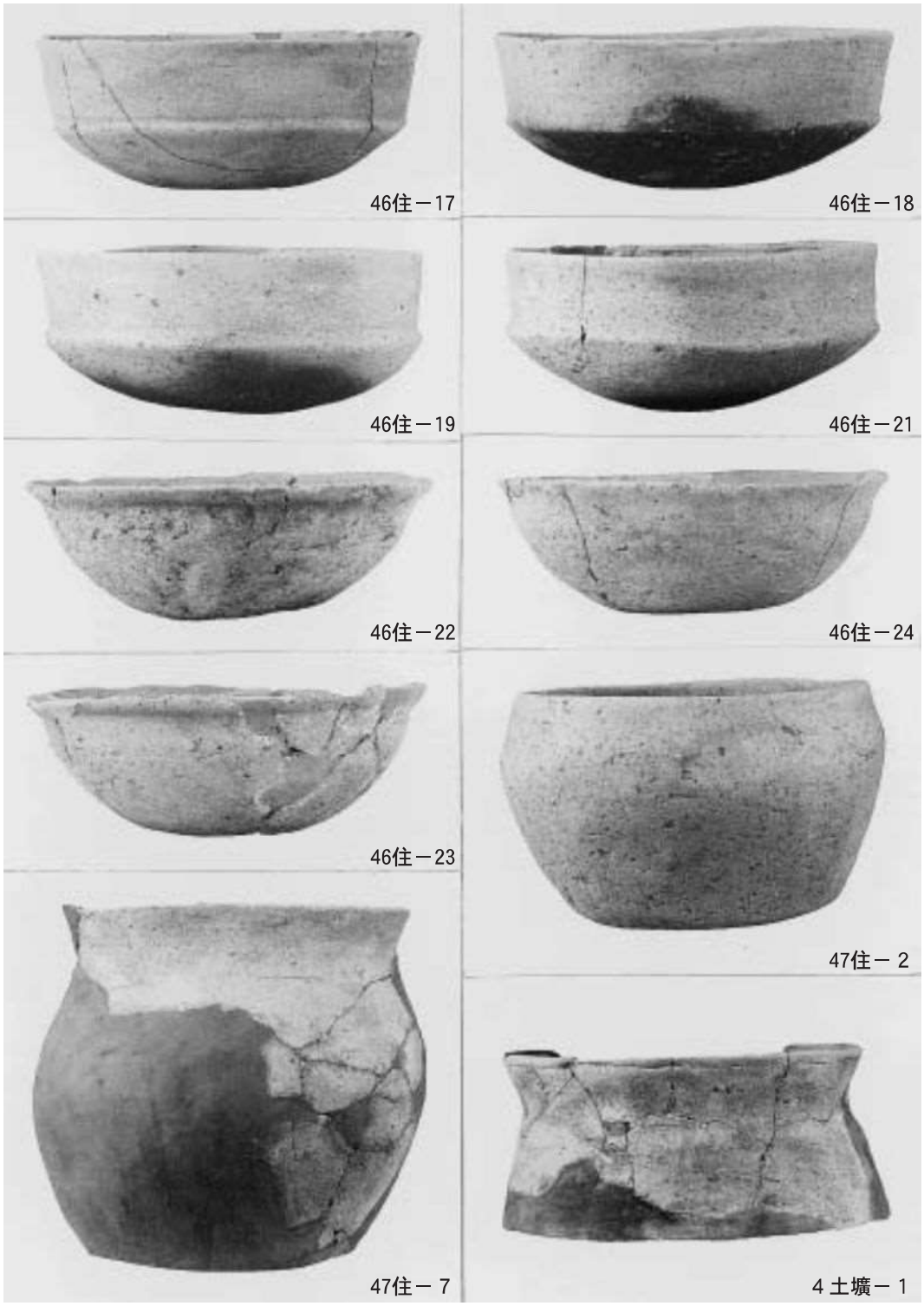
46住－4

46住－5

住居跡出土遺物（22）

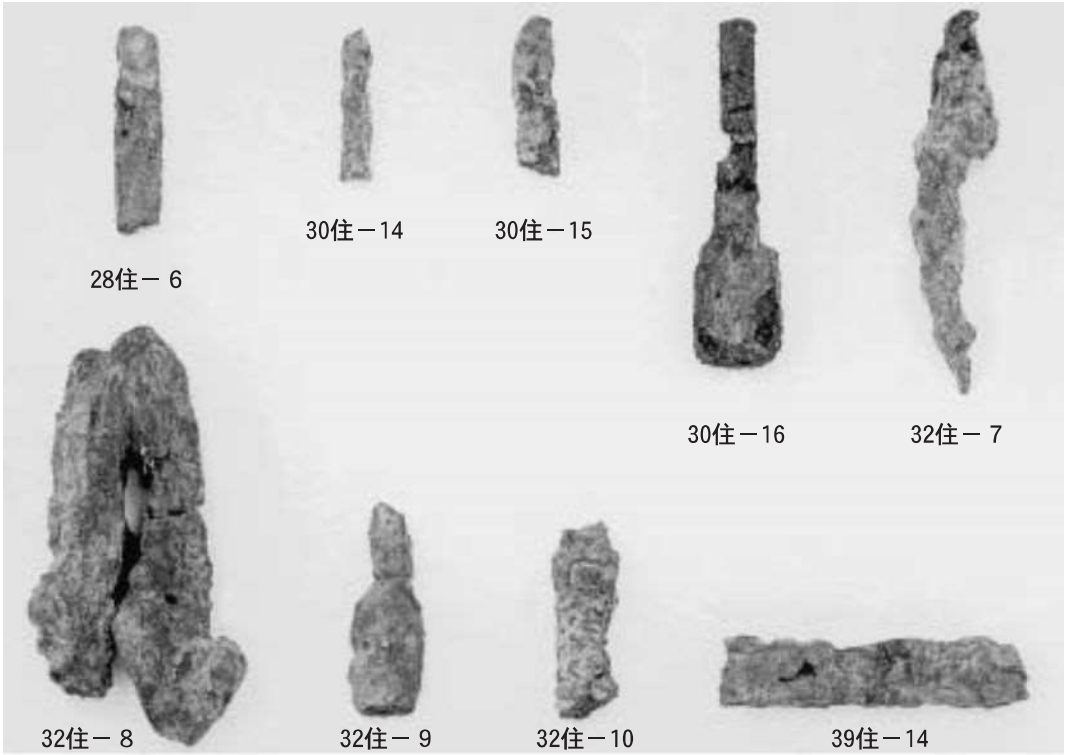


住居跡出土遺物（23）



住居跡出土遺物（24）・土壙出土遺物

図版65



住居跡出土鉄器

B地点調査風景

報　告　書　抄　録

フリガナ	オオクボイセキ（Ｂチテンノチョウサ）		
書　　名	大久保遺跡（Ｂ地点の調査）		
シリーズ	児玉町遺跡調査会報告書	巻　　次	第 14 集
編 著 者	恋河内昭彦		
編集機関	児玉町遺跡調査会		
所 在 地	〒367-0298　埼玉県児玉郡児玉町大字八幡山368番地　　TEL　0495（72）1331		
発 行 日	2003年（平成15年）３月31日		

フリガナ 所収遺跡	所　在　地	コード		北　緯 (°　′　″)	東　経 (°　′　″)	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺 跡					
オオクボイセキ 大久保遺跡 （Ｂ地点）	児玉郡児玉町 大字児玉字大 道南1645-1外	113824	043	36°11′20″	139°9′10″	19940509 ～ 19940831	2700	分譲住宅 建設

所収遺跡	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大久保遺跡 （Ｂ地点）		縄文（後期）		土器、石器	
		弥生（中期）		土器	
	集落	古墳（後期）	竪穴住居６	土師器、土製支脚	
	集落	白 鳳 時 代	竪穴住居１	土師器、須恵器	
	集落	奈 良 時 代	竪穴住居２、土壙３	土師器、須恵器	
	集落	平 安 時 代	竪穴住居12、掘立柱建物４、土壙７	土師器、須恵器、灰釉、鉄製品	

児玉町遺跡調査会

会　長	冨丘　文雄	（児玉町教育委員会教育長）
理　事	田島　三郎	（児玉町文化財保護審議会　委員長）
〃	清水　守雄	（児玉町文化財保護審議会　副委員長）
〃	間正　明彦	（児玉町文化財保護審議会　委　員）
〃	荒井　一夫	（　〃　）
〃	桜井　豊	（　〃　）
〃	吉川　豊	（児玉町役場　総務課長）
〃	杉村　義昭	（　〃　総合政策課長）
〃	前川　由雄	（　〃　農林商工課長）
〃	出牛　博	（　〃　土木課長）
〃	立花　勲	（　〃　都市計画課長）
〃	清水　満	（児玉町教育委員会　社会教育課長）
幹　事	永尾　清一	（　〃　社会教育課長補佐）
〃	鈴木　徳雄	（　〃　文化財係長）
〃	恋河内昭彦	（　〃　文化財係主任）
〃	徳山　寿樹	（　〃　文化財係主事）
〃	大熊　季広	（　〃　文化財係主事）
〃	松澤　浩一	（　〃　文化財係主事）

児玉町遺跡調査会報告書　第14集

大　久　保　遺　跡

―　B地点の調査　―

平成15年３月27日　印刷

平成15年３月31日　発行

発行者　児玉町遺跡調査会
埼玉県児玉郡児玉町大字八幡山368番地

印刷所　たつみ印刷株式会社
埼玉県深谷市東大沼356番地

第８図　大久保遺跡Ｂ地点全体図